みんなで選んだ
芦屋の未来遺産
～ 芦屋文化の 100 年リレー ～

■ 発 行 年 月 ; 平成 25(2013)年 11 月
■編集・発行 ; 芦屋ユネスコ協会
659-8501 芦屋市精道町７番６号
芦屋市教育委員会 社会教育部 生涯学習課内
TEL 0797-38-2091
■ 資 料 協 力 ; 芦屋市 企画部 広報国際交流課

みんなで選んだ 芦屋の未来遺産 ～芦屋文化の100年リレー～ 芦屋ユネスコ協会

補完・解説版

みんなで選んだ

# 芦屋の未来遺産

～ 芦屋文化の 100 年リレー ～



井上正三「芦屋川・松並木の道」(1996 年・水彩)

芦屋ユネスコ協会

# 発刊にあたって



芦屋ユネスコ協会は、100年後の子どもたちへの贈り物として、長い歴史と伝統のもとに豊かに培われたふるさと「芦屋」の文化・自然の遺産を伝える「未来遺産運動」を、市民あげての運動として展開していきたいと考えました。

私たちの住む芦屋は、自然遺産・史跡と文化財・民話と歌物語・郷土資料・芸術文化・人物・祭・災害・モダニズム＆ライフスタイルを含め、人口は少ないながら日本でも有数の、素晴らしい未来へ伝える多くの遺産を抱える宝石のようなまちです。

芦屋ユネスコ協会では、平成22(2010)年の芦屋市制施行70周年を記念して、市民の皆さんに芦屋の未来への遺産をアンケート方式で選んでいただき、「みんなで選んだ 芦屋の未来遺産 ～芦屋文化の100年リレー～」と題した冊子を発刊しました。

前回冊子の作成は平成21(2009)年から準備し、「市民が選んだ“芦屋の未来遺産”」へのアンケートを募集しましたところ、592枚・延べ1,953件の回答がありました。

そこには、市民の皆様が芦屋のどこに魅力や愛着を感じているのか、何を未来へと継承していきたいのかが描きだされており、前回はそれらの皆様の思いを分野別に分類し、冊子としてまとめました。

今回の冊子は、その前回の冊子の補完・解説版として発刊することとなりました。

発刊に際しましては、企画段階から芦屋市教育委員会の全面的なご支援や、芦屋市広報課からの資料提供をいただきました。また、それらの資料を取りまとめ、前回冊子の補完・解説版の編集に取り組んでいただいた「未来遺産運動推進委員会」アドバイザーの南ゆう子氏の尽力に、心から感謝いたします。さらに、郷土資料の学識者である信岡利英氏・岩本昌三氏・明尾圭造氏に、専門委員として多大なアドバイスと監修のご指導をいただきました。

今後は、必要に応じて補完を行いつつ、より内容を充実させながら～芦屋文化の100年リレー～に向け、市民の皆様のご理解とご協力をいただきながら、全国に発信していけるような「芦屋の未来遺産運動」にしてまいりたいと考えています。

“芦屋がいかに素晴らしいまちであるのか”を市民の皆さんに再認識していただき、誇りをもって末永く伝播・継承していける資料として、これらの冊子を大いに活用していただけることを願っています。

芦屋ユネスコ協会

会長　廣瀬　忠子

# 目　次


■発刊にあたって

■A 芦屋の自然と景観 ---------- 1

芦屋川周辺の自然･景観 / 宮川周辺の自然･景観 / 山手方面の自然･名所 / 愛称道路と景観 /
奥山･奥池の自然と景観 / 芦屋の景観･モダニズム建築物 / 新芦屋八景

■B 芦屋の史跡・文化財 ---------- 21

芦屋市内の遺跡・史跡・埋蔵文化財 / 市内の寺院等 / 市内の神社等 /
市内の石碑等 / 芦その他　歴史資料等

■C 芦屋の民話と伝承 ---------- 37

芦阪急以北に残るお話（荒地山･芦屋谷･水車谷･鷹尾山･芦屋廃寺･会下山の麓　ほか）/
阪急以南･里に残るお話（旧打出村･旧芦屋村･旧芦屋浜　ほか）

■D 芦屋の文学・芸術・文化 ---------- 49

和歌に詠まれた芦屋Ⅰ / 和歌に詠まれた芦屋Ⅱ / 和歌に詠まれた芦屋Ⅲ /
芦屋と俳句･詩 / 近代文学に描かれた芦屋 / 現代文学に描かれた芦屋 / 芦屋と芸術家たち

■E 顕彰すべき人物 ---------- 67

あ行〈11 人〉/ か行〈５人〉/ さ行〈９人〉/ た行〈６人〉/ な行〈４人〉/ は行〈10 人〉/
ま行〈２人〉/ や行〈８人〉/ 芦屋市名勝絵葉書の画家たち

■F 芦屋トピックス ---------- 87

芦屋のまつり / 国際文化住宅都市建設法 / 芦屋川トンネル / 六麓荘住宅地の開発 /
六麓荘国際ホテル / 芦屋モダニズム / 芦屋と災害 / 橋ものがたり / 丸型ポスト /
打出海水浴場 / 伊藤動物園 / 児童の村小学校 / 東洋牧場

■G 参考〈広報あしや・抜粋〉 ---------- 119

芦屋川市制誕生前夜点描 / 高地性集落「会下の山遺跡」/ 大豪族の墓「打出小槌古墳」 /
発掘された芦屋の 100 年 / 芦屋市制黎明期･文化の創造者たち / 近・現代文学と芦屋Ⅰ /
現代文学と芦屋Ⅱ /「伊勢物語」と芦屋 / 阪神･淡路大震災から 15 年目の年を迎えて



【主な参考文献】

◆**新修 芦屋市史**　芦屋市
◆**芦屋郷土誌**　芦屋史談会（細川道草）
◆**阪神間モダニズム**　「阪神間モダニズム」展 実行委員会
◆**あしやの民話**　（三好美佐子）
◆**あしや子ども風土記**　芦屋市教育委員会（芦屋市文化振興財団）
◆**広報あしや**　芦屋市総務部広報課（企画部広報国際交流課）
◆**芦屋市ガイドマップ**　芦屋市総務部広報課（企画部広報国際交流課）
◆**芦屋今むかし**　芦屋市

# A　芦屋の自然と景観



芦屋川・開森橋付近



芦屋川上流・城山山麓の桜



芦屋川・業平橋付近（愛称道路「業平さくら通り」）



松林の続く芦屋川河口付近（鵺塚橋から）

# A 芦屋の自然と景観

《芦屋川周辺の自然・景観》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 芦　屋　川 | 芦屋川流域 | ◆六甲山地にある源流に谷水を合わせて南下し、高座川と合流して河口に至る、全長約８㎞の天井川（二級河川）。<br>◆山から海までが近く、雨が降ると急流となって流れるため、河口付近には扇状地が形成されやすい特徴がある。<br>◆天井川であるため、現ＪＲ（省線）は明治７年に川底を横断する隧道を造った。英国人技師の指導の下、優れたレンガ製造と組み立て工事により完成された。これが、「トンネル」と呼称された日本初の「芦屋川トンネル」で、同じ天井川の住吉川・石屋川についても同時期に施工され、「トンネル」の呼称が付けられた。<br>◆国道２号以南から芦屋川河口までの両岸は美しい松並木が続き、平成 11 年には『芦屋川松風通り』の愛称が付けられた。 |
| 芦屋川の生物 | | ◆**市木クロマツ**…昭和 45 年、市木に選定。<br>◆**市花コバノミツバツツジ**…昭和 45 年、市花に選定。<br>◆**ゲンジボタル**…かつては、芦屋川・宮川流域のあちらこちらで見られ、昔の和歌集にも歌われたホタルの名所でもあった。また、業平の「蛍合戦の怪火（あやしび）」の伝説もある。<br>一時川の汚染等で、開森橋付近の川石にカワニナという淡水貝が姿を消したが、水質改善と地元有志による放流などで、この貝を餌とするゲンジボタルが再び見られるようになった。<br>◆**ヘイケボタル**…ゲンジボタルより小型のヘイケボタルは水田・湿原といった止水域を繁殖地としている。幼虫の餌になるのは、止水に生息するモノアラガイなどである。<br>芦屋市は住宅地として発展する中で市内に水田がほとんど姿を消した現在、岩ケ平（岩園町）に残る水田に、激減しているものの一部見ることができる。<br><br>＊芦屋川には、アユ・アマゴ・ゲンジボタル・カジカガエル・カワセミなど、貴重な生物が数多く生息している。<br>＊近年、河口にはカモメやカモの仲間が多く見られるようになった。 |
| 芦屋川沿いの景　観 | | ◆**業平橋からの風景**…北側は、桜並木と川沿いの建物が山肌に映える。南側は、河口に向かって松並木が続く。<br>◆**業平さくら通り**…芦屋川沿いの、国道２号・業平橋から開森橋までの両岸道路を指す愛称。<br>◆**阪神芦屋駅からの風景**…北側には、松並木に彩られた芦屋川が眼下に見え、左岸には官公署の間にカトリック芦屋教会の尖塔が、右岸には大きな邸宅が建ち並んでいる。芦屋らしい美しい風景。<br>◆**公光橋からの風景**…同上。<br>◆**大正橋からの風景**…松ノ内緑地に近く、芦屋川右岸からＪＲ芦屋駅北側の「駅前通り」に通じる橋。<br>◆**仏教会館（前田町）屋上からの眺望**…天井川風景とともに、市内 360 度を眺望することができる。<br>◆**開森橋北側の風景**…芦屋川と高座川の合流地点には、国指定重要文化財の「旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）」（山手町）が建ち、中世の山城・鷹尾城跡のある「城山」を正面に望むことができる。<br>◆**ヨドコウ迎賓館（山手町）**…国の重要文化財の指定を受けているヨドコウ迎賓館は、フランク・ロイド・ライトが山邑家（灘の酒造家・８代目の山邑太左衛門）の依頼を受けて、大正７年（1918）に別邸として設計。工事は、ライト帰国後（1924・大正 13 年）に、ライトの弟子である遠藤 新（えんどう あらた）・南 信（みなみ まこと）らによって建設された。大谷石をふんだんに使用したこの館は、芦屋川の自然地形に調和した建築物であり、またバルコニーから見る市内の眺望もすばらしい。<br>◆**芦屋公園（浜芦屋町・松浜町）**…大正６年に「芦屋遊園」が開設されたところで、当時の松林は国道２号まで続く広大な敷地を有していた。現在は国道 43 号以南となったが、往時の松林の面影をとどめている。<br>◆**芦屋の浜・打出の浜**…かつての芦屋・打出浜には、海水浴場や地引網漁の風景が見られた。また、白砂青松の遠浅の海岸は万葉のころから「漢人浜」といわれ、名称地として知られた。<br><br>＊芦屋川の桜・芦屋公園の松は、どちらも芦屋を代表する景観である。<br>＊阪神芦屋駅から眺める景色（北は山・南は海）は、芦屋そのもの。“住んでいて良かった！”と思える瞬間です。 |



芦屋公園のクロマツ（市木）林



芦屋神社のコバノミツバツツジ（市花）



芦屋霊園へと続く「さくら参道」

# A 芦屋の自然と景観

《芦屋川周辺の自然・市街地の景観》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 芦屋川の源流 | 芦屋川流域 | ◆芦屋市の最高峰・後鉢巻山（うしろはちまきやま）898.6ｍの手前、石の宝殿白山宮（はくさんぐう）の祠を下った付近が源流点。周辺は深山幽谷の趣きがある。 |
| ブナ自生地 | | ◆芦屋川源流の近くにある芦屋で唯一のブナ自生地。六甲山では、紅葉谷付近のブナが知られているが、南面の芦屋山地で見られるのは貴重。 |
| 芦屋川沿いの松林 | | ◆芦屋川畔の松は自然に育ったものばかりではなく、昭和 10 年（1935）には河口付近から業平橋までに 400 本もの松が植えられた。<br>◆明治 40 年、現在の芦屋公園の前身「芦屋遊園」（国道２号以南－臨港線）が開園。このころの芦屋川の土手は広く、広い松林の中には人力車や休憩所・お店、また遊具なども置かれ、白砂青松の景勝地として「名所絵葉書」にも必ずといっていいほど入れられていたところ。<br>◆現在の芦屋公園は、国道 43 号以南－臨港線までとなっているが、「ぬえ塚」や「阪神・淡路大震災の慰霊と誓いのモニュメント」（浜芦屋町）とともに、テニスコートの南には、『芦屋遊園』の古い石碑や石造りのあづまやや石垣で囲った築山や石橋のある丘（松浜町）などが残っており、芦屋遊園の昔の面影を今もしのぶことができる。<br><br>＊業平橋から芦屋川河口までの、松並木が美しい。 |
| 芦屋公園<br>（浜芦屋町・松浜町） | | |
| 芦屋川沿いの桜並木<br>（業平さくら通り） | | ◆芦屋川上流の桜は、戦後間もない昭和 22 年（1947）に市民の寄附によって植栽された。その後も補植を続け、今日の桜並木となっている。<br>◆平成 11 年（1999）、業平橋から開森橋までの両岸を愛称道路『業平さくら通り』と命名、現在も市民に親しまれています。 |
| 開森橋北側の桜並木 | | |
| その他の桜の名所 | 市内一円 | ◆**芦屋霊園（朝日ケ丘町）**…公園墓地。市内の眺望とともに、見事な桜が楽しめる。<br>◆**さくら参道（朝日ケ丘町）**…芦屋病院西側の道路（岩園交番北－山麓線）。満開時は、見事な桜のトンネルとなる。平成 11 年（1999）に、愛称道路「さくら参道」と命名された。<br>◆**山麓線の枝垂れ桜（六麓荘町）**…道路沿いにある擁壁上（極楽地さんの棚田の畦）に植えられた枝垂桜。<br>◆**岩ケ平公園（岩園町）**…桜の季節には、公園中が満開の桜で覆われる。<br>◆**潮（汐）見ざくら（東芦屋町）**…初代の潮見ざくらは、西山町の芦屋廃寺（塩通山法恩寺）内に、在原業平が植えたと伝えられている。<br>２代目は、前田町仏教会館の西南・国道２号北大竺堂の森（江戸時代）、３代目は明治６年に開森橋西詰・芦屋小学校校庭に植え継がれた。<br>この枝垂桜はよく成長し、京都の祇園桜のように美しく、昭和初期まで芦屋の名木として知られた。<br>４代目は芦屋史談会有志により現在の場所に植樹（昭和 33 年）され、その後も市が何度か植え替えをし、現在に至っている。<br>◆**松ノ内緑地（松ノ内町）**…元「崇信幼稚園」跡。ＪＲの芦屋川トンネルに面し、業平の桜を謳った歌碑や枝垂桜で親しまれている。<br>◆**宮塚公園（宮塚町）**…鳴尾御影線沿いの公園に咲く桜は、沿線の街路樹の新緑のトンネルとの対比が美しい。<br>◆**街路樹の桜並木（茶屋之町）**…三八通りの１本東、国道２号－鳴尾御影線の間、しゃれた店も点在している。<br>◆**川西さくら通り（川西町・平田北町）**…阪神線・北－国道２号（川西町）は、主にソメイヨシノ。国道 43 号－阪神線・南（平田北町）は八重桜並木。<br>◆**中央公園（若葉町）**…宮川沿いの桜並木は、空や宮川の川面に映えて美しい。 |
| その他の花の名所 | | ◆**コバノミツバツツジ**…芦屋の市花。芦屋の背山に多く見られる。かつては、芦屋神社が有名であったが、宅地造成の進む中、今は激減している。<br>◆**バラ（岩園町）**…岩ケ平公園内「モンテベロバラ園」に、約 40 種・200 株のバラの花が咲く。昭和 30 年開園。<br>◆**モクレン（清水町）**…清水公園周辺の街路樹として植樹されている。<br>◆**アジサイ**…ウォーターパーク（陽光町）・総合公園（陽光町）・清水公園（清水町）・芦有ドライブウエイ（奥山）などに、群生が見られる。<br>◆**ハナミズキ**…花水木通り（呉川町）・市役所前（精道町）などに多く見られる。<br>◆**希望りんご**…花水木通りの南西詰め、臨港線沿いの一隅に、４月には白い花が咲き、９月にはかわいい実をつける。<br>◆**梅林（若葉町）**…中央公園には、約 100 本の梅が咲く。<br>◆**黄ショウブ・花ショウブ（潮見町）**…西浜公園には、５月には黄ショウブ、６月には薄紫や白い花ショウブが美しく咲く。 |



宮川大橋（高浜町・若葉町）



宮川河口の生物(鵜と小鷺)

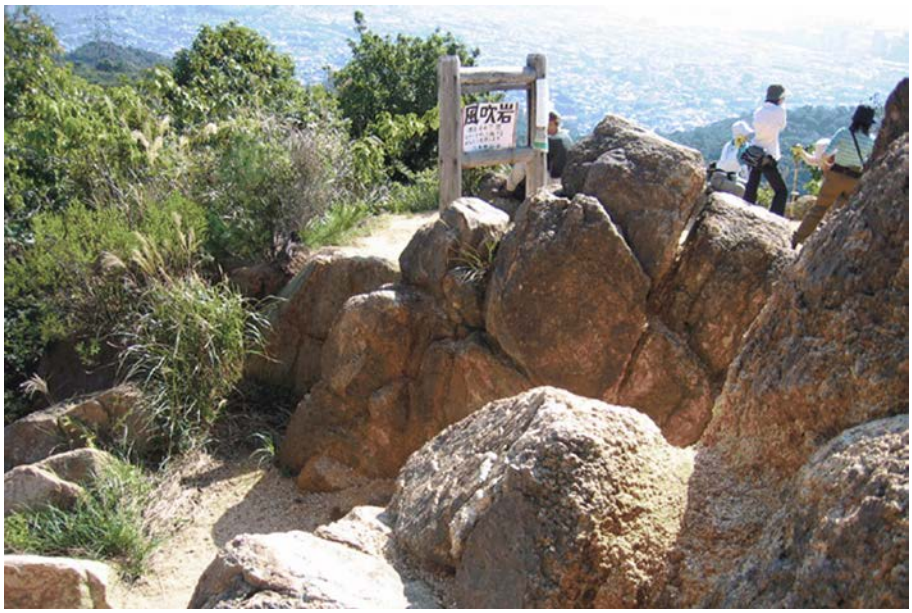


桜並木の続く宮川河口付近（中央公園）

# A 芦屋の自然と景観

《宮川周辺の自然・市街地の景観》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 宮　　川 | 宮川流域 | ◆宮川は、打出川また都川ともいい、古くは呉川と呼ばれていた。<br>宮川の名称は、下流に金比羅神社を祭ってあったので、その名が付けられたものと考えられる。江戸時代の「摂津名所大絵図」や「山論図」などには、打出川や都川の名も見られる。<br>◆源を剱谷に発して奇岩の間を清流し、水道橋付近で朝日ケ丘町の西・東山町の渓谷から流れてくる支流を合わせ川幅が広くなり、一直線に海へ流れている。全長約３㎞余り、下流の両岸は大正年間までは松林となっていて、打出の名勝地に数えられていた。<br>◆昭和に入ってから水害を防ぐための護岸工事が行なわれ、現在に至っている。<br>◆現在、宮川には、下流から汐見橋・宮川大橋・汐凪橋・下宮川橋・浜打出橋・川原橋・西蔵橋・宮川橋・常盤橋・宮塚橋・西国橋・打出橋・上宮川橋・親王塚橋・芦月橋・岸ノ郷橋・川端橋・有楽橋・岩園橋・水道橋など20の橋が架かっている。 |
| 宮 川 大 橋 | | ◆昭和 53 年４月、シーサイドタウン誕生に先立って、現在地に架けられた。<br>幅約 14 m・延長 49 mの橋には、広い歩道と車道との間に、さざなみを連想させる銀色のオブジェが美しく輝いている。<br>◆シーサイドタウンの東西をつなぐこの橋は、阪神・淡路大震災で大きな被害を受け、平成９年に大改修された。 |
| 宮川の生物 | | ◆魚が生息できる場所は、国道 43 号以南の下流に限られ、宮川橋・宮塚橋周辺にはオイカワやヨシノボリ・フナなどが生息している。<br>◆汐凪橋から河口にかけて、春にはボラの幼魚・イナの大群が遡上してくる。<br>◆芦屋川と異なり、汐凪橋から河口までが運河状になっているため、飛来する鳥もカモやカモメ・サギの仲間など、多くが飛来してくる。<br>◆宮川右岸の河川敷に見られる植物は、ほとんどが帰化植物だが、アシの小群落やマメ科・シソ科などの植物が見られる。 |
| 宮川けやき通り | | ◆国道２号の上宮川交差点北側から岩園隧道・西宮市境まで、宮川線沿いに約２㎞続くけやき並木。<br>◆平成 11 年、愛称道路「宮川けやき通り」と命名され、現在に至っている。 |
| 宮川さくら並木 | | ◆さくら参道（朝日ケ丘町）…剱谷からのせせらぎに沿って、山麓線・芦屋霊園前から宮川線・岩園交番へと続く道。満開時には、見事な桜のトンネルとなる。平成 11 年に、愛称道路「さくら参道」と命名された。<br>◆中央公園（若葉町）…宮川河口・右岸沿いにあるさくら並木。 |
| 市街地の公園等<br><br>※芦屋市内の都市公園は、平成 23 年４月現在で 142 カ所となっています。<br><br>※今回掲載の、キャナルパークなどは、その中には含まれていません。<br><br>※今回は、ご意見として上がったもののみを掲載しました。<br><br>※保護樹林等は、別途掲載としました。 | 市内一円 | ◆芦屋霊園（朝日ケ丘町）…明るい公園墓地。桜の名所で、市街地を一望できる。<br>◆前山公園（剱谷）…山麓グリーンベルトを形成する公園。<br>◆岩ケ平公園（岩園町）…モンテベロバラ園のある公園。桜の季節もすばらしい。<br>◆岩園北公園（岩園町）…大きな造形遊具とヒノキの並木が特徴的な公園。<br>◆仲ノ池緑地（岩園町）…自然生態観察公園として整備された緑地。<br>◆山手緑地（山手町）…重要文化財「旧藤井邸」洋館が保存されている緑地。<br>◆山手南緑地（山手町）…ヨドコウ迎賓館の北にある緑地。<br>◆山芦屋公園（山芦屋町）…芦屋川上流沿いの公園。<br>◆東山公園（東山町）…鳥の鳴き声や虫の音色が楽しめる森林公園。<br>◆楠公園（楠町）…ブランコに乗りながら、電車が見えるように工夫されている。<br>◆清水公園（清水町）…地下を流れるこの地の小川をせせらぎ等に利用した公園。<br>◆月若公園（月若町）…高浜虚子三代句碑がある。山手幹線開通で全面改修された。<br>◆松ノ内公園（松ノ内町）…かつての屋敷跡の風情が残る公園。<br>◆前田公園（前田町）…平成 15 年（2003）に整備。かつての屋敷跡の風情が残る。<br>◆宮塚公園（宮塚町）…鳴尾御影線や中央線の街路樹に囲まれた公園。桜の名所。<br>◆打出公園（打出小槌町）…かつて「お猿の公園」として親しまれた公園。<br>◆大東公園（大東町）…芝生公園。お花見広場のある桜の名所。<br>◆南宮公園（南宮町）…江尻川緑道と一体となって、緑を守っている公園。<br>◆江尻川緑道（大東・南宮町）…下水道整備によって生まれた緑道。<br>◆芦屋公園（浜芦屋・松浜町）…松林とテニスコートのある、芦屋を代表する公園。<br>◆臨港線遊歩道沿いの緑地（呉川町）…希望りんごの樹木が植えられた緑地。<br>◆芦屋中央公園（若葉町）…市内で１番広く、野球場や梅林もある公園。<br>◆西浜公園（潮見町）…日本庭園風の池やあずまやのある公園。<br>◆総合公園（陽光町）…本格的な競技用トラックもある、緑ゆたかな公園。<br>◆親水公園（陽光町）…南芦屋浜のほぼ中央にあり、東西に伸びた開放的な公園。<br>◆キャナルパーク（陽光町）…北側護岸（潮見町）を含め、尼崎港湾事務所が管理。<br>◆陽光緑地（陽光町）…キャナルパーク南にあり、緑の中の散歩が楽しめる公園。<br>◆潮芦屋ビーチ（南芦屋浜町地先）…昔の芦屋浜を髣髴とさせる砂浜と、磯遊びや潮干狩りも楽しめるビーチ。サマーカーニバル花火大会の会場。 |



風吹岩（ロックガーデン）


高座の滝（雄滝）



山の標識

# A 芦屋の自然と景観

《山手方面の自然・名所》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 保護樹林等 | 市　街　地<br>〈山の手方面〉 | ◆六麓荘保護樹林（六麓荘町）…平成 21 年に整備し、「六麓荘西緑地」と改称。<br>※平成 20 年に、所有者・極楽地さんから市へ同地が寄贈されたため。<br>◆岩園保護樹林（岩園町）…平成 21 年に整備し、「岩園緑地」と改称。<br>※平成 20 年に、所有者・極楽地さんから市へ同地が寄贈されたため。<br>---<br>◆エノキの大木（西山町）…アーバンライフの南にあるニレ科の天然木。<br>◆芦屋野鳥の森（奥山）…芦有道路沿いの森。<br>◆岩ケ平の池（岩園町）…岩園天神社北側にあり、周囲を赤松の林に囲まれ、池の中ほどに石灯籠が立ち、「とうろう池」と呼ばれた。<br>◆岩園天神社の森（岩園町）…境内に 6 世紀ころの古墳や役行者（えんのぎょうじゃ）の碑がある。常緑広葉樹の森。<br><br>＊岩園天神社の森は、常緑広葉樹の極相林です。 |
| 城山（鷹尾山） | 芦屋背山<br>〈六甲山東部〉 | ◆城山は、標高 260 mのなだらかな国有林の山。頂上から、大阪湾が一望できる。<br>◆戦国時代の古戦場「松若物語」の舞台として知られる。鷹尾城跡のある山。<br>◆市花コバノミツバツツジや、ヤマツツジ・モチツツジが城山の自然を彩る。<br><br>＊城山には、毎日たくさんのかたが上り、足腰を鍛えています。 |
| 荒　地　山 | | ◆城山の尾根続きの岩場。芦屋の民話「七右衛門ぐらのたたり」の舞台となった山。<br>◆城山から荒地山にかけて、湧水がある。「荒地山の三湧水」といわれ、花崗岩をくぐって湧き出す水は、『十楽水』や『陽明水』等と湧き出す場所にふさわしい名称が付けられている。 |
| 高　座　の　滝 | | ◆高さ 10 m余の夫婦滝。この辺りで、昔の修験道関係の遺物が出土している。<br>◆雄滝の横はロックガーデンの登山口となっており、岩肌にはわが国のロッククライミングの父・アルピニストの藤木九三のレリーフが嵌め込まれている。<br>◆高座川の側には小堂があり、その裏には不動尊が祭られている。<br>◆高座の滝周辺には３軒の茶屋があり、ハイカーたちの疲れを癒す場所となっている。<br>◆高座川は、城山・荒地山とロックガーデンの間を流れ、高座の滝への谷筋を流れている。<br>◆高座橋（山芦屋町）は、明治から大正にかけての交通機関の発達に伴い住宅地が増加する中で村内の里道の利用度が高まり、明治 40 年の村議会で高座橋が整備されることに決まった。現在の橋は昭和 30 年に架け替えられ、近隣の人や山手中学校の生徒、またハイカーたちにも親しまれている。<br><br>＊高座の滝は涼しい風が吹きぬけ、滝の音が心を癒してくれる場所です。<br>＊高座の滝には、毎日早朝歩きして、一日楽しく過ごしています。 |
| ロックガーデン | | ◆ロックガーデンは、芦屋川と魚屋道（ととやみち）にはさまれ、南は高座の滝口から、北は荒地山までの一帯、神戸市と芦屋市とにまたがる岩場群を指す。<br>◆大正 13 年（1924）、藤木九三らが中心となったロック・クライミング・クラブが誕生（昭和８年解散）し、芦屋の岩場を発見。ロッククライミング発祥の地。<br>◆変化にとんだ岩場の構成や形状によって、ゲートロック（懸垂岩）、キャッスルウォール（平岩）、チョックストーン（ローソク岩）、グレイプス（墓場）、イタリアンリッジ（マッターホルンのイタリアンロックに似ている）、ピラーロック（尖岩）などと名付けられ、岩登りの良い練習場となった。<br>◆名称は、大正 13 年ころに、登山家・藤木九三などにより命名された。<br>◆昭和 38 年５月 12 日、ロックガーデンを全国に紹介したアルピニスト藤木九三の功を称える「記念レリーフ」の除幕式が行なわれた。 |
| 風　吹　岩 | | ◆魚屋道（ととやみち）の最高峰から、少し東南へ下がったところ。<br>◆眺望がよく、大阪湾やロックガーデンの岩場などの風景が広がる。<br>◆風吹岩は、ハイキング道の要所・休憩所として親しまれ、大きな鉄柱が目印となっている。風がいつも強く吹いているため、風吹岩と名付けられた。 |



山麓線に咲く枝垂桜（六麓荘町）



花水木通り・ハナミズキ（呉川町）

# A 芦屋の自然と景観

《愛称道路と景観》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 愛称道路と並木道 | 市内一円 | ◆平成 11 年、一般のかたから募集し、20 の道路の愛称名が決定した。<br>なお、10 川西さくら通りと 17 花水木通りについては選定せず、選定以前からの地元で定着していた名称をそのまま採用している。<br><br>1 奥池グリーンロード（奥池南町）…芦有道路の奥池ハイランド進入路から、奥池を経由し、再び芦有道路に出るまでの全長 2.51㎞の道。閑静な住宅群、整備された緑豊かな街路や、四季折々の奥池の自然美が楽しめる。<br>2 日の出坂（六麓荘町）…八十塚橋西から日の出橋を経由し、西宮市境に至る 0.59㎞の道。木立に囲まれた豪邸群や、芦屋大学などがある。<br>3 山麓線（六麓荘町～山手町）…八十塚橋バス停西から県道奥山精道線に至る1.85㎞の山肌に沿うように続く道。<br>4 さくら参道（朝日ケ丘町）…剱谷からのせせらぎに沿って、山麓線・芦屋霊園前から宮川線・岩園交番前へ。満開時には、見事な桜のトンネルとなる。<br>5 岩園並木坂（岩園町）…岩園保育所北側交差点から岩園隧道までの 0.62㎞の道。ナンキンハゼの並木道。<br>6 宮川けやき通り…国道 2 号・上宮川交差点から宮川線沿いに岩園隧道までの 2 ㎞の道。緑のトンネルのあちらこちらにしゃれたお店も点在する。<br>7 駅前通り…宮川線・上宮川橋交差点から、ＪＲ線北側の道を通り、芦屋川に至る 0.80㎞の東西の道。駅前には、ホテルやデパート・商店街等がある。<br>8 稲荷山線…臨港線・南宮ポンプ場前の交差点から北へ、国道 2 号を越え、ＪＲ線に至る 1.21㎞の道。稲荷山に行く参道があったといわれる。<br>9 鳴尾御影線…西宮市境から神戸市境に至る 2.11㎞、芦屋を横断する東西の道。街路樹のけやき並木（打出小槌町・宮塚町）が美しい。<br>10 川西さくら通り（川西町・平田北町）…阪神線・北－国道 2 号（川西町）は、主にソメイヨシノ。国道 43 号－阪神線・南（平田北町）は八重桜並木。<br>11 江尻川若草通り…大東町と南宮町境で、臨港線から国道 43 号までの 0.55㎞の南北の道。かつて、西国街道まで船が入れたという江尻川。今は暗渠となったその上に造られた緑地にこの愛称が付けられた。<br>12 浜風通り（浜風町）…浜風大橋から臨港線に至る 1.43㎞の南北の道。海浜公園横の入江に浮かぶヨットやカヌーを右に見つつ、海浜公園プールを過ぎ、臨港線に至る潮風も心地よい散歩道。<br>13 シーサイドプロムナード（芦屋浜）…中央緑道。臨港線からシーサイドタウンを貫いて宮川大橋を渡り、芦屋川河口へと至る緑豊かな 2.09㎞の道。浜風北公園・東浜公園・新浜公園・潮見東公園・西浜公園・潮見西公園に隣接。<br>14 潮風通り（潮見町）…潮風大橋から芦屋川河口までの 0.84㎞の道。 松やキョウチクトウ、ユキヤナギなどが美しい、深江の入江に沿った南北の道。<br>15 臨港線…西宮市境の堀切川から西へ、芦屋公園南詰めまでの 2 ㎞の道。南側にシーサイドタウン、北側には図書館・谷崎潤一郎記念館・美術博物館などの文化ゾーンがある東西の道。<br>16 芦屋川松風通り…芦屋川河口から業平橋までの両岸沿いの 2.80㎞の南北の道。左岸（松浜町・浜芦屋町）には芦屋公園の松林やテニスコート、さらに国道 43 号から業平橋（松浜町・浜芦屋町）には川沿いに松の街路樹が続きます。右岸（川西町・平田北町・平田町）には大きな邸宅や洋館が建ち並び、街路樹の松並木とともに芦屋らしい景観を見せている。<br>17 花水木通り（呉川町）…芦屋中央線。臨港線・呉川町三叉路北詰から国道 43 号までの 0.60㎞ の道。通り沿いのせせらぎ、足湯もあるあしや温泉・保健福祉センターなどの施設もあり、１年中、市民に親しまれている。<br>18 宮川地蔵通り…臨港線・西蔵町の交点を宮川沿いを北へ、国道 2 号までの 1.11㎞の道。道筋には、多くの地蔵尊が点在している。<br>19 業平さくら通り…国道 2 号・業平橋から開森橋までの芦屋川両岸 1.59㎞の道。ルナ・ホールや市民センターなどの施設もある芦屋市の顔。<br>20 芦屋神社道…山芦屋交番山側の道の西詰・燈篭の東から芦屋神社までの 0.49㎞の道。途中、街を一望できるスポットがある。<br>21 高座の滝道…開森橋西詰から高座川に沿うように九十九折の坂道を上り、高座の滝まで行く 1.41㎞の道。<br>22 ライト坂…開森橋東詰めから県道を北へ、ライト設計の国指定重要文化財の旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）のある、山麓線まで 0.98㎞の坂道。<br><br>◆その他の並木道<br>◇イチョウ並木（朝日ケ丘町）…市道 502 号線。黄葉するイチョウ並木の坂道は圧巻。<br>◇駅前線のさくら並木（茶屋之町・大桝町）…両町の境・鳴尾御影線から国道 2 号まで間、桜並木が美しい。 |



奥池・奥山貯水池（芦有展望台から）



雨乞いの伝承が残る弁天岩（芦有道路）



東おたふく山のなだらかな稜線

# A 芦屋の自然と景観

《奥山・奥池の自然と景観》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 奥　池 | 奥池周辺 | ◆美しい詩情とかんがい用水として大切な役割を果たしてきた奥池は、海抜 500 m以上のところにある周囲 800 mの大きな池である。<br>◆江戸時代から芦屋の村々は、日照りが続くと田畑の水不足に悩み、水争いが絶えなかった。当時、芦屋村の年寄であった猿丸又左衛門安時は、水不足による争いを解消するため、天保 12 年(1841)年から約 20 年の年月をかけて奥池の造営に成功した。<br>◆奥池の湖畔には「奥池水神社」が祭られていて、その側の大きな花崗岩の磨かれた切断面に『天保十二年 ここ奥山に 猿丸安時は治水のため谷をせきとめ 辛苦二十余年を要してこの池を築造し ここに祠を建て 水神を祭り 末永く池の安全を祈る』と刻まれている。<br>◆奥池周辺は野鳥と植物の宝庫で、リス・キツツキ・野ウサギ・キツネ・イノシシ・キジなども見られる。<br>◆奥池の周辺には、自然を生かした公園や遊歩道「奥池園地」があり、散策や休憩できるスポットとなっている。<br>◆奥池の周辺には、芦有が経営する「奥池遊びの広場」などの施設があり、バーベキューやグラウンドゴルフなどが楽しめる。<br><br>＊奥池に住み、毎日同じ場所を散歩していますが、季節や時間によってその表情は変化に富み、毎日が発見の楽しみがあります。<br>未来に守り伝えていきたい自然です。 |
| 奥山貯水池 | | ◆昭和 47 年６月、奥池の４倍以上の貯水量を有する奥山貯水池(昭和 45 年着工)が完成。人口増加に伴う将来の水資源の需要に応じるためのもので、有効貯水量 346.740 立方メートル、利用水量も奥山浄水場で遠隔操作でコントロールができるものであった。<br>◆周囲 1,100㎞ あり、その周りには幅約 10 mの巡回管理道路が造られ、散策道となっている。 |
| イ モ リ 池 | 奥池南町 | ◆氷河期の残留植物「サギスゲ」が見られる、日本西限の地といわれている。<br>◆湿地の貴重な動植物であるトキソウ・ミミカキグサ・オオミズゴケ・イモリ・サンショウウオ・ハッチョウトンボなどが見られる。 |
| ごろごろ岳 | 剱谷国有林<br>(奥池周辺) | ◆標高 565.6 m(現在は 565.3 m)の語呂合わせで「ゴロゴロ」といわれるようになったという説や、巨石がごろごろしているからという説、また別名『雷岳』から転じて「ごろごろ岳」と呼ばれているからという諸説がある。<br>◆芦屋側を「剱谷」、西宮側を「剣谷」と表記する。標高約 580 mであるが、565.6 m(現在は 565.3 m)の立合峠の頂に三角点がある。<br>◆この周辺には、大坂城石垣用の刻印石が多く残存する。<br>◆『人間灯台』と呼ばれた池野良之助氏が、昭和 10 年から 38 年間の長きにわたりその任に就いていたという「剱谷森林気象観測所跡」がある。氏はここで１人、昭和 48 年に廃止となるまで、気象観測と山火事の看視を続けた。 |
| 芦 有 道 路 | 六甲山地<br>(奥山一帯) | ◆芦屋市奥山から有馬までの 10.67㎞を、わずか 20 分で結ぶ六甲山地横断道路。<br>◆２年の年月と 26 億円の巨費をついやして、芦有開発会社によって、昭和 36 年９月 21 日に全線開通した。 |
| 弁 天 岩 | | ◆芦有道路のゲートを過ぎて、大きなヘアピンカーブを曲がる辺りの左山側に「弁天岩」があり、その谷筋に「フカ切り岩」(別名・まないた岩)の巨石がある。<br>◆いずれも、古来からの雨乞いの民間伝承のある岩。<br>◆伝承によれば、旱魃に苦しむ村人たちは、芦屋(打出)沖で大きなフカを捕らえ、この岩場まで運び上げる。そして、まないた岩でそのフカを切り殺し、それを弁天岩の岩肌に投げつけ、神聖な住家を血で汚され怒った水神が、それを洗い落とすために激しい雨を降らせてくれると、信じてきた。<br>◆天保５年(1834)８月に、95 日の日照りの末、この「フカ切り」を行なったと、芦屋に残る記録は教えてくれる。 |
| フ カ 切 り 岩 | | |
| 東おたふく山<br>（ 花 原 ） | | ◆ 696 mの東おたふく山(シノキ山)付近は、おたふくの名のように草山が多く、まるでビロードで覆われたようなおだやかな地形である。<br>◆その南のふもとの花原盆地は、450 mの高位にあり、植物の多い土地となっている。四季とりどりの美しい花が見られ、春から初夏にかけてウメバチソウ・イワカガミ・ウチョウランなどが咲き、野鳥が遊ぶ、実に楽園の風情がある。 |

# コラム『芦屋のモダニズムとライフスタイル』

大阪と神戸の中間に位置する芦屋は、阪神間モダニズムの中心とも言える存在です。

そして、山と海を背景に風光明媚で気候温暖なロケーションは南仏ニースにも例えられる日本屈指の住宅都市へと発展を遂げました。

明治末年から大正にかけて、阪神・国鉄（JR）・阪急の順に駅舎が設置され、移住者は増加の一途をたどります。そのなかで、単に外来の洋風建築を真似るだけではなく、地域風土に根ざした和洋折衷とも言える阪神間特有のモダニズム建築が生まれ、芦屋はその中心地ともいえる存在となりました。

今日、確認できる代表的な建築として、フランク・ロイド・ライト設計の重要文化財住宅ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）[1]、芦屋仏教会館[2]、芦屋市立図書館打出分室（旧松山家住宅）[3]、滴翠美術館（山口吉郎兵衛邸）、などがあります。

注）1･2･3 は編集の都合上“B：芦屋の史跡と文化財”に分類



芦屋仏教会館設計図面（芦屋市立美術博物館蔵）

# A 芦屋の自然と景観

《芦屋の景観・モダニズム建築物》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 旧国際ホテル<br>（芦屋大学本館） | 六 麓 荘 町 | ◆六麓荘は、昭和４年ころ、国有林の払い下げを受け、大阪の富豪らにより設立された株式会社六麓荘によって、数万坪・197 区画の宅地造成が行われた。<br>◆六麓荘では、街路の完全舗装、電力・電話線の地下埋設、上下水道整備や巡査派出所まで完備された近代的なまちが、昭和６年に完成している。<br>◆国際ホテルは、昭和 12 年、六麓荘の傾斜地中腹に建てられたが、戦後ＧＨＱに接収された後、芦屋女学校の手に渡り、現在は芦屋大学となっている。 |
| 滴 翠 美 術 館<br>（山口吉郎兵衛邸） | 山 芦 屋 町 | ◆山口吉郎兵衛氏は、当時、山口銀行を有する著名な事業家で、かつ茶の湯や古美術界で知られた名流人であった。<br>◆昭和８年、山芦屋町の高台に、主に山口氏の社交の場として建てられた。<br>◆本館は鉄筋コンクリート造・屋根は鉄骨トラスト構造の相当規模の建築であり、加えて木造平屋一部２階建ての附属室を持つ。<br>◆近代建築に日本瓦を積極的に活用した、モダンと伝統の対比した特徴がある。 |
| 旧山邑家住宅<br>（ヨドコウ迎賓館） | 山 手 町 | ◆昭和 49 年５月 、国の重要文化財の指定（日本初）を受ける。<br>◆国の重要文化財の指定を受けているヨドコウ迎賓館は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが、山邑家（灘の酒造家・８代目の山邑太左衛門）の依頼を受けて、大正７年（1918）に別邸として設計されたもの。<br>◆工事は、ライト帰国後（1924・大正 13 年）に、ライトの弟子である遠藤 新（えんどう あらた）・南 信（みなみ まこと）らによって建設された。 |
| 旧 藤 井 邸 | 山 手 町<br>（山手緑地内） | ◆昭和初期、「松風山荘」（医学博士・佐多愛彦氏提唱の別荘地）の一角に建てられた和洋折衷の住宅（小川安一郎設計＊六麓荘町・旧平野邸や旧南蛮美術館なども設計）。<br>◆平成７年の阪神・淡路大震災で損壊するまでは、「共済組合 芦屋会館」として使用され、多くの客を迎え入れていた。<br>◆現在は、山手緑地（山手町）の敷地内に和館の一部と蔵が保存されている。 |
| 重 信 医 院 | 西 山 町 | ◆谷崎潤一郎「細雪」の中で、『櫛田医院』のモデルとされたことで有名。<br>◆大正 15 年築・木造２階建ての和洋館の住宅兼医院。<br>◆現在（平成 24 年）も、当時の場所そのままに、医院を続けられている。 |
| 仏 教 会 館 | 前 田 町 | ◆崇信会会長・伊藤長兵衛氏（丸紅社長）の発願により、昭和２年６月５日に落成。<br>◆昭和 10 年４月３日、会館の附属事業として、崇信幼稚園を開園（松ノ内町・現松ノ内緑地内）。<br>◆敷地面積 204 坪余で、建坪 60 坪の鉄筋コンクリート３階建・地下室付会館。<br><br>※市民会館完成までは、ここで「芦屋市展」なども開催されていた。 |
| カトリック<br>芦屋教会 | 公 光 町 | ◆芦屋川沿いの風景にとけ込み、美しい景観を醸している。<br>《略史》<br>・昭和 20 年（1945）、稲畑邸（平田町）を仮聖堂として芦屋教会発足。<br>・昭和 30 年（1955）、現在地に「カトリック芦屋教会」竣工。<br>・平成 18 年（2006）、教会献堂 50 周年を迎えた。 |
| 松　涛　館<br>（図書館打出分室）<br><br>＊史跡・文化財にも再掲 | 打出小槌町 | ◆平成 20 年 12 月 、芦屋市で２番目となる「国の登録有形文化財」に登録される。<br>※１番目の登録文化財は、平成 19 年１月の「中川家住宅」（三条町・昭和５年築）。武田五一氏設計の和洋折衷の建物。主屋・表門・塀が登録文化財に登録された。<br>◆打出小槌町にあるこの石造建築物は、明治中期から後期にかけて建設され、元大阪の 12 両替屋の一つで、逸見銀行の所有建物。それを、昭和５年に松山與兵衛氏が購入し、現在の打出小槌町に移築し美術品等の保管に使われた。昭和 27 年に松山與兵衛氏から市が買収、石造２階建て洋館の内部を改装し、昭和 29 年から昭和 62 年まで図書館本館として利用。平成２年 12 月 17 日からは、図書館打出分室として利用されている。<br>◆外観はイタリアルネサンスのパラッツオ風の、重厚でルスチカ仕上げの花崗岩を積み、縦長のアーチ窓を持っている。また「松濤」の文字をデザインした扉、その内側にロマネスク調の木製飾り柱等があり、石垣塀と建築が調和し、地域の重要なシンボル的存在となり、落ち着きあるたたずまいの形成に寄与していることが、登録有形文化財に登録された理由とされている。 |

## 《芦屋のモダニズム建築物》



芦屋警察署＜公光町＞昭和２年(1927)当時の正面玄関

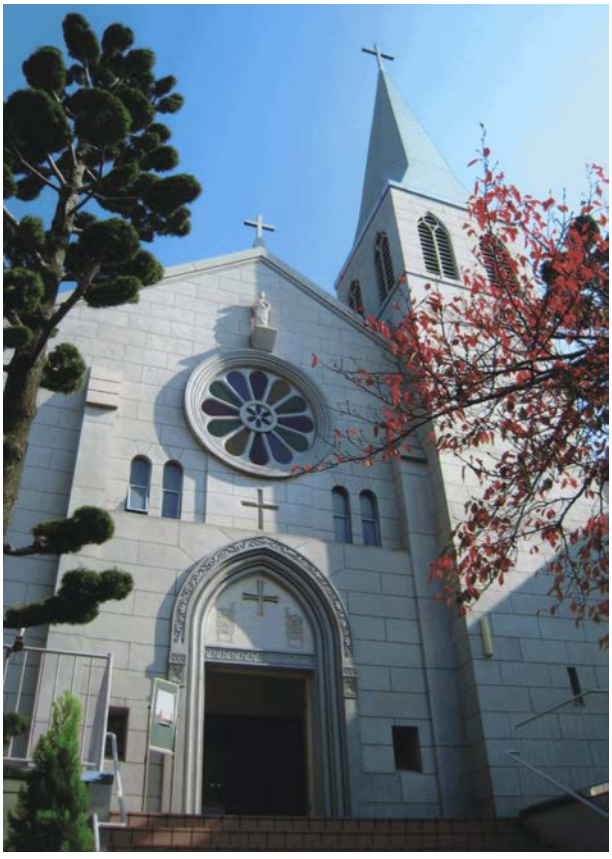


昭和２年建設の仏教会館＜前田町＞平成 16 年(2004)撮影

# 《芦屋のモダニズム建築物》



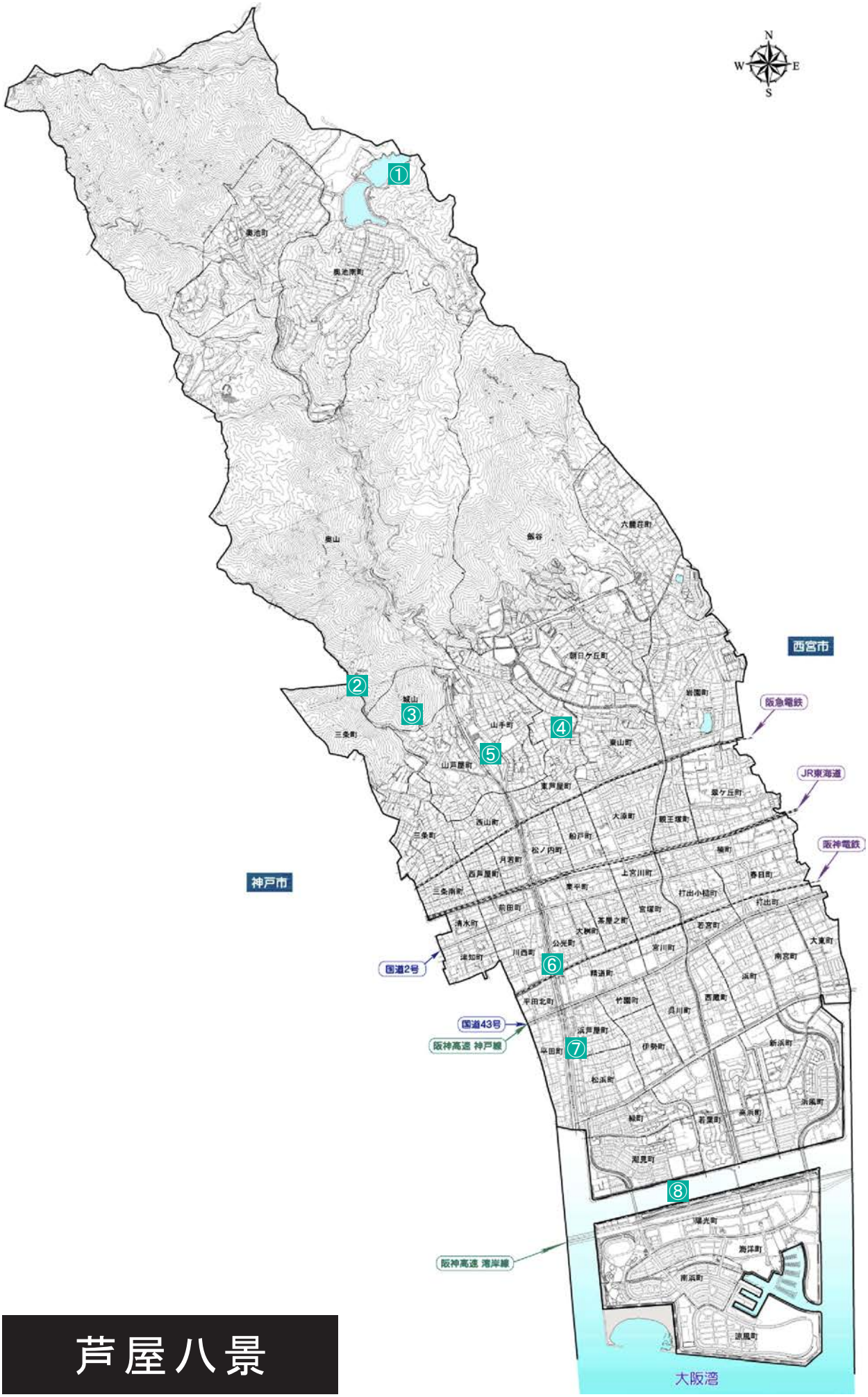
旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）４階食堂の北面暖炉＜山手町＞



芦屋川畔に建つ「カトリック芦屋教会」＜西山町＞平成 20 年(2008)撮影




重信医院＜西山町＞平成元年(1989)撮影／広報あしや 11 月 1 日号表紙


N
W
E
S
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
奥池町
奥池南町
奥山
飯谷
六麓荘町
西宮市
鷲林寺
城山
三条町
山手町
東山町
山芦屋町
東芦屋町
岩園町
阪急電鉄
JR東海道
阪神電鉄
神戸市
西山町
船戸町
松ノ内町
月若町
西芦屋町
三条南町
東平町
上宮川町
打出小槌町
春日町
打出町
前田町
清水町
茶屋之町
宮塚町
若宮町
大東町
大桝町
公光町
川西町
宮川町
南宮町
国道2号
精道町
浜町
平田北町
竹園町
西蔵町
国道43号
浜芦屋町
阪神高速 神戸線
平田町
伊勢町
新浜町
松浜町
浜風町
若葉町
潮見町
曙光町
海洋町
南浜町
阪神高速 湾岸線
大阪湾

# 芦屋八景

芦屋観光協会60周年記念事業

# 「新芦屋八景」を選定

問い合わせ　芦屋観光協会事務局　☎㊳2033（経済課内）

芦屋観光協会では、創立六十周年を記念して「新芦屋八景」を、新たに選定しました。

「芦屋十景」は、芦屋観光協会の五周年を迎えた昭和二十九年に選定されましたが、その後も昭和四十年・昭和五十五年と、その時代に合わせて改訂されてきました。今回は、観光協会六十周年を迎えるに当たり、「選定委員会」で、現在の芦屋にふさわしい景観を、新たに決定しました。

＊選定委員＜敬称略＞
委員長・城純一（観光協会会長）、委員・小田脩造（商工会会長）、廣瀬忠子（婦人会会長）、室井明（自治会連合会会長）、藤巻孝正（芦屋神社宮司）、柴田直義（ヨドコウ迎賓館館長）、中路之啓・三宅育夫（阪急電鉄調査役）ほか、環境協会会員、市の部長等、委員長一人・委員十人

◆◆◆　選　定　理　由　◆◆◆

**①奥池と芦有道路の景観**　六甲山の緑を映す奥池は、海抜 500 mの高所にある。自然に恵まれた周辺は野鳥や植物の宝庫であり、芦有道路に沿って展開する渓谷美や大阪湾の遠望もすばらしい。

**②高座の滝とロックガーデン**　高さ約 10 mの夫婦滝。小さいが滝は美しく、周囲は樹木に覆われて静寂の中に滝の水音が冴える。ロックガーデンの登山口でもあり、一変して白々とした奇勝が展開する。

**③城山と会下山遺跡**　標高 260 mの鷹尾山。通称城山として親しまれている。戦国時代には阪神間での古戦場であった。山麓には古墳が点在し、馬の背から荒地山に至るハイキングコースが通り、遠望も楽しめる。高座川を挟んで、すぐ西南に位置する会下山遺跡は、標高 200 m、約 1800 年前の弥生文化期の高地性集落跡。ここからは古代人の住居跡や多くの貴重な土器、石器類等も出土し、県史跡に指定されている。

**④芦屋神社**　芦屋の氏神さま。「緑ゆたかな美しいまちづくり条例」によって指定する、市内唯一の保護樹林がある。７世紀の横穴石室、宝塔、歌碑等芦屋の生活文化史を彩るものも多い。


②高座の滝

**⑤重要文化財旧山邑家住宅**　昭和 49 年に国の重要文化財に指定されました。灘の酒造家山邑太左衛門が、帝国ホテルなどの設計をしたアメリカの建築家Ｆ．Ｌ．ライトに別荘として設計を依頼し、大正 13 年に完成した邸宅。Ｆ．Ｌ．ライトの住宅建築としては日本で唯一ほぼ完全な姿で現存するもの。

**⑥芦屋川河畔**　国道２号線を境に北は桜並木、南は松並木と堤防上の風致もすばらしい。潮見桜、山邑邸、ルナ・ホール、高浜虚子三代句碑等が点在し、散策にも好適。ＪＲと交差するところは、天井川として全国的にも珍しい。

**⑦芦屋公園**　芦屋川に沿って国道 43 号のすぐ南に広がる松林の公園。「市木」のクロマツの姿が美しくその数百本の松がつくり出す木影は市民のこの上ないオアシスでもある。公園の一角には古い伝説を秘めた「ぬえ塚」がある。

**⑧キャナルパークと潮芦屋ビーチ周辺**
キャナルパークは、海浜スポーツの絶好の場として親しまれている。潮芦屋地区には、新たな憩いの場になっている陽光緑地など、六甲の山並みや芦屋浜の超高層住宅群を借景にした近代都市・芦屋らしい景観に恵まれた地域。


①奥池


③城山


④芦屋神社


⑤重要文化財旧山邑家住宅


⑦芦屋公園


⑧キャナルパークと潮芦屋ビーチ周辺

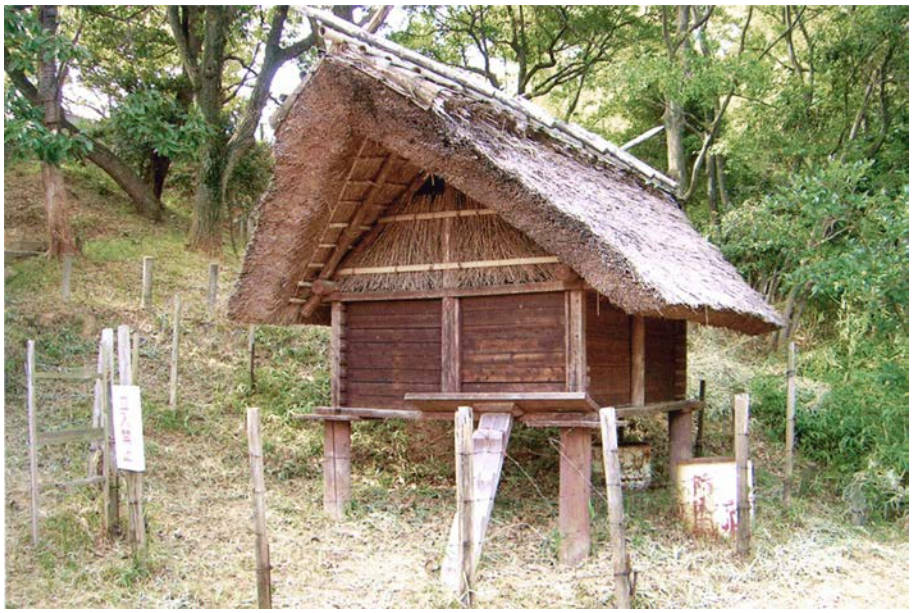



*To be continued in the Future.*

# B　芦屋の史跡・文化財



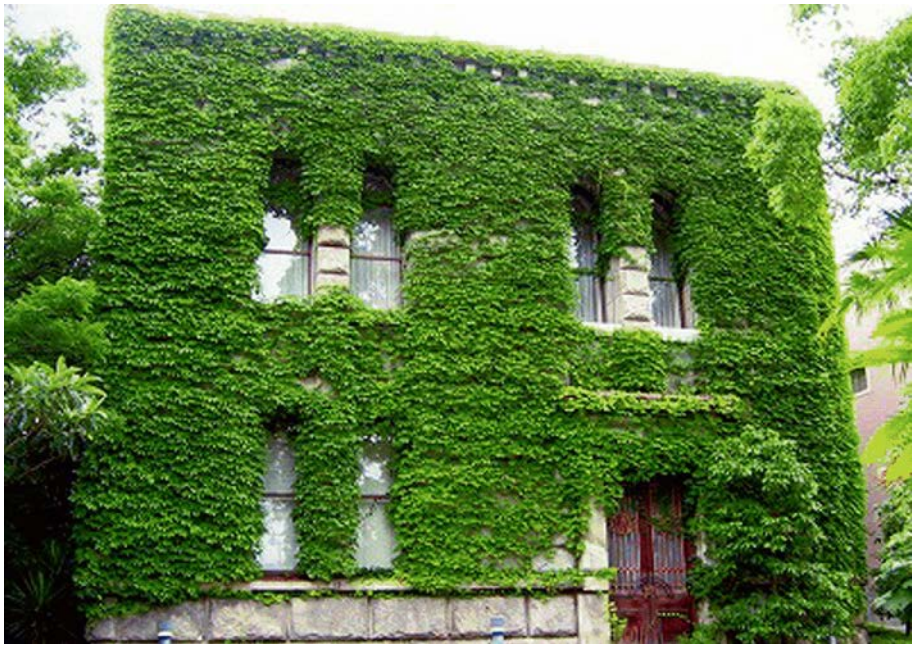
水車臼跡（山芦屋町）



会下山遺跡・復元された高床式倉庫



旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）〈山手町〉



旧松山家住宅（図書館打出分室）〈打出小槌町〉

# B 芦屋の史跡・文化財

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 会下山遺跡 | 三条町地先 | ◆昭和 35 年、兵庫県史跡第１号に指定<br>◆平成 23 年２月７日、国の史跡（史跡名勝記念物）に指定される。<br>◆標高 200 ｍにある弥生時代中期から後期の高地性集落跡で、復元された高床式倉庫がある。<br>◆昭和 29 年、芦屋市の山手中学校植物実習園の整備工事の際、生徒が弥生時代の土器を発見したことを契機として昭和 31 年から 36 年まで発掘調査。その結果竪穴住居跡や祭器場跡、火焚場をはじめ弥生時代の集落を構成する生活跡と当時使用された土器・石器・鉄器・青銅器などの遺物が発掘された。<br>◆高地での水汲場は東斜面の山裾に設定していた。第４、第５トレンチでは斜面に造成した段状遺構が確認され、これらの遺構から弥生時代後期前半の甕や高坏が出土し、高座川への水汲みルートも想定された。<br>◆出土した「青銅製漢式三翼鏃」（市指定文化財）は、美術博物館（保管 / 市教育委員会所蔵）で見られる。 |
| 城山遺跡 | 山芦屋町地先 | ◆会下山とは高座川を隔てて東側に対峙する標高 250 ｍの鷹尾山山頂部一帯にある高地性集落で、弥生時代の土器や古墳時代後期の古墳群が出ている。<br>本格的な発掘調査はされていないが、一部試掘調査された地点では包含層及び遺構の存在が確認され、集落址遺存が予想される。2000 年の国の砂防工事に伴う調査では西側斜面において実際に竪穴住居が発掘されている。<br>◆謡曲「松若物語」の舞台、中世の山城（鷹尾城）城跡の遺構がある。古戦場。 |
| ヨドコウ迎賓館<br>（旧山邑家住宅） | 山手町 | ◆昭和 49 年５月 、国の重要文化財の指定（日本初）を受ける。<br>◆国の重要文化財の指定を受けているヨドコウ迎賓館は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが、山邑家（灘の酒造家・８代目の山邑太左衛門）の依頼を受けて、大正７年（1918）に別邸として設計されたもの。<br>◆工事は、ライト帰国後（1924・大正 13 年）に、ライトの弟子である遠藤 新（えんどう あらた）・南 信（みなみ まこと）らによって建設された。<br>◆来歴は、次のとおり。<br>1918 年（大正７年）　《基本設計終了》<br>1923 年（大正 12 年）　《着工》<br>1924 年（大正 13 年）２月　《上棟》<br>1924 年（大正 13 年）　《竣工》<br>1935 年（昭和 10 年）　天木繁二郎氏の所有となり別荘として使用<br>戦後進駐軍の社交場となる<br>1947 年（昭和 22 年）　淀川製鋼所の所有となり、社長公邸として使用<br>1959 年（昭和 34 年）　貸家となり米国人が住む<br>1971 年（昭和 46 年）～ 1973 年（昭和 48 年）<br>淀川製鋼所独身寮として使用<br>1974 年（昭和 49 年）５月　国の重要文化財の指定を受ける<br>1981 年（昭和 56 年）　《調査工事》<br>1985 年（昭和 60 年）７月～ 1988 年（昭和 63 年）11 月　《保存修理工事》<br>1988 年（昭和 63 年）12 月　《完工》<br>1989 年（平成元年）６月　淀川製鋼所迎賓館として、一般公開開始<br>1995 年（平成７年）１月　阪神淡路震災により一部破損<br>1995 年（平成７年）６月～ 1998 年（平成 10 年）３月　《調査・修理工事》<br>1998 年（平成 10 年）３月　《完工》<br>1998 年（平成 10 年）５月　一般公開再開 |
| 図書館・打出分室<br>（旧松山家住宅<br>「松濤館」） | 打出小槌町 | ◆平成 20 年 12 月 、芦屋市で２番目となる「国の登録有形文化財」に登録される。<br>※１番目の登録文化財は、平成 19 年１月の「中川家住宅」（三条町・昭和５年築）。武田五一氏設計の和洋折衷の建物。主屋・表門・塀が登録文化財に登録された。<br>◆打出小槌町にあるこの石造建築物は、明治中期から後期にかけて建設され、元大阪の 12 両替屋の一つで、逸見銀行の所有建物。それを、昭和５年に松山與兵衛氏が購入し、現在の打出小槌町に移築し美術品等の保管に使われた。昭和 27 年に松山與兵衛氏から市が買収、石造２階建て洋館の内部を改装し、昭和 29 年から昭和 62 年まで図書館本館として利用。平成２年 12 月 17 日からは、図書館打出分室として利用されている。<br>◆外観はイタリアルネサンスのパラッツオ風の、重厚でルスチカ仕上げの花崗岩を積み、縦長のアーチ窓を持っている。また「松濤」の文字をデザインした扉、その内側にロマネスク調の木製飾り柱等があり、石垣塀と建築が調和し、地域の重要なシンボル的存在となり、落ち着きあるたたずまいの形成に寄与していることが、登録有形文化財に登録された理由とされている。 |



会下山遺跡から出土した弥生時代の日常容器



堂ノ上出土の流水紋銅鐸（親王寺所蔵）〔写真提供　山本徹男氏〕

**農耕の祭りと埋められた銅鐸**

弥生時代には稲作とかかわる農耕儀礼や祭祀が発達しました。その中心が銅鐸による祭です。銅鐸は銅・スズ・鉛の合金が原料で、複雑な構造の鋳型によって造られた鋳造青銅器です。

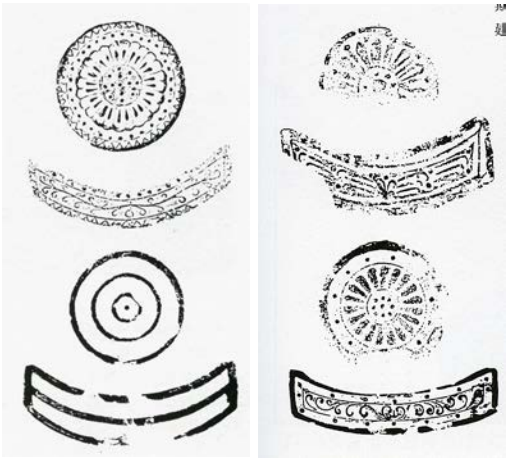
全国では 400個以上の出土例があり、60個近い数が見つかった兵庫県は最も出土数の多い地域です。市内では楠町の堂ノ上という地名のところから美しい流水紋銅鐸が１個発見されています。周辺は銅鐸が数多く見つかっている地域で、六甲山地斜面の桜ヶ丘・渦森（うずがもり）・中野生駒・森遺跡や、平野部の津門（つと）・本山遺跡がその出土地です。

銅鐸の発見場所は山腹や山麓の人里離れた所が多いのですが、近年、集落内に穴を掘って上手に埋めた例も多く見つかり、祭の方法にもいろいろあったようです。



芦屋廃寺跡創建当初の塔心礎（兵庫県指定史跡）

芦屋廃寺跡出土瓦



●芦屋廃寺の創建は、白鳳の特色を示す八葉複弁蓮華文の軒丸瓦の存在から、７世紀末に遡ることが知られます。この瓦は、法隆寺の流れをくむもので、その寺領と関係する可能性もあります。

# B 芦屋の史跡・文化財

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| **その他の市内の遺跡・埋蔵文化財**<br><br>※芦屋市内には、現在 150 カ所近くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。<br><br>※時代的には、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世のいずれかに属するか、または２つ以上にまたがって、複合遺跡を形成しています。<br><br>※今回は、平成 21 年４月・市教委編纂の「芦屋市文化財調査報告第 80 集」から抜粋、主要 29 遺跡（前頁掲載分除く）を掲載しています。<br><br>※「徳川大坂城東六甲採石場」である『岩ケ平刻印群（六麓荘・岩園・朝日ケ丘町）』、『奥山刻印群（奥池・劔谷・朝日ケ丘町）』、『城山刻印群（城山・東芦屋町）』は、次の「史跡」欄に紹介しています。<br><br>《その他のご意見》<br>※市民の意見として上がった、山手町から出土した「新羅印花紋陶質土器」は、列島内で屈指の資料の１つで、芦屋と新羅との交流を示す物的遺産ですが、左の一覧には入っていません。<br><br>※市民の意見として上がった、「山手緑地の化石層」についても、古生代のフズリナの化石が見られますが、左の一覧には入っていません。 | 市内一円 | ◆**朝日ケ丘遺跡（朝日ケ丘町）**…昭和 39 年発見。縄文時代前期を主体とする遺跡。<br>◆**芦屋神社境内古墳（東芦屋町）**…境内の西隅に保存されている横穴式石室墳は、天井石を残した後期古墳。<br>◆**芦屋廃寺遺跡（西山・西芦屋・三条・三条南町）**…縄文時代早期から近世に至る複合遺跡。白鳳時代から近世の瓦が大量に出土することから、古代寺院（塩通山法恩寺）の存在が推定される。<br>◆**阿保親王塚古墳（翠ケ丘町）**…前期古墳（宮内庁管理）。前方後円墳の可能性も強い。江戸時代（宝永年間）に出土した銅鏡（三角縁神獣鏡・内行花文鏡）等から、４世紀後半の築造と思われる。古式の円筒埴輪片も出土。<br>◆**打出岸作り遺跡（大原町）**…昭和 11 年・12 年、弥生土器出土。平成３年には、中世の水田ほか、弥生時代末から古墳時代初頭の土器・木製品を多数出土。<br>◆**打出小槌遺跡・古墳（打出小槌町）**…遺跡からは平安時代から近代の重複する水田層、また旧石器時代のナイフ形石器が出土。<br>打出小槌古墳は、５世紀末に築かれた前方後円墳と推定。円筒埴輪・形象埴輪など、多数の遺物が出土。緑や赤で彩色された器財埴輪や、入れ墨を有する人物埴輪は、県下でも貴重な存在となっている。<br>◆**大原遺跡（大原町）**…昭和 36 年に発見。平成２年の調査では、中世の遺物等ほか鎌倉時代から江戸時代、また古墳時代の水田跡が確認された。旧石器時代から縄文時代の石器も数点検出されている。<br>◆**金津山古墳（春日町）**…５世紀後半築造の前方後円墳。円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・器財埴輪・人物埴輪・動物埴輪など多数出土。<br>◆**冠遺跡（山芦屋町）**…標高 53 ｍの傾斜地に立地。弥生時代から近世までの複合遺跡であるが、主体は古墳時代から中世の資料。<br>◆**久保遺跡（親王塚町）**…鎌倉時代から室町時代の水田面を検出。別の地点では、弥生土器や石のやじりなどが出土している。<br>◆**呉川遺跡（呉川町）**…大坂城再築用石材の集積場・船出場と推定。美術博物館の前庭や花水木通り南詰めに野外展示されているのは、ここの出土石。<br>◆**小松原遺跡（打出小槌・春日町）**…金津山遺跡に隣接。弥生時代中期の方形周溝墓や土器などが見つかっている。<br>◆**三条岡山遺跡（三条町）**…弥生時代中期、古墳時代中後期以降、中世の遺物を包含する複合遺跡。７世紀初頭の祭祀遺構や須恵器大甕・高杯等出土。<br>◆**三条九ノ坪遺跡（三条町）**…弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居、平安時代前期の段状遺構や日本で２番目に古い木簡（652 年）が発見された。<br>◆**三条古墳群（三条町）**…古墳時代後期の群集墳。竈形土器・馬具・鉄鏃など特徴的な遺物が副葬されており、渡来系氏族の墓域と考えられている。<br>◆**城山古墳群（城山・東芦屋町）**…三条古墳群の東方に位置する古墳時代後期の群集墳。巨石墳・多角形墳など。渡来系氏族の関連が考えられる。<br>◆**城山南麓遺跡（城山・山芦屋町）**…城山山頂の弥生遺跡とは別の弥生時代の遺跡。<br>◆**月若遺跡（月若・西芦屋・西山町）**…縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡。５～６世紀の祭祀遺物や、近世の酒造関連の竈 10 基などが出土。<br>◆**津知遺跡（津知町）**…８世紀末～９世紀前半の建物跡や和同開珎・万年通宝・緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・硯・軒瓦など豊富な遺物が出土。<br>◆**寺田遺跡（三条・西芦屋町）**…弥生時代後期から近世までの複合遺跡。出土品には、奈良時代の墨書土器や和同開珎が特筆される。<br>◆**堂ノ上銅鐸出土地（楠町）**…江戸時代（宝永年間）に、旧字堂ノ上から銅鐸が出土。平野部での出土は重要。鐸身には流水紋が施されている（親王寺所蔵）。<br>◆**業平遺跡（松ノ内・業平町）**…縄文時代から中世に至る複合遺跡。縄文時代の石器製作跡や、古墳時代の古い横穴式石室や竪穴住居跡・土器棺等が出土。<br>◆**藤ケ谷遺跡（東芦屋町）**…昭和 15 年に発見。芦屋神社一帯に散布する弥生遺跡。弥生土器・打製石鏃・叩き石ほか、須恵器片なども出土。<br>◆**前田遺跡（前田町）**…主として縄文時代晩期前半の土器溜りや、弥生時代前期の水田跡、および古代の遺構・遺物が出土。<br>◆**翠ケ丘古墳群（翠ケ丘・楠・春日・南宮・親王塚・打出小槌町）**…古墳時代前期から後期にわたる古墳群。前期では「**阿保親王塚古墳**」、中期では「**金津山古墳**」・「**打出小槌古墳**」、後期では「**打出駒塚古墳**」や**四ツ塚**をはじめとする多くの伝承墳がある。首長系譜のたどれる市内唯一の古墳群。<br>◆**八十塚古墳群（六麓荘・岩園・朝日ケ丘町）**…現在、62 基の古墳が確認されている。<br>◆**山芦屋遺跡（山芦屋町）**…近畿では希少な縄文時代早期の遺物や、弥生時代後期の住居跡、中世の遺物包含層が確認されている。<br>◆**六条遺跡（清水町）**…古代から中世にかけての複合遺跡。古代の井戸や墨書土器をはじめ、芦屋の荘園期に関わる遺物、中世の遺構・遺物が多数出土。<br>◆**若宮遺跡（若宮町）**…縄文時代晩期から弥生時代中期までの、初期農耕集落跡。縄文時代や弥生時代の土器ほか、古墳時代や古代・中世の遺物も出土。 |



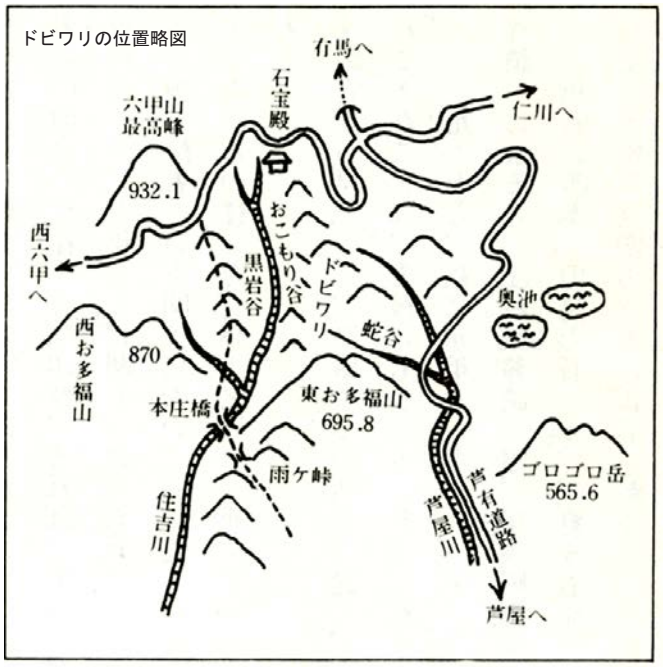
復元されたナウマン象（大阪市立自然史博物館）



ナウマン象の化石発掘現場（昭和 36 年ころ）

# B 芦屋の史跡・文化財

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 市内の史跡等 Ⅰ<br><br>※今回は、昭和 54 年３月・市教委発行の「芦屋の生活文化史―民俗と史跡をたずねて―」から抜粋、また「芦屋の未来遺産」に寄せられた市民のご意見を加え、掲載しています。<br><br>※ただし、文化財と重複するものは省略し、『民話・伝説』に属するものは、次の《C》で紹介しています。なお、史跡的要素の濃厚なものについては、再掲しました。 | 市内一円 | ◆ナウマン象化石出土地（奥池南町）…昭和 36 年３月、芦有道路の開設工事に伴い、料金ゲート北方約 100 ｍの芦屋川左岸の洪積層から化石が出土。大阪市立自然史博物館の鑑定によると、化石はナウマン象の右下顎の第三真臼歯とみられ、出土した地層から３～ 10 万年前のものと推定されている。<br><br>◆芦屋廃寺跡（西山町）…「行基年譜」には、『天平２年（730）菟原郡に船息院・同尼寺を建てる』という記事があり、天平 19 年（747）の「法隆寺伽藍縁起幷流記資財帳」には、『摂津国菟原郡参拾壱町陸段弐百捌拾捌歩』と記され、菟原郡内に寺院や法隆寺領のあったことがうかがえる。<br>元禄５年（1692）の「寺社御改委細帳」に最も詳しく、行基の開創による塩通山法恩寺の名が見える。<br>また、在原業平が伽藍を修復し、嘉吉２年（1442）のころ兵火で焼失したので、その跡に薬師堂を設けたことを伝えている。<br>行基のころにさかのぼる寺院のの存在を考えさせる伝承は、ほかに「摂津志」や「摂津名所図会」・「摂陽群談」・「芦屋の里」・「塩通寺故事」・「務古の浦風」などにも取り上げられており、明治 41 年の奈良時代の遺瓦発見を契機に、幻の芦屋廃寺への関心は急速に高まった。<br><br>◆阿保親王塚（翠ケ丘町）…平城天皇の皇子・阿保親王（在原業平の父）が祀られているとの伝承を持つこの古墳は、現在宮内庁によって管理されている。古墳の外形は、周囲 356 m・面積 7, 400㎡ の方形の区画の中に、径 36 m・高さ約３ｍの円墳があり、墳丘の周囲にはコの字状の周濠がめぐらされている。<br>出土遺物には三角縁の古鏡や円筒埴輪片が見られ、古墳の築造時期は４世紀の終りごろと思われる。阿保親王の逝去年代（842 年）とは、著しく異なっており、親王とはかつて存在した「四ツ塚」の方が関連深い。<br>長州藩主・毛利家が阿保親王の末裔であるとの関係から、江戸時代を通して特別な保護に力を尽くしたことが知られる。<br><br>◆金津山古墳（春日町）…この古墳は、金塚（こがねづか）・黄金塚・金津山といろいろに呼ばれるが、その名の由来にまつわる伝説がある。<br>昔、阿保親王の御殿がこの打出の里にあった。親王は里人たちを深く愛し、里が万一飢饉になれば掘り出せるようにと、財宝をこの塚に埋めたという。元禄 14 年（1701）、「摂陽群談」に『阿保親王此岡山に於て、金瓦１万枚黄金１千枚を埋せ、此里飢饉に及ぶ時、是を掘て飢を養』とすでに書かれている。 また、打出の人は江戸時代から『朝日さす入日かがやくこの下に、金（こがね）千枚、瓦万枚』と歌っていたという。<br>現在、この古墳は四方を民家に囲まれ、径 44 m・高さ約４ｍの円墳の形で残っている。もとは、前方後円墳であったと推測できる。<br><br>◆楠公戦跡碑（楠町）…楠木正成が湊川で討ち死にする直前の、延元元年（1336）２月 10 日、足利尊氏と打出・西宮で戦った。正成は足利直義に直撃を加え、尊氏らを兵庫に走らせた。「太平記」には、『…はるかの沖を見渡せば、大船五百余艘は帆をあげて東をさしてはせたりける…』など、詳しく記されている。中世の古戦場の跡。<br>この碑は、昭和９年に精道村教化団体聯合会が、楠公六百年祭記念事業として取り上げ、打出村内有志の寄贈により、昭和 11 年に竣工。裏面の撰文には、正成軍と尊氏軍の合戦の様子が詳述されている。<br><br>◆鷹尾城跡（城山）…中世の山城・鷹尾城を築いたのは、細川高国方の国侍で、摂津豊島地方の豪族・瓦林政頼である。<br>永正８年（1511）、細川高国・澄元両軍勢による鷹尾城をめぐる攻防は、阪神地方の代表的な古戦場としてつとに知られている。<br>現在、標高 260 ｍの城山山頂には、尾根筋に併行して走る掘割らしきものを除いて、中世の城砦としての遺構は何も残っていない。<br>この地は、阿波の澄元方の進路を押さえる交通上の要衝であり、肥沃な灘筋を制圧する上には格好の場であった。<br>激戦の末、一時は城側が勝ったが、敗報を聞いた澄元側の赤松勢は大軍を催して播磨から押し寄せ攻めたてたので、ついに政頼らはひそかに城を捨て、伊丹城に逃れた。 |




『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』（昭和 54 年・教育委員会刊）より



打出陣屋之図　松村砬年 筆（阿保天神社所蔵）／
『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』（昭和 54 年・教育委員会刊）より転載




旧西国街道復元図〈春日町〉／
『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』（昭和 54 年・教育委員会刊）より

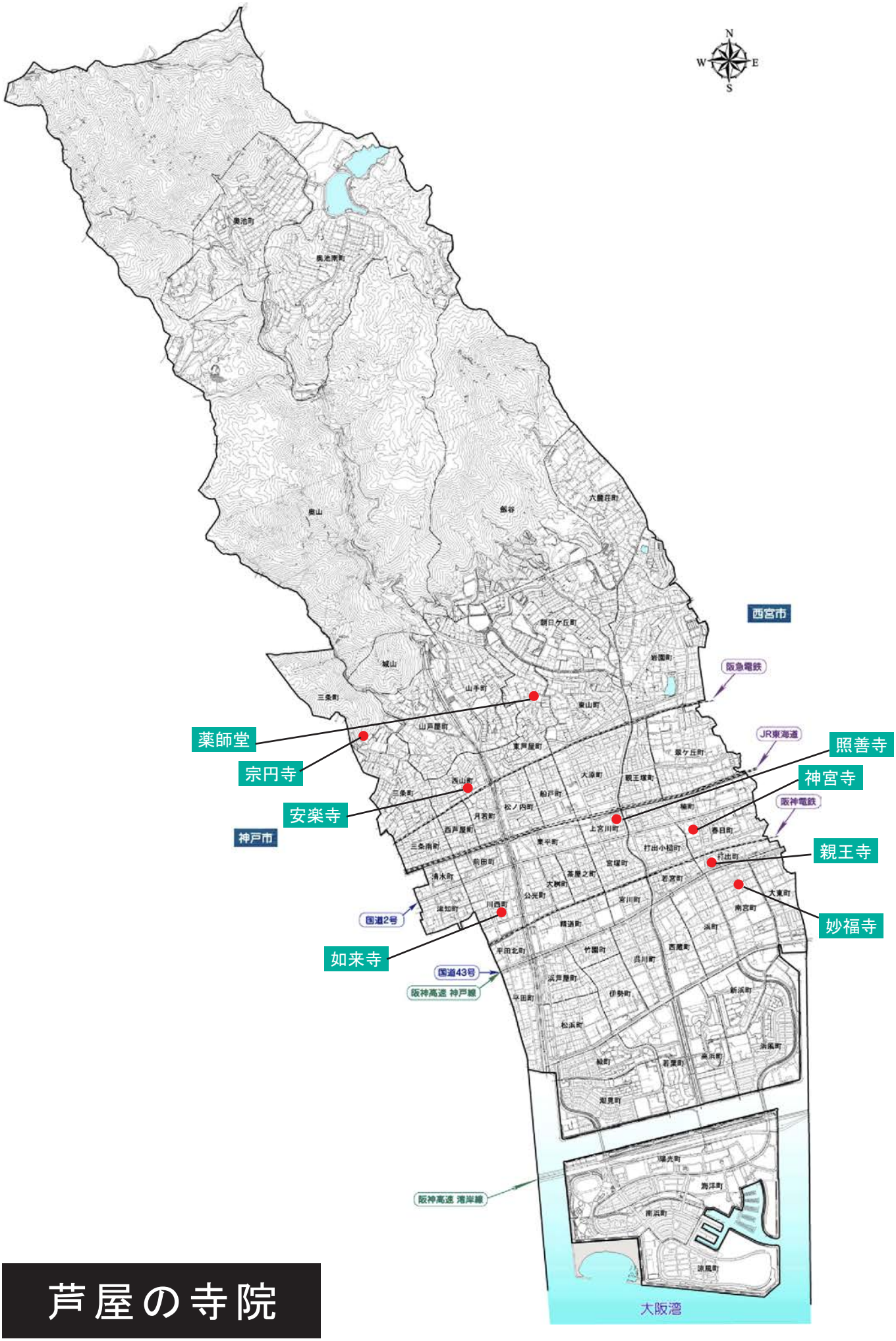



春日地区　旧西国街道沿いの町並み復元図

（本図は、大正期から昭和初期のもので聞書きをもとに絵図風に復原したもの）

# B 芦屋の史跡・文化財

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| **市内の史跡等 Ⅱ**<br><br>※今回は、昭和 54 年３月・市教委発行の「芦屋の生活文化史―民俗と史跡をたずねて―」から抜粋、また「芦屋の未来遺産」に寄せられた市民のご意見を加え、掲載しています。<br><br>※ただし、文化財と重複するものは省略し、『民話・伝説』に属するものは、次の《C》で紹介しています。なお、史跡的要素の濃厚なものについては、再掲しました。 | 市内一円 | **◆西国街道**…いわゆる西国街道は、西宮から本市に入ったところで２本に分かれて、西進していた。南の“浜街道”はほぼ国道 43 号に沿っていたため、現在では消滅している。他方の“本街道”は、茶屋之町北部で国道２号と合流し、西方は消滅している。<br>文献に見ると、この道は古代律令制下で、都と大宰府を結ぶ“山陽道”が通っており、古代には交通の要衝であった芦屋に駅が設置されていた（「延喜式」）。また、平安時代の往来の一端は「伊勢物語」や「源平盛衰記」に、中世には「増鏡」や「太平記」から、当時の山陽道の往来がうかがえる。<br>やがて、江戸時代には「西国街道」と呼ばれ、西宮から打出に来て、道は２本に分岐するようになる。２本の道は、神戸・生田神社の南側で合流し、中国地方へと続いていた。当時、大名行列等は本街道を通り、民衆は浜街道を往来したという。<br><br>**◆徳川大坂城石切り場**…元和６年（1620）、徳川秀忠により始められた大坂城築城工事に伴い、芦屋から西宮にまたがる表六甲山系一帯から、多量の花崗岩が石材として切り出された。<br>市内にある「徳川大坂城東六甲採石場」には、『岩ケ平刻印群（六麓荘・岩園・朝日ケ丘町）』、『奥山刻印群（奥池・劔谷・朝日ケ丘町）』、『城山刻印群（大字城山・東芦屋町）』に、割石が多数密集している。<br>海岸は、石材の船出し場としての意義があったと考えられる。<br><br>**◆ドビワリの水争い（奥山）**…芦屋川と住吉川の分水嶺となっている峠で、文政 10 年（1827）に起きた水争い。ひどい旱魃で困り果てた芦屋・打出村の村民がドビ（土樋）を通して住吉川の水を芦屋川に引き込もうとした。それを知った住吉川下流の６カ村の村民は激怒して、ドビを粉々に打ち壊した。芦屋・打出村民は大阪奉行所に訴え、一応６カ村の謝罪で和解したが、なおも紛争は続いた。ついに、尼崎藩と天領支配する京都小堀代官所が立会い、仲介者をたて、今後芦屋・打出村民は住吉川から決して引水しない。６カ村は、破壊行為に関して銀５貫を賠償金として支払い、芦屋・打出はそれを元に溜池を築き水不足に備えることで話し合いは決着した。<br><br>**◆打出陣屋（打出村）**…安政元年（1854）のロシア軍艦大阪湾廻航に村民は大いに驚かされたが、海浜防備の必要性は幕末になるとますます高まり、文久元年（1861）３月 23 日、阿保親王塚の東方に打出陣屋が設けられた。その後、王政復古や神戸事件などの動乱を経て、明治時代の夜明けとともに海浜防備の必要性も薄らぎ、明治２年（1869）に姿を消した。<br><br>**◆水車臼跡（山芦屋町）**…江戸時代から、芦屋川の急流を利用して行った水車産業（酒造用の酒米・菜種油絞り、そうめんづくり）の名残り。<br>三条町や山芦屋町を中心として、当時水車場で使用されていた石臼や水路跡が残っている。民話「金兵衛車やけ車」も伝えられている。<br>現在、バス停名に『水車谷』の名が残っている。<br><br>**◆小阪家住宅（三条町）**…江戸時代の民家で、阪神・淡路大震災まで市内に現存した最古の建築物。震災により解体されたが、現在も市指定文化財。<br><br>**◆延命地蔵（打出小槌町）**…西国橋東詰めに安置されている。延享２年（1745）の銘が見られる。<br><br>**◆観音堂（三条町）**…かつて本庄９カ村の氏寺「普門山宗円寺」（開基不詳）があり、延宝２年（1674）の大風雨により廃絶されるまで、観音菩薩を本尊としてお祀りしていた。観音堂は「厄除観音」と称し残っていたが、山手中学校建設のため北方へ移され、現在も残されている。<br><br>**◆霊園・戦没者墓地（朝日ケ丘町）**…芦屋市霊園は、宗教を別を問わない、近代的な市営霊園として、昭和 25 年に建設計画が決定された。昭和 28 年には建設に着手。29 年光明地蔵尊建立、30 年無縁塔の完成・在留外国人墓地の開放、33 年には市内戦没者のための軍人墓地を造り、333 柱をおまつりした。37 年、市民の寄進による芦屋観音像建立、45 年には芦屋市戦災死遺族会慰霊碑を建立、動物塚・歯の供養塔も建てられた。 |


N
W
E
S
奥池町
奥池南町
奥山
飯谷
大龍寺町
朝日ケ丘町
城山
山手町
三条町
東山町
山芦屋町
東芦屋町
岩園町
緑ケ丘町
大原町
親王塚町
西山町
三条町
船戸町
松ノ内町
月若町
西芦屋町
三条南町
東半町
上宮川町
楠町
春日町
打出小槌町
打出町
前田町
清水町
宮塚町
茶屋之町
若宮町
大桝町
公光町
宮川町
大東町
南宮町
浜町
川西町
精道町
竹園町
西蔵町
呉川町
浜芦屋町
伊勢町
新浜町
平田町
松浜町
緑町
若葉町
潮見町
浜風町
曙光町
海洋町
南浜町
西宮市
神戸市
阪急電鉄
JR東海道
阪神電鉄
薬師堂
宗円寺
安楽寺
照善寺
神宮寺
親王寺
妙福寺
如来寺
国道2号
国道43号
阪神高速 神戸線
阪神高速 湾岸線
大阪湾

# 芦屋の寺院

# B 芦屋の史跡・文化財

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 市内の寺院等 | 市内一円 | ◆**薬師堂（西山町）**…塩通山法恩寺（行基の開基。その後、在原業平が伽藍建立）の薬師堂は、嘉吉２年（1442）のころ兵火で焼失したので、その跡に薬師堂が設けられたと伝えられている。元禄５年（1692）および明和６年（1769）「寺社改帳」によると、長福寺（現・安楽寺）の支配に属していた。この薬師堂は明治 14 年ころに廃せられ、本尊の薬師如来は安楽寺に移された。<br>昭和 11 年、猿丸吉左衛門氏が土地を寄進、芦屋神社東側に移転した。<br><br>◆**安楽寺（西山町）**…安楽寺は、元禄５年（1692）「寺社御改委細帳」に、当初知恩院末寺で、浄土宗「大甲山長福寺」と号したことが記されている。宝永年間（1704）に、寺号を「安楽寺」と改称。本尊は、阿弥陀如来。<br><br>◆**如来寺（川西町）**…大正 15 年５月建立。本尊は、阿弥陀如来。昭和６年 12 月に、芦屋如来寺と改称、真宗京都仏光寺派に属す。<br><br>◆**親王寺（打出町）**…承和 11 年（844）、阿保親王（792-842）の住地跡に建立されたと伝えられる。本尊は、阿弥陀如来。<br>長州藩主毛利家が、阿保親王の裔孫大江広元の子・季光を祖としたことから、当寺を厚く崇敬し、種々の寄進宝物が蔵されている。<br>宝物に、「阿保山親王寺縁起」・「阿保親王竹園伝記」・「阿保親王画像」・「業平朝臣画像」ほか、経典・考古資料などがある。<br><br>◆**妙福寺（南宮町）**…寺伝によると、天文 24 年（1555）にはこの地に高野山浄喜院の末寺（真言宗）浄満寺があったが、村民離散により退転した。<br>弘治３年（1557）、村民を招き帰し、浄満寺の跡に妙覚寺を建てた。<br>元禄８年（1695）、打出大火で妙覚寺も類焼。正徳５年（1715）、妙覚寺第７代住職・貞順が現在の阿弥陀如来を請い受けて本尊とし、寺号を「真相山妙福寺」と改めたとある。また、昭和 33 年、国道 43 号建設のため、寺を現在地に移転した。真宗大谷派東本願寺末寺。<br><br>◆**照善寺（上宮川町）**…開基は明らかでないが、元禄５年（1692）「寺社改帳」によると、かつて“辻本道場”という説教所のようなものであった。<br>享保 17 年（1732）、僧・釈昇道が京都西本願寺から阿弥陀如来像の立像を請い受けて本尊とし、光明山照善寺と号して正式の寺となる。<br>寛政４年（1792）の大火で焼失し、旧記一切を失う。<br>昭和 20 年（1945）の阪神大空襲でも本堂や主な建物等が全焼したが、いち早く復旧した。<br>また、平成７年（1995）阪神・淡路大震災でも本堂など全壊したが復旧。<br><br>◆**宗円寺（三条町）**…「普門山宗円寺」は禅宗の寺で、本庄９カ村の氏寺であった。<br>開基不詳。本尊は、観音菩薩。江戸時代、大風雨のため廃絶した。<br>＊観音堂は「厄除観音」として残っていたが、山手中学校建設のため北方に移された。<br><br>◆**照楽寺（三条町）**…貞亨３年（1686）までは川辺郡小浜亳摂寺下の“辻本道場”と称していたが、同年４月に本山から「水無瀬山照楽寺」の寺号を受けた。<br><br>◆**神宮寺（春日町）**…寺伝によると、寛和年間（985 年ころ）、業平の跡をしたってこの地を訪れた比叡山高僧恵心僧都が、観音堂の荒廃を嘆き、自ら観世音像を彫りお祀りしたと伝えられている。<br>昭和 20 年（1945）の阪神大空襲で全焼したが、本尊・脇仏八体とも無事であった。天台宗梅松山神宮寺（打出観音堂）。<br>特筆に値する仏教美術としても著名な本尊十一面観音像については、古代末期にさかのぼる文化財として、昭和 11 年３月の「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書」に、詳細に報告されている。 |



芦屋神社〈東芦屋町〉



打出天神社〈春日町〉



高浜虚子・年尾・汀子　三代句碑（月若公園内）〈月若町〉

# B 芦屋の史跡・文化財

《市内の神社》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 市内の神社等 | 市内一円 | ◆芦屋神社（東芦屋町）…祭神・天穂日命。創建は明らかでないが、芦屋村の氏神として知られる。元禄５年（1692）「寺社改帳」・明和６年（1769）「差出明細帳」によれば、本殿のほか末社として、出雲神・愛宕・多賀大明神・荒神があり、また門丸の森・庚申塚・十王堂石祠・天照大神宮・大将軍塚・弁財天女・若宮などが祀られていたと記されている。<br>このほか、現在も７世紀の古墳が残されていたり、芦屋川上流の弁天岩に祀られていた「水神社」が移されている。<br>昭和21年、芦屋天神社を芦屋神社と改称した。<br>かつては、市花コバノミツバツツジの群生する名勝地としても有名。<br><br>◆打出天神社（春日町）…祭神は、菅原道真・事代主命。創建・由来とも定かでない。<br>寛文７年（1667）、初代宮守南嶺が願主となり菅原道真の木造を寄進。<br>寛政８年（1796）刊「摂津名所図会」に、『生土神（うぶすながみ）』と記されている。<br>明治41年（1908）、旧打出村の金比羅神社・春日神社・若宮神社・南宮神社・厳島神社（金津山）を合祀した。<br>本殿・拝殿は、昭和20年（1945）８月５日の阪神大空襲で焼失。39年に新社殿が竣工した。境内には、元禄４年（1691）の石灯籠などもある。<br><br>◆岩園天神社（岩園町）…祭神は、菅原道真・秋葉大神・春日大神。創建については明らかでないが、元禄５年（1692）「寺社改帳」にも、すでにその大きさなどについての記載がある。<br>明治年間に改築。境内には、元禄９年（1696）奉納の石灯籠がある。<br>南西角に７世紀ごろの古墳の石室があり、その上に花崗岩に刻まれた「役小角（えんのおづぬ）」の像が建っている。古くから、土地の人々は“行者さん”と呼び、宮とともに大切に信仰されている。<br>神社の裏側にも、古墳の横穴石室がある。<br>拝殿に奉納されていた絵馬には、安政４年（1856）や明治12年（1879）の年代も見られる。<br><br>◆阿保天神社（上宮川町）…祭神は、阿保親王・在原業平・菅原道真。創建については明らかでないが、本殿・拝殿があり、参詣者も絶えなかった。<br>昭和20年（1945）８月５日の阪神大空襲で、京吉稲荷神社を残し、全焼。<br>昭和27年（1952）、主神道真公のほかに阿保親王・在原業平を増祀して、旧西打出天満宮から「阿保天神社」と改称。また、戦災で焼失した六麓荘の氏神・大国神社も合祀されている。昭和31年（1956）、社殿再建。<br>境内には、元禄年間制作の鳥居や古式の手洗い鉢、「力石五十貫」と刻まれた卵形の石６個が残されている。<br><br>◆三条八幡神社（三条町）…祭神は、八幡皇大神（やわたすめのおおかみ）・大山積大神・市杵島姫神（いちきねしまひめのかみ）ほか。創建は、元禄５年（1692）「寺社改帳」に、何百年も以前から村中廻り持ちの支配であったと記されている。<br>旧三条村の古くからの氏神は、本庄９カ村の氏神・森村の稲荷大明神であったが、江戸時代には八幡宮が三条村の精神上の指導的役割を果たしていた。<br>明治40年（1907）、山神社・厳島神社を合祀した。同年、本殿・拝殿を改築し、石鳥居などを新造した。昭和17年（1942）、社務所新築。<br><br>◆日吉神社（津知町）…祭神・大山咋神（おおやまぐいのかみ）。創建は不詳。<br>近江の国・日吉神社から分かれた。元禄５年（1692）「寺社改帳」に社名が見られる。<br>明治43年（1910）、厳島神社を合祀。祭神は、市杵島比売神（いちきねしまひめのかみ）で、「歯神さん」といわれている。<br>大山咋神は、大年神の御子で比叡山に官居された山神であるが、造酒の神としても信仰されている。拝殿東には、ほうそうの神が祀られている。<br>平成７年（1995）の阪神・淡路大震災で全壊したが、平成15年に再建。<br>境内には、屋根に永正17年（1520）の銘文が刻まれた、花崗岩の石の祠がある。市内に現存する最古の金石文であり、旧津知村の歴史を物語る大切な資料でもある。 |



「細雪」の碑（谷崎松子氏の揮毫）〈山芦屋町〉



業平歌碑（松ノ内緑地内）〈松ノ内町〉


『摂津名所図会』　寛政８（1796）年／芦屋市立美術博物館蔵

# B 芦屋の史跡・文化財

《文学碑・歌碑・句碑等》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 市内の石碑等 | 市内一円 | 《文学碑・歌碑・句碑等》<br>◆「細雪」文学碑（東芦屋町・山手夢保育園北）…昭和 61 年、谷崎潤一郎生誕 100 年を記念し、「谷崎潤一郎『『細雪』文学碑建立実行委員会」（委員長・辻本勇）らによって建てられた。<br>前面には谷崎松子夫人による『細雪』の二文字、裏面には昭和 13 年の阪神風水害で芦屋川洪水を描写した『細雪』の一説が刻まれている。<br><br>◆業平の歌碑（松ノ内町・松ノ内緑地内）…阪神・淡路大震災からの復興事業の中で、旧宗信幼稚園跡地に整備された緑地。平成 11 年に都市公園として供用開始された。同年、緑地内に業平の歌碑が建てられた。昔、業平の屋敷がこの辺りにあったというゆかりによる。（計画は、内海市長のころから始まっており、業平の歌の選定は歌人・早野台気氏による）<br>碑には「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌が刻まれている。<br><br>◆高浜虚子三代句碑（月若町・月若公園内）…芦屋観光協会（昭和 24 年創立）創立 30 周年記念事業として昭和 54 年に立案、翌 55 年同地に建てられた。芦屋川沿いの月若公園付近は、かつて近くに俳人・高浜年尾（高浜虚子の長男）の家もあり、俳人高浜虚子主宰の「ホトトギス」ゆかりの地でもある。月若公園に芦屋川の春を読んだホトトギスの親子三代句碑がある。<br>碑文は、「咲きみちてこぼるゝ花も無かりけり」（虚子）・「六甲の端山に遊び春隣」（年尾）・「目に慣れし花の明るさつづきをり」（稲畑汀子）。<br><br>《顕彰碑》<br>◆猿丸安時顕彰碑…奥池の開削に成功した顕彰碑（東芦屋町・開森橋東詰）。<br><br>◆奥池水神社の祠…奥池湖畔西側に建つ石祠。そのそばの大きな花崗岩の磨かれた切断面に、「天保 12 年、ここ奥池に、猿丸安時は治水のため谷を堰き止め、辛苦 20 余年を要してこの池を築造し、ここに祠を建て水神を祀り、末永く池の安全を祈る」と刻まれている。<br><br>《その他の石碑・石造遺品等》<br><br>◆伝猿丸太夫之墓（東芦屋町）…芦屋神社の一隅に、百人一首で有名な伝猿丸太夫之石塔もある。<br><br>◆伝芦屋廃寺塔心礎石（伊勢町）…西山町で発掘された石。県指定文化財の奈良時代の塔心礎。現在、美術博物館の前庭に置かれている。<br><br>◆「行基の松」石碑（西山町）…奈良時代から室町時代にあった芦屋廃寺（塩通山法恩寺）の境内には、「潮見の松」や「芦屋の松」「行基の松」があった。<br><br>◆尼崎藩領界石（打出小槌町）…「従是東尼崎領」と刻まれた境界石標。<br><br>◆大楠公戦跡碑（楠町）…延元元年（1336）、楠木正成と足利尊氏とが戦った中世の古戦場の跡。昭和 11 年、打出村内有志の寄贈により、楠公六百年祭記念事業として竣工。裏面の撰文には、合戦の様子が詳述されている。<br><br>◆石造遺品（春日町）…昭和 42 年に実施した市内の調査結果に基づき、春日土地区画整理事業の実施に対して、昭和 51・52 年に春日地区の旧西国街道の調査を行った。その結果、この地域には室町時代前後の石造品が多く分布していることが分かった。<br>確認されたのは、五輪塔・地蔵尊・道標ほか総計 134 点であった。 |
| その他<br>歴史資料等 | | ◆業平別荘の跡（業平町）…史実としての確証は困難であるが、江戸時代の地誌は、その別荘跡を「業平朝臣仮居古跡」とか「在原業平別荘跡」と記し、現在の市民センター付近にその位置を示しているが、もとより伝承によるものである。<br>※芦屋を描いた文献…「万葉集」（759 年・天平時代）・「伊勢物語」（平安時代）・「源平盛衰記」（鎌倉時代）・「増鏡」（南北朝時代）・「太平記」（室町時代？）・「革令紀行」（太田蜀山人 / 江戸時代）・「福原鬢鏡」（1680 年・江戸時代）・「摂陽群談」（1701 年・江戸時代）・「兵庫名所記」（1710 年・江戸時代）・「摂津誌」（1734 年・江戸時代）・「摂津名所図会」（1796 年・江戸時代）などがある。 |

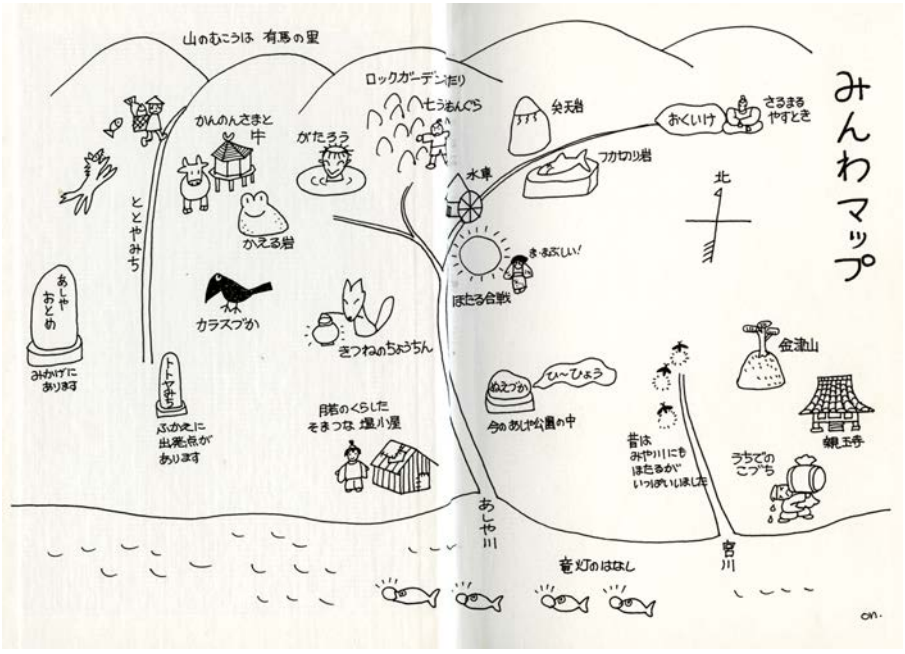


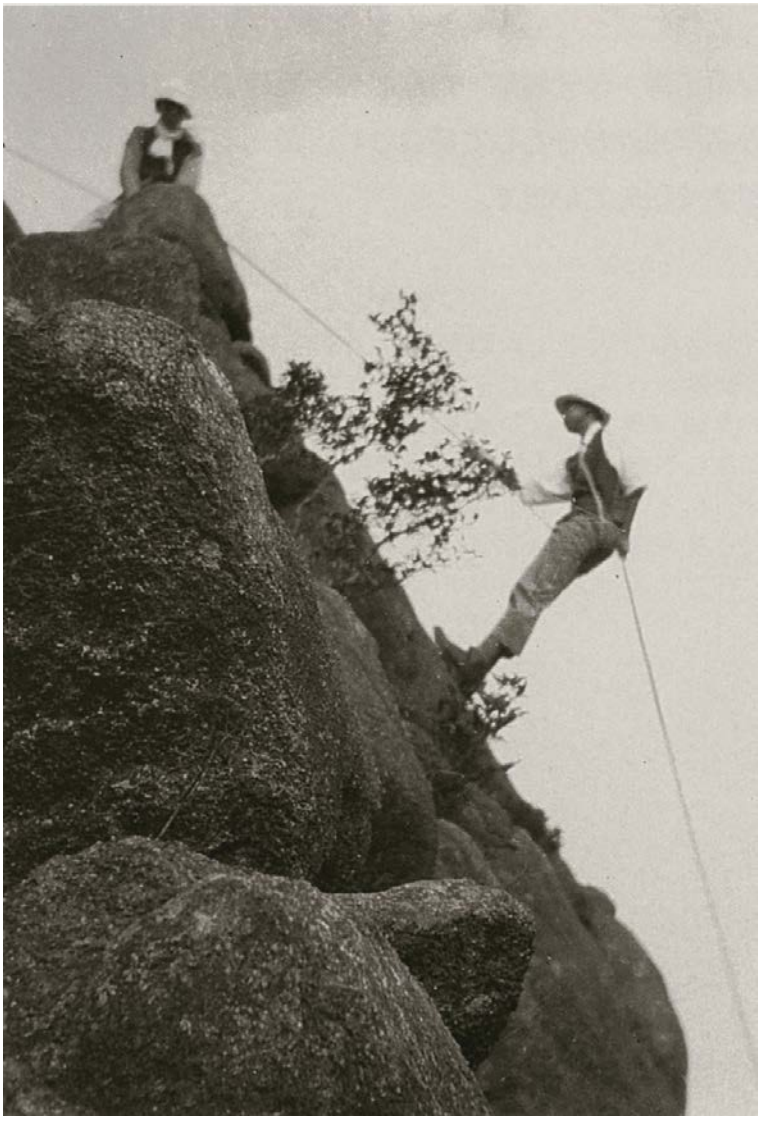

*To be continued in the Future.*

# C　芦屋の民話と伝承

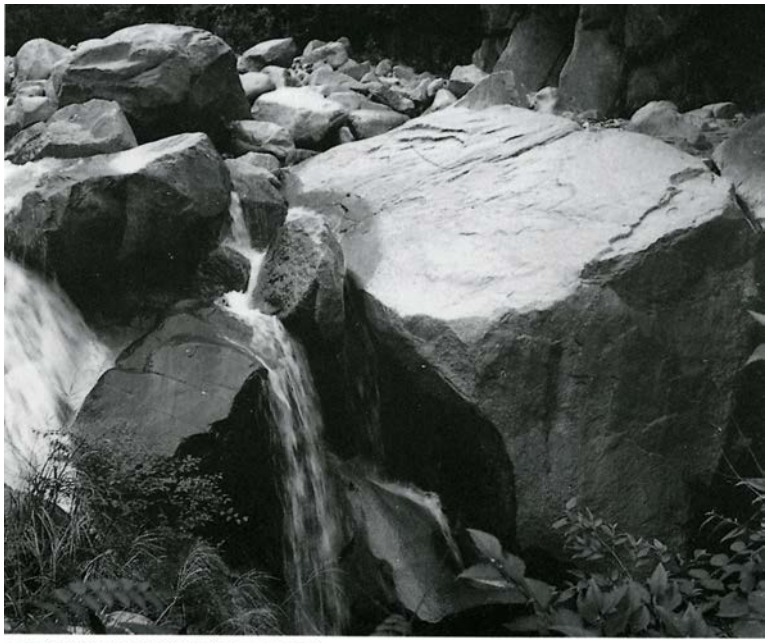


ぬえ塚（芦屋公園内・浜芦屋町）





荒地山の岩場（昭和４年ころ／「芦屋今むかし」より）



芦屋谷のフカ切り岩（「あしや子ども風土記―伝説・物語」より）



●フカ切りの神事を行う行者の図

行者の末孫の家に残された掛け軸に、江戸末期に実際に行われた雨乞いの儀式を描いた掛け軸が残されていた。

# C 民話と伝承

《阪急以北に残るお話》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 七右衛門嵓（くら）のたたり | 荒　地　山<br>〈ロックガーデン〉 | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆芦屋と神戸の境にある荒地山は、石宝殿に祀られている山の神（権現さま）の住まいだといわれていた。そのため、六甲山中で悪事をはたらくと、この荒地山に迷い込んで神罰を受けると言い伝えられてきた。<br><br>【お話のあらまし】<br>昔、山の麓の芦屋村に七右衛門という若者がいた。彼には身寄りがなかったが、正直な働き者なので、村人に愛されて成長した。そのうち七右衛門には、兄のように慕う１人の友人ができた。ところが、ある時その友人に裏切られ、その友人は姿を消してしまった。<br>絶望した七右衛門は、仕事もせず、すさんだ生活を送るようになった。そして、そんな七右衛門を、村人も次第に顧みなくなっていった。<br>やがて七右衛門は、山を越える旅人を襲い、追いはぎをはたらくようになっていった。そんな七右衛門のうわさを耳にしていた村人たちは、村から姿を消した七右衛門が山で悪事をはたらいたため神罰を受けたと思い、言い伝えを信じて荒地山へと向かった。<br>と、そこには、険しい岩場の下で頭を砕かれ死んでいる七右衛門の姿があり、このときから誰いうとなく、この岩場を「七右衛門ぐら」と呼ぶようになった。 |
| フカ切り岩と弁天岩 | 芦　屋　谷<br>〈芦有道路〉 | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆芦屋川の谷沿いには、しばしば信仰の対象となったいくつもの巨岩がある。その１つに、水の神の住処と信じられた弁天岩や、その東のフカ切り岩と呼ばれる巨岩がある。いずれも、江戸時代に旱魃に苦しんだ麓の芦屋・打出の村人にとって大切な雨乞いの霊場であった。<br><br>【お話のあらまし】 村人たちは旱魃に苦しめられると、芦屋川を上って弁天岩に行き、水神に雨を乞う祈りを捧げた。祈願も虚しくさらに川の水が枯れ始めると、人々は一旦山を降り、フカ切りの儀式の準備を始める。<br>山を降りた村人たちは、水神へのいけにえとするために打出の沖で大きなフカを捕らえ、再び弁天岩へと戻る。<br>弁天岩の東下の谷間には、弁天滝という一条の滝の落ち口に、上面が平坦な巨大な長方形の岩が乗りかかるようにしてある。人々はこの巨石をフカキリ岩とかマナイタ岩と呼び、この岩の上で運びあげたフカを切り、それを弁天岩へ持って行き、その血を弁天岩に投げつけた。<br>古くは水神へいけにえを捧げる風習だと考えられるが、人々は、こうすると水神が神聖な住み家を血で汚されたことに怒り、汚れを洗い落とすために激しい雨を降らせてくれると信じてきた。<br>江戸時代も終わりに近い天保５年（1834）８月、この地に 95 日の日照りが続いたため、行者を招いてこのフカ切りの儀式を行ったと、芦屋に残る記録は伝えている。 |
| 金兵衛車やけぐるま | 水　車　谷<br>〈城山の麓〉 | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆芦屋川が山地から市街地へと流れ出る少し手前辺りに、「水車谷」という地名が残ってている。現在の奥山浄水場辺りから川下にかけて、かつては数多くの水車場があった。<br>◆芦屋付近から西の一帯は「灘目」と呼ばれ、江戸時代から急流を利用して、酒造用の精米や菜種油絞り、小麦粉を使った素麺づくりなどの水車産業が盛んであった。<br>◆現在も、そのころの水車の臼を嵌め込んだ民家の石垣（山芦屋町）が残されていますが、金兵衛車はこの民家よりやや北にある堰堤の右岸辺りにあったと伝えられている。<br><br>【お話のあらまし】 ある年、丹波の国の若者が、格式の高い金兵衛車での米搗き手に選ばれた。このことは、一家また村の誉れでもあったが、その一方で国に残る愛する美しい娘との別離に苦しんでいた。若者とその娘は、若者の任務を解いて欲しいと願ったが、周囲の人々は二人の願いには耳を傾けなかった。<br>六甲越えで芦屋の金兵衛車に着いた若者は、水車の主に「金兵衛車」の格式の高さや任務の名誉について説かれ、また酒米を搗くときには全部搗き終わるまで水車から出ることも他人と無駄話をすることも固く禁じられた。<br>一方丹波では、娘に縁談が持ち込まれいてた。思い悩んだ娘は、恋しい若者の後を追って芦屋の里へと訪ねついた。しかし、水車の主に阻まれ、幾度たずねても会えぬうちに、とうとう半狂乱となった。<br>ある日、そんな娘が裏山から二枝の榊を持って現れ、目を吊り上げ髪を振り乱して山野を駆け巡り、最後に金兵衛車の水車の周りをぐるぐると駆け回った。そのうち、娘の体から妖しい炎が立ち上り、まもなく焔そのものと化して天空に昇っていった。<br>その夜も更けたころ、金兵衛車は奇妙な光に包まれ、水車も臼も若者も主も、ついに１つの火の車となって夜空に昇り、姿を消してしまったという。<br><br>それがいつのことか、また若者の名を何といったか誰も知らないが、そののち芦屋では、子どもたちでも「金兵衛車やけぐるま」と謡うようになった。 |



城山（正面左）と秋の芦屋川

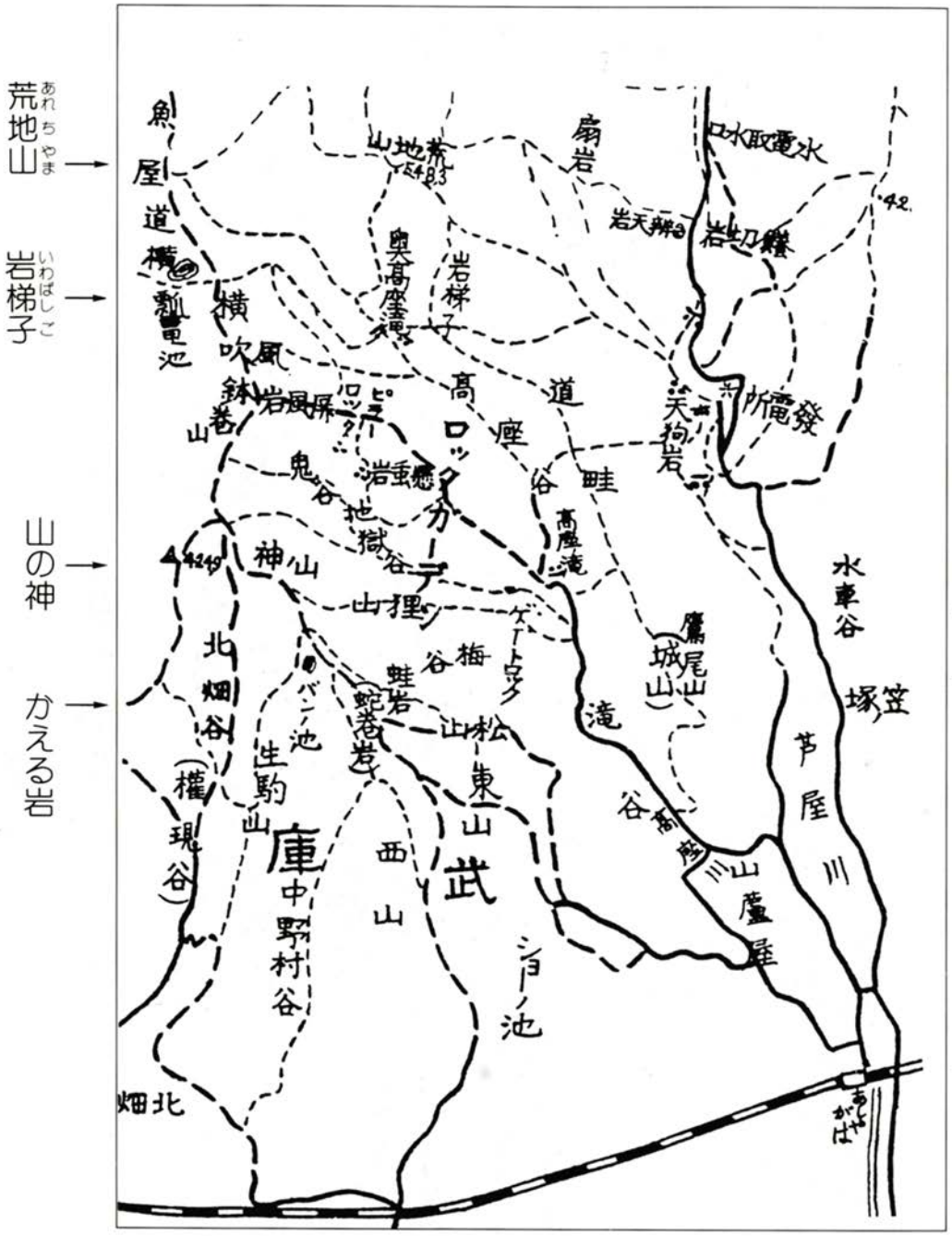



東芦屋町薬師寺にあるいしぶみ(もと西山町薬師堂にあった。)

# C 民話と伝承

《阪急以北に残るお話》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 松若物語 | 鷹尾山（城山） | ◆永正８年（1511）、細川高国・澄元両軍勢による鷹尾城をめぐる攻防戦は、中世の阪神地方の代表的な戦いとして知られている。<br>◆この山城（鷹尾城）を築いたのは、高国方の国侍・瓦林政頼（摂津豊島地方の豪族）である。芦屋は、阿波の澄元方の進路を押さえる交通上の要衝であり、肥沃な灘筋を制圧する上には格好の場であった。<br>◆激戦の末、一時は城側が勝ったが、敗報を聞いた澄元方の赤松勢は大軍で播磨から押し寄せ攻め立てたので、ついに政頼らは城を捨て伊丹城へと逃れた。<br>◆標高 260 ｍの現在の城山山頂には、雑草や潅木が繁茂し、中世の城砦としての遺構は、尾根筋に並行して走る掘割らしきものを除いて何も残っていない。<br>◆この古戦場にまつわる悲哀な物語が、「瓦林政頼記」に残っている。<br><br>【お話のあらまし】　勢力の強くなった政頼に降参を申し入れてきた澄元方の地侍の１人に、河島兵庫助という者がいた。政頼は、兵庫助を厚遇して鷹尾城を守らせ、また歌道に秀でた兵庫助の息子・松若を、政頼の居城・越水城で側近として召し仕った。<br>　ところが、兵庫助が敵に内通しているのではないかという風聞が高まり、兵庫助は越水城で殺される運命にまで追いやられた。<br>　松若は、その危急を父に知らせるため鷹尾城へと馳せ参じたが、すでに父・兵庫助は自害し、城山からは煙が立ち上っていた。松若は「最早これまで」と逃げることもせず、政頼に覚悟のほどを伝えた。政頼はこれを聞き、けなげな振る舞いに不憫がったが、これほど利発な松若を生かしておけば後に仇討ちなどもやりかねないと恐れた家臣もあり、ついに西宮の六湛寺で首を打たれることとなった。時に、松若　若干 16 歳であった。<br>　辞世の句に次の一句を残し、首を打たれたのであった。<br>「父に我　仕ふ願いも三瀬川（三途の川）　ともに越ふべき道のうれしさ」 |
| 湯元のお薬師さん | 芦屋廃寺（法恩寺）故地<br><br>山芦屋町・西山町・西芦屋町 | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆山芦屋町・西山町・西芦屋町の旧地名には、法泉寺・西ノ坊・大僧・寺田といった寺院関係の地名の集中が見られる。これが法恩寺の故地と考えられる。<br>◆法恩寺は、行基の開山や在原業平の薬師堂建立の伝説を持つ古刹だが、中世の戦国騒乱の渦中で、灰燼と帰してしまった。<br>◆村に平穏が戻った時、村人は寺址に小堂を建て、薬師仏を祭った。<br>◆芦屋の湯元薬師は有馬の温泉寺の奥院とされ、温泉寺の僧侶はこの薬師堂に月参りをするため、毎月山を越えて芦屋の里を訪ねたといわれる。<br>◆もともと有馬温泉は、熊野権現の神力で紀州の熊野灘から紀伊水道・大阪湾を経、芦屋の浦で地中にもぐり、六甲の山をくぐって地熱で温められたものが、有馬で湧き出ていると考えられていた。この地下水脈が、芦屋の薬師堂の下を通っていると人々は信じていたので、これを「湯元の薬師」と呼んだのである。<br>◆塩通山法恩寺の「塩通」という呼び名も、このことによるといわれている。 |
| 観音さまと牛 | 旧三条村（三条町）<br><br>会下山の麓 | ◆このお話は、平成 11 年刊行「あしやの民話」に、三条町の古老・小阪清兵衛さんと小阪保さん親子から聞き取り、童話作家・三好美佐子さんがまとめたもの。<br><br>【お話のあらまし】　昔の芦屋は、ほとんどの家が農家やった。そのころの話。<br>　そのころ、芦屋の田んぼは山が海に近いこともあって、急な斜面の土地で棚田が多かった。<br>　牛は、大切な働き手としてどの農家にも飼われていた。そんなとき、牛だけが罹りあっという間に死んでしまう牛の疫病がはやったことがあった。元太の家でも、クロという真っ黒の立派な雄の牛を飼っていた。クロは、元太が生まれる前からいた牛で、毎日、元太が世話をし、兄弟みたいにしてきた。元太は、クロが病気に罹らんように気を付けた。その辺の草や水を、食べたり飲ませたりするようなことはさせへんかった。田畑にも連れて行かず、牛小屋に１日中閉じ込めておく日が多くなっていた。クロはだんだん痩せてきて、元気がなくなった。外へ連れてやったら喜ぶのにと、元太は思った。<br>　クロは、棚田の坂道を上り下りするのが好きで、重い体を軽々と動かしとった。それが、今は一歩歩くのもしんどそうにしとる。ひょっとすると疫病に罹っているかもと、心配でならんかった。<br>　そんなときや、近くの人が飛んで来て、「三条村の観音さんに牛を連れてお参りしたら、疫病に罹らんそうや」と、言うてくれた。それを聞いて、その日の日暮れごろ家を出て、元太と父はクロを観音さんの所へと連れていくことにした。<br>　急な山道を、元気のなくなったクロは嫌がったが、二人はクロを引っ張ったり押したりして、明け方までかかって何とか境内に着いた。<br>　境内には、何頭もの牛が木に繋がれていて、黒々とした牛の姿が影絵のように浮かんで見えた。それらの牛を見て、クロは急にしっかりと歩き始めた。<br>　境内に繋がれた牛は、どの牛も疲れた様子であったが、確実に生きていた。生きている強さを、体中で表していた。<br>　疫病の騒動は、まもなく治まった。<br>　不思議なことに、観音さんの境内に繋がれた牛は、一頭残らず疫病に罹らずに済んだ。<br>　村人たちは、「観音さんのお蔭や」と、みんな喜んだというお話。 |




六甲山の地図にみる芦屋の伝説・物語の場所

「あしや子ども風土記—伝説・物語」より

# C 民話と伝承

《阪急以北に残るお話》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 高嶋池のがたろう（カッパ） | 旧三条村（三条町） | ◆このお話は、平成 11 年刊行「あしやの民話」に、三条町の古老・小阪清兵衛さんと小阪保さん親子から聞き取り、童話作家・三好美佐子さんがまとめたもの。<br>※小阪保さんによれば、高嶋池は三条町 23 番あたりにあった約 1000 坪ほどの池で、高座川からの水を溜める溜池で、江戸時代から棚田の水源としていたが、昭和 10 年前後に埋められたとのこと。<br><br>【お話のあらまし】　昔、高嶋池にはがたろう（カッパ）が住んでいると、信じられていた。<br>あるとき、隣村の深江の漁師が、がたろうを地曳き網で捕まえようとした。それを知った地元の三条村の人たちは驚き、深江の漁師に抗議した。それを聞きつけ集まってきた人々で、高嶋池の周りはにぎやかになり、出店までもがでる騒ぎとなった。<br>そんな騒ぎが治まった後も、何度となく、がたろうを見たという人の話が聞こえてきた。<br>高嶋池の水が澄んでいて底の底まで見えるようなある日、池の渕を眺めていたとき、ほんの一瞬だったが、長い足を２つに折り水底で座り込んでいるがたろうの姿が見えたという、村人もいた。<br>村から町へと変わっていく時代の中で、だれも高嶋池に近付かなくなっなったころ、すり鉢状の高嶋池は水を抜かれ、埋め立てられることになった。がたろうは、どこに行ったんやろ。<br>水を抜かれた高嶋池には、それらしい生き物はいなかったが、すり鉢みたいな池の底の真ん中に、がたろうが座っているような形をした岩が１つ転がっていたそうな。 |
| カラス塚の神事 | 山芦屋村（三条町）<br><br>城山の麓 | ◆山芦屋のカラス塚の神事は、明治のころまで続けられていた。カラス塚のあった辺りには今は住宅が並び、塚の面影もない。<br><br>【神事の概要】　山の神さまに１年の豊作を願うため、子どもたち中心に行う珍しい神事。<br>カラスは、この日に限り、山の神のお使いであると信じられていた。<br>山芦屋村では年末になると、７歳から 13 歳までの男の子たちが、その年の大将になる子どもの家に集まる。夜中の２時ごろになると、子どもたちは旗を先頭に立てて、「トーカラトカラ　山の神のサイデンボウ」と大声で叫びながら、水車谷の水車小屋をまわり、粉米をもらい集める。<br>１月４日の朝、村の年寄りたちは西山にまつる山の神の境内を掃き清め、御幣をつるし、酒や菓子・子どもたちが集めた粉米で作った団子に味噌をまぶし、山の神に供える。<br>やがて、はだか・裸足になった子どもたちが現われ、１つずつ団子をくわえて城山の麓にあるカラス塚へと走る。塚に着くと、団子をくわえたまま「カァー カァー」とカラスの鳴くマネをして、塚の周りを３回まわり、団子をお供えする。<br>山の神の境内へ帰るときも、また団子をくわえ、カラスのマネをしながら帰る。境内でも、山の神の周りを３回まわり、団子を供える。最後にとんどで体を暖め、雑煮を食べて、すべての神事が終わる。<br><br>＊カラス塚に供えた団子が早くなくなると、その年は豊作になると信じられていた。<br>＊山の神は、冬は山にいて山を守り、春には里に降りて田の神となり、秋の取入れが済むとまた山に帰るといわれている。<br><br>※１月４日に山の神さまに１年の豊作を願うという神事は、ほかにも岩ケ平の「山始め」の日に山の神をまつるもの、また三条村では子どもたちが山神社でとんどをするなどが行われていた。 |
| カエル岩 | 六　甲　山（梅谷）<br><br>三条村の裏山 | ◆三条町や東灘区の森から裏山に登ると、尾根の上に大きな岩があり、座った蛙の姿をしているので、「蛙岩」と呼んでいる。<br><br>◆江戸時代の絵図には、この岩は「狼岩」と呼ばれていた。<br><br>【お話のあらまし】<br>昔、六甲に大きな蛙が住んでいた。<br>大きな蛙だったので、跳ぶと地響きがし、鳴くと木の葉が震えた。<br>その大きさで村人たちから恐れられていた大蛙だが、別に村人に危害を加えることもなく、ここでのんびりと暮らしていた。<br>ある日、そんな大蛙のいる六甲山の梅谷へ大蛇がやってきた。<br>大蛇に狙われた大蛙は、死を覚悟して、目を閉じた。その瞬間、大蛙は大きな岩になった。<br>六甲の山の神は、日ごろおとなしい大蛙を哀れに思い、そのままの姿で岩にした。<br>ご馳走を食べ損ねた大蛇は、岩となった大蛙のそばを離れずにいたが、やがて大蛙の岩に巻きついたままの姿で岩になっていた。<br>そんなことがあってから、蛙岩は「蛇巻岩（じゃまきいわ）」とも言われるようになった。<br><br>山の神さまは、大蛙も大蛇も分け隔てなく岩にした。<br>梅谷の大蛙も大蛇も仲良く岩となった身では、けんかもできず、お互いに食べられることもなく、平和な日々を過ごしているのやろ。 |




むかしの絵図(およそ150年まえ)に
みる芦屋の伝説・物語の場所

「あしや子ども風土記—伝説・物語」より

# C 民話と伝承

《阪急以南・里に残るお話》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 打出の小槌 | 旧打出村 | 【お話のあらまし】<br>昔、摂津の国菟原郡打出村に「隠れ里」というところがあり、ここに長者が住んでいた。<br>この長者は、１つの宝の小槌を持っていた。それは、この小槌を打ち振ると、何でも願いが叶うというものであった。<br>しかし、この小槌には１つ困ったことがあった。小槌を使って望みを叶えたときに鐘の音が聞こえてくると、それまで打ち出したものがすべて消えてなくなるという。<br>何でもこの小槌は、元々芦屋沖に住んでいた竜神が持っていたものであったが、こんな面倒な小槌を持っているのが嫌になり、人に化身して聖武天皇に献上したものという。<br>献上された朝廷も、寺の多い都では一日中鐘の音が鳴り響いており、まことに使い難く困っていた。ちょうどそのころ、手柄を立てた芦屋の長者が都に来ていたので、小槌は褒美として長者に下されることとなったという。<br>大喜びで隠れ里に帰った長者は、噂を聞いて集まった村人たちの前で、みんなの願った黄金を出そうと小槌を打ち振った。小槌からは、その願いどおりの黄金がザクザクと出てきたが、ちょうどそのとき鐘の音がして、すべてが消えてしまったという。<br>最後の１枚が消えたとき、長者も村人も「いい夢を見させてもらった」といったそうな。<br>今でも、静かな夜中に地に耳をつけて聞いていると、地下深くからかすかに饗宴の声が聞こえてくるのだという。 |
| 金津山古墳と黄金伝説 | 旧打出村（春日町） | 【お話のあらまし】<br>昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建て村人たちを愛し、親しみをもって接していた。村人たちも、親王さんといって、たいそう敬っていた。<br>親王は、村人たちに「自然の災害などで困った時には、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられている。<br>朝日さす入日かがやくこの下に金千枚瓦万枚<br>この塚は金津山（かなつやま）・黄金塚（こがねつか）・金塚（かなつか）などと呼ばれ、江戸時代の名所絵図を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があり、その周りに道が造られ、大きな松が描かれている。また明治時代まで、墳丘の中央に厳島神社の石祠や石の鳥居が建っていたが、明治 41 年に打出天神社に合祀された。<br>「打出名所は、かずかずあれど、わけて名高い黄金塚」と打出のみこしかき音頭にも謡われているほど、西国街道をいく人々がお参りする名所となっていた。<br>今も金津山は阪神電車「打出駅」の少し北にあり、民家に囲まれた小高い塚は「金津山古墳」と呼ばれ、大切に守られており、古の打出の風景を今に伝えている。 |
| 蛍合戦と業平 | 旧芦屋村・旧打出村<br><br>芦屋川・宮川・片田川 | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆かつて、芦屋川・宮川や片田川には蛍が飛び交い、蛍の名所となっていた。<br>◆「伊勢物語」に、業平の歌『晴るる夜の星か河辺の蛍かも我すむ方の海士のたく火か』にもあるように、平安時代から芦屋の里には蛍が群をなして飛んでいた。<br>◆大小の塊になって飛ぶ様子は三夜にも及んだ。芦屋の里の村人たちは、これを「蛍合戦」と呼び、業平の魂が蛍となって飛んでいるのだと言い伝えた。<br>◆江戸時代の「播磨巡覧記」には、『片田川、芦屋川に添いたる細き流れなり。水絶ゆることなし。弘法大師の呪する所やといふ。夏は蛍多し』とある。<br>◆片田川の流れは、今は見ることができない。 |
| 業平と公光〈雲林院〉 | 旧芦屋村（月若町） | ◆謡曲「雲林院」（「伊勢物語」に取材した謡曲・世阿弥作ともいわれるが不明）<br>※本曲は世阿弥以前に古作があったようで、世阿弥の「甲楽談儀」に金剛権守所演のことが見え、また喜阿弥の謡の記述が「別本聞書」にある。この古作を改作したらしい世阿弥自筆本も現存している。<br>◆公光の屋敷跡が月若町辺りにあったというが、判然とはしない。<br><br>【お話のあらまし】<br>芦屋の里の人・公光は、幼い時から「伊勢物語」を愛読していた。<br>ある夜、そんな公光は不思議な夢を見た。<br>都・北山の雲林院の櫻の下で、緋の袴を付けた女性と束帯姿の男性が佇み、伊勢物語を読んでいる。近くにいた老人に尋ねると、二人は二条の后と業平であると語ったかところで、夢から覚めた。<br>公光は夢見心地で、雲林院を訪ねる。<br>雲林院で出会った老人に公光が夢のことを話すと、「その夢は業平があなたの心を感じ取り、伊勢物語の秘事を授けようというのであろうから、今夜はここで一夜を明かし、夢の続きを見なさい」といい、その老人は夕霞の中に消えていった。<br>北山のあたりに住む人に、公光が老人のことを尋ねると、その老人は業平の霊と思われるので、ここに留まって待つように勧めた。<br>いわれるままに公光が木の下で仮寝の夢を結んでいると、やがて匂やかな大宮人・業平が現れ、伊勢物語の秘事を語り、業平と二条の后の恋の逃避行を語り、思い出の夜遊の曲を舞った。やがて時も移り、公光の夢は覚めた。 |
| 業平・公光の祠 | 旧芦屋村（月若町） | ◆昭和９年、西芦屋青年団が建立。堂内には大小２個の石祠がある。<br>◆江戸時代の地誌には、公光第宅（やしき）古跡や業平朝臣別荘古蹟などと記されているが、はっきりした場所は不明。 |




鵺（歌川国芳・画、江戸時代）




業平・公光の祠（月若町）



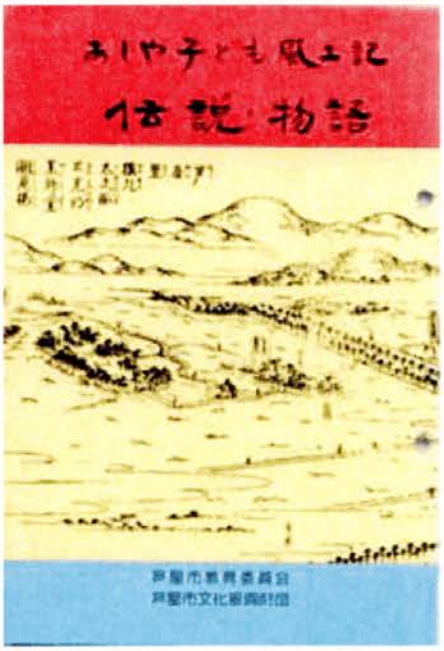
# C 民話と伝承

《阪急以南・里に残るお話》

| 名　称　等 | 所　在 | 内　容・解　説 /（＊）市　民　の　推　薦　理　由 |
|---|---|---|
| 鵺（ぬえ）塚 | 旧芦屋村<br>（浜芦屋町） | ◆「平家物語」（鎌倉時代の軍記文学）では、源頼政の鵺退治は、近衛天皇（1141～55）と二条天皇（1158～65）が在位されたときに２度行われた。<br>◆江戸時代の地誌や、室町時代の謡曲「鵺」（世阿弥・作）にも芦屋が登場している。<br>◆現在、芦屋公園内に塚はあるが、これは後年になって造られたものである。<br><br>【お話のあらまし】　昔、12 世紀の半ばに京都の御所を騒がす怪物が出没した。<br>毎夜、丑の刻（午前２時ごろ）になると、三条の森あたりから妖しい黒雲が湧き、鵺（とらつぐみ）の鳴声に似たもの悲しい鳴声が響くと、天皇は大へん苦しみだされた。<br>そこで、源頼政という弓の名人が、弓矢を用意して静かに目を閉じ、神に祈り、空を見上げると、雲の間に妖しい影が見えた。この時とばかり、矢をはなつと手ごたえがあり、大きな音とともに怪物が落ちてきた。よく見ると、頭がサル、体はタヌキ、手足はトラ、尾はヘビという妖怪であった。<br>人々は驚き、その死体を丸木舟に乗せて川に流したところ、淀川から大阪湾に流れ、はるか芦屋の浜に流れついた。これを見た芦屋の村人たちは、たたりを恐れて、塚を作ってねんごろに弔い、この塚を「ぬえ塚」と呼ぶようになった。 |
| 月若丸と藤栄 | 旧芦屋村 | ◆鎌倉時代、時の執権・北条時頼はその子・時宗に執権職を譲り、自らを最明寺時頼と名乗り、修行僧姿で諸国行脚の旅に出た。その廻国説話の１つ。<br>◆謡曲「籐栄」に、鎌倉時代の芦屋荘での物語が伝えられている。<br><br>【お話のあらまし】　芦屋荘の地頭・籐左衛門は、幼い息子・月若丸のことを案じて、実弟の籐栄に託し、息を引き取った。籐左衛門が亡くなると、籐栄は甥の月若丸を追い出し、芦屋荘を横領しため、月若丸は浜辺の苫家で貧しい暮らしに甘んじていた。<br>ある日の夕暮れ、月若丸の苫家に旅の僧が訪れ、一夜の宿を求めた。招き入れられた僧は、この粗末な苫家に似合わぬ気品の高い月若丸を不思議に思い、その身の上を尋ねた。<br>月若丸がためらいがちにその身の上を話したところ、旅の僧はその話にいたく同情した。<br>一方、叔父・籐栄は、鳴尾の長者と共に芦屋浦で舟遊びをし、楽を奏し舞いに興じていた。その籐栄の舞を見ていた僧は、もう一舞をと所望した。籐栄は、この申し出に腹を立て、僧に「成敗してくれる」と叫んだ。そのとき、僧は「我は先の執権・北条時頼じゃ。最明寺入道と号して、世の悪を正す諸国行脚の身である」と名乗りを上げた。<br>こうして、時頼は籐栄の悪事を正し、所領を月若に返してやった。心を入れ替えた籐栄も、以後許されて、月若を助け芦屋荘の経営に励んだので、一族は大いに栄えたという。 |
| 芦屋沖の竜灯 | 旧芦屋浜<br>（浜芦屋町） | ◆芦屋の七不思議と呼ばれる中の１つ。<br>◆「摂陽群談」（1701 年・元禄 14 年）にも、伝えられている。<br><br>【お話のあらまし】　昔、芦屋の浜では、真っ黒の夜に沖の方を見ると、海中のあちらこちらから、蝋燭の灯りのような青白い光が現れて、風の吹く方向とは逆に、光が繋がって走るという不思議な光景が見られた。<br>村人たちは、この妖しい光を見るたびに、「あれは、海中の魚の群れが竜神さまをお祭りしているのじゃ」と語り伝えたという。ここ 100 年ほどは、誰にも見かけられていない。 |
| 猿丸太夫 | 旧芦屋村<br>（山芦屋町） | ◆「百人一首」の『奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋は悲しき』で知られる猿丸太夫は、芦屋に住んだと伝えられる。<br>◆芦屋には旧家の猿丸家があり、また芦屋神社の境内には「猿丸太夫の墓」と称する石塔があるため、この地に住んだと考えられるようになった。<br>◆また山芦屋町の猿丸家墓所にも、中央に猿丸太夫の銘が刻まれた墓石がある。 |
| 芦屋処女（おとめ）の伝説 | 旧芦屋村<br>（神戸市） | ◆「万葉集」に、三人の歌人（高橋虫麻呂・田辺福麻呂・大伴家持）の歌がある。<br>◆後世、「大和物語」（平安時代）・謡曲「求塚」（室町時代）・戯曲「生田川」（明治時代・森鷗外）の作品素材ともなった。<br>◆摂津国菟原郡（芦屋市・神戸市東部）に住んでいたという伝説上の人物。<br>２人の男性から求婚され、悩んだ果てに３人とも命を絶ったという伝説。<br>※処女塚は東灘区御影塚町に、東求女塚は東灘区住吉宮町、西求女塚は灘区都通りにある。 |
| 魚屋（ととや）道 | 東　六　甲 | ◆深江から山へ登り、風吹岩・東お多福山を通り有馬に至る、六甲横断の道。<br>◆かつて、芦屋浜・打出浜などで獲れた鰯等の魚を、有馬へ運搬するための道。 |
| 石の宝殿 | 六　甲　山 | ◆伝説では、神功皇后が三韓から持ち帰った神の石を納めた所だとか、また祠の傍に皇后が黄金の鶏を埋めたので元旦の黎明にはその鶏の鳴き声が六甲中に響き渡るなどと伝えている。<br>◆六甲には山伏や天狗に関する多くの伝説があり、古くは修験道場だったようだ。<br>◆江戸時代には、山麓各地の農民の間で、雨乞いの場として信仰されていた。<br>ここが、船坂川・仁川・芦屋川・住吉川などの分水嶺に位置することによるため、そのような信仰が起こったものと考えられる。 |

# 芦屋の伝説＆民話一覧

- 芦屋の菟原処女（あしやおとめ）
- 金兵衛車やけぐるま
- 怪物の墓「ぬえ塚」
- 芦屋谷のフカ切り岩
- 月若と藤栄
- 雲　林　院（業平と公光）
- 荒地山―七右衛門ぐら
- 芦屋沖の龍灯
- 六甲山の石宝殿
- 猿丸太夫
- 湯もとの薬師さん
- 蛙　　岩
- 打出沖の海鳴り
- 金津山の黄金
- 打出の小槌
- カラス塚の神事
- 松若物語
- 水番ときつねのちょうちん
- ホタルがり
- 高嶋池のがたろう
- 観音さんに助けてもらった牛
- 猿丸安時さんと奥池
- 魚屋道（ととやみち）




平成4年（1992）3月31日発行　絶版

表　紙




平成11年（1999）7月20日発行
三好美佐子・著



裏表紙

# D 芦屋と文学・芸術・文化




在原業平の歌碑（松ノ内緑地）

19 伊勢物語絵巻 斎宮歴史博物館

芦屋の里



布引の滝



芦屋の浜



芦屋の里



■特別展「伊勢物語と芦屋」〈平成 12 年 10 月 28 日～ 11 月 26 日 / 芦屋市立美術博物館〉展覧会図録より抜粋

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《和歌に詠まれた芦屋Ⅰ》
※ここでいう『芦屋の里』は、東は武庫平野から西は神戸までの、広範囲の地域を指しています。

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 万　葉　集 | ※延暦元年（782）ころか | ◆現存する日本最古の歌集。仁徳天皇の時代から淳仁天皇に至る天平・宝持３年までの、およそ 400 ～ 500 年間の歌約 4,500 首が集められ、20 巻にまとめられている。成立年代・編者とも不明だが、大伴家持の手を経たものが多い。<br>◆万葉集には、「芦屋処女（おとめ）の伝説」を歌ったものが６首あり、いずれもその妻争いの事件を取り上げ、墓に詣でて同情の涙を流すという内容の歌。<br>◆「芦屋処女の伝説」を歌った作者は３人。最も古い高橋蟲麿の歌は、奈良時代の聖武天皇の時代（天平４年・732）の作とされている。また、その 12 年後に田辺福麻呂（天平 16 年・744）が同様の趣旨の歌が作られ、さらにその６年後の天平勝宝２年（750）、大伴家持の歌が作られている。<br>◆その他に「漢人（からひと）の浜」を歌ったものが１首あり、昔から芦屋の浜を漢人の浜ということから、芦屋の浜を詠んだ歌と考えられている。 |
| 後拾遺（ごしゅうい）和歌集 | 応徳３年（1086）《平安時代》 | ◆白河天皇の勅により、藤原通俊が応徳３年に撰した勅撰集（20 巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■能因法師　芦の屋の小屋の渡りに日は暮れぬ　いづち行くらむ駒にまかせて（巻９）<br>■中納言定頼　八重葺の隙だにあらば芦の屋に　おとせぬ風はあらじとをしれ（巻 16） |
| 千載（せんざい）和歌集 | 文治３年（1187）《平安時代》 | ◆寿永２年（1183）の後白河法皇の院宣により、藤原俊成が平安時代・文治３年に撰した撰集（20 巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■藤原為実　芦の屋の仮初ぶしは津の国の　長らえゆけど忘れざりけり（巻 14・恋歌） |
| 新古今（しんこきん）和歌集 | 元久２年（1205）《鎌倉時代》 | ◆建仁元年（1201）の後鳥羽上皇の院宣により、源通具・六条有家・藤原定家・藤原家隆・飛鳥井雅経・寂蓮らが、元久２年に撰した撰集。古今和歌集以後の８勅撰和歌集、いわゆる「八代集」の最後を飾る。<br>◆『古今集』を範として七代集を集大成する目的で編まれ、新興文学である連歌・今様に侵蝕されつつあった短歌の世界を典雅な空間に復帰させようとした歌集。古今以来の伝統を引き継ぎ、かつ独自の美世界を現出した。「万葉」「古今」と並んで三大歌風の一つである「新古今調」を作り、和歌のみならず後世の連歌・俳諧・謡曲に大きな影響を残した。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■摂政太政大臣　いさり火の昔の光ほの見えて　あしやの里に飛ぶ蛍かな（巻３・夏歌）<br>■源俊頼朝臣　芦の屋のしづはた帯のかた結び　心やすくも打解くるかな（巻 14・恋歌）<br>■在原業平朝臣　芦の屋の灘の塩やき暇なみ　つげのを櫛もささずきにけり（巻 17・雑歌）<br>■在原業平朝臣　はるる夜の星か河辺の蛍かも　わが住む方の海人の焚く火か（巻 17・雑歌）<br>※業平の歌は、いずれも「伊勢物語」にも見られる。 |
| 新勅撰（しんちょくせん）和歌集 | 文暦２年（1235）《鎌倉時代》 | ◆貞永元年（1232）の後堀河天皇の勅により、藤原定家が単独で撰し、上皇の死後も九条道家・教実父子の後援で編纂事業が引き継がれ、四条天皇代の文暦２年（1235）に完成（20 巻）。仮名序も定家筆。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■藤原俊成　遥かなる芦屋の沖のうきねにも　夢路は近き都なりけり（巻８・旅歌）<br>■待賢門院堀川　霜がれはあらわに見えし芦の屋の　小屋の隔ては霞なりけり（巻１・春歌）<br>■藤原家隆　短夜のまだふしなれぬ芦の屋の　つまも顕に明くる東雲（巻 19・雑歌） |
| 続後撰（しょくごせん）和歌集 | 建長３年（1251）《鎌倉時代》 | ◆宝治２年（1248）の後嵯峨上皇の院宣により編纂された 10 番目の勅撰和歌集。藤原為家撰（20 巻）。およそ 1400 首を納める。<br>◆冷泉家時雨亭文庫に撰者自筆本が伝存、昭和 59 年に重要文化財に指定された。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■少将内侍　問えかしな芦屋の里の晴るる夜に　われ住む方の月はいかにと（巻６・秋歌）<br>■源　重之　芦の屋の小屋のしのやの忍びにも　人に知られぬふしを見せなむ（巻 11・恋歌）<br>■藤原定家　芦の屋に蛍やまがふ海人や焚く　思いも恋も夜は燃えつつ（巻 14・恋歌） |
| 続（しょく）古今和歌集 | 文永２年（1265）《鎌倉時代》 | ◆正元元年（1259）に後嵯峨院の院宣により、藤原為家ほか撰により完成（20 巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■順徳院　芦の屋の灘の塩屋の天の戸を　おし明け方ぞ春は寂しき（巻１・春歌）<br>■藤原家隆　いつもかく寂しきものか津の国の　芦屋の里の秋の夕暮れ（巻４・秋歌）<br>■藤原為家　よしやただ芦屋の里の夏の日に　うきてよるてふその名ばかりは（巻 11・恋歌）<br>■後鳥羽院　芦の屋の灘の塩くむ海人びとも　絞るに袖の暇なきまで（巻 12・恋歌）<br>■藤原為家　明け渡る芦屋の浦の波間より　ほのかにまわる紀路の遠山（巻 19・雑歌） |



阿保親王塚（翠ケ丘町）




大楠公戦跡碑（楠町）

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《和歌に詠まれた芦屋Ⅱ》
※ここでいう『芦屋の里』は、東は武庫平野から西は神戸までの、広範囲の地域を指しています。

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 続拾遺和歌集（しょくしゅうい） | 弘安元年<br>(1278)<br>《鎌倉時代》 | ◆建治２年(1276)の亀山上皇白河天皇の勅により、二条為氏が撰した勅撰和歌集（20巻）。12番目の勅撰和歌集。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■衣笠内大臣　濡れて干す隙こそなけれ夏がりの　芦屋の里の五月雨のころ（巻３・夏歌）<br>■正三位知家　芦の屋の海人のなはたく漁火の　それかとばかり飛ぶ蛍かな（巻３・夏歌）<br>■前中納言定家　ほのぼのとわが住む方は霧こめて　芦屋の里に秋風ぞ吹く（巻４・秋歌）<br>■前内大臣　基　夜と共に浮節知らぬ芦の屋の　海人の袖だにほしぞかねける（巻16・雑歌） |
| 新後撰和歌集 | 嘉元元年<br>(1303)<br>《鎌倉時代》 | ◆正安３年(1301)の後宇多天皇の勅により、二条為世が撰した勅撰集（20巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■前中納言定家　芦の屋の仮寝の床のふしの間も　短く明くる夏の夜な夜な（巻４・夏歌）<br>■順徳院　慣れにける芦屋の海人も哀れなり　一夜にだにも濡るる袂を（巻８・旅歌）<br>■前内大臣 実　暮れぬとてわが住む方に帰るなり　芦屋の沖の海人の釣舟（巻17・雑歌） |
| 玉葉和歌集（ぎょくよう） | 正和元年<br>(1312)<br>《鎌倉時代》 | ◆伏見院の院宣により、京極為兼が撰した勅撰集（20巻）。後の「風雅和歌集」とともに、京極派の歌風を中心とする勅撰集として、「新古今集」以降の勅撰集の中で異彩を放っている。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■後徳大寺左大臣　打ち時雨もの寂しかる芦の屋の　小屋の寝覚めに都恋しも（巻８・旅歌）<br>■源俊頼朝臣　草枕ささがき薄き芦の屋は　ところせきまで袖ぞ露けき（巻８・旅歌）<br>■高階宗俊朝臣　芦の屋の仮寝も近く満つ潮に　磯越す波を枕にぞ聞く（巻８・旅歌）<br>■前参議雅有　都にて聞き忘れにし波の音に　また立ち帰りなれむとすらむ（巻８・旅歌）<br>■入道太政大臣　芦の屋の忍びに燃ゆるわが思い　さぞ共人にいふひまぞなき（巻９・恋歌） |
| 続千載和歌集 | 元応２年<br>(1320)<br>《鎌倉時代》 | ◆文保２年(1318)の後宇多法皇の勅により、二条為世が撰した勅撰集（20巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■中務卿宗尊親王　今朝みれば露ぞ隙なき芦の屋の　小屋の一夜に秋や来ぬらん（巻４・秋歌）<br>■前参議実俊　仮にだに上にな立てそ芦の屋の　下焚く烟思ひ消ゆとも（巻11・恋歌）<br>■読み人しらず　芦の屋の灘の潮路を漕ぐ舟の　跡なき波に雲ぞかかれる（巻16・雑歌） |
| 続後拾遺和歌集 | 嘉暦元年<br>(1326)<br>《鎌倉時代》 | ◆鎌倉時代の勅撰和歌集。元亨３年（1323）後醍醐天皇の勅により、二条（藤原）為藤・為定が撰し、正中二年（1325）に四季部奏覧。嘉暦元年（1326）完成返納（20巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■津守国冬　芦屋がた月澄むかたの浦風に　海士の焚く火の煙だになし（巻５・秋歌） |
| 新千載和歌集 | 延文４年<br>(1359)<br>《室町時代》 | ◆室町前期の勅撰和歌集。正平11＝延文元年(1356)後光厳天皇の勅により、藤原為定が撰し、延文４年成立（20巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■宜秋門院丹後　来つつ鳴けわが住む方の友千鳥　芦屋の里の夜半の仮寝に（巻６・冬歌） |
| 新拾遺和歌集 | 貞治３年<br>(1363)<br>《室町時代》 | ◆室町前期の勅撰和歌集。20巻。正平18・貞治２年(1363)後光厳天皇の勅により二条為明が撰したが、途中で没したため頓阿（とんあ）が助成、翌年完成。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■常磐井入道前太政大臣　夏かりの芦屋の里の夕暮れに　蛍やまがふ海士の漁火（巻18・雑歌） |
| 新葉和歌集（しんよう） | 弘和元年<br>(1381)<br>《室町時代》 | ◆南北朝期の準勅撰集。撰者は後醍醐天皇皇子宗良（むねよし）親王。天授２年(1376)ころ発企、弘和元年(1381)に長慶天皇の綸旨が下り、同12月3日に奏覧。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■後亀山院御製　春はまたわが住む方に帰るなり　芦屋の海人の衣かりがね（巻１・春歌）<br>■読み人しらず　浦に住む思いやなぞと芦の屋の　絶えぬ煙を問ふ人のなき（巻11・恋歌） |
| 新後拾遺和歌集 | 至徳元年<br>(1384)<br>《室町時代》 | ◆南北朝時代の勅撰和歌集。天授元＝永和元年(1375)後に円融天皇の勅により、二条為遠・二条為重が撰し、元中元＝至徳元年(1384)成立。二条良基の仮名序あり（20巻）。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■正三位知家　難波女のすくも焚く火の打ちしめり　芦屋の里に春雨ぞ降る（巻１・春歌）<br>■津守国実　芦の屋は住む海人やなき月影に　漕ぎ出でてみる灘の友舟（巻８・秋歌） |



■運慶作「世親(古代インドの仏教僧)像」(京都・興福寺北円堂)
　鎌倉文化とは、鎌倉幕府の成立した 12 世紀末葉から幕府が滅亡した 14 世紀前半にかけての日本の文化。王朝国家からの自立を指向する本格的な武家政権が東国に開かれた時代であり、各方面で新しい文化的所産が生まれた。



■室町文化を代表する銀閣寺（京都・東山）
　室町文化とは足利氏によって京都に室町幕府が開かれた時代の日本の文化。南北朝文化ののち、３代将軍足利義満の時代に北山文化が栄え、ついで８代将軍足利義政の時代に東山文化として成熟した。戦国時代にはさらに文化の民衆化と地方普及が進んだ。広義には、南北朝文化を含むことがある。

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《和歌に詠まれた芦屋Ⅲ》
※ここでいう『芦屋の里』は、東は武庫平野から西は神戸までの、広範囲の地域を指しています。

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 新続古今和歌集 | 永享 11 年<br>(1439)<br>《室町時代》 | ◆室町時代最後の勅撰和歌集。永享５年(1433)、後花園天皇の勅により、飛鳥井雅世が撰し、永享 11 年成立 (20 巻 )。一条兼良の真名序・仮名序がある。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■前参議忠定　芦屋の屋の灘の塩屋に立つ煙　里わく春の夕霞かな ( 巻１・春歌 )<br>■後亀山院御製　春はまたわが住む方に帰るなり　芦屋の海人の衣かりがね ( 巻１・春歌 )<br>■権中納言雅世　浦風もわが住む方の夜や寒き　芦屋の里に衣打つ声 ( 巻５・秋歌 )<br>■大納言経信　旅寝する芦の小屋にて見るときも　おも変りせぬ秋の月かな ( 巻 10・旅歌 ) |
| 六百番歌合（ろっぴゃくばんうたあわせ） | 建久４年<br>(1193)<br>《鎌倉時代》 | ◆鎌倉時代に藤原良経主催でなされた歌合。判者藤原俊成の判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」などで知られ、後の千五百番歌合とならび歌合の最高峰と評される。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■定家朝臣　芦の屋の隙もる雨の雫こそ　音聞かぬより袖は濡れけり ( 恋　４番 ) |
| 千五百番歌合 | 建仁２年<br>(1202)<br>《鎌倉時代》 | ◆鎌倉前期の歌合せ。20 巻。建仁２年(1202) ごろ成立。後鳥羽院が当時の代表的歌人 30 人に、各 100 首を詠進させたもの。判者は、後鳥羽院・藤原俊成ら 10 人。各首に判者の評があり、新古今時代の歌風・歌論を知る貴重な資料。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■後鳥羽院　月残る芦屋の里の有明に　昔に似たる海士のいざり火<br>■後鳥羽院　蛍とぶ芦屋の浦の海士の焚く　一夜もはれぬ五月雨の空<br>■後鳥羽院　津の国の芦屋の里にとぶ蛍　誰が住む方の海士のいざり火 |
| 秋篠月清集（あきしのげっせいしゅう） | 元久２年<br>(1205)<br>《鎌倉時代》 | ◆藤原良経の自撰家集。４巻。1610 余首。《新古今集》成立の元久２年 (1205) 前後に成ったと思われる。良経の隠者志向とともに、人生の無常をも見つめた長高清雅な歌境で知られる。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■摂政太政大臣　いさり火の昔の光ほの見えて　あしやの里に飛ぶ蛍かな ( 巻２・夏 )<br>■前中納言定家　芦の屋の灘の塩焼き暇あれや　磯山桜かざす海士人 ( 巻３・春 ) |
| 順徳院御集（じゅんとくいんぎょしゅう）<br>( 紫禁和歌草 ) | 承久２年<br>(1220)<br>《鎌倉時代》 | ◆建暦元年 (1211) から承久２年 (1220) にかけて歌合等で詠まれた順徳院の歌を、年代順にまとめた御製集。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■芦の屋の灘の塩屋のあまの戸を　おし明方ぞ春はさびしき<br>■降る雪はかつ消え行けど津の国の　芦屋の波の音はまさらず |
| 拾遺愚草（しゅういぐそう） | 天福２年<br>(1233)<br>《鎌倉時代》 | ◆藤原定家の自撰家集で、伝本は定家自筆本 ( 冷泉家蔵 ) ほか。建保４年 (1216) に上中下３巻を編み、のち天福元年 (1233) ころまで自身で増補。上巻は 100 首、中巻は韻字歌や 50 首の定数歌を、下巻は 15 首歌以下の作品や贈答歌を収める。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■藤原定家　芦の屋に蛍や紛う海士の焚く　思いも恋も夜は燃えつつ(上・恋)<br>■藤原定家　芦の屋のわが住む方の遅桜　ほのかに霞む帰るさの空(上・春)<br>■藤原定家　仄々とわが住む方は霧こめて　芦屋の里に秋風ぞ吹く(上・秋)<br>■藤原定家　芦の屋の蔦這ふ軒の村時雨　音こそ立てね色は隠れず(上・歌合百首・蔦)<br>■藤原定家　芦の屋の仮寝の床のふしのまに　短く明くる夏の夜な夜な(中・芦屋里) |
| 拾玉集（しゅうぎょくしゅう） | 貞和２年<br>(1346)<br>《室町時代》 | ◆慈円の家集で、鎌倉最末期からに室町時代にかけて青蓮院尊円親王が集成。同親王の命により慶運が編纂したともいう。六家集の一つで、５巻本 (5917 首 ) と７巻本 ( 流布本 4613 首 ) とがある。前者には青蓮院本ほかの善本が存し、和歌の配列はほぼ年代順で、慈円の全歌集にちかい。歌風は平易な詞を用いてのびやかであり、新しい趣向を好んで仏教的な述懐歌に特色がみられる。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■慈円　ながめやる心にあとはつきにけり　芦屋の里の雪のあけぼの(巻２・雪朝眺望)<br>■慈円　行きとまる心つくしの哀れさは　芦屋の里の秋の夕風(巻２・海路)<br>■慈円　幾たびか夢より夢に移るらむ　芦屋の沖の舟の通い路(巻３海路)<br>■慈円　木の葉吹く武庫の山風立ちぬらし　芦屋の沖に海士の釣り舟(巻６・冬) |
| 壬二集（みに） | 寛元３年<br>(1245)<br>《鎌倉時代》 | ◆藤原家隆の他撰歌集。六家集の１つ。九条基家が、家隆の詠草をもとに撰した。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■藤原家隆　都まで心しづまぬうきねかな　芦屋の奥の有明の空(上・海路)<br>■藤原家隆　いつもかく寂しきものか津の国の　芦屋の里の秋の夕風(中・雑)<br>■藤原家隆　短夜もまだ臥し慣れぬ芦の屋の　つまもあらはに明くる東雲(中・芦屋里) |

## 「属目散趣」「歌風土記兵庫県」　富田（とみた）　砕花（さいか）

盛岡市に生まれた**富田砕花（一八九〇～一九八四）**は、十八歳の頃、与謝野鉄幹・晶子の新詩社に入り、同郷の石川啄木らと短歌を発表していました。大正二年（一九一三）、知人斎田氏を訪ね、砕花は病気療養に芦屋へやってきました。大正九年（一九二〇）に結婚。公光町、宮川町へと移り、昭和五十九年に九十三歳で亡くなるまで六十年余りの長い間、芦屋に住み続けました。

作品には、自分の名前を詠み込んだ『属目散趣』の

**「砕けたる花を名とした生涯を終わりしことに悔いあらめやも」**

また、ロック・ガーデンを詠んだ『歌風土記兵庫県』の

**「ただひとりとかげ極めこむ日もありて物の音絶えし岩場なりしか」**

などのほか、芦屋では、宮川小学校・精道中学校をはじめ、多数の校歌を作りました。戦後は、県下をくまなく旅し、『歌風土記兵庫県』や『兵庫讃歌』を出すなど、広く兵庫県の風土と人を愛し、兵庫県文化の父と呼ばれました。



■平成19年度版「芦屋市ガイドマップ」より一部抜粋

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《和歌に詠まれた芦屋Ⅳ》
※ここでいう『芦屋の里』は、東は武庫平野から西は神戸までの、広範囲の地域を指しています。

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 散木奇歌集（さんぼくきかしゅう） | 大治３年（1128）《平安時代》 | ◆平安後期の歌人源俊頼の家集。10巻。最晩年に自撰。〈散木〉は無用の木の意。新奇な歌の意の〈奇歌〉と、棄てるべき歌という意の両様の表記がある。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■源 俊頼　芦屋の屋のひまほのぼのとしらむまで　燃え明かしてもゆく蛍かな（巻２・夏） |
| 夫木和歌抄（ふぼくわかじょう） | 延慶３年（1310）《鎌倉時代》 | ◆鎌倉後期の私撰和歌集。36巻。藤原長清撰。延慶3年(1310)ごろの成立とされる。万葉集以後の家集・私撰集・歌合わせなどの撰から漏れた歌１万7000余首を、四季・雑に部立てし、約600の題に分類したもの。夫木和歌集。夫木集。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■兵衛内侍　心ありて誰か聞くらむ津の国の　芦屋の里の鶯の声(巻２・鶯)<br>■光明峯寺入道摂政　芦の屋の灘の潮風心あらば　いそ山桜波に散らすな(巻４・花)<br>■慈円　五月雨はひまこそなけれ津の国の　芦屋の里の雲のやへぶき(巻８・五月雨)<br>■具親朝臣　津の国の芦のまろやの五月雨に　隙こそなけれ雲の八重ぶき(巻８・五月雨)<br>■民部卿為家　芦の屋のうないをとめの濡れ衣　ころも久しき五月雨の空(巻８・五月雨)<br>■後久我太政大臣　藻塩焼く芦屋の海士の浮き寝だに　波にしをれて行く蛍かな(巻８・蛍)<br>■民部卿為家　今宵われ芦屋の沖の月を見て　鹿の音誘ふ嵐をぞ聞く(巻12・鹿)<br>■権大納言実家卿　夕ざれば芦屋の沖に風過ぎて　生田の小田も穂波立ちけり(巻12・秋田)<br>■家長朝臣　芦の屋に波の寄るさへ打つ衣　灘の塩焼きいとまなのよや(巻14)<br>■按察使公通　朝ぼらけ芦屋の沖をゆく舟の　よそ目は鴨の居るかとぞみる(巻23)<br>■西行　波高き芦屋の沖を帰る船の　ことなくて世を過ぎむとぞおもふ(巻23)<br>■後鳥羽院　蛍とぶ芦屋の浦に海士の焚く　一夜も晴れぬ五月雨の空(巻25・浦)<br>■藤原定家　このごろは南の風にうき海松の　よるよる涼し芦屋の里(巻28・海松)<br>■後九条内大臣　芦屋の里の入江による草の　みるめにうきて行く蛍かな(巻31・里)<br>■前大納言忠良卿　浦近き芦屋の里に日は暮れて　浦路のきりに蛍のいさり火(巻31・里)<br>■民部卿為家　山遠き夕告げ鳥も明けぬとて　芦屋の里に舟急ぐなり(巻31・里)<br>■参議雅経卿　ゆふざれば秋やは松を吹く風に　軒打ちそよぐ芦屋の里(巻31・里)<br>■大蔵卿有家　呉とは黄楊の小櫛をささずとも　芦屋の里に蛍とぶなり(巻31・里) |
| 類題鰒玉集（るいだいふくぎょくしゅう） | 文政11年（1828）《江戸時代》 | ◆江戸後期の歌人・国学者の加納諸平（かのう もろひら）の私撰和歌集。14巻。近世諸家の和歌に、自詠を加えたもの。初編は、文政11年(1828)刊。続刊あり。<br><br>【芦屋の里の歌】<br>■伴林光平　瀬戸こゆる汐けのみこそ霞あれ　まだ下もえの芦の屋の里(武庫郡誌所載)<br>■美蔭　かやり火の燈の末に月ふけて　つゆしづかなる芦の屋の里(武庫郡誌所載) |
| 菟玖波集（つくばしゅう） | 正平11年／延文元年（1356）《南北朝時代》 | ◆南北朝時代に撰集された連歌集。巻数は20巻。二条良基が僧救済（ぐさい）の協力を得て撰集し、1356年(正平11年／延文元年)に成立。古来からの連歌も収められ、連歌の変遷を見ることができる。また、この連歌集の撰出により連歌が和歌から独立し、独自の文化としての地位を占めるようになった。<br><br>【芦屋の里の歌】六甲南麓の連歌<br>■関白左大臣　芦の屋の塩焼く海士のいとまなみ　風有舟はささす来にけり(中略)<br>■権大僧正円忠　舟にても旅をするがの海戸遠し　よその里にも衣うつ音<br>■道誉法師　海士の住む芦屋の舟もほど近し　須磨も明石も舟の通い路 |
| 芦屋と短歌 | 江戸・明治 | ◆猿丸安時…文政11年(1828)に百姓総代、天保12年(1841)には年寄役となった安時(1804～1880)は、この年から奥池の開削を手がけ20余年の月日を費やし、村民を水不足から救った。<br>安時には姉がおり、二人は大変和歌を好み、家集に「沢の潟の雫」が残されている。 |
| 芦屋と短歌 | 大正・昭和 | ◆猿丸保明…孫にあたる保明(精道村長)は、安時の没後40年後の大正７年、奥池開削の功を称えるために、広く歌人の歌を集めた「池の玉藻」を出版。<br>◆富田砕花…大正時代初期に精道村に居を定めた砕花(1890～1984)は、多くの詩集や評論集も残しているが、歌人として歌集「悲しき愛」・「白樺」・「歌風土記兵庫県」・「属目散趣」などがある。<br>◆窪田空穂…大正８年、歌集「青水泡」の中で、六甲を詠じている。<br>◆星野天知…大正12年から昭和25年に没するまで大原町に住んだ氏は、歌集「芦屋の宿」を残している。<br>◆土屋文明…昭和５年に来神、歌集「往還集」に六甲を詠じている。<br>◆与謝野寛・晶子…昭和８年、丹羽夫妻を訪ねた２人は、多くの歌を残している。<br>◆丹羽俊彦・安喜子…松浜町(酉新田)に住んだ歌人。与謝野夫妻との交流が深い。<br>◆早野臺氣…昭和24年に芦屋市発行の広報誌「あしや」の誌上で、多くの短歌を発表。昭和29年には、「芦屋十景」が絵葉書やせんべい(観光協会)となり、それらにも氏の前衛短歌が紹介された。芦屋短歌協会を主宰。没後、氏を慕う弟子たちの手で歌集「海への會話」が出版された。 |

## 業平讃歌

早野（はやの）臺氣（だいき）

なつかしな　いにしへびと
夢ならで　けふあひまつる
五月風み前をわたれ
まばゆきはわが業平の　み名の大きさ

●早野臺氣（一八九八～一九七四）

歌人。浜芦屋町に十九歳より住み、戦前から前衛短歌運動にかかわる。戦後は、具体美術の創始者吉原治良らと親交をもち、自らオブジェ短歌と称し、歌集『海への會話』を遺した。

芦屋在住五十七年の間、郷土史家として、また芦屋短歌協会創設にも功労。昭和四十四年に芦屋市民文化賞受賞。

## 芦屋裏山

吉沢（よしざわ）独陽（どくよう）

識らず知らずに
来は来てみたが
さるとりいばらの
赤い実が
ぽつりぽつりと
あるばかり
遠い昔の
おもいでに
雑木林の細道の
空の深さよせつなさよ

●吉沢独陽（一九〇三～一九六八）

詩人。関東大震災後、芦屋に移り住み、西山町に聖樹薬詩園を経営。戦前は『日本詩壇』創刊。戦後は、坂本勝と『聖樹』を刊行。

芦屋在住四十年余りの間、登山に打ち込み、日本アルプスに七十数回登っている。芦屋の裏山はわが庭であった。


城山を望む

## 芦屋風景

柳沢（やなぎさわ）健（けん）

黄昏の海を見てゐると、
味のいい葡萄酒の匂がする。
黄昏の松原を見てゐると、
紫いろの絹の匂がする。
黄金のちらちらする砂浜に身を横たへて、
薄るゝ雲と消え行く帆とを
眺めながら、
私は獨語する。
「この仄かに燃える日の
匂ひ…」
遠く、四國の山が夕陽のなかに揺れる。
微風が海波をたゝいて消える。
音もなく滑るヨットには、暗紫のボネット。
誰かゞ幽かに海上で話す聲がする。
ヨットのうへでか？　いや、もつと遠く。
もつと深く、
夕陽が青く煙つてゐる波のはるかかなたに…。
黄昏の海を見てゐると、
黄金の人魚の唄がきこえる。
黄昏の松原を見てゐると、
長い髪の毛を解く音がする。

●柳沢健（一八八九～一九五三）

詩人。横浜郵便局、朝日新聞社、外務省に勤めた、都会風の情熱的な詩人で、三木露風と詩誌『未来』を出す。「芦屋風景」は、公光町に住んでいた大正八年から十三年までの朝日新聞社記者のころの作品。

## 橋の上

杉山（すぎやま）平一（へいいち）

橋の上にたつて
深い深い谷川を見おろす
何かおとしてみたくなる
小石を蹴ると
スーツと
小さくなつて行つて
小さな波紋をゑがいて
ゴボンと音がきこえてくる
繋がつた！
そんな気持で吻とする
人間は孤獨だから

（第一詩集「夜学生」より）

●杉山平一（一九一四～）

詩人。昭和初期、東芦屋町に在住。現在は宝塚市在住。三好達治に見出され、抒情のなかに社会的感覚を備えた詩人として、また映画評論家として活躍。本市富田砕花賞選考委員として長く務められた。詩の中の橋は、阪急芦屋川駅北側の桜橋とされています。


桜橋

■平成19年度版「芦屋市ガイドマップ」より一部抜粋

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《芦屋と俳句・詩》

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 江戸時代の芦屋と俳句 | 延宝８年（1680）《江戸時代》 | ◆延宝８年刊行の地誌「福原鬢鏡」に、『打出宿』・『芦屋宿』と題して、次のような句を見ることができる。<br><br>【打出宿】<br>■すき鍬や　あるいはたこの　うち出村（宗因）<br>■棟の槌や　かすみを生んで　打出村（利安）<br>■所から　里衣やうち出の　槌の音（吉一）<br>■宝船　つくるうち出の　小槌かな（義次）<br>【芦屋宿】<br>■穂に出るは　ちゃせんなるらし　芦屋釜（繁生）<br>■穂に出でる　あし屋の里の　綿子かな（博有）<br>■雪にてや　あし屋の里の　煎茶釜（是水） |
| 明治・大正・昭和の芦屋と俳人 | 明治～現在 | 大正時代には、芦屋が健康地・別荘地として発展してきたことにより、多くの俳人が居住し名句を残した。句会もさかんに行われ、俳句雑誌も多く出版された。<br><br>◆**齋藤幾太（砂明）**…打出の広大な屋敷で、明治中期から「双葉会」を結成し、多くの門人を輩出した。中には、後に打出焼窯元となる阪口砂山もいた。<br>◆**河東碧梧桐**…大正８年芦屋の海岸に住み、月斗の養女を夭逝させ、悲歌を残す。<br>◆**山口誓子**…大正 13 年、病気療養で芦屋へ。『北斗七星』の名句を詠じている。<br>◆**青木月斗**…度々芦屋を訪れ、多くの門人を輩出。「ホトトギス」から出発の俳人。<br>◆**高浜虚子**…明治・昭和期の俳人・小説家。ホトトギスの理念となる「客観写生」「花鳥諷詠」を提唱したことでも知られる。<br>◆**高浜年尾**…虚子の長男。昭和 10 年、芦屋に来住。昭和 14 年、虚子の跡を継いで、俳句誌「ホトトギス」を主宰。<br>◆**稲畑汀子**…年尾の次女として、横浜で生まれる。小学校のころから虚子や父のもとで俳句を教わる。昭和 10 年、一家で芦屋に来住。年尾の死去により「ホトトギス」主宰を継承。昭和 62 年、日本伝統俳句協会を設立し、会長に就任。平成 12 年、虚子記念文学館を芦屋に開館、理事長に就任。 |
| 芦屋と詩人 | 大正～昭和 | ◆**富田砕花**…1890 ～ 1984 年。盛岡市に生まれた砕花（本名・戒治郎）は、12 歳で上京、18 歳には与謝野鉄幹・晶子の「新詩社」に入り、同郷の石川啄木と歌会に出席。『明星』や若山牧水の歌誌『創作』などに短歌を発表。大正元年、第１歌集「悲しき愛」を出版。翌大正２に病を得、知人を頼って病気療養のために芦屋へ。大正９年、田島マチと結婚。茶屋之町・公光町・宮川町へと居を移しながらも、大正 10 年から昭和 59 年に亡くなるまでの 70 余年、芦屋に住み続けた。<br>芦屋定住後、大正・昭和にかけて多くの著作を残した。昭和 23 年には、第１回兵庫県文化賞を受賞。戦後は、県下をくまなく旅し、『歌風土記兵庫県』や『兵庫讃歌』を出版。また宮川・岩園小学校や精道中学校ほか多くの校歌や社歌等を作詞し、広く兵庫の風土と人を愛し、“兵庫県文化の父”と呼ばれた。<br>現在の旧居は戦災で一部を残し焼失し、戦後再建された建物だが、谷崎が昭和９年３月から同 11 年 11 月まで住んだころの面影も一部残し、またその後昭和 13 年から 59 年まで砕花が住んだという文学にゆかりの深い家です。砕花氏没後、ご遺族から建物や蔵書一式のご寄贈を受け、昭和 62 年からは富田砕花旧居として一般公開している。<br>◆**柳沢　健**… 1889 ～ 1953 年。詩人。会津若松生まれ。横浜郵便局・朝日新聞社・外務省に勤めた。都会風の情熱的な詩人で、三木露風らと詩誌『未来』を出す。富田砕花との交流も深く、大正８年から 13 年まで公光町に住んだ。<br>◆**吉沢独陽**… 1903 ～ 1968 年。詩人。信州の生まれ。関東大震災後、芦屋に移り住み、西山町に聖樹薬詩園を経営。戦前「日本詩壇」を創刊、戦後は阪本勝と「聖樹」を刊行した。<br>◆**杉山平一**…1914 ～ 2012 年。詩人。昭和初期ころ、東芦屋町に在住、後に宝塚市へ。昭和16年第２回中原中也賞、同18年『夜学生』で文芸汎論詩集賞受賞。平成 15 年『戦後関西詩壇回想』で小野十三郎賞特別賞を受賞。<br>三好達治に見い出され、抒情の中に社会的感覚を備えた詩人・映画評論家として活躍。関西詩人協会代表・四季派学会会長・現代詩人会会長などを歴任。また、本市の富田砕花賞の第１回から第21回までの間、選考委員を務めた。芦屋に住まれたころに書かれた『夜学生』の詩の中の橋は、　阪急芦屋川駅北側の桜橋といわれている。 |

■平成19年度版「芦屋市ガイドマップ」より一部抜粋

## 「細雪」「猫と庄造と二人のをんな」

谷崎　潤一郎（たにざき　じゅんいちろう）



●谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）が、大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災を逃れて、妻千代子と幼い娘鮎子を連れ関西に移ってきたのは、大正十二年十月、三十八歳のときでした。関西に移り住んだ谷崎は、芦屋や西宮などの風物を愛し、また引越し好きということもあり、芦屋・西宮・神戸の岡本など転々とします。その間に、彼の代表作「卍」「蓼喰ふ蟲」「乱菊物語」「吉野葛」「春琴抄」「猫と庄造と二人のをんな」「細雪」など、次々と発表していきます。

谷崎が芦屋に住んで、ごく普通の下町と庶民の生活を描いた「猫と庄造と二人のをんな」という名作があります。芦屋の旧国道（現国道二号）沿いに金物屋を営む猫好きな男庄造の物語で、現在と違い昭和十一年頃ののんびりとした風景が印象的な作品です。

また、この旧国道筋は「細雪」の舞台にもなっています。昭和十三年の阪神大水害の様子が、迫力ある描写で描かれています。



昭和初期の業平橋を走る国道電車

## 蒼白い月

徳田　秋声（とくだ　しゅうせい）

●徳田秋声（一八七一～一九四三）は、大正九年（一九二〇）五月十二日、大阪時事新報社の懸賞小説授賞式に講演のため下阪。帰途、芦屋に住む長兄の養嫡子夫妻を訪れました。小説「蒼白い月」は、その際に著された作品。

その時の秋声は、自分自身のこれからの人生と、徳田家の将来を思いながら、蒼白い月のかかる芦屋川の河口をそぞろ歩きます。

**「そこは大阪と神戸とのあひだにある美しい海岸の別荘地で、白砂青松と言った明るい新開地の別荘地であつた。（中略）街路は整頓され、洋風の建築は起こされ、郊外は四方に発展して、致るところの山裾と海辺に、瀟洒な別荘や住宅が新緑の木立ちのなかに見出された。（中略）私たちは河原ぞひの道路を歩いていた。河原も道路も蒼白い月影を浴びて、真白に輝いていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路の傍らには松の生い茂つた崖が際限もなく続いていた。そしてその裾に深い叢があつた。月見草がさいていた。」**（講談社「日本現代文学全集28」）



芦屋公園

## 芦屋にて

生田　春月（いくた　しゅんげつ）

**「茶屋芦屋から浜芦屋まで、阪神電車の踏切を越して、村役場の前をずつと海岸まで導いている真白な広い道と、芦屋川ぞいのみちとの間が、細長い遊園地になつていて、白い松林の中には、休憩所があつたり、テニスコオトがあつたりする。夏になると、小学校では、机を持出して、ここで授業をするのだといふ。いちばん自由な林間学校である。芦屋の児童は幸福だと思ふ。」**（新潮社「生田春月全集8」）

●生田春月（一八九二～一九三〇）

詩人。ツルゲーネフ、ゲーテ、ハイネなど翻訳が多く、特にハイネの研究に優れる。「芦屋にて」は、公光町に住んでいた大正八年から十三年までの朝日新聞社記者のころの作品。昭和五年、小豆島近くを航行中の菫丸船上から投身自殺した。



芦屋川河口付近

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《近代文学に描かれた芦屋》

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 近代文学と<br>芦屋 | 明治・大正<br>～<br>昭和初期 | ◆**谷崎潤一郎**…1886～1965年。小説家。東京日本橋蠣殻町生まれ。大正時代は「悪魔主義」と呼ばれ、また映画に興味を示したのもこのころであった。大正12(1923)年の関東大震災以後、関西へ移住。『痴人の愛』(1924～25)・『卍』(1928～30)を得た。その間、千代子夫人と離婚。夫人を友人佐藤春夫に譲る出来事もあった。『蓼喰ふ虫』(1928～29)の背景が、それである。次第に創作方法や語りの文体がより磨かれ、『吉野葛』『盲目物語』(ともに1931年)・『蘆刈』(1932)・『春琴抄』(1933)などの名作がある。昭和10(1935)年、現芦屋市宮川町の家(現"富田砕花旧居")で根津松子と結婚、終世の伴侶を得て作風も安定した。<br>『陰翳礼讃』(1933)などの美学がまとまったのも、このころである。戦中は『源氏物語』の現代語訳を完成、大作『細雪』(1943～48)を書く。戦後も、『少将滋幹の母』(1949～50)・『鍵』(1956)・『瘋癲老人日記』(1961～62)など着実な歩みをみせ、海外でも評価は高まった。<br>※芦屋に住んだのは、昭和9年3月から11年11月までの2年半。<br>◆**徳田秋声**…1871～1943年。小説家。本名・末雄。石川県金沢市横山町に、加賀藩の家老横山三左衛門の家中雲平を父とし、前田家直臣津田采女の三女で三度目の継妻を母として生まれる。複雑な家庭、ひよわな生い立ち、家計の窮迫からくる劣等意識がその消極的ともいえる人生観の元となり、後年の作品の底流になっている。私小説の画期的傑作とされている「足跡」(明治43年)「黴」(明治44年)により、日本自然主義文学盛行の中で文壇的地位を確立した。<br>※11ページの**「蒼白い月」**は、徳田秋声が大正9年に発表した短編に描かれた芦屋の風景。まだ武庫郡精道村といったときで、秋声がこの村に住んでいた兄の養子・桂三郎という人を訪れたときのものといわれている。<br>◆**宇野浩二**…1891～1961年。小説家。福岡県に生まれ、大阪で育った。本名格次郎。育った大阪宗右衛門町の花柳界近辺への追憶をもちつづけた。1913年刊の処女作品集「清二郎　夢見る子」にはすでに宇野文学特有の夢と詩の合奏が見られる。翌年、永瀬義郎・鍋井克之らのはじめた美術劇場にも協力。19年には、終世の友広津和郎の紹介で「蔵の中」を『文章世界』に発表し、さらに「苦の世界」「子を貸し屋」などにより、大正文学の中心作家となる。<br>※昭和28年発行の「宇野浩二著作集(1)」の中の、**『枯れ木のある風景』**(小出楢重の作品名)の一文に、当時の芦屋風景が描かれている。<br>◆**小出楢重**…1887～1931年。大正～昭和初期の洋画家。また、随筆の名手としても知られる。大阪に生まれた小出は、大正15年(38歳)から芦屋(精道村平田/現・川西町)へ。亡くなる(昭和6年)までの5年間を芦屋で過ごし、独自の裸婦連作とともに、達見とユーモアに満ちた名随筆を残した。※そのアトリエは移築され、現在は芦屋市立美術博物館にある。<br>**【随筆集「めでたき風景」(昭和5年刊)ー『蘆屋風景』より抜粋】**<br>**蘆屋といふ処へ住んで2年になる。先づ気候は私達の如くほそぼそと生きているものにとっては先づ結構で申分は無い。そして非常に明るい事が、私達淋しがり屋の為に適当しているやうだ。〈中略〉南はすぐ海であり、北には六甲山が起伏し、その麓から海岸まではかなりの斜面をなしている。…その気候や地勢の趣きが南仏ニースの市を中心とした趣きにもよく似通っている様に思えてならない。…〈後略〉…** |
| その他の文学者 | | ◆**阪本　勝**…1899～1975年。兵庫県知事時代から朝日ケ丘町に居住。文人政治家として活躍し、戯曲「洛陽餓ゆ」や伝記「佐伯祐三」などを著した。<br>◆**星野天知**…1862～1950年。作家。慶応三年・江戸生まれ。明治期に「文学界」を主宰。大正12年の関東大震災後に姻戚の高浜虚子家とともに関西へ逃れ、次に昭和25年に没するまで大原町に住んだ。芦屋在住時の著書に、回想録「黙歩七十年」がある。<br>◆**丸尾長顕**…1901～1986年。昭和の演出家・作家。明治34年生まれ。宝塚歌劇団文芸部長、「婦人画報」編集長を歴任。昭和26年日劇ミュージックホールのプロデューサーとなりヌードショーを演出し、多くのダンサー(ジプシー・ローズら)やボードビリアン(トニー谷ら)を発掘した。作品には、後に芦屋に住む女性がすべて"有閑夫人"であるかのように揶揄されるきっかけとなった小説**「芦屋夫人」**(昭和9年)や、随筆「恋愛実務知識」などがある。<br>◆**児玉隆也**…1937～1975年。芦屋出身のジャーナリスト。昭和35年、光文社に入社し「女性自身」の編集に携わるが、45年退社。49年「文芸春秋」に「淋しき越山会の女王」を発表し、立花隆の「田中角栄研究」とともに、田中首相退陣の引き金となった。著作に「この三十年の日本人」など。 |

# 芦屋の人

元気になるメッセージ

## 私の好きな芦屋



芥川賞作家・小川　洋子

芦屋に引っ越ししてきて、一年半になります。その前は長く倉敷に住んでいました。

すぐ隣の県なのだからと、気楽な気持ちでやってきたのですが、目に入る風景のすべてが倉敷とは違っていて、驚きました。

まず、海の匂い。これは子どもの頃から私もずっと親しんできたものですが、そこに山の気配が色濃く溶けているのが新鮮でした。海と山とが離れがたく、一体となっているような感じです。またその感じが、街中どこにでも漂っていて、自然と心を落ち着かせてくれます。

もう一つは、芦屋川と宮川のこぢんまりとした風情です。私が知っている故郷の川、旭川と高梁川は水量が多く、土手が高く、岸の向こう側ははるか遠くです。けれど芦屋川と宮川は、岸のすぐそばを、せせらぎを聞きながら歩くことができます。石を伝って、向こう岸まで渡ることさえできます。芦屋に住み始めてからの一番の楽しみが、犬の散歩になりました。

最後に忘れてならないのは、やはり阪神タイガースでしょう。サンテレビで試合を見ていて、阪神が点を入れると、どこからともなく歓声が聞こえてきて、近所のマンションの窓辺に、メガホンのシルエットがぱぁーと映ります。打出の商店街を歩くと、そこでもあそこでも、お店の人とお客さんがタイガースについて何かしら語り合っています。私が最も幸福を感じる瞬間です。

●小川洋子（おがわ・ようこ）氏
昭和三十七年（一九六二）、岡山市生まれ。早稲田大学第一文学部文芸科卒業。
昭和六十三年（一九八八）、「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人賞を受賞。平成三年（一九九一）、「妊娠カレンダー」で第一〇四回芥川賞受賞。主な著書に、「完璧な病室」「シュガータイム」「アンネ・フランクの記憶」「沈黙博物館」「まぶた」等々。最新刊に、「博士の愛した数式」（新潮社）。
平成十三年（二〇〇一）より芦屋市在住。

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《現代文学に描かれた芦屋》

| 名　称　等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| 現代作家と<br>その作品に見る<br>芦　屋 | 昭和後半<br>～平成 | ◆村上春樹…1949年1月12日生まれ。小説家・アメリカ文学翻訳家。随筆・紀行文、ノンフィクションの著作もある。京都府京都市伏見区に生まれ、兵庫県西宮市・芦屋市に育つ。早稲田大学第一文学部映画演劇科卒業。ジャズ喫茶の経営を経て、1979年『風の歌を聴け』で群像新人文学賞受賞。当時のアメリカ文学から影響を受けた文体で都会生活を描いて注目を浴び、村上龍と共に時代を代表する作家となる。<br>1987年発表の『ノルウェイの森』は上下430万部を売るベストセラーとなる。これをきっかけに村上春樹ブームが起き、以後は国民的支持を集めている。その他の主な作品に『羊をめぐる冒険』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『1Q84』など。日本国外でも人気が高く、柴田元幸は村上を現代アメリカでも大きな影響力をもつ作家の一人と評している。2006年、特定の国民性に捉われない世界文学へ貢献した作家に贈られるフランツ・カフカ賞をアジア圏で初めて受賞し、以後ノーベル文学賞の有力候補と見なされている。デビュー以来、翻訳の活動も行っており、フィッツジェラルドの諸作品やレイモンド・カーヴァー全集のほか、多くの訳書がある。随筆・紀行文も多数。 |
| | | ◆小川洋子…1962年3月30日生まれ。小説家。岡山県岡山市出身。旧姓は本郷。祖父は金光教の教師であり、両親とも金光教の信者という家庭で育つ。生家も教会の敷地内にあった。岡山市立三勲小学校、岡山県立岡山朝日高等学校を経て、早稲田大学第一文学部文芸専修卒業。少女時代に世界児童文学を愛読。高校時代に『アンネの日記』を読み感銘を受ける。早稲田大学を卒業した1984年、倉敷市の川崎医大秘書室に就職。1986年、川崎製鉄のエンジニアの男性との結婚を機に退職し、小説の執筆に取り組むようになる。<br>1988年、「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞受賞し作家デビュー。1991年、妊娠した姉に対する、妹の静かな悪意を描いた「妊娠カレンダー」で芥川賞受賞。以降も無垢と残酷、生と死、慈しまれるものの消滅といったテーマを繊細な筆致で描いている。2004年、記憶が80分しかもたない数学博士と家政婦の母子との交流を描いた『博士の愛した数式』で読売文学賞、本屋大賞を受賞。映画化もされ話題となる。2005年には『薬指の標本』がフランスで映画化された。その他の作品に『ブラフマンの埋葬』(2004年泉鏡花文学賞)、『ミーナの行進』(2006年谷崎潤一郎賞)など。2007年7月より芥川賞選考委員に参加。2012年から、太宰治賞・読売文学賞の選考委員も務める。芦屋市在住(平成13-19年)。 |
| 芦屋・阪神間を<br>描いた<br>作家と作品 | 昭　和 | ◆北尾鐐之助「近畿百景」(昭和４年)<br>「関西に於ける最もハイカラな区域と云へば阪急の夙川から御影に至る沿線であって、〈中略〉金に不自由はないのだから、毛皮、手袋、ハンドバックの好み迄ソツのあろう筈はないのだけれども…」<br>「御影・岡本・芦屋川では、阪神間における、最もモダーンな色彩を乗せる。それは大概、ブルジョアの家族たちで、目の覚めるような振袖か、でなければ、スマートな洋装である」<br>「向うの低い松林道を、若い洋装の婦人が、すばらしいポインターを曳いて来る。淡紅色のスヱーター。空色のスカート。〈中略〉三人連れの若い女が口笛を吹いて通る。三人とも、断髪の、口紅の、スヱーターの、軽快な足どりで、ペーブメントを高い踵で叩いて行く。印度更紗のパラソル。燃ゆるようなダリアの帯、手に油絵具の箱をさげて、遠い夢みるやうな眼ざしの美しい少女…〈後略〉」<br>◆田辺聖子「幼き日の夢の国」(昭和30年)<br>「畳敷き文化圏とは、はるかに隔絶した、モダンなハイカラな、遠いヨーロッパの香り…〈後略〉」<br>◆遠藤周作「口笛をふく時」(昭和48-49年)<br>「『こんな家に住めて、犬を飼えたらなァ。』〈中略〉たしかにうすぎたない二人の中学生にはこの家は彼等の手の届かぬ幸福がすべてあるような気がした。〈中略〉まるでピアノを習う娘たちが幸福の象徴でもあるような声を出して…〈後略〉」<br><br>※平成９年に、兵庫県立近代美術館・西宮市大谷記念美術館・芦屋市立美術博物館・谷崎潤一郎記念館が同時開催した「阪神間モダニズム」展の図録に掲載されている、樋賀七代氏の「文学表現にみる『阪神間』、その光と影」から引用しました。また樋賀氏は、この一文の注釈に、下記のように記しています。<br>■たとえば、井上靖の「猟銃」や、山崎豊子の作品には、『阪神間』に住む独特の女性とその生き方が描かれ、その豊かさゆえに生活の目的を失ったり誤ったりした様子が描かれている。<br>■遠藤周作の文学作品の主題に西洋と東洋の比較、さらにはそこから生まれる『日本人の罪意識』の問題がある。それは一見、大阪人の物事をはっきりと白黒つけないというところと似通っていることは重要である。<br>■村上春樹がその文学作品の主題に『人間の関係性の問題』を取り上げたのも、宮本輝が近代合理主義の問題を取り上げたのも、『阪神間』を抜きにしては考えられないだろう。 |



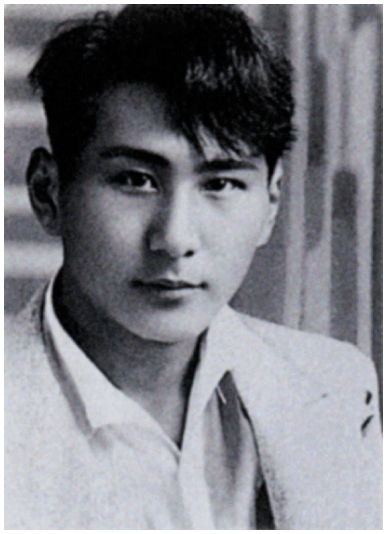
田中千代 1936 ～ 48（中山岩太 撮影）



「芦屋風景」1929 年／小出楢重（油彩・布）



アトリエ（川西町）前の楢重・1928 年



若き日の貴志康一



美術博物館前庭に移築された小出のアトリエ

小出楢重のアトリエ・内部▶





船出（神戸港）／1936 年・ハナヤ勘兵衛



セルフ・ポートレート 1930（中山岩太）



福助足袋 1930（中山岩太）



上海から来た女 1932（中山岩太）

# D 芦屋と文学・芸術・文化

《芦屋と芸術家たち》

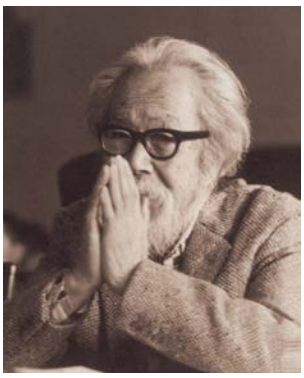
| ジャンル等 | 成立年代 | 内　容・解　説 |
|---|---|---|
| ファッション | | ◆**田中千代**…1906 ～ 1999 年。洋裁教育者・服飾デザイナー。明治 39 年生まれ。昭和 12 年田中千代衣服研究所創立。昭和22年、研究所を本山から芦屋へ移転。27 年から香淳皇后のデザイナーを務めた。民族衣装の研究・収集家としても知られる。編著「田中千代服飾事典」など著書多数。平成 11 年 6 月 28 日死去。92 歳。東京出身。 |
| 美　術　家 | | ◆**小出楢重**…1887 ～ 1931 年。大正～昭和初期の洋画家。38 歳大正 15 年(1926)から亡くなる(昭和６年)までの５年間を芦屋(精道村平田 / 現・川西町)で過ごし、独自の裸婦連作を残した。※そのアトリエは移築され、現在は芦屋市立美術博物館にある。<br>◆**林　重義**…1896 ～ 1944 年。大正- 昭和前期の洋画家。作品に「秋の山路」「舞妓」など。昭和３年「阪神婦人洋画研究所」・４年「アシヤ洋画研究所」開設。<br>◆**上山二郎**…1895 ～ 1945 年。大正- 昭和前期の洋画家・銅版画家。藤田嗣治や東郷青児などを吉原治良に紹介し、影響を与える。<br>◆**吉原治良**…1905 ～ 1972 年。日本の抽象画家、および実業家。吉原製油社長。大阪生まれだが、大正 14 年から芦屋へ。表現の独自性を求め続けたほか、若い画家たちと具体美術協会を立ち上げた。<br>◆**長谷川三郎**… 1906-1957 年。洋画家。小出楢重に洋画を学ぶ。幼少期から何度か芦屋に住み、日本における抽象絵画発展に大きな役割を果たした。私立甲南中学・高校内に、記念ギャラリーが開設されている。<br>◆**伊藤継郎**…1907 ～ 1994 年。洋画家。昭和３年から芦屋へ。小磯良平に勧められ、新制作派協会会員となる。昭和 47 年、芦屋市美術協会代表。<br>◆**村上華岳**…1888 ～ 1939 年。日本画家。大正 12 年から昭和２年まで芦屋に居住。 |
| 音　楽　家 | 大正～昭和初期<br>阪神間モダニズム時代の主役たち | ◆**貴志康一**…1888～1939年。大正９年、小学校５年生の時に芦屋市へ。14歳から、神戸の芦屋文化村で、ミハイル・ヴェクスラーに直接ヴァイオリンを師事。音楽理論と作曲法を当時、宝塚交響楽団の指揮を務めていたヨセフ・ラスカより学ぶ。16 歳の時に、大阪で、ヴァイオリニストとしてデビュー。旧制甲南高等学校を２年生の時に中退、ジュネーヴ音楽院に入学し、優秀な成績で修了。19 歳からは、ベルリン高等音楽学校でカール・フレッシュの教室に在籍、1929年(昭和４年)には1710年製のストラディヴァリウスを購入。三度のヨーロッパ留学の中でも、特に 1932～３年のベルリン滞在時に作曲家・指揮者として活躍。1935 年(昭和 10 年)、ドイツテレフンケン社に自作作品 19 曲を貴志自身の指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と録音。1935年(昭和10年)に帰国した後は指揮者などとして活躍するが、1936 年(昭和 11 年)に虫垂炎をこじらせ、翌年(昭和 12 年)11 月、腹膜炎により 28 歳で死去。<br>◆**ロシア人音楽家たち**…大正６年(1917)に勃発したロシア革命から、いち早く亡命した老ピアニストのアレクサンダー・ミハイロビッチ・ルーチンを中心に、多くの亡命音楽家たちが彼の住む芦屋文化村に集まった。その他、日本経由で米国に亡命したトルストイの娘アレクサンドラも、亡命前の半年間を芦屋海岸で過ごしている。 |
| 写　真　家 | | ◆**中山岩太**…1895～1949年。戦前の日本の新興写真を代表する写真家。ニューヨークで「ラカン・スタジオ」開設、1926 年に渡仏。マン・レイや未来派のエンリコ・プランポリーニらと知り合う。1927 年(昭和２年)に帰国後は芦屋に定住、ハナヤ勘兵衛らと芦屋カメラクラブを結成。<br>◆**ハナヤ勘兵衛**…1903 ～ 1991 年。写真家。本名・桑田和雄。大阪生まれ。写真を学び、芦屋で写真材料店を開く。1930 年に、芦屋カメラクラブに紅谷吉之助・高麗清治らとともに参加。その作品には、多重露光やフォトモンタージュを駆使したものが多く、強烈なモダニズムを感じさせる。 |
| コレクター | | ◆**山口吉郎兵衛**… 1883 ～ 1951 年。銀行家。滴翠と号し、人形・祥瑞・国焼・かるた・羽子板などを蒐集し、昭和８年、山芦屋町に建てた自邸(滴翠美術館)で研究に没頭した。<br>◆**山口謙四郎**… 1886 ～ 1957 年。銀行家。吉郎兵衛の実弟。大正から昭和初期にかけて、当時学術的にも解明されていなかった東洋の古美術に興味を示し、独自の鑑識眼と洞察力で、学術的視野に立ち中国の石仏や金属工芸品などを蒐集した。<br>◆**山本発次郎**…1887 ～ 1951 年。1894 年(明治 27 年)に、大阪でメリヤスの製造卸の「山発商店」を開く。白髪染めヘアカラー「パオン」で知られる山発産業の創業者として、また洋画家・佐伯祐三の絵画の蒐集家としても、その名を知られる。芦屋(山芦屋町)には、大正半ばから居住。 |




*To be continued in the Future.*

# E　顕彰すべき人物





















# E 顕彰すべき人物

《あ行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| 阿保親王（あぼしんのう） | 延暦 11 年(792) － 承和９年 10 月 22 日(842 年 12 月 1 日)。<br>市の東部、ＪＲと阪急にはさまれた住宅地(翠ケ丘町)に、古くから「親王さんの森」として市民に親しまれてきた阿保親王墓がある。<br>阿保親王は平城(へいぜい)天皇(774～824)の第一皇子で、桓武天皇(737～806)の孫にあたり、延暦11年(792)に誕生。弘仁元年(810)の藤原薬子の乱に連座して、大宰権帥として筑紫に左遷され、10余年後に許され、都に戻っています。このころ、仲平・行平・守平・業平の四子に、在原姓を賜わった。<br>  <br>阿保親王塚（翠ケ丘町）<br>親王は、上総太守・三品・治部卿・上野太守・宮内卿・弾正尹などを歴任し、承和９年(842)、上総太守兼弾正尹となったが、この年の10月22日に51歳で薨去した。<br>『続日本後紀』によれば、親王は文武両道に秀でた人でありながら、慎み深い人であったと記されているが、親王が芦屋で薨ぜられたことについては、正史には記載がない。<br>親王と芦屋の関係については、山口県文書館所蔵の毛利家文庫に「阿保親王御廟詮議」・「阿保親王事取集」・「阿保親王竹園伝記」等がある。また、親王の菩提寺と伝えられる打出町の阿保山親王寺にも、毛利家の記録が伝わっている。<br>毛利家文庫の「江氏家譜」によると、同家は阿保親王の嫡孫・大江朝臣音人の末裔になるため、親王を祖先と仰ぎ、祀り続けてきたことがわかる。<br>親王寺に伝来する「阿保親王寺縁起」一巻と、「曩祖阿保親王尊廟竹園之伝記」一巻は、ともに親王が、「承和九年摂津国菟原郡芦屋庄打出村において薨じ給う」と記している。また、これらの史料では、親王寺建立は「承和十一年甲子、親王のすませ給う地を改めて、寺院を建立し、阿保山親王寺と号す」と伝えている。<br>「阿保親王御廟詮議」によると、毛利家と親王家の関係は、前記した元禄４年の親王 850 年忌あたりから密度を増したものと考えられる。<br>しかし、阿保親王と芦屋の関係については、現在でもあまり知られていない。 |
| 在原　業平（ありわらの　なりひら） | 天長２年(825)～元慶４年５月 28 日 (880 年７月９日)。<br>平安時代初期の貴族・歌人。平城天皇の孫。贈一品・阿保親王の五男。<br>官位は従四位上・蔵人頭・右近衛権中将。六歌仙・三十六歌仙の一人。<br>父は平城天皇の第一皇子・阿保親王、母は桓武天皇の皇女・伊都内親王で、業平は父方をたどれば平城天皇の孫・桓武天皇の曾孫であり、母方をたどれば桓武天皇の孫にあたる。血筋からすれば非常に高貴な身分だが、薬子の変により皇統が嵯峨天皇の子孫へ移っていたこともあり、天長３年(826 年)、父・阿保親王の上表によって臣籍降下し、兄・行平らとともに在原氏を名乗る。<br>  <br>「業平画像」福田眉仙筆（美術博物館蔵）<br>福田眉仙（一八七五～一九六三）によって描かれた業平画像。昭和初期ころ・絹本著色。縦１２７・８cm×横５６・７cm掛軸。<br>別称の在五中将は在原氏の五男であったことによる。<br>全 125 段からなる『伊勢物語』は、在原業平の物語であると、古くからみなされてきた。<br>芦屋は在原業平ゆかりの地とされ、業平の父・御陵と称する親王塚があり、業平町・業平橋という地名もあります。このような芦屋と業平の関係は、すべて「伊勢物語」の第 87 段に発している。<br>  <br>「若鶴百人一首」（美術博物館蔵） |

# E 顕彰すべき人物

《あ行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| いくた　しゅんげつ<br>生田　春月<br>（詩　人） | 明治 25(1892) 年３月 12 日 ～昭和５ (1930) 年５月 19 日。詩人。ツルゲーネフ・ゲーテ・ハイネなどの名翻訳で有名なドイツ文学研究者。<br>「芦屋にて」の作品は、公光町に住んでいた大正８年から 13 年までの、朝日新聞社記者に書かれたもの。<br>昭和５年(1930 年)５月 19 日、大阪発- 別府行きの船菫丸に乗船中、瀬戸内海播磨灘で投身自殺。享年 38 歳。 |
| いけの　りょうのすけ<br>池野　良之助<br>（人間灯台） | 昭和 10 年 (1935) ～昭和 48 年 (1973) までの 38 年間にわたり、気象観測と山火事看視に従事し、「人間灯台」と呼ばれた。<br>昭和 48 年 (1973) ６月､「剣谷森林気象観測所」は閉鎖され、その後京都大学地震研究所となったが、平成３年 (1991)10 月に一部焼失した。<br>平成４年 (1992)11 月８日没 ( 享年 82 歳 )。<br>池野さんが観測所で使用されていた器具･日記・データ等は､芦屋市立美術博物館に保管されている。<br>  |
| いとう　ちょうべい<br>伊藤　長兵衛<br>（実業家）<br>と<br>仏教会館 | 明治元年 (1868 ) ～ 昭和 16 年 (1941)。実業家。滋賀県犬上郡河瀬村犬方の若林又右衛門の三男として生まれる。幼名は長次郎。16 歳で伊藤長兵衛商店に丁稚奉公に入る。22 歳で六代目伊藤長兵衛の養子となり、明治 25 年 (1892) に長兵衛の次女やすと結婚。翌年、七代目伊藤長兵衛を襲名。滋賀県内外への商売が結実し伊藤長兵衛商店は拡大、大正 10 年 (1921) には伊藤忠商店を合併して丸紅商店 ( 丸紅の前身 ) を設立し､初代社長に就任。<br>大正６年９月、芦屋浜に子女養育のため住居を置き、大正 12 年には精道村大字毛賀 885 へ転居。崇信会創設に着手し､昭和２年６月５日には芦屋仏教会館を落成させた。昭和５年には芦屋字芦原 ( 現船戸町 ) に転居したが健康がすぐれず､脳溢血のため半身不全麻痺と軽度の言語障害となり闘病生活を送った。<br>  |
| いとう　つぐろう<br>伊藤　継郎<br>（画　家） | 明治 40(1907)年～平成６(1994)年。画家。大阪生まれ。大正 12 年 (1923) 松原三五郎の天彩画塾に学び、翌年赤松麟作の洋画研究所に学ぶ。<br>昭和３ (1928) 年、芦屋に移る。<br>昭和５ (1930) 年、第 17 回二科展に初入選。昭和 12(1937) 年、二科会会友。<br>昭和 16(1941) 年、二科会を退会。第６回新制作展に出品。会員に推挙され、以後同会を中心に作品を発表。<br>昭和 23(1948) 年、芦屋市美術協会の創立に参加。<br>昭和 36(1961) 年～ 40(1965) 年、大阪芸術大学教授。<br>昭和 40(1965) 年～ 45(1970) 年、京都市立美術大学教授。<br>昭和 45(1970) 年～ 56(1981) 年、大手前女子短期大学教授。<br>昭和 44(1969) 年、第３回芦屋市民文化賞受賞。<br>平成２ (1990) 年、兵庫県文化賞を受賞する。 |
| いなはた　ていこ<br>稲畑　汀子<br>（俳　人）<br>  | 昭和６年(1931 ) １月８日～。俳人。芦屋市平田町在住。<br>父・高濱年尾と母・喜美の次女として、横浜市に生まれる。 小学校のころから、祖父･高濱虚子と父･年尾に俳句を学んだ。<br>小林聖心女子学院高校卒業を経て､同校英語専攻科在学中に病を得て中退。<br>以後俳句に専念し､祖父･父に同行し全国を廻る。<br>  <br>虚子記念文学館（平田町）<br>昭和 31(1956) 年、24 歳で稲畑順三と結婚、のち二男一女の母となる。<br>昭和 40(1965) 年、「ホトトギス」同人。<br>昭和 52(1977) 年、「ホトトギス」雑詠選者となる。<br>昭和 54(1979) 年、父・高濱年尾の死去により「ホトトギス」主宰を継承。<br>昭和 57(1982) 年より、朝日俳壇選者。<br>以後、世界各地を吟行し、諸外国との俳句親善に努める。<br>昭和 62(1987) 年、日本伝統俳句協会を設立し会長に就任。<br>平成６ (1994) 年～同８ (1996) 年、NHK 俳壇の講師・選者。<br>平成 12(2000) 年､「虚子記念文学館」を芦屋市平田町に開館､館長に就任。<br>同年より、朝日新聞俳壇選者。 |

# E 顕彰すべき人物

《あ行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| 宇野（うの）　浩二（こうじ）<br>（小説家）と<br>小出　楢重 | 明治 24(1891) 年７月 26 日～昭和 36(1961) 年９月 21 日。小説家。本名格次郎。福岡市生まれ。大正８ (1919) 年「蔵の中」でデビュー。<br>浩二は、友人・鍋井克之の紹介で画家・小出楢重との交際を始め、大阪の楢重の家を訪ねたり文通をしたりして、小説の挿絵も依頼した。<br>「枯木のある風景」は、その小出楢重をモデルとした小説である。<br>  <br>「枯木のある風景」1930 年 |
| 大橋　エレナ<br>（ファッション<br>デザイナー） | 明治 28(1895) 年～昭和 41(1966) 年。ブラジル生まれ。<br>画家・大橋了介 (1895 ～ 1943)とパリで出会い、昭和８ (1933) 年に結婚。その後、二人で日本へ帰国。<br>昭和 10(1935) 年、松坂屋大阪店への転勤に伴い、芦屋に居を定めた。専属デザイナーとして活躍する一方、自宅でピアノや洋裁を教え、家計を支えた。<br>昭和 18(1943) 年に了介が脳腫瘍で亡くなった後、彼の画集を自費出版、昭和 24(1949) 年に了介の作品を携えて、ブラジルへ帰国した。<br>「薔薇」1948 年<br>  |
| 大森（おおもり）　一樹（かずき）<br>（映画監督）<br>  | 昭和 27 年 (1952) ３月３日 生まれ。<br>映画監督・脚本家。株式会社ファーストウッド・エンタテインメント代表取締役。<br>大阪芸術大学芸術学部映像学科教授。<br>  <br>医師免許を持った珍しい映画監督。漫画少年でもあり、学生時代は真崎守の作品に影響を受ける。一方高校の時から映画監督を目指して自主映画を制作し、村上知彦と知り合う。大学在学中の昭和 48(1973) 年から、村上・西村隆らと映画自主上映グループ「グループ無国籍」を結成し、新開地の映画館で邦画のオールナイト上映企画を行った。大学時代に完成させた 16 ミリ映画『暗くなるまで待てない！』が、キネマ旬報ベスト 10 で 21 位に入るなど、高く評価される。<br>昭和 53(1978) 年、「城戸賞」受賞のシナリオを自ら監督した『オレンジロード急行』で商業映画デビュー。自身の体験を元に大学病院を舞台にした作品『ヒポクラテスたち』でブレイク。以降、村上春樹作品の映画化『風の歌を聴け』、斉藤由貴主演の三部作・平成ゴジラシリーズなど、作品を作り続けている。<br>芦屋市平田町在住。<br>  |
| 小川（おがわ）　洋子（ようこ）<br>（小説家）<br>  | 昭和 37(1962) 年３月 30 日生まれ 。岡山市出身。小説家。<br>昭和 63(1988) 年、「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞受賞し作家デビュー。平成３ (1991) 年、妊娠した姉に対する、妹の静かな悪意を描いた「妊娠カレンダー」で芥川賞受賞。以降も無垢と残酷、生と死、慈しまれるものの消滅といったテーマを繊細な筆致で描いている。<br>平成 16(2004) 年、記憶が 80 分しかもたない数学博士と家政婦の母子との交流を描いた『博士の愛した数式』で、読売文学賞、本屋大賞を受賞。映画化もされ話題となる。平成 17(2005) 年には、『薬指の標本』がフランスで映画化された。<br>その他の作品に『ブラフマンの埋葬』(2004 年泉鏡花文学賞)、芦屋を舞台とした『ミーナの行進』(2006 年谷崎潤一郎賞)など。<br>平成 19(2007) 年７月より芥川賞選考委員に参加。<br>平成 24(2012) 年から、太宰治賞・読売文学賞の選考委員も務める。<br>芦屋市在住(平成 14 ～ 19 年)後、西宮市苦楽園へ転居。<br>平成 19 年度芦屋市市民文化賞受賞。<br>  <br>◀芦屋を舞台とした「ミーナの行進」でミーナ達が住んだとされる邸宅のモデルとなった、山芦屋町の右近邸 |

# E 顕彰すべき人物

《か行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| かわひがし　へきごどう<br>**河東　碧梧桐**<br>（俳　人） | 明治６(1873)年２月 26 日～昭和 12( 1937)年２月１日。日本の俳人・随筆家。本名は秉五郎(へいごろう)。<br><br>明治 21(1888)年、伊予尋常中学(現在の愛媛県立松山東高校)に入学。明治 22(1889)年、帰郷した子規に野球を教わったことがきっかけで、同級生の高濱清(後の高浜虚子)を誘い、子規より俳句を学ぶ。<br>碧梧桐と虚子は「子規門下の双璧」と謳われたが、守旧派として伝統的な五七五調を擁護する虚子と激しく対立していた。<br>新傾向俳句からさらに進んだ、定型や季題にとらわれず、生活感情を自由に詠い込む自由律俳句誌『層雲』を主宰する荻原井泉水と行動を共にした。しかし、1915 年(大正４年)には井泉水と意見を異にし、層雲を去っている。碧梧桐はその年の３月、俳誌『海紅』を主宰。更にこれも中塚一碧楼に譲る。昭和初期に風間直得が漢語にフリガナ(ルビ)を振るルビ俳句を試作、これに賛同した碧梧桐もこれを作るようになる。<br><br>子規は、碧梧桐と虚子について、「虚子は熱き事火の如し、碧梧桐は冷やかなる事氷の如し」と評した。 |
| きし　こういち<br>**貴志　康一**<br>（音楽家）<br><br>  | 明治 42(1909) 年３月 31 日～ 昭和 12(1937) 年 11 月 17 日。<br>母の実家の仙洞御料屋敷西尾邸に生まれる。父方の祖父は代々式部卿を務め、後にメリヤス業で成功した裕福な大商家という環境で育つ。<br><br>小学校５年生の時に、芦屋に転居。14 歳から、神戸市の深江文化村でミハイル・ヴェクスラーに直接ヴァイオリンを師事。<br>音楽理論と作曲法を、当時、宝塚交響楽団の指揮を務めていたヨセフ・ラスカより学ぶ。<br>16 歳の時に、大阪で、ヴァイオリニストとしてデビュー。<br>旧制甲南高等学校を２年生の時に中退後、ジュネーヴ音楽院に入学し、優秀な成績で修了。19 歳、ベルリン高等音楽学校でカール・フレッシュの教室に在籍。<br>昭和４ (1929) 年、1710 年製のストラディヴァリウスを購入。３度のヨーロッパ留学の中でも、特に昭和７ (1932) 年～ 10(1935) 年のベルリン滞在時に作曲家・指揮者として活躍し、昭和 10(1935) 年３月、ドイツテレフンケン社に自作作品 19 曲を貴志自身の指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と録音した。1935 年に帰国した後は指揮者などとして活躍するが、1936 年に虫垂炎をこじらせ、昭和 12(1937) 年 11 月、腹膜炎の為、28 歳で死去した。<br>墓は、京都市右京区にある妙心寺徳雲院にある。<br><br>湯川秀樹のノーベル物理学賞受賞の後の晩餐会の時に彼の曲が流れたことは有名である。母校の甲南高等学校には貴志康一資料室があり彼の作品に触れることができる。甲南高等学校元教員日下徳一による『貴志康一　よみがえる夭折の天才』(音楽之友社、2001 年)、および毛利眞人による評伝「貴志康一　永遠の青年音楽家」(国書刊行会、2006 年)が出版され、また小松一彦らが貴志康一の曲を復活させ話題を呼んでいる。<br><br>生誕 100 周年の平成 21(2009) 年３月 31 日、「貴志康一生誕 100 年記念コンサート」が小松一彦指揮大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏でザ・シンフォニーホールで行われた。<br>ソプラノ坂本環、ソロ・ヴァイオリニストに小栗まち絵を迎え、歌曲「天の原」「かごかき」「赤いかんざし」「力車」、ヴァイオリン協奏曲、交響曲「仏陀」が演奏された。<br>また、芦屋ルナ・ホールでも、生誕 100 周年記念コンサートが開催された。<br><br>  <br>貴志邸洋館「子どもの家」（浜芦屋町・大正９年）<br>康一の父が建てたこの家は、平成７年の阪神・淡路大震災で全壊した。その後、洋館にはめ込まれていたステンドグラスが、芦屋市立美術博物館に寄贈されている。 |

# E 顕彰すべき人物

《か行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| こいで　ならしげ<br>小出　楢重<br>（画　家）<br>  <br>「芦屋風景」 昭和４(1929)年 | 明治 20 年 (1887)10 月 13 日 – 昭和６年 (1931) ２月 13 日。大正～昭和初期の洋画家。大正 15 年(1926)から 38 歳で亡くなる昭和６年(1931)までの５年間を、芦屋(精道村平田 / 現・川西町)で過ごし、独自の裸婦連作を残した。<br>また文学作品の挿絵や装丁も手がけており、谷崎潤一郎の『蓼（たで）喰ふ蟲』は、大阪毎日新聞に連載され、楢重が挿絵を描いている。さらに、昭和４年に改造社から単行本が出版される際には、装丁をしている。<br>多くの随筆集も出しているが、『めでたき風景』は代表作である。その中に次のように当時の芦屋の印象が描かれている。「芦屋という処へ住んで二年になる。先ず気候は私たちの如くほそぼそと生きているものにとっては先ず結構で申分はない。そして非常に明るい事が、私たちさびしがり屋のために適当しているようだ。(中略) その気候や地勢の趣きが南仏ニースの市を中心として、西はカーニュ、アンチーブ、キャンヌ東はモンテカルロといった風な感が深い」(岩波文庫)<br>大正 10 年 (1921) ～ 11 年 (1922) に渡欧。大正 12 年、二科会員に推挙される。<br>フランスからの帰国後、大正 12 年 (1924) には鍋井克之らと大阪に「信濃橋洋画研究所」を設立し、昭和前期の洋画界に新風を送り込み、若手の先駆者となる。<br>晩年に集中して描かれた裸婦像は、西洋絵画に見られる理想化された裸婦像とは一線を画した、本人による日本独自の裸婦表現を確立したものとして高く評価される。<br>平成３年、芦屋市立美術博物館の一隅に復元されたアトリエ(昭和４年築)には、小出楢重のアトリエが復元・保存されている。<br>  <br>昭和３年ー小出楢重のアトリエ（現・川西町） |
| こだま　たかお<br>児玉　隆男<br>（画家・歌人） | 明治 27(1894) 年～昭和 20(1945) 年。画家、歌人。筆名・多歌緒。<br>精道村時代の美しい芦屋風景やいきいきとした子どもたちの姿を描いた「海郷抄（かいごうしょう）」、また「水明行（すいめいこう）」・「山の彼方の幸福（しあわせ）」などの画帖を残した。その画帖は、大正６年に始まり、昭和 20 年７月に亡くなる直前までの 30 年に及ぶ 30 余冊。その内容は、東北・関東・地方を旅して記した村落の姿、また、六甲山を愛し、５万分の１地図に足跡を克明に記すとともに、絵と短歌と人生観を記した。<br>また、歌集「繊月（せんげつ）」（平成３年２月刊）は、生前児玉隆男氏自身が出版準備していたものを、娘の花岡秋子氏により後年上梓された。<br>  <br>精道村の田園風景（児玉隆男・画「水明行」大正８年） |
| こにし　けんぽ<br>小西　絹甫<br>（押絵家元） | 押絵の代表例によく使われる羽子板や、単純な図柄を小箱やしおりに施す“手すさび”では飽き足らなかったのが初代家元・小西絹甫（明治４年生まれ）。<br>明治 44 年にみやび流押絵を創流し、百歳の天寿を全うするまで、独自の技と創意で新しい感覚を吹き込み、画材を広げ、押絵を芸術の域まで高めた。<br>また、初代の娘で、みやび流押絵 家元２代目は、家元襲名後、芦屋・大阪・東京に４つの押絵教室を創設。<br>ＮＨＫテレビで２度の押絵講師を務め、新聞紙上でも指導。<br>昭和 53(1978) 年に教則本を出版するなど、初代が築いたみやび流の基礎を、大きく発展・拡大させた。<br>  <br>  <br>  |

# E 顕彰すべき人物

《さ行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| さいとう　いくた<br>**斎藤　幾太**<br>（打出の殿様）<br>  <br>打出焼 | 安政６（1859）年～昭和 13(1938) 年 10 月６日。享年 80 余歳。斎藤幾太の父・久原庄三郎（1840 ～ 1908）は山口県の酒造家で、幾太は３人兄弟の長男。次男田村市郎は神戸市天王谷に閑居し、三男久原房之助（1869 ～ 1965）は衆議院議員・逓信大臣・久原鉱業の社長。久原鉱業は、日立製作所の母体でもある。日立製作所は、1910 年に久原鉱業所日立鉱山付属の修理工場として発足した。<br>幾太は、元山口県令(初代)中野悟一の養子になり、中野家の旧姓の斎藤姓を名乗った。幾太の叔父･藤田伝三郎(1841 ～ 1912)は、井上馨の支援を得て大阪で藤田組を起した。藤田組は、西南戦争で大阪・広島・熊本の用達商人として、軍需品納入・軍夫の提供で巨利を得、後に大阪商法会議所会頭に就任し、大阪実業界の重鎮となった。<br>幾太は打出で悠々自適の生活を営んだ。毎朝、馬に乗って付近の散歩を楽しんだ。痩躯で上下に長いヒゲを蓄えた幾太は、威容自ら人を服せしむるものがあった。資性温厚陰徳を好み、博愛の情に富み、私財を投じて本村（精道村）の発展事業に尽くした功績はまことに大きい。<br>幾太は、村の不就学児童を集めて自宅に夜学校を開き、貧困者には毎月米を与えたので「打出の殿様」と呼ばれた。<br>★打出夜学校　明治 38 年、打出観音堂で夜学校を開いた。生徒が増加して施設が手狭になったため、明治 41 年、自邸の敷地に新たに学舎を建てた。対象は「打出村在住ノ青年ニシテ、小学　教育ヲ終ワリタルモノ」で、満 25 歳まで夜学校で勉強をさせた（『新修芦屋　市史』昭和 61 年）。<br>★「大楠公六百年大祭」記念事業　「精道村教化連合会」が「大楠公戦跡碑」を建立した。土地(130 坪)を提供したのは打出村の斎藤幾太である。<br>★芸術愛好家　幾太は俳句を好み「紫水庵砂明」と号した。京都の花ノ本聴秋宗匠を師とし、毎月、双葉会という句会を自邸で開き自ら撰者となった。<br>茶道にも造詣が深く、自邸で茶会を催した。古美術収集も半端ではない。<br>また陶芸にも興味を持ち、「お庭焼」として「打出焼」を創窯し、番頭坂口庄蔵（号・砂山）に制作させた。幾太が、打出焼で作った棺桶に入って生前葬を営んだエピソードも伝えられている（藤川祐作「打出焼の歴史」(『生活文化史』神戸深江生活文化資料館、2009.3.31 号)。 |
| さかもと　まさる<br>**阪本　勝**<br>（文人政治家） | 明治 32(1899) 年 10 月 15 日 ～昭和 50（1975）年３月 22 日。大正・昭和期の作家・政治家。衆議院議員・兵庫県知事などを務めた。<br>福島中学校教員・大阪毎日新聞記者などを務めたが、水平社運動との関わりなどで職を辞し、昭和２（1927）年に関西学院の講師となった。同年、賀川豊彦･河上丈太郎の勧めで、兵庫県議会議員選挙に日本労農党から出馬し当選。<br>県議会議員活動の傍ら社民系の政治団体「社会思想社」に属し、昭和２（1927）年に『洛陽飢ゆ』･昭和８（1933）年に『戯曲資本論』などを発表し、プロレタリア文学や唯物史観評論の分野で活躍した。<br>元兵庫県知事の湯沢三千男が内務大臣のもとで行われた昭和 17(1942) 年の第 21 回衆議院議員総選挙で、大政翼賛会の推薦を受け立候補して当選。<br>昭和 17(1942) 年、『新世界観の構想』を著し、次第にファシズム・浪漫主義への接近を見せた。<br>戦後、芦屋市西山町に住む詩人・吉沢独陽と『聖樹』を刊行。富田砕花らとの交流を深める。<br>一方、戦後は神戸市民生局長となるが、昭和 17(1946) 年に公職追放。追放解除後の昭和 26(1951) 年、日本社会党公認で尼崎市長選挙に出馬して当選。<br>昭和 29(1954) 年、兵庫県知事選挙に当選。知事在任中は、瀬戸内海沿岸地域に比べて発展が遅れていた内陸部や北部の振興に尽力した。<br>昭和 45(1970) 年、兵庫県立近代美術館設立にあたって初代館長に就任。<br>昭和 50（1975）年３月 22 日、芦屋市の自宅で死去。享年 75 歳。 |
| さんだや　ひらく<br>**三田谷　啓**<br>（社会事業功労者） | 明治 14(1881) 年９月１日～昭和 37(1962) 年５月 12 日。医師･社会事業功労者。<br>昭和２（1927）年､「三田谷治療教育院」を芦屋市楠町に創設し、精神薄弱児､病･虚弱児などを収容、相談に応じた。昭和４（1929）年､母子保護の知識をより広めるため､同院内に「日本母の会」設立。<br>昭和 10(1935) 年､恩賜財団母子愛育会理事となり、昭和 13(1938) 年には学齢期の障害児のために院内に学校法人翠ヶ丘小学校を付設する。<br>昭和 25(1950) 年､全日本社会事業大会で社会事業功労者として表彰される。<br>  <br>三田谷　啓（大正元年）<br>昭和 31(1956) 年､「少年の村」構想を実現させるために行政機関に働きかけ、翌年､院内に「農園学寮」を設ける。昭和 36(1961) 年､藍授褒章が授与される。 |

# E 顕彰すべき人物

《さ行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| さるまるたゆう<br>猿丸太夫<br>（歌　人） | 奈良時代後期か平安時代初期に生存したといわれる三十六歌仙の１人。生没年不明。「猿丸」は名、大夫とは五位以上の官位を得ている者の称。<br>百人一首（奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の 声聞くときぞ秋はかなしき）で知られた猿丸太夫は、芦屋に住んだと伝えられている。<br>芦屋には旧家の猿丸家があり、また芦屋神社社殿の裏庭に「伝猿丸太夫之の墓」といわれる石塔もある。<br>  |
| さるまる　やすとき<br>猿丸　安時<br>（芦屋村村長）<br>と　奥池 | 文政 11(1828) 年～明治 13(1880) 年。<br>阪急芦屋川の北にある開森橋の東詰に「猿丸安時頌徳碑」がある。昔から、芦屋地方の村々は日照りが続くと田畑の水不足に悩み、水争いが絶えなかった。芦屋村長であった猿丸又左衛門安時はこのような争いをやめさせるために、芦屋川の上流にある奥山にため池を造って、20 余年の苦心の末に「奥池」を造成した。碑はこれら安時の功績を顕彰するため、後年に建てられた。猿丸又左衛門安時は奥池を造っただけではなく、幕末から維新にかけて 18 カ村の総代庄屋をつとめ、幕府や県令からしばしば表彰されている。<br>安時の墓は、阪急芦屋川駅から東に約 100 ｍの沿線ぞいの猿丸家墓地にある。<br>  |
| しらすじろう<br>白洲　次郎<br>（官僚・実業家） | 明治 35(1902) 年２月 17 日～ 昭和 60(1985) 年 11 月 28 日。日本のオピニオンリーダー・官僚・実業家。終戦連絡中央事務局次長、経済安定本部次長、貿易庁長官、東北電力会長などを歴任した。<br>芦屋市（精道村）出身。精道小学校<br>連合国軍占領下の日本で吉田茂の側近として活躍し、終戦連絡中央事務局や経済安定本部の次長を経て、商務省の外局として新設された貿易庁の長官を務めた。吉田茂の側近として、連合国軍最高司令官総司令部と渡り合い、「従順ならざる唯一の日本人」などの評を得るに至る。吉田政権崩壊後は、実業家として東北電力の会長を務めるなど、多くの企業の役員を歴任した。<br>  |
| すがあつこ<br>須賀　敦子<br>（随筆家） | 昭和４（1929）年１月 19 日～平成 10（1998）年３月 20 日。芦屋市生まれ。随筆家・イタリア文学者。20 代後半から 30 代が終わるまでイタリアで過ごし、40 代は専業非常勤講師として過ごす。50 代以降、イタリア文学の翻訳者として脚光を浴び、50 代後半からは随筆家としても注目を浴びた。 |
| すがいくみ<br>菅井　汲<br>（画　家） | 大正８（1919）年３月 13 日～平成８（1996）年５月 14 日。洋画家・版画家。本名、貞三。神戸市生まれ。国際的に最も高く評価されている日本人画家の１人。<br>昭和８（1933）年には、国鉄芦屋駅近くに住み、京都の画学校に通い、後に大阪美術学校で学ぶ。昭和 12(1937) 年に卒業後、阪急電鉄宣伝課に就職。ポスター原画展等で数々の賞をとり、図案家として名を馳せる。<br>昭和 23(1948) 年、吉原治良の勧めで二科展に出品。落選が続いたが、昭和 26(1951)・27(1952) 年の「芦屋市展」で受賞。そんな中、パリへ行く機会を得た。 |
| すぎやまへいいち<br>杉山　平一<br>（詩　人）<br>  <br>詩の舞台となった「桜橋」（山芦屋町） | 大正３（1914）年 11 月２日～平成 24(2012) 年５月 19 日。詩人・映画批評家。<br>福島県生まれ。昭和初期、東芦屋町に在住。その後、宝塚市へ転居。<br>北野中学、松江高校を経て東京帝国大学美学美術史学科卒業。在学中三好達治に認められ『四季』に参加、同人となる。卒業後織田作之助らと『大阪文学』を創刊。<br>昭和 16(1941) 年、第２回中原中也賞。昭和 18(1943) 年、『夜学生』で文芸汎論詩集賞受賞。平成 15(2003) 年、『戦後関西詩壇回想』で小野十三郎賞特別賞受賞。<br>〔＊『夜学生』（第一藝文社）には、芦屋の桜橋などが詩の舞台となっている〕<br>平成 24(2012) 年、詩集『希望』で第 30 回現代詩人賞受賞。<br>その他、大阪府知事賞、大阪芸術賞、兵庫県文化賞などを受賞されている。<br>戦後は映画評論で活躍、『映画芸術』『映画評論』に多く寄稿。<br>昭和 41(1966) 年、帝塚山学院短期大学教授。昭和 51(1976) 年 10 月、大阪シナリオ学校 校長に就任。昭和 60(1985) 年、定年。帝塚山学院名誉教授のほか、四季派学会会長・現代詩人会会長を歴任した。<br>本市の富田砕花賞選考委員も、晩年まで長く務められた。 |

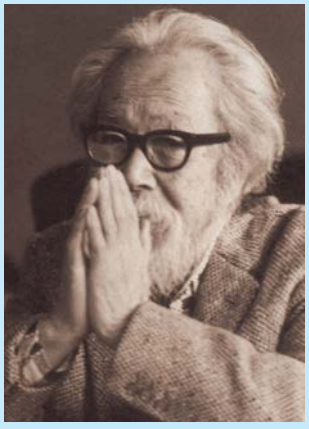
# E 顕彰すべき人物

《た行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| たかはま　きょし<br>**高濱　虚子**<br>（俳　人） | 明治７（1874）年２月 22 日～昭和 34（1959）年４月８日。俳人・小説家。<br>本名・清。虚子号は本名をもじって正岡子規によりつけられた。<br>明治 31（1898）年、『ホトトギス』を引き継いで東京で編集発行。明治 38 年からは夏目漱石の『吾輩は猫である』『坊つちやん』などの掲載で誌名を高め、自らも『俳諧師』『風流懺法』などを発表。多数の傑出した俳人を育てて、子規の抱いていた俳句の未来への疑問を吹き払い、庶民の詩・花鳥諷詠の詩として俳句を普及し繁栄させた。その人柄は洋行中も和服で通したこと、ファシズムも戦争も自然現象のごとく「何事も野分一過の心」で過ごしたこと、『ホトトギス』を家系相続とし家元化したことなどに顕著である。『進むべき俳句の道』『五百句』『句日記』『虚子俳話』『定本虚子全集』など著書多数。文化勲章受章。平成 12（2000）年４月、孫・稲畑汀子氏によって「虚子記念文学館」が、本市平田町に建てられた。 |
| たかはま　としお<br>**高濱　年尾**<br>（俳　人） | 明治 33（1900）12 月 16 日～昭和 54（1979）10 月 26 日。大正－昭和時代の俳人。<br>高浜虚子の長男で、稲畑汀子の父。正岡子規が命名親。<br>中学時代から父の手ほどきを受け、一時会社に勤めたのち俳句に専念。昭和 13 年から「俳諧」を主宰。昭和 26 年、父より「ホトトギス」を引き継ぐ。<br>大正 12（1923）年の関東大震災で被災し、姻戚の星野天知家とともに芦屋へ。昭和 10 年７月、精道村芦屋字徳塚に来住。昭和 18 年 12 月に月若町 27 に移転、昭和 20 年８月６日の空襲により全焼したが、再建し晩年までこの地に居住した。著作に「俳諧手引」、句集に「年尾句集」。<br><br>◆高浜虚子三代句碑（月若町・月若公園内）　…芦屋観光協会（昭和 24 年創立）創立 30 周年記念事業として昭和 54 年に立案され、翌 55 年同地に建てられた。<br>月若公園に芦屋川の春を読んだホトトギスの親子三代句碑がある。碑には、<br>「咲きみちてこぼるゝ花も無かりけり」（虚子）<br>「六甲の端山に遊び春隣」（年尾）<br>「目に慣れし花の明るさつづきをり」（稲畑汀子）<br>の句が刻まれている。<br>  |
| たなか　ちよ<br>**田中　千代**<br>（ファッション・デザイナー） |  <br>昭和 22（1947）年<br>田中千代服飾専門学校（大原町）<br>明治 39（1906）年８月９日～平成 11（1999）年６月 28 日。日本のファッション・デザイナーの草分け。田中千代学園の創立者として、服飾界に大きな影響を与えてきた。デザイナーとして斬新なファッションを創造するかたわら、教育者としても洋裁研究に力を注いだ。戦後は、いち早くファッション・ショーを開き、また昭和 22 年には芦屋に研究所を移し、学校法人田中千代学園として、日本の洋裁技能教育に、大きく貢献した。その一方、民族衣装の研究・収集や「服飾事典」の編集等に積極的に取り組み、その活躍は多くの人々を魅了した。 |
| たにざき　じゅんいちろう<br>**谷崎　潤一郎**<br>（小説家）<br>  | 明治 19（1886）年７月 24 日～ 昭和 40（1965）年７月 30 日。東京生まれ。作家。<br>市内宮川町には昭和９年（1934）から約２年間、富田砕花旧居に居住。<br>その間、「現代語訳　源氏物語」などを執筆。「細雪碑」が開森橋東詰に、谷崎潤一郎記念館が伊勢町文化ゾーンにある。<br>明治末期から第二次世界大戦後の昭和中期まで、戦中・戦後の一時期を除き、終生旺盛な執筆活動を続け、国内外でその作品の芸術性が高い評価を得た。現在においても近代日本文学を代表する小説家の一人として、評価は非常に高い。<br>関東大震災の後、谷崎は関西に移住し、次々と佳品を生みだした。長編『痴人の愛』では妖婦ナオミに翻弄される男の悲喜劇を描いて大きな反響を呼ぶ。続けて『卍』、『蓼喰ふ虫』、『春琴抄』、『武州公秘話』などを発表し、大正以来のモダニズムと中世的な日本の伝統美を両端として文学活動を続けていく。<br>この間、佐藤春夫との「細君譲渡事件」や２度目の結婚・離婚を経て、昭和 10（1935）年に森田松子と３度目の結婚をし、私生活も充実する。<br>戦争中、谷崎は松子夫人とその妹たち四姉妹との生活を題材にした、大作『細雪』に取り組み、軍部による発行差し止めに遭いつつも執筆を続け、戦後その全編を発表する（毎日出版文化賞、朝日文化賞受賞）。<br>戦後は高血圧症が悪化し、『源氏物語』の現代語訳も中断を強いられた。<br>しかし、『過酸化マンガン水の夢』（1955 年）を皮切りに、『鍵』、『瘋癲老人日記』（毎日芸術賞）といった傑作を発表。<br>1960 年代以降はノーベル文学賞の候補、また 1964 年（昭和 39 年）には日本人で初めて全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員にも選出された。 |

# E 顕彰すべき人物

《た行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| 徳田（とくだ）　秋声（しゅうせい）<br>（小説家） | 明治４（1872）年２月１日～昭和 18（1943）年 11 月 18 日。金沢市生まれ。<br>自然主義文学の小説家。本名は末雄。<br>代表作に『新世帯』『黴（かび）』『あらくれ』『縮図』など。<br>明治 28 年ごろ尾崎紅葉の門下に入り創作を志した。明治 33 年には読売新聞に入社。秋声は、大正９（1920）年５月 12 日、大阪時事新報社の懸賞小説授賞式に講演のため下阪。帰途、精道村に住んでいた兄の養子・桂三郎夫妻を訪れた。<br>  <br>大正時代初期の芦屋川<br>短編『蒼白い月』（大正９年発表）には、その時の芦屋風景が描かれている。<br>近代文学に芦屋が最初に紹介された作品であり、当時の芦屋川の風景がよく描かれている。<br>「そこは大阪と神戸とのあひだにある美しい海岸の別荘地で、白砂青松と言った明るい新開の別荘地であった。（中略）街路は整頓され、洋風の建築は起こされ、郊外は四方に発展して、到るところの山裾と海辺に、瀟洒な別荘や住宅が新緑の木立のなかに見出された。（中略）<br>私たちは河原ぞひの道路を歩いていた。河原も道路も蒼白い月影を浴びて、真白に輝いていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路の傍には松の生茂った崖が際限もなく続いていた。そしてその裾に深い叢（くさむら）があった。月見草がさいていた。」<br>（講談社『日本現代文学全集 28』） |
| 富田（とみた）　砕花（さいか）<br>（詩人・歌人）<br>  | 明治 23（1890）年 11 月 15 日～昭和 59（1984）年 10 月 17 日。<br>詩人・歌人。兵庫県文化の父。岩手県盛岡市生まれ。本名・戒治郎。<br><br>盛岡市に生まれた砕花（本名・戒治郎）は、12 歳で上京、18 歳には与謝野鉄幹・晶子の「新詩社」に入り、同郷の石川啄木と歌会に出席。『明星』や若山牧水の歌誌『創作』などに短歌を発表。大正元（1912）年、第１歌集「悲しき愛」を出版。<br>翌大正２（1913）年に病いを得、知人を頼って病気療養のために芦屋へ。<br>大正４（1915）年、最初の詩集『末日頌』を上梓、大正詩壇における民衆詩派の詩人として活躍した。<br>大正９（1920）年、田島マチと結婚。茶屋之町・公光町・宮川町へと居を移しながらも、大正 10（1921）年から昭和 59（1984）年に亡くなるまでの 70 余年、芦屋に住み続けた。芦屋定住後、大正・昭和にかけて多くの著作を残した。<br>戦前の全国中等学校野球大会や日本体操大会の行進歌や大会歌を作詞したほか、ホイットマンやエドワード・カーペンターを日本に紹介。<br>戦後は、県下をくまなく旅し、『歌風土記兵庫県』や『兵庫讃歌』を出版。また宮川・岩園小学校や精道中学校ほか多くの校歌や社歌等を作詞し、広く兵庫の風土と人を愛し、“兵庫県文化の父”と呼ばれた。<br>昭和 23（1948）年には、第１回兵庫県文化賞を受賞。<br><br>現在の旧居は戦災で一部を残し焼失し、戦後再建された建物だが、谷崎が昭和９（1934）年３月から同 11（1936）年 11 月まで住んだころの面影も一部残し、またその後昭和 13（1938）年から砕花が住んだという文学にゆかりの深い家。<br>砕花氏没後、ご遺族から建物や蔵書一式のご寄贈を受け、昭和 62（1987）年からは「富田砕花旧居」として一般公開している。<br>  <br>●富田砕家旧居（宮川町 4-12）<br>谷崎が住んだころにもあった春日燈篭は、今も庭の一隅に残されている。<br>  <br>●富田砕花旧居〈内部〉<br>毎週水・日曜日／午前10時～午後4時<br>母屋・庭園・門屋（展示室）を公開 |

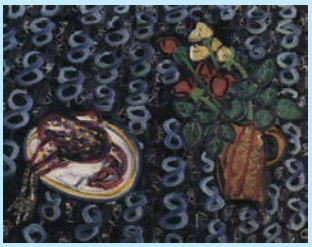
# E 顕彰すべき人物

《な行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| なかやま　いわた<br>**中山　岩太**<br>（写真家） | 明治 31（1895）年８月３日 ～昭和 24（1949）年１月 20 日。福岡県柳川市出身。戦前の日本の新興写真を代表する写真家の１人。<br>大正７（1918）年に東京美術学校臨時写真科を卒業（第１期生）すると、農商務省の派遣で、アメリカのカリフォルニア大学で学ぶ。その後、ニューヨークの菊地東陽スタジオで働いたり、「ラカン・スタジオ」を開設したのち、昭和元（1926）年渡仏。マン・レイや未来派のエンリコ・プランポリーニと知り合う。<br>昭和２（1927）年に日本に帰国した後は、芦屋市前田町に建てたスタジオを拠点に、ハナヤ勘兵衛ら地元の写真愛好家を集め「芦屋カメラクラブ」を結成、欧米での経験を生かして活躍した。<br>昭和７（1932）年には、野島康三・木村伊兵衛と雑誌『光画』を創刊。<br>日本の戦前において、海外の同時代の写真を自分の身をもって体験した数少ない写真家の１人。<br>  <br>福助足袋（1930 年）<br>  <br>セルフ・ポートレート（1930 年）<br>  <br>上海から来た女（1932 年） |
| なかがわ　かずまさ<br>**中川　一政**<br>（画家・歌人） | 明治 26（1893）年２月 14 日～ 平成３（1991）年２月５日。東京都生まれの洋画家・美術家・歌人・随筆家。洋画、水墨画、版画、陶芸、詩作、和歌、随筆、書と多彩な作品を制作した。全てが独学であり自ら「在野派」と称した。洒脱な文章でも知られた。97 歳と長命であったが、晩年まで創作活動を続けた。視力が衰えたため、家政婦に絵の具の色の名を大きく書かせて描く時に見分けたという。バラを題材にした作品は判明しているだけで 800 点を超える。<br>また、阪神間の雰囲気を最も早く吸収したのは、画家・中川一政であろう。<br>彼の回想録には、<br>「大正三年、私は摂津の芦屋にいた。裸で浜へ行ける距離のところに斎田という家があり、詩人の富田砕花が家族のようにしており、私を呼んでくれた。<br>（中略）当時の芦屋は、松林の中に流れひなびていたが、肉屋がアメリカ帰りであったり、ミッションスクールがあったり、どこかハイカラなところがあった」<br>と記しており、その当時、深江の酒蔵を描いたのが、中川の画家としての第一歩であった。 |
| ながやま　れいざぶろう<br>**長山　禮三郎**<br>（能楽師） | 昭和 18（1943）年１月 25 日、東京新宿区生まれ。観世流能楽師。祖父・父・伯父とも能楽師シテ方。昭和 30 年、12 歳で先代観世喜之師の内弟子入門。12 年間修業後独立。以後、故八世観世銕之亟師に 31 年間芸事指導を受け、今日に至る。<br>昭和 49 年から毎秋「能・狂言鑑賞の会」（自主公演）を能楽堂で主宰。<br>昭和 51 年「世阿弥座」を組み、ヨーロッパ５カ国での公演に参加。<br>昭和 61 年、重要無形文化財（指定）保持者に認定される。<br>昭和 57 年・平成３年・同７年と、３度「大阪文化祭本賞」を受賞。<br>平成 17 年「芦屋市民文化賞」受賞。<br>東西の舞台活動と素人会員の指導にあたり、現在に至る。三条南町在住。 |
| にわ　あきこ<br>**丹羽　安喜子**<br>（歌　人）<br>**と**<br>**与謝野 晶子** | 明治 25（1892）年～昭和 35（1960）年。三重県津市生まれ。歌人。<br>大正８（1919）年以来、与謝野晶子の愛弟子で、近代短歌の東京新詩社の社友となり、雑誌『明星』の編集委員もつとめた。<br>昭和 11（1936）年に『芦屋より』を出版し、昭和 15（1940）年には自ら「芦屋短歌会」を主宰すると同時に、明治・大正・昭和初期に出版された近代短歌集のほとんどを、初版の形で蒐集した。<br>その中でも晶子の短歌集の初版を含む多くのコレクションはとりわけ貴重なものである。このコレクションは、安喜子の夫で関西学院の財務部長・理事を務め、自らも歌人であった丹羽俊彦氏から、関西学院に寄贈された。<br>与謝野晶子（1878 ～ 1943）は、昭和８年７月に丹羽安喜子宅（現・松浜町）を訪れ、大阪湾を隔てた故郷・堺の灯を眺めて望郷の歌を詠んだ。<br>ふるさとの和泉に暗き雲ありて　芦屋に見るは紀の国の山<br>ふるさとの貧しき灯あり明滅す　夜の海のはての最も遠く |

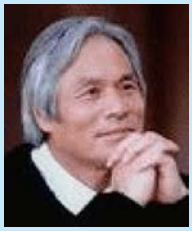
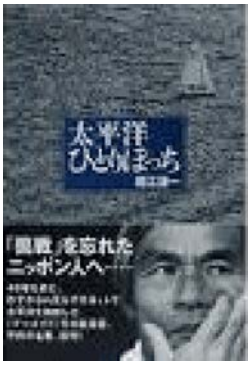
# E 顕彰すべき人物

《は行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| 長谷川（はせがわ）　三郎（さぶろう）<br>（画　家）<br>  <br>「無題　青の静物」1934 年 | 明治 39(1906) 年９月６日～昭和 32(1957) 年３月 11 日。日本の洋画家。<br>下関に生まれ、明治 43(1910) 年に一家で神戸へ転居。大正７（1918）年には精道村（現・芦屋市呉川町）に転居、青春時代を阪神で過ごす。<br>旧制甲南高等学校(現甲南大学)を経て、東京帝国大学美学美術史科卒。数々の作品を残した現代抽象絵画の先駆者。<br>昭和 25(1950) 年にイサム･ノグチを日本に紹介。この頃から、東洋の精神と西洋の芸術の融合について取り組み始め、拓本・木版・水墨の制作に専念。昭和 29(1954) 年、日米抽象美術展の代表として渡米し、翌年一時帰国。<br>サンフランシスコ美術大学客員教授として再渡米し、同地の東洋文化研究所内に住み東洋の精神を広め、サンフランシスコ・オークランド・ニューヨーク各地で個展等を開催、制作活動も意欲的に行なう。<br>昭和 32(1957) 年、サンフランシスコで客死。<br>現在、甲南学園（芦屋市朝日ケ丘町）「長谷川三郎記念ギャラリー」には、平面タブロー・素描・立体作品ほか、貴重な資料等が多く所蔵されている。 |
| ハナヤ 勘兵衛（かんべえ）<br>（写真家） | 明治 36(1903) 年１月 12 日 ～平成３（1991）年５月 15 日。写真家。本名は桑田和雄。大阪生まれ。<br><br>昭和３（1929）年、芦屋市前田町に写真材料店開く。<br>昭和４（1930）年に、中山岩太が中心となり結成された「芦屋カメラクラブ」に紅谷吉之助･高麗清治らと参加。<br>その作品には、多重露光やフォトモンタージュを駆使したものが多く、強烈なモダニズムを感じさせる。雑誌「光画」にも、その作品が掲載された。また、戦後も活動を続け後進を多く育てた。<br><br>写真材料店「ハナヤ勘兵衛」は、現在も第四代目がその多くの業績を継承している。<br>  <br>「何デェ」 1937 年 |
| 早野（はやの）　臺氣（だいき）<br>（歌　人） | 明治 31(1889) 年～昭和 49(1974) 年１月 10 日。歌人（タンキスト）。大阪船場生まれ。本名･二郎。戦前の『日本歌人』（昭和９年創刊）を中心とした前川佐美雄・石川信夫・斎藤史・筏井嘉一・加藤克己などの新風･ポエジー運動の中で、異彩を放っていた歌人。※『日本歌人』創刊に参画した昭和９年は、二郎 37 歳。<br>明治 41(1908) 年、19 歳のころから精道村（現･芦屋市浜芦屋町）に住み続け、藤村叡運という高僧のもとに和歌(旧派の歌)を学ぶ。叡運死去の後、尾上柴舟が紅葉会として歌会を引き継ぎ、その幹事をつとめた。<br>大正 11 年、佐々木信綱主宰の『心の華』に入会。このころから西欧の表現派･ダダイズム･シュルレアリスムといった新しい 20 世紀芸術の潮流に感応し、昭和５年には『帚木』も発表の場に加え、「自然発生的な短歌を克服した純粋短歌」を唱えて旺盛な創作活動を展開した。<br>戦後は臺氣と号し、尾崎孝子編集の『新日光』と同人誌『未名』などを発表の場にして、具体美術協会の吉原治良たちとの親交の中で、「オヴジェタンカ」を志向。<br>前衛精神を枯渇させることなく、前人未踏の表現世界を独りで模索し続けたアヴァンギャルド。<br>昭和 49 年１月 10 日未明、急逝。享年 77 歳。<br>  |
| 原（はら）　笙子（しょうこ）<br>（女人舞楽） | 昭和８（1933）年３月 14 日 ～平成 17（2005）年 10 月７日。舞楽家。原笙子はペンネーム。ロシア語の「ハラショー（Хорошо）」から。<br>昭和 32(1957) 年、日本で唯一の女人舞楽を担う「京都舞楽会」を立ち上げ、男性中心の舞楽界に新風を吹き込んだ。<br>昭和 53(1978) 年、家出を繰り返した波乱の少女時代をつづった『不良少女とよばれて』を出版。ベストセラーになりテレビドラマ化された。<br><br>昭和 60(1985) 年、芦屋で女人舞楽の会「原笙会」を設立。日本はもとより世界各国にて公演活動を行う。<br>平成 17(2005) 年 10 月７日、急性骨髄性白血病のため死去。享年 72 歳。<br>  |

# E 顕彰すべき人物

《は行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| ひろせ　かつよ<br>**廣瀬　勝代**<br>（社会事業功労者）<br>  <br>芦屋ユネスコ会館（奥池）<br>昭和 39(1964)年～昭和 59(1984) 年 | 明治 28(1895) 年２月 15 日～昭和 59(1984) 年３月３日。<br>日本ユネスコ協会の創立や芦屋ユネスコ会館設立に尽力。<br>「父の日」や、国鉄芦屋駅（現ＪＲ）に快速を停める運動に尽力をされたことは言うに及ばず、芦屋文化の貢献に尽くした。<br>芦屋市婦人会長・兵庫県連合婦人会長・日本赤十字奉仕団長・芦屋ユネスコ協会会長などを歴任。<br>  <br>昭和 40(1965) 年、東京三越「手工芸展覧会」会場に美智子妃殿下（現・皇后）をお迎えし、ご案内する廣瀬勝代氏<br>**◎廣瀬勝代と「芦屋ユネスコ協会」**<br>昭和 20(1945) 年、国連にユネスコが創設された当時、アメリカ在住の元ＩＣＵ総長の湯浅八郎氏が日本にもユネスコ精神の必要性を感じ、翌年帰国後、芦屋の廣瀬勝代を訪問し、ユネスコ協力団体設立を要請した。<br>婦人会・日赤奉仕団の活動の中でその趣旨を生かすべく、仙台の従姉妹・氏家愛子氏に湯浅氏の意向を伝え、世界初の民間ユネスコ協力団体を仙台に誕生させた。<br>その後「芦屋ユネスコ協会」を昭和 22(1947)年８月１日に発足させ、また昭和 39(1964) 年 東京オリンピックのときに「芦屋ユネスコ会館」をオープンさせた。 |
| ふくだ　びせん<br>**福田　眉仙**<br>（日本画家） |  <br>「業平画像」福田眉仙筆<br>明治８(1875)年９月５日～ 昭和 38(1963)10 月 28 日。<br>新南画を拓いた画家。兵庫県矢野町瓜生(現在の相生市)に生まれる。<br>京都の久保田米僊、ついで東京美術学校で橋本雅邦に画技を学ぶ。特に、その校長・岡倉天心には人格的に深い影響を受けた。<br>明治 31(1898)年、天心・雅邦が日本美術院を創設すると、横山大観・下村観山・菱田春草らとこれに参加。明治 42 年(1909)年、師天心から託された南画復興を叶えるため、日露戦争後の中国大陸を約３年にわたってスケッチ旅行をし、峨眉山の壮観さに感銘を受け、号を眉仙とした。<br>大正６(1917)年、西宮市苦楽園（出入口は芦屋市六麓荘町）に居を移し、長虹画窟を構えた。昭和 38(1963)年、88 歳で死去。<br>眉仙の画風は、南画(文人画)を基調とするものであるが、根底を支えるのは写実主義である。画題・画意によってもっともふさわしい画風を駆使し、「新南画風」とでもいうべき眉仙独自の画境を拓き、日本美術史に独自の足跡をとどめている。 |
| ほりえ　けんいち<br>**堀江　謙一**<br>（冒険家）<br>  | 昭和 13(1938)年９月８日生まれ。海洋冒険家。<br>昭和 37 年に単独無寄港太平洋横断に成功。その後、西回りや縦回り単独無寄港世界一周など数々の偉業を成し遂げる。また平成 17 年には 66 歳で東回り単独無寄港世界一周を達成、世界で２人目の東西両回りでの単独無寄港世界一周という快挙を達成。<br>これらの偉業は、国内にとどまらず世界の青少年に夢と感動を与え、海洋スポーツ普及に大きく貢献。<br>平成 17 年「芦屋市民文化賞」受賞。<br>高浜町在住。<br>平成 19(2008)年、「植村直己冒険賞特別賞」受賞。<br>著書多数あり。<br>  <br>「植村直己冒険賞特別賞」受賞会見<br>  <br>『太平洋ひとりぼっち』<br>（文藝春秋 /1962 年） |

# E 顕彰すべき人物

《は行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| 藤木（ふじき）　九三（くぞう）<br>（登山家）<br>と<br>ロック･ガーデン | 明治 20(1887) 年９月 30 日 ～ 昭和 45(1970) 年 12 月 11 日。<br>日本の登山家、ロック・クライミング・クラブ（ＲＣＣ）の創設者。京都府福知山市生まれ。<br>明治 42(1909) 年に東京毎日新聞社に入社。同年、やまと新聞に移籍、大正４（1915）年には朝日新聞社へ。翌（1916）年、特派員として、東久邇宮の槍ヶ岳登山に随行。大正８（1919）年、朝日新聞社神戸支局長。同年から西宮市甲子園に住み、六甲山の岩場をロック･ガーデンと命名する。<br>昭和３（1928）年には、日本初のロック・クライミングを目的とした山岳会であるＲＣＣ同人を、水野祥太郎や西岡一雄とともに発足させる。<br>昭和４（1929）年、やはり日本初の岩登りの理論書である『岩登り術』を刊行するとともに、８月には、案内人の松井憲三とともに、北穂高岳滝谷の初登攀に成功した。<br>昭和５（1930）年５月、日本を離れ、パリに滞在。６月から９月の間に、モンブラン・マッターホルンなどの岩場を登攀した。<br><br>昭和７（1932）年に、樺太の突岨山を登攀した。昭和 10(1935) 年、京都大学山岳部の白頭山への冬季遠征に記者として参加。昭和 11(1936) 年には、１月に石鎚山の冬季初登を成し遂げた。<br>昭和 34(1959) 年、日本山岳会顧問。第２次ＲＣＣの創設時には、奥山章に請われて顧問に就任した。<br><br>富田砕花とは、終生、家族ぐるみでの付き合いがあった。<br>  <br>藤木九三レリーフ（ロックガーデン登山口･高座の滝の横） |
| 星野（ほしの）　天知（てんち）<br>（文学者） |  <br>文久２年１月 10 日(1862 年２月８日)～昭和 25 年(1950 年)９月 17 日。<br>明治期の作家･教育家･武道家、のち書道家。<br>「文学界」を主宰し、天為･暗光･破蓮などの筆名も使った。<br>廃刊後は文学から遠ざかり、書道に精進した。<br><br>大正 12(1923) 年の関東大震災で、笹目ヶ谷の家を失い、姻戚の高浜虚子家と共に西下して、長女の婚家を頼った。<br>次いで、芦屋市大原町に自宅を構え、そこで書道の教授を続けた。<br>昭和 13(1938) 年、回想録『黙歩七十年』を刊行した。<br>昭和 23(1948) 年、カトリックの洗礼を受け、昭和 25(1950) 年に老衰のため自宅で没した。享年 88 歳。<br>  <br>明治 26 年１月から明治 31 年１月までに 58 冊発行。明治期のロマン主義の月刊文芸雑誌。北村透谷、島崎藤村、樋口一葉、上田敏、田山花袋らが書いた。 |
| 細川（ほそかわ）　道草（どうそう）<br>（郷土史家） | 明治 30(1897) 年～※没年不明。香川県出身。本名は久吉。業平町に住んだ。<br>昭和 24 年８月に芦屋市立図書館に勤務の後、郷土資料の収集を始める。昭和 32(1957) 年、『芦屋史談会』を創設し、昭和 25 年８月から『広報あしや』に“芦屋郷土誌”を連載、昭和 38(1963) 年に「芦屋郷土誌」（芦屋史談会刊）発行。<br>※芦屋史談会　昭和 32(1957) 年６月８日 創立。以後、芦屋市立図書館で、「土曜話の集い」を不定期に開催した。<br>  <br>旧芦屋市立図書館（現在･図書館打出分室） |

# E 顕彰すべき人物

《ま行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| むらやま<br>村山　リウ<br>（評論家） | 明治 36(1903) 年４月１日 ～ 平成６ (1994) 年６月 17 日。<br>日本の評論家。香川県仲多度郡琴平町生まれ。<br>大正 10(1921) 年、日本女子大学校国文科卒。昭和５ (1930) 年、岡山医科大学勤務の医師と結婚、新聞などで人生相談を行い女流評論家として活動。<br>戦争で大阪の家を焼かれ、戦後、『源氏物語』の研究を始めてその解き語りを関西を中心に始め、「村山源氏」として知られた。<br>昭和 34(1959) 年には、テレビでその現代語訳の朗読を行った。<br>「源氏物語」を現代の女性の生き方と対比して軽妙にかたり「村山源氏」と評判になった。大阪ユネスコ協会副会長・大阪市選挙管理委員長などを歴任。<br>著作に「私の源氏物語」「わたしの中の女の歴史」など。<br>大阪を拠点として活動していたが、終の棲家として芦屋市山手町のグランドハイツ建設後すぐに夫婦で移り住んだ。<br>昭和 53(1978) 年、芦屋市民文化賞受賞。 |
| むらかみ　はるき<br>村上　春樹<br>（小説家） | 昭和 24(1949)年 1 月 12 日 、京都市伏見区に生まれ。西宮市・芦屋市に育つ。日本の小説家、アメリカ文学翻訳家。随筆・紀行文、ノンフィクションの著作もある。<br>昭和 54(1979)年『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞しデビュー。当時のアメリカ文学から影響を受けた文体で都会生活を描いて注目を浴び、村上龍と共に時代を代表する作家と目される。<br>昭和 62(1987)年発表『ノルウェイの森』は 430 万部を売るベストセラーとなる。これをきっかけに村上春樹ブームが起き、以後は国民的支持を集めている。その他の主な作品に『羊をめぐる冒険』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『1Q84』など。<br>日本国内外でも人気が高く、柴田元幸は村上を現代アメリカでも大きな影響力をもつ作家の一人と評している。平成 18(2006)年、特定の国民性に捉われない世界文学へ貢献した作家に贈られるフランツ・カフカ賞をアジア圏で初めて受賞し、以後ノーベル文学賞の有力候補と見なされている。<br>デビュー以来、翻訳の活動も行っており、フィッツジェラルドの諸作品やレイモンド・カーヴァー全集のほか、多くの訳書がある。随筆・紀行文も多数。 |

**五月の海岸線**

村上（むらかみ）　春樹（はるき）

「ねえ、もう二十年も昔になるかな、夏になると僕は毎日この海で泳いでいたんだよ。海水パンツをはいたまま、家の庭先から海岸まで裸足で歩いて通ったんだぜ。太陽に焼かれたアスファルトの道は恐ろしく熱くってね、ぴょんぴょん跳びながら歩いたもんさ。夕立もあったよ。焼けたアスファルトの路面に吸い込まれていく夕立の匂いがたまらなく好きだった。」

（「カンガルー日和」より）

●村上春樹…昭和二十四（一九四九）年～

小説家。京都市生まれ。西宮市立香櫨園小学校・芦屋市立精道中学校・県立神戸高校・早稲田大学文学部演劇科卒業。

昭和五十四年『風の歌を聴け』で群像新人賞、同五十七年『羊をめぐる冒険』で野間文芸新人賞、同六十年『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で谷崎潤一郎賞を受ける。同六十二年『ノルウェイの森』が空前のベストセラーとなり、平成十八年にはフランツ・カフカ賞を受賞し、ノーベル文学賞の候補者となる。



かつての防潮堤を残した現在の臨港線

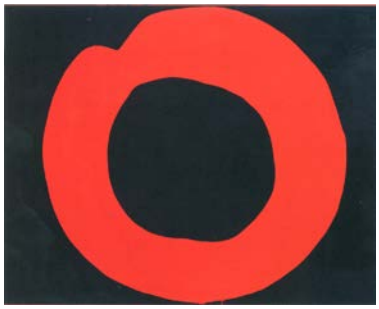
# E 顕彰すべき人物

《や行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| やなぎさわ　たけし<br>柳　沢　　健<br>（詩　人） | 明治 22(1889) 年 11 月３日 ～ 昭和 28(1953) 年５月 29 日。日本の外交官・詩人。福島県会津若松市に生まれる。会津中学校(のち福島県立会津高等学校)から一高、東京帝国大学仏法科に学び、大正４ (1915) 年５月卒業。逓信省に入り、同年 10 月文官高等試験に合格。横浜郵便局長心得在職中の大正８ (1919) 年４月辞職。大阪朝日新聞社に入社し、論説班に所属。その後外務省に勤務し、フランス・イタリア・メキシコなどに駐在。ポルトガル公使館一等書記官を最後に退官し、日泰文化会館館長を務めた。<br>その傍ら、大学時代に島崎藤村・三木露風に師事して認められ、詩人としても中央詩壇で活躍し「果樹園」・「柳澤健詩集」などを発表した。<br>都会風の情熱的な詩人で、露風と詩誌「未来」を出した。詩『芦屋風景』( 新潮社「現代詩人全集 12」) は、朝日新聞社記者であった大正８年から 13 年の、公光町に住んでいたころの作品。<br>外務省文化事業部の課長当時、日本ペンクラブの創設にも尽力し(初代会長は自らが敬愛する島崎藤村)、当時軍国主義路線で孤立しつつあった日本文化の伝播に努めた。退官後は評論家として活躍し、故郷会津地方の校歌も多数手がけた。<br>戦後は出版事業に関わり「世界の日本社」を設立。最後の軍令部総長・豊田副武の回顧録などを出版した。 |
| やまぐち　せいし<br>山口　誓子<br>（俳　人） | 明治 34(1901)年 11 月３日 – 平成６年(1994)年３月 26 日。京都市出身の俳人。本名は山口新比古(ちかひこ)。「新興俳句運動」の指導者的な存在。<br>大正 11(1922) 年、高浜虚子と出会い師事する。水原秋桜子にも出会い、影響を与え合う。東京大学在学中、病気のため精道村芦屋八田の地に転地療養する。<br>昭和元 (1926) 年、東大卒業後、大阪住友合資会社本社に入社。<br>昭和 15(1940) 年ごろ、胸部に疾患が悪化し始め、昭和 17(1942) 年退社。<br>昭和３ (1928) 年、浅井波津女と結婚。<br>昭和４ (1929) 年「ホトトギス」の同人となる。<br>その後、水原秋桜子や高野素十、阿波野青畝と共に『四 S』の１人として全盛期を築き、昭和初期の俳壇を賑わせる。<br>昭和７ (1932) 年、第一句集『凍港』刊行。昭和 10(1935) 年刊行した句集『黄旗』を契機に、「ホトトギス」を離れ「馬酔木(あしび)」同人となり、水原秋桜子と共に新興俳句運動の中心的存在となる。<br>戦後は桑原武夫の『第二芸術論』に反発、俳句の復活を志し、昭和 23(1948) 年、西東三鬼らとともに「天狼」を創刊。廃れかかっていた伝統俳句の戦後勃興に寄与した。昭和 28(1953) 年に西宮市苦楽園へ転居。昭和 32(1957) 年より朝日俳壇の選者を務め、新幹線で東京の朝日新聞社に赴き、選を行った。その時、新幹線の車窓から詠んだ俳句が「窓際俳句」と呼ばれる。<br>昭和 62(1987) 年、芸術院賞を受賞。平成４ (1992) 年には文化功労者受彰。<br>平成８ (1994) 年、92 歳で死去。誓子の遺産は神戸大学に寄贈された。<br>山口誓子が住んでいた屋敷は阪神・淡路大震災で倒壊し、代わりに句碑と記念碑が建てられている。現在、屋敷は神戸大学文理農学部キャンパス内に再現され、神戸大学に山口誓子記念館として不定期に公開されている。 |
| やまだ　こうさい<br>山田　皓斎<br>（日本画家） | 明治 39(1906)年～平成９(1997)年。昭和期の日本画家。女優・岸ユキの父。<br>青木大乗に師事し、その後、新美術協会を創立。多くの作家を育て、数々の賞を受賞。<br>★新美術協会…昭和 29 年３月 28 日創立・発会<br>創立会員には、長谷川雅司・伊東 種(彫)・前田見邦・丸田良平・丸山石根・松本雅山(彫)・諸永青晃・大橋良三・沖中陽明・田所量司・竹内無憂樹・立脇泰山・山田皓斎などの名前がある。<br>発会の日 ( 昭和 29 年３月 28 日 ) を創立記念日とし、事務所を芦屋山田皓斎方 ( 西芦屋町 )、東京・田所量司に置いた。 |
| よしざわ　どくよう<br>吉澤　独陽<br>（詩　人） | 明治 36(1903) 年～昭和 43(1968) 年。詩人。信州の生まれ。関東大震災後に芦屋へ移り住み、西山町で「聖樹楽詩園」を経営。<br>戦前、『日本詩壇』を創刊。戦後は、阪本勝と『聖樹』を刊行した。<br>芦屋在住 40 年余りの間、登山に打ち込み、日本アルプスに登攀 70 余回を数える。芦屋の裏山は、我が庭であった。<br><br>★独陽の詩『芦屋裏山』<br>識らず知らずに／来は来てみたが／<br>さるとりいばらの／赤い実が／ぽつりぽつりと／あるばかり／<br>遠い昔の／おもいでに／雑木林の細道の／空の深さよせつなさよ |

# E 顕彰すべき人物

《や行》

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| よしはら　じろう<br>**吉原　治良**<br>（画　家）<br>  <br>昭和 45 年撮影 | 明治 38(1905) 年 1 月 1 日 ～ 昭和 47(1972) 年 2 月 10 日。画家。<br>前衛美術グループである「具体」の創始者。<br>大阪生まれ。生家は老舗の油問屋。<br>上山二郎に兄事し、二科展に出品。<br>大正 15(1926) 年、21 歳のとき芦屋に移住し、以来没するまで芦屋に住み続けた。<br>昭和 23(1948) 年には「芦屋市美術協会」を創立、同協会主催の「芦屋市展」・「童美展」を開催し、審査員を務めた。<br><br>戦後、吉原治良氏の下には関西の若い人たちが集まり、新しい表現を試みた。 氏は、彼らのエネルギーを結集し、昭和 29(1954) 年「具体美術協会」を結成、“具体”は今日も世界的に知られる美術運動の一つとなっている。<br><br>また昭和 30(1055) 年に芦屋公園で行われた「真夏の太陽に挑む野外モダンアート実験展」や、翌 31(1956) 年の「野外具体美術展」の開催など、芦屋市民の目を大いに驚かせた。<br><br>昭和 38(1963) 年、兵庫県文化賞受賞。<br>  <br>「雪山」　油彩・昭和15年<br>（大阪市立近代美術館建設準備室蔵）<br>  <br>「黒地に赤の円」　油彩・昭和40年<br>（兵庫県立美術館蔵） |
| やまぐち きちろべえ<br>**山口 吉郎兵衛**<br>（コレクター）<br>と<br>てきすい<br>**滴翠美術館** | 明治 16(1883)年 4 月 25 日～ 昭和 26(1951)年 10 月 2 日。大阪市生まれ。<br>山口 吉郎兵衛は、大阪の山口財閥の当主が代々襲名した名前。第四代が滴翠と号した。美術品蒐集家として、世界中のカルタ・人形・陶磁器のコレクションを買い求めた。<br>昭和 4 (1929)年、精道村芦屋(現・山芦屋町)に 621 坪の土地を買い、豪壮な本邸が安井武雄の設計によって建築された。第二次世界大戦の敗戦後、この山口家本邸と多数のコレクションを基礎に財団法人滴翠美術館が設立され、吉郎兵衛の蒐集した芸術品は散逸することを免れた。<br>現在の建物は、吉郎兵衛の住宅(建築家・安井武雄氏設計)を改装したもので、近年の「関西モダニズム建築 20 選」の中に名を連ねている。<br>  <br>山口邸玄関アプローチ(山芦屋町) |
| やまむら たざえもん<br>**山邑 太左衛門**<br>（酒造家）<br>と<br>**F．L．ライト** | 旧山邑家住宅は、芦屋市山手町にある。灘五郷の造り酒屋「櫻正宗」の八代目当主・山邑太左衛門の別邸として、アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトが設計した個人住宅。国の重要文化財。<br>  <br>ライトが設計した建築物としては、日本に完全な形で現存する唯一の作品で、その価値の高さから昭和 49(1974) 年、大正時代以降の建造物でかつ鉄筋コンクリート建造物として、初めて国の重要文化財に指定された。<br>平成元 (1989) 年から、淀川製鋼所迎賓館（ヨドコウ迎賓館）として一般公開されている。 |
| やまもと　はつじろう<br>**山本　発次郎**<br>（コレクター）<br>と<br>**佐伯　祐三** | 船場の実業家・山本発次郎と天才画家・佐伯祐三 (1898-1928) は、希有な出会いをした。山本発次郎は、美術収集家として著名であったが、佐伯の没後にその作品と出会い衝撃を受け、滞仏期の作品を中心に収集をした。<br>大正半ばに芦屋に移り住んだ山本は、短期間に佐伯祐三の作品 150 点余りを収集。昭和 12 年には東京で回顧展を開催したり、画集を発行するなど、佐伯への傾倒は並々ならぬものがあった。<br>佐伯は、短期間の活動の大部分をパリで過ごし、客死した。野獣派的な表現でパリの街角・店先を描き、ポスターや看板などの文字を画面構成し、都市風景に独自性をみせた。その佐伯作品を没後まもなく収集し始めた山本発次郎コレクションは、現在計画中の大阪市立近代美術館（仮称）に約 50 点が寄贈され、同館の佐伯祐三コレクションの中心となっている。 |

# 芦屋市名勝絵葉書

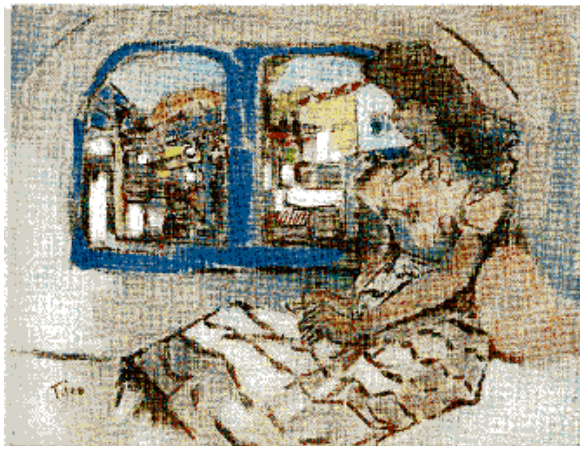
## 昭和 26(1951) 年 / 芦屋市・芦屋地区観光協会 発行



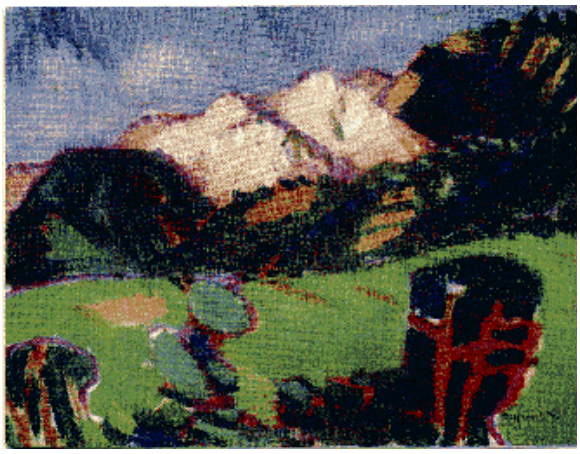
「六麓荘からの展望」 福田 眉仙



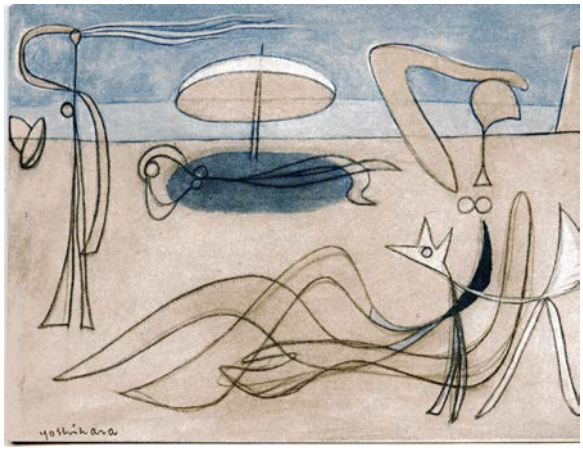
「涸川 – 芦屋川–」 井上 覚造



「バスの中から水道筋を望む」 伊藤 継郎



「ロックガーデン遠望」 山崎 隆夫



「芦屋海岸」 吉原 治良




「芦屋市名勝絵葉書」外装・山崎 隆夫

# E 顕彰すべき人物 《追記》

あ～や行に紹介していない
左ページのかたの紹介

| 人物名 | 解　　説 |
|---|---|
| いのうえ　かくぞう<br>井上　覚造<br>（画　家） | 明治 38（1905）年１月 13 日～昭和 55（1980）年１月 21 日。<br>昭和時代の洋画家。大阪出身。神戸高商（現神戸大）卒。<br>信濃橋洋画研究所で小出楢重に師事。九室会に属す。<br><br>大正 13（1924）年　神戸高等商業学校（現・神戸大学）在学中、妹尾政彦・前田藤四郎・山崎隆夫らと美術グループ「青猫社」を結成。<br>昭和３（1928）年　卒後、信濃橋洋画研究所で小出楢重に学ぶ。<br>昭和５（1930）年　二科展入選<br>昭和 17（1942）年　二科賞受賞<br>昭和 20（1945）年　二科会会員<br><br>昭和 23（1948）年　吉原治良・伊藤継郎・藤井二郎らと、芦屋市美術協会の創立に参加。<br>昭和 47（1972）年　青児賞受賞<br>昭和 52（1977）年　「文明批判序説」で総理大臣賞を受賞。国際展にも出品。サロン- ドートンヌ会員。<br>昭和 53（1978）年　二科会理事に就任。<br>昭和 55（1980）年　１月 21 日　死去。75 歳。 |
| やまさき　たかお<br>山崎　隆夫<br>（画　家） | 明治 38（1905）年７月 13 日～平成３（1991）年。大阪生まれ。洋画家。<br><br>神戸高等商業学校（現・神戸大学）在学中の昭和２（1927）年から、小出楢重の自宅アトリエで開かれていた私塾に通う。<br>昭和５（1930）年卒業後、三和銀行に就職。昭和６（1931）年に小出楢重が没した後、昭和 14（1939）年まで林重義に師事。<br>昭和７（1932）年、第二回独立美術協会展に初入選。細部を単純化し、色面の構成によって対象を明確に描きだした。当時の静物画や風景画には、当時の師であった林の影響がうかがえる。<br><br>昭和 12（1937）年から昭和 47（1972）年までの 35 年間、かつて通った芦屋の旧小出楢重邸に移り住む。<br><br>昭和 13（1938）年、第 13 回国画会展に出展し、国画奨励賞受賞。以後、国画会展に出品し続け、昭和 15（1940）年に国画会同人、昭和 18（1943）年に会員となる。<br><br>戦後も国画会展を中心に発表を続けるかたわら、会社の宣伝部門を担当し、昭和 29（1954）年にサントリー株式会社の取締役宣伝部長に就任。<br>昭和 39（1964）年には、広告宣伝制作会社のサン・アドを設立し、同社取締役社長となった。<br><br>平成３（1991）年、86 歳で没した。 |

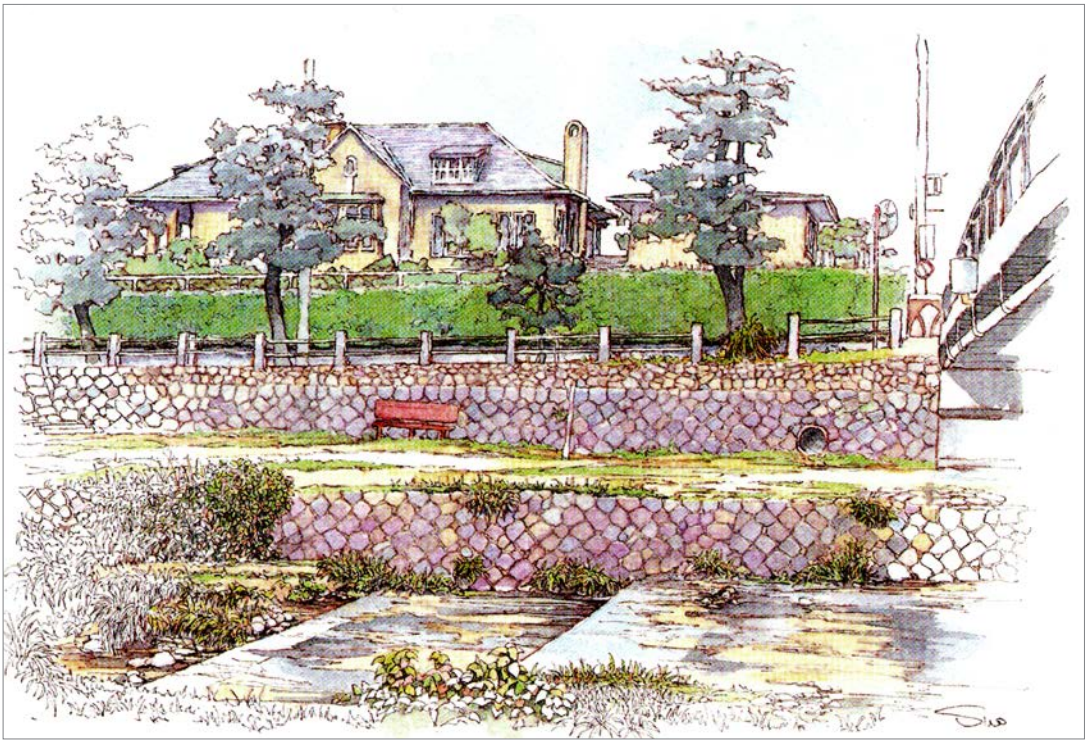


◀山崎隆夫も住んだ「小出楢重アトリエ」（前・川西町）
芦屋市立美術博物館（伊勢町）前庭の一隅に移設されている




*To be continued in the Future.*

# F　芦屋トピックス



井上正三「平田町・鵺塚橋」（1996 年 / 水彩）

# F 芦屋トピックス　芦屋のまつり

## 芦屋さくらまつり

芦屋川を会場に行われる「芦屋さくらまつり」は、市民や阪神間の人々に定着し、毎年多くの人でにぎわいます。

川沿いでは市民グループなどによる縁日が開かれ、河川敷に設置された特設ステージではさまざまなコンサートやイベントが繰り広げられます。

夜には、ライトアップされた美しい夜桜も楽しめます。

## あしや山まつり

さわやかな５月の、新緑の奥池で開催される「あしや山まつり」は、記念ハイキングやイベントなど、自然とともに満喫できます。

## 芦屋サマーカーニバル　＆　ドラゴンボートレース大会

サマーカーニバルは、毎年、総合公園と潮芦屋ビーチ周辺で行われます。多くの縁日や特設ステージのイベントほか、日没後は美しい花火が夏の夜空を鮮やかに染め上げます。

またもう１つの夏の風物詩「ASHIYA CUP ドラゴンボートレース大会」は、芦屋キャナルパークを会場に、毎年開催されています。



芦屋サマーカーニバル



あしや秋まつり（三条地区だんじり）

## 芦屋のまつり

印は、「芦屋三大まつり」と呼ばれています。



芦屋さくらまつり



あしや山まつり



ASHIYA CUP ドラゴンボートレース大会

## あしや秋まつり

毎年 10 月第２日曜日、「あしや秋まつり」が、芦屋市立精道小学校の校庭とその東側道路を会場に開催されます。

市内に五基ある地車（だんじり）が精道小学校東側道路に揃い、勇壮な練り回しが披露されます。

芦屋の地車は、「西之町地車同好会」・「打出総代会地車保存会」・「三条地区地車愛好会」・「精道地区地車保存会」・「山之町地車愛好会」の５団体で保存されています。

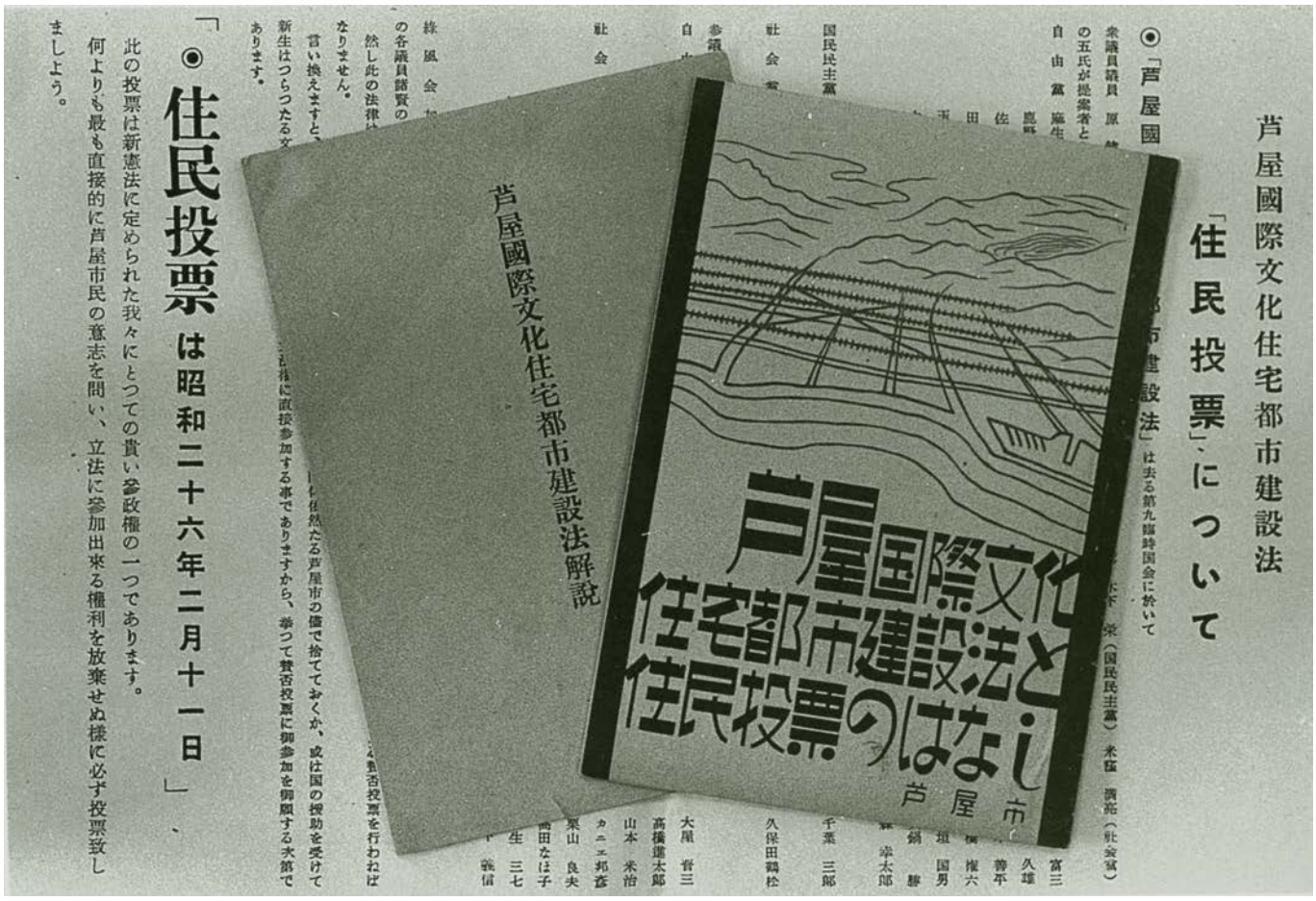
# F 芦屋トピックス　国際文化住宅都市建設法

## ■新しいまちづくりを目指して

終戦後の虚脱状態にあった人々の生活に容赦なく襲いかかったのは、生活必需品と住宅不足およびインフレーションでした。

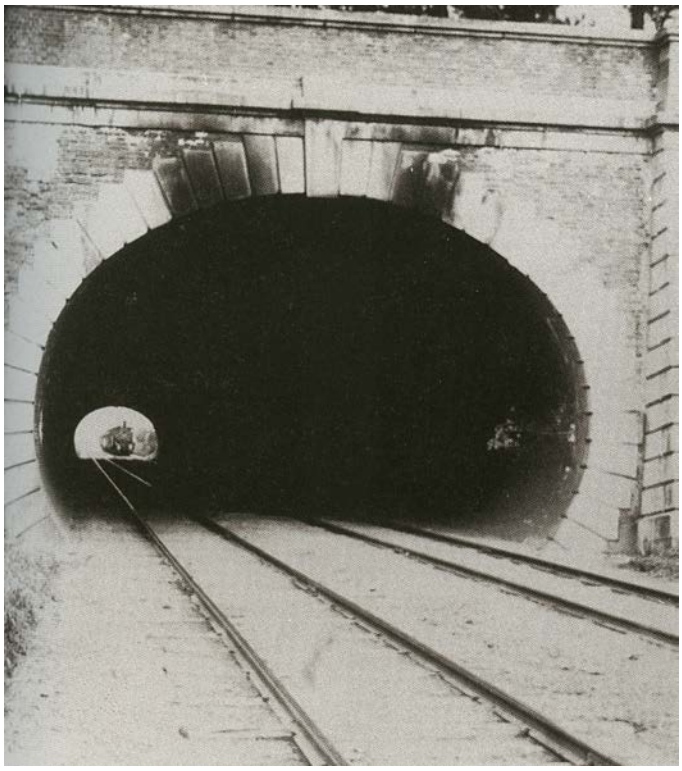
戦災の復興は被災直後に着手され、清掃事業や水道など公共施設の破損修理が進行したほか、罹災者や引揚者に対する応急住宅の供給、また自力復興を希望する者には製材・畳・釘など建築資材の斡旋が行われました。

昭和 25(1950)年 12 月には、「芦屋国際文化住宅都市建設法」が国会で可決、翌年２月の住民投票の結果を踏まえ、昭和 26(1951)年３月に公布されました。




**国際文化住宅都市建設法**　昭和 25 年 12 月国会で可決され、住民投票を経て交付された。

# F 芦屋トピックス　日本初のトンネル － 芦屋川トンネル



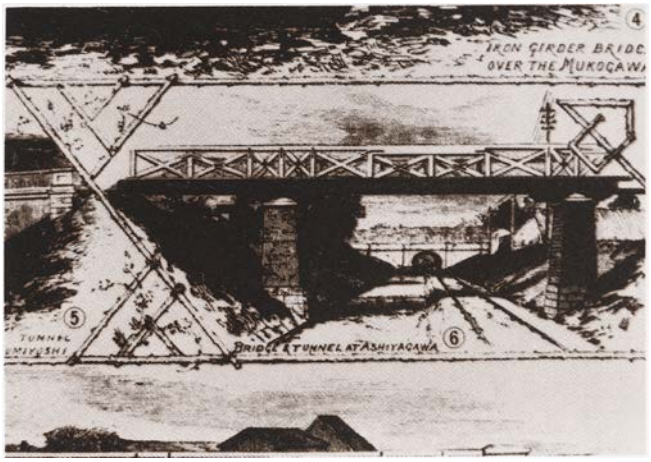
複線となった明治 27 年以降の「芦屋川トンネル」（天井川風景）

## 省線・国鉄（ＪＲ）

明治７（1874）年５月、大阪・神戸間に鉄道（単線）が開通しましたが、当時の駅は、大阪・西宮・三宮・神戸駅、そして翌６月に開設された神崎・住吉駅だけでした。

明治 27（1894）年には、単線から複線となりますが、芦屋に駅が開設されたのは、大正２年８月のことでした。

芦屋駅開設については、当時の精道村が国に請願を出し、さらに用地 3,000 坪と工事費１万円を寄付しています。




『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に紹介された「芦屋川トンネル」の挿絵

### ■天井川の下を貫いた日本初の“トンネル”

業平橋の北、大正橋のすぐ南にはＪＲの列車が川床の下に作られたトンネルを通り抜けています。

トンネルが作られたころの記録には「汽車は、堤の下をくぐって走り、その穴の道はレンガ石で作り、これをトンネルと称え」（『鉄道院文書』明治７年）と記されています。

日本でトンネルという言葉が使われた最初と思われます。また、イギリスの新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の明治９（1876）年９月２日号には、「芦屋川のトンネルは、中心点を３つ持つ楕円で、中央には深さ 15 インチの円形逆アーチも付いており、レールは複線が入る広さのもので、日本でレンガで作った組立工事のうち、最も優れたもの」と、挿絵入りで紹介されました。

しかし、現在では線路は複々線になって、このレンガのトンネルは見ることはできません。



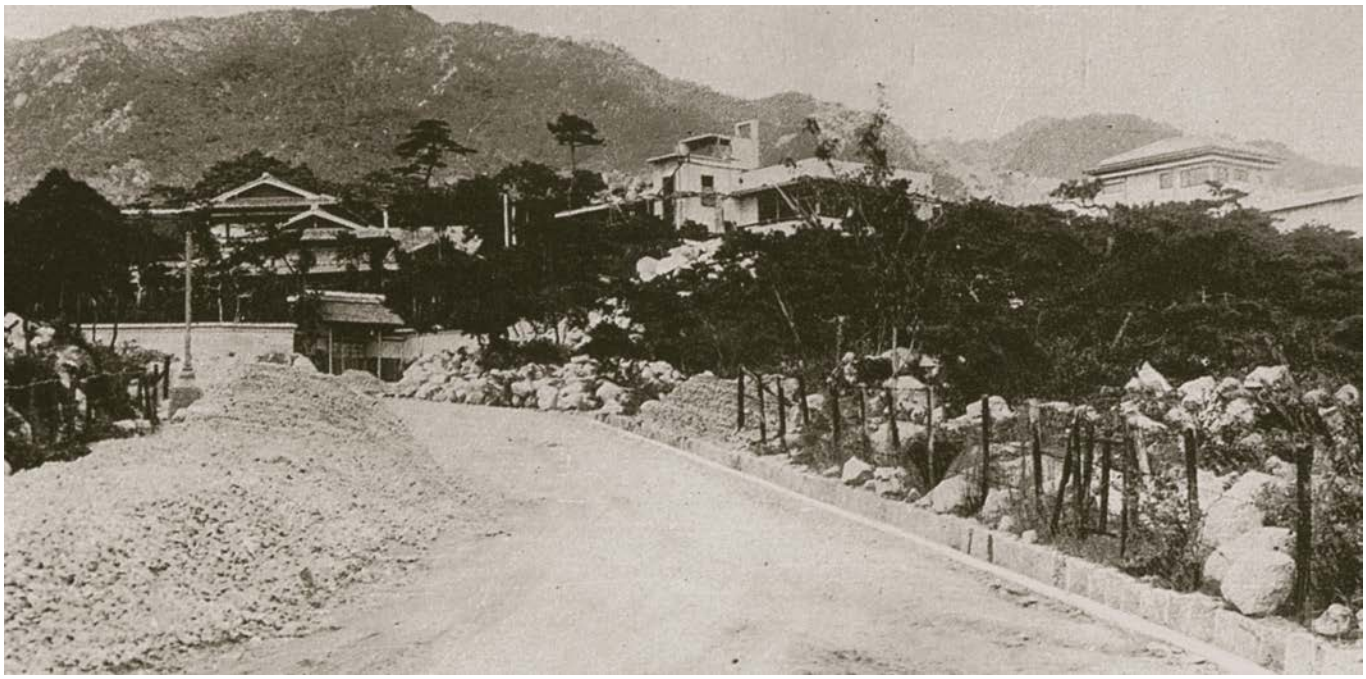
◀現在の芦屋川トンネル

# F 芦屋トピックス　“東洋一の健康地”六麓荘住宅地の開発

## 六麓荘住宅地の開発

“東洋一の健康地”をキャッチフレーズに、株式会社六麓荘が、昭和４年に国有林の払い下げを受け、住宅建設を始め、昭和６年には現在の六甲山麓の地に「六麓荘住宅地」が竣工しました。

上・下水道やガスのほか電気線・電話線も地下配線という画期的な試みがなされ、交通機関としては「六麓荘乗合自動車」（ボンネットバス）が運転されました。



造成中の六麓荘住宅地（昭和初期）

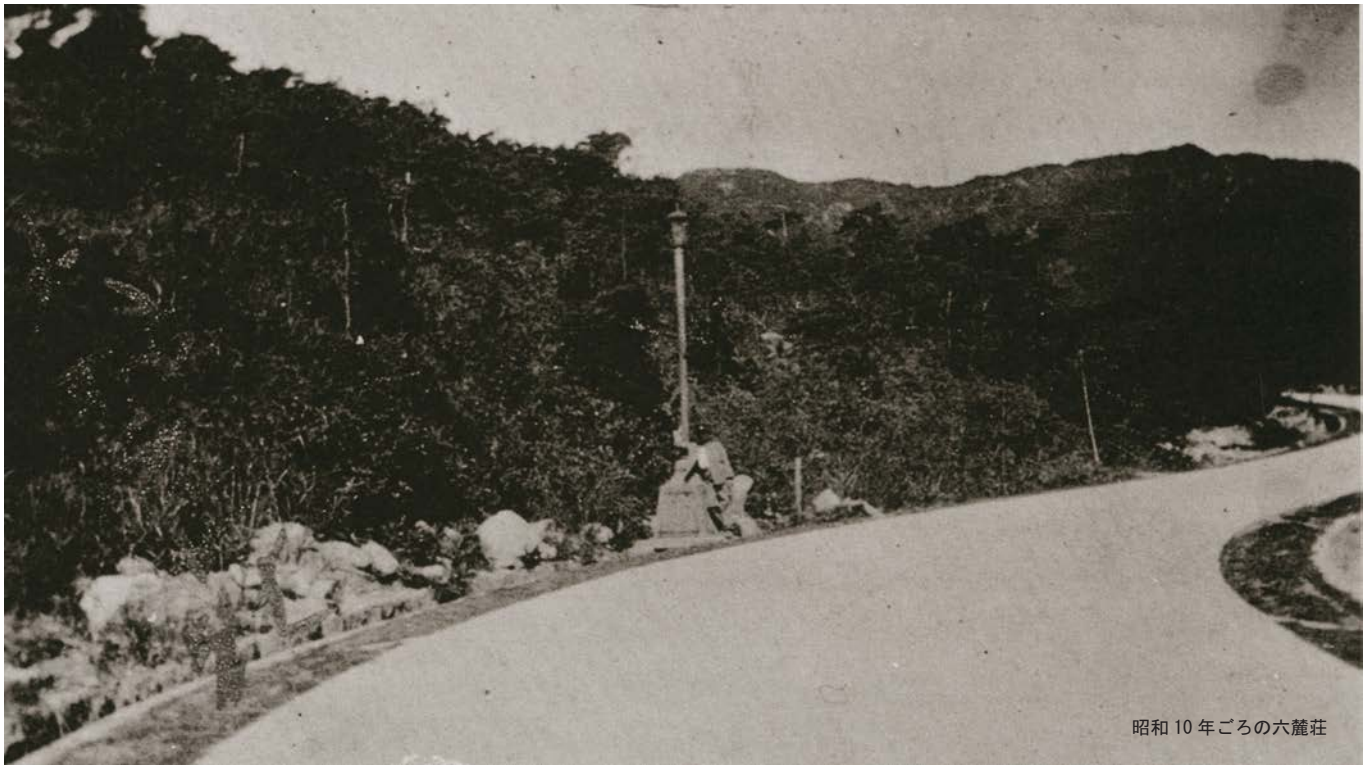


水道管・ガス管・電気線の地下埋設工事



電話線の地下配線工事

# F 芦屋トピックス “東洋一の健康地”六麓荘住宅地の開発

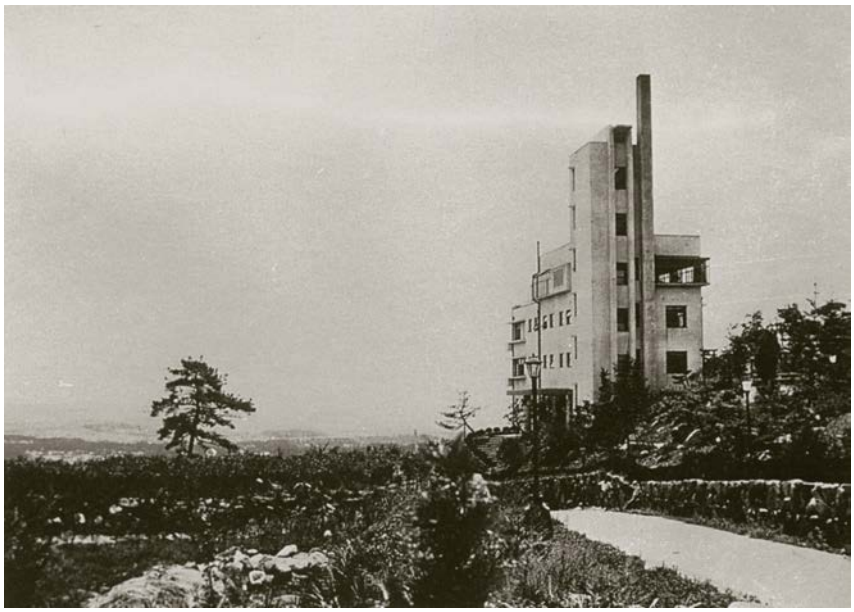


昭和 10 年ごろの六麓荘




六麓荘分譲開始当時のパンフレット

# F 芦屋トピックス　六麓荘国際ホテル



建設当時の国際ホテル（昭和 12 年ごろ）

## 六麓荘国際ホテル

国際ホテルは、茅渟（ちぬ）の海を見下ろし、四季を通じて風光明媚、しかも省線（JR）芦屋駅から十数分の便利な立地ということで、昭和 12（1937）年９月、六麓荘に建設されました。

戦時中は企業の研究室として使用されたりもしましたが、戦後は米軍に接収され、外国人や一流財界人が泊まるホテルとして有名でした。

その後、学校法人芦屋学園の買収によって、昭和 35（1960）年４月には芦屋女子短期大学として、また昭和 39（1964）年からは芦屋大学本館として利用されており、現在もその姿を今にとどめています。

オープン当時のパンフレットには、宿泊料や食事料も記載されています。

◆御宿泊料◆
- 洋　室　（御一名様）
  金 八円～十二円
- 洋　室　専用浴室付　（御一名様）
  金 十七円～二十円
- 各室御二人の場合は五割増を頂戴いたします

◆御食事料◆
- 朝　食　　金　一円五十銭
  （七時ヨリ十時迄）
- 昼　食　　金　二　円
  （十二時ヨリ二時迄）
- 夕　食　　金　二円五十銭
  （六時ヨリ八時迄）




オープン当時のパンフレット



ホテル食堂

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

## 花開くモダニズム

芦屋市が誕生したのは、昭和 15 年のことです。しかし、市となる前の武庫郡精道村と呼ばれた時代から、芦屋の風土はモダンな香りに包まれ、モダニズム文化が花開いていたのです。

大正８(1919)年、わが国においても「都市計画法」が公布され、1920 年代から 30 年代へと続くこの時代、東京・大阪・横浜・神戸など６大都市が出現し、ここに今日の社会の原型を形成するモダンな都市文化が姿を現しました。大正 14(1925)年、大阪は市域を拡張し、人口でも東京を上回る大都市となっていました。そして神戸は、外国人居留地のある都市として、ハイカラな異文化流入の港湾都市として発展を遂げていました。芦屋はその大阪と神戸の２大都市の中間に位置するという地の利に恵まれていたため、大阪・神戸両都市のモダン文化交流の交差点となりました。

美術・写真・ファッション・建築・文学などの分野で、確かにモダニズムの足音を聞くことができます。



小出楢重「横たわる裸女Ａ」／昭和３(1928)年　油彩・布(49.2×67.5cm)

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

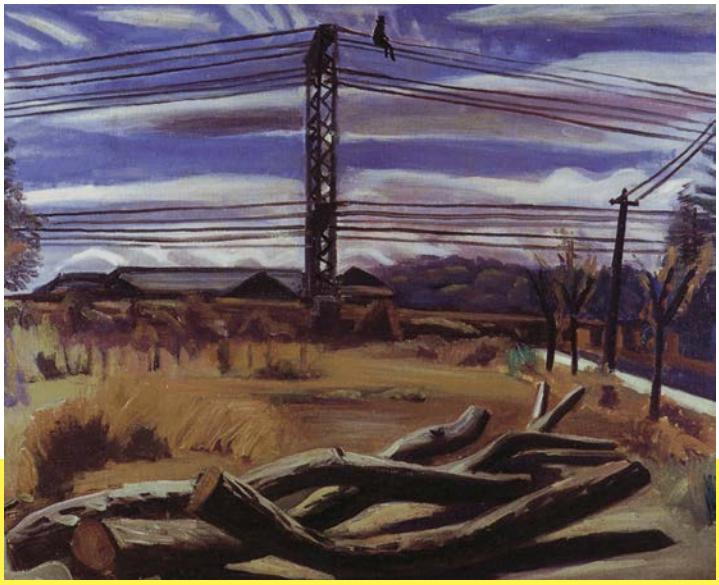
## 美　術

近代美術史上、裸婦像の第一人者と呼ばれ、晩年、芦屋のアトリエから、裸婦像をはじめ静物・風景など数々の傑作を生み出した小出楢重。

12歳から芦屋に住み、後に「近代日本が生んだ最も俊敏な知性の芸術家」といわれた長谷川三郎。

戦後、芦屋に誕生し、世界的な影響力を持った日本唯一の前衛美術グループ「具体」の指導者・吉原治良。

具象あるいは抽象絵画、また前衛芸術と、それぞれ日本を代表する画家たちが芦屋の地とどのように結びついてきたのか、芦屋モダニズムの時代に活躍した芸術家を顕彰してみましょう。



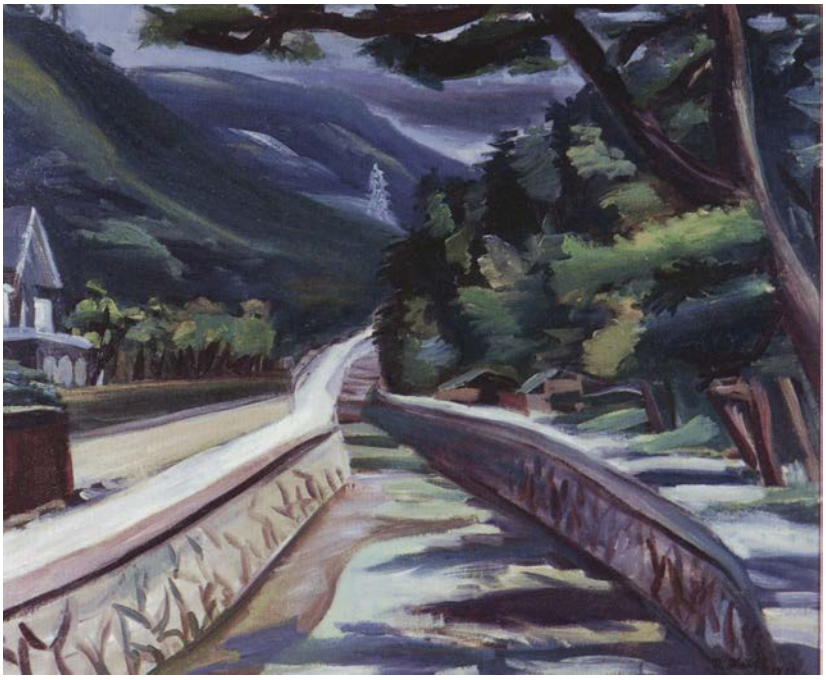
**小出楢重「枯木のある風景」／昭和５(1930)年　油彩・布(72.8×90.8cm)**
小出楢重の絶筆。現在の川西町の市立体育館・青少年センター付近から、阪神電車方面を望んだ風景。



**小出楢重のアトリエ**
昭和３(1928)年に建てられた三角屋根のアトリエ(木造)。昭和62(1987)年夏までは、川西町にあった。

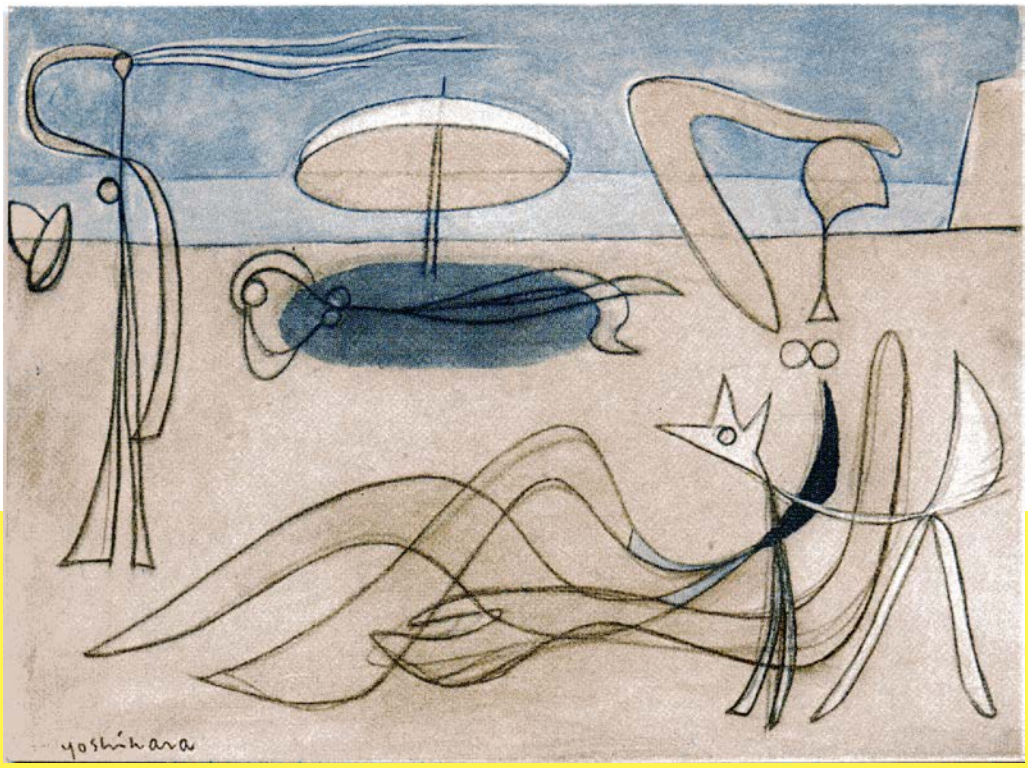


**制作中の小出楢重**
昭和３(1928)年に川西町のアトリエで。制作中の作品は「周秋蘭立像」。

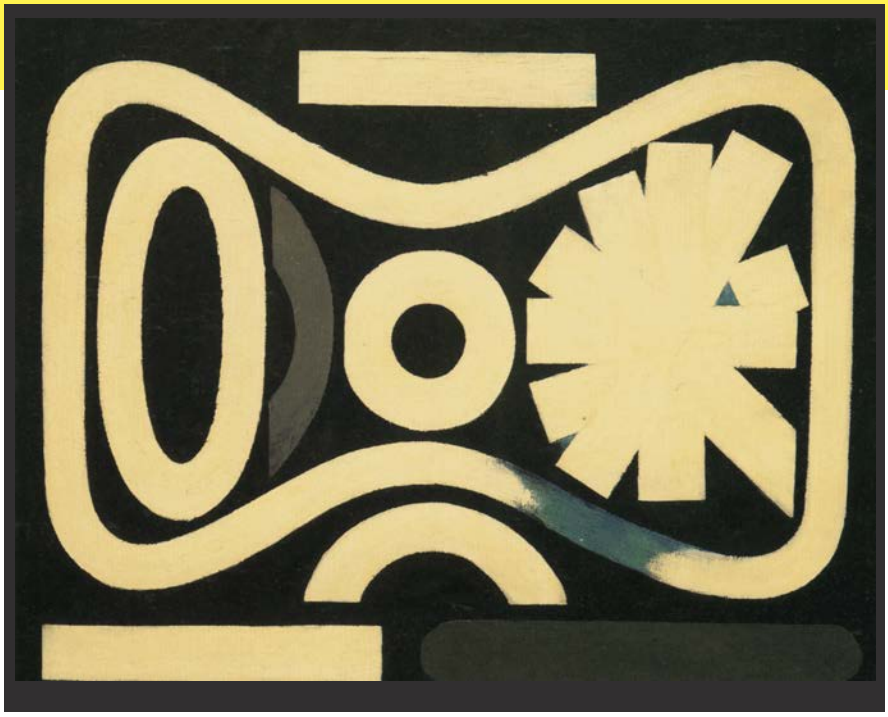


小出楢重「芦屋風景」／昭和４(1929)年　油彩・布(59.5×72.0cm)

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム




**吉原治良「芦屋海岸」**　昭和 25(1950)年(芦屋市・芦屋地区観光協会)発行の『芦屋名勝絵葉書』より



吉原治良「作品(３)」／昭和９(1934)年　油彩・布(90.9×116.6cm)

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム



長谷川三郎「無題－青の静物－」／昭和９(1934)年　油彩・布(79.0×98.5cm)



大石輝一「六麓荘風景（Ａ）」／昭和５(1930)年　油彩・布(61.0×91.0cm)



大石輝一「打出風景（Ａ）」／昭和４(1929)年　油彩・布(37.8×45.5cm)

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

## 建　築

芦屋に現在もそのモダンな姿をとどめる「旧山邑邸」（現・ヨドコウ迎賓館）。

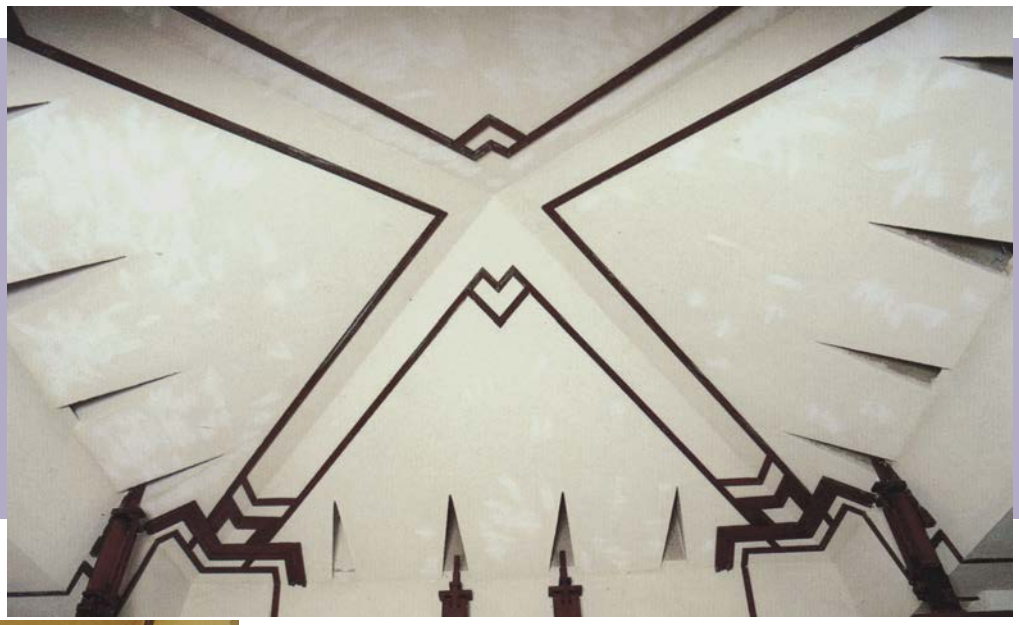
帝国ホテルなどの代表作で知られるアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの設計によるこの「旧山邑邸」で、どんなモダンな生活が繰り広げられていたのでしょうか。

ライトの残した数少ない貴重な作例が、今もひっそりと芦屋（山手町）に眠っています。

ここには、紛れもなく、日本モダニズムの最も優れた足跡が、一外国人の手によってもたらされたその技の面影が刻印されています。



旧山邑邸（ヨドコウ迎賓館）玄関



**４階食堂の天井**
幾何学的な装飾が施され、天井のまわりには自然光を取り入れる工夫がなされている。



**和室の西側にある廊下**
日本的な縁側を洋風に表現した連続窓になっている。

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

## 芦屋のモダニズムとライフスタイル

大阪と神戸の中間に位置する芦屋は、阪神間モダニズムの中心ともいえる存在です。そして、山と海を背景に風光明媚で気候温暖なロケーションは、南仏ニースにも例えられる日本屈指の住宅都市へと発展を遂げました。

明治末年から大正にかけて、阪神・国鉄(JR)・阪急の順に駅舎が設置され、移住者は増加の一途をたどります。その中で、単に外来の洋風建築を真似るだけではなく、地域風土に根ざした和洋折衷ともいえる阪神間特有のモダニズム建築が生まれ、芦屋はその中心地ともいえる存在となりました。

今日、確認できる代表的な建築として、フランク・ロイド・ライト設計の重要文化財住宅"ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)"・芦屋仏教会館・芦屋市立図書館打出分室(旧松山家住宅)・滴翠美術館(山口吉郎兵衛邸)などがあります。



芦屋市立図書館打出分室（旧松山家住宅）



昭和２(1927)年当時の芦屋警察署・正面玄関



芦屋仏教会館

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

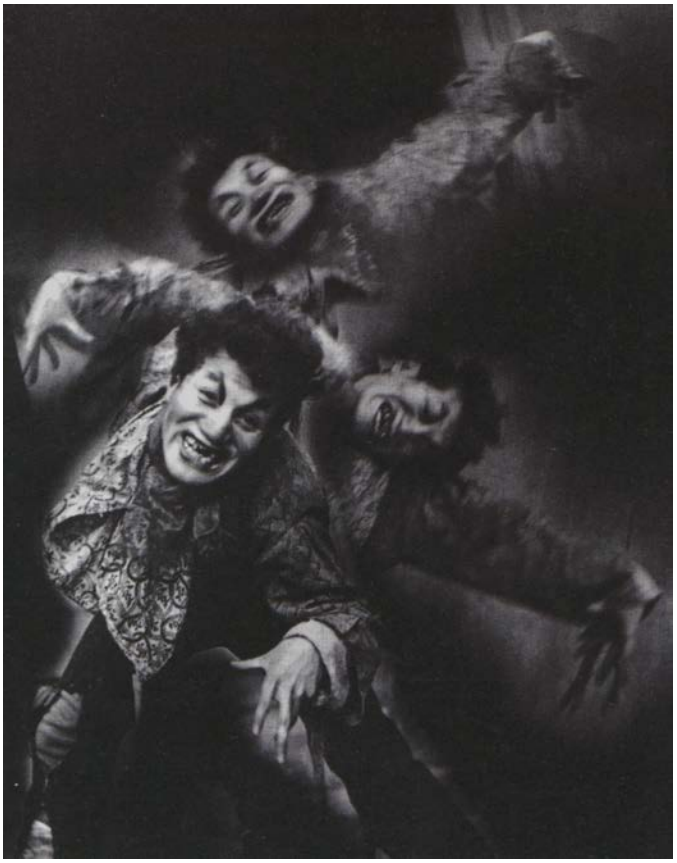
## 写　真

　ニューヨーク・パリでの滞在を終えて帰国、昭和４(1929)年に前田町にパリのアトリエをまねた家を建てて住んだ中山岩太。また、芦屋でモダンな写真材料店を始めつつ、「シルクハット」などの代表作を生み出すハナヤ勘兵衛。彼らを中心に『芦屋カメラクラブ』が創立され、ニューヨークやパリにも先行して先駆的な作品がいくつも世に出されました。

　それまで記録的な側面の役割を担っていた写真を、一気に芸術作品としての表現手段とした彼らの活動は『新興写真』の拠点として、国内外に大きな衝撃をもって注目されました。



中山岩太「パイプとグラスと舞台」／昭和７(1932)年



ハナヤ勘兵衛「ナンデェ！」／昭和 10(1935)年

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

## ファッション

田中千代は、日本のファッション・デザイナーの草分けの一人また田中千代学園の創立者として、服飾界に大きな影響を与えてきました。昭和 12(1937)年、神戸岡本に「洋裁研究」を開設、また昭和 22 年には芦屋大原町に研究所を移し、さらに学校法人田中千代学園を開設するなど日本の洋裁技能教育にも大きく貢献しました。

洋風文化の最も華麗な具体例として、洋裁・洋服の世界がクローズアップされてきた時代でもありました。

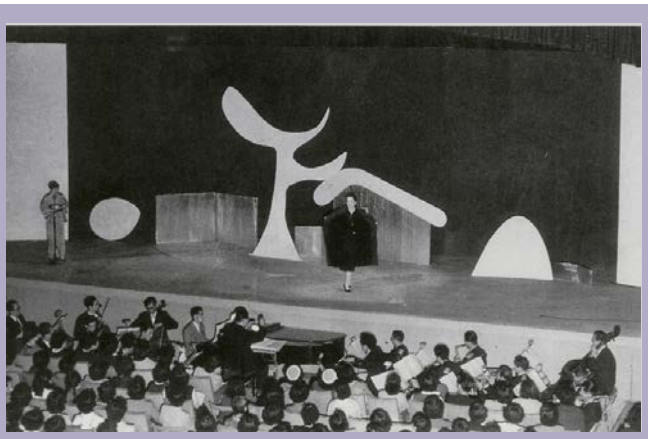
戦後は一早くファッション・ショーを開き、昭和 27 年からは皇后さまのデザイナーとしても活躍しました。

また交友関係を見ても、小磯良平や吉原治良、さらには中山岩太とも交流があったモダンガール田中千代は、芦屋の地を拠点として世界にはばたいていったのです。

一方、民族衣装の研究・収集や「服飾事典」の編集などに積極的に取り組み、その仕事ぶりと着実な歩みは、多くの人々を魅了しました。



田中千代「パジャマドレス」／昭和 7 (1932)年



吉原治良が舞台デザインした「田中千代グランド・ショー」／昭和 27(1952)年



田中千代「市松柄のきもの」／昭和 25(1950)年



田中千代「黒地に銀唐草柄帯地のコート」／昭和 37(1962)年

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム



大正時代の芦屋川風景

## 近代文学

農村から住宅地へ、移り行く精道村時代の芦屋の情景は、近代文学の名作の中に生きています。

星野天知・児玉多歌緒・柳沢健・徳田秋声・山口誓子・吉沢独陽・宇野浩二・与謝野晶子・谷崎潤一郎・富田砕花・高浜年尾など多くの著名な文人が、芦屋を舞台にすぐれた作品を残しています。

**〔近代文学に最初に描かれた芦屋〕**

「河原も道路も蒼白い月影を浴びて真白にかがやいていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路傍には松の生い茂った崖が際限もなく続いていた…」

徳田秋声「蒼白い月」（大正９年）



**児玉多歌緒 スケッチブック**

大正時代の中ごろ、芦屋に住んだ画家であり、歌人でもあった児玉多歌緒は、芦屋の美しい風景や、いきいきとした子どもたちの姿を「海郷抄」等のスケッチブックに残しています。

**〔与謝野晶子が芦屋浜で詠んだ歌〕**

昭和初期、芦屋松浜町に住んでいた歌人・丹羽安喜子邸を訪れた与謝野晶子が、芦屋浜で、遠く対岸のふるさとの堺を望んで詠んだ歌

ふるさとの和泉に暗き雲湧きて
芦屋に見るは紀の国の山



昭和初期の芦屋浜風景

# F 芦屋トピックス　芦屋モダニズム

## 二大文豪ゆかりの地

宮川町の富田砕花旧居は、奇しくも谷崎潤一郎も住んだゆかりの地として、往時の面影を伝えています。

谷崎潤一郎は、昭和９(1934)年に松子夫人とこの家へと移り、「現代語訳源氏物語」・「猫と庄造と二人のをんな」等の名作を執筆しました。昭和 11(1936)年の秋には神戸住吉へと転居し、昭和 16(1941)年の秋から芦屋を舞台にした「細雪」を書き始めました。

『兵庫県文化の父』といわれた富田砕花は、大正時代初期から芦屋に住み、ホイットマン訳詩集「草の葉」・カーペンター「民主主義の方へ」等を世に送り、民衆詩派の代表的詩人として活躍しました。

富田砕花はマチ子夫人と昭和 13(1938)年に結婚し、谷崎潤一郎の住んでいた後の家に居住、昭和 59(1984)年 10 月、93 歳で亡くなるまで、兵庫県を舞台に大きな文化的業績を残しました。



谷崎潤一郎



谷崎潤一郎　遺品




富田砕花　作品




谷崎潤一郎著「蓼喰ふ虫」／昭和４(1929)年
装丁・小出楢重



富田砕花



富田砕花旧居(宮川町)

# F 芦屋トピックス　芦屋と災害ー精道村時代

## 室戸台風と阪神大水害

阪神間随一の住宅地として発展を続けた精道村では、水害から村民と市域を守るため、大正４・５(1915・6)年〈第１次〉と昭和８(1933)年〈第２次〉の２度にわたって、芦屋川の大改修工事を行いました。

ところが、改修を終えた直後の昭和９(1934)年と 13(1938)年、いずれも大暴風雨や集中豪雨に見舞われて、空前の被害を受けてしまいました。それが、後年「室戸台風」・「阪神大水害」と呼ばれるものでした。

### ■室戸台風

昭和９年９月 21 日、午前８時の前後１時間にわたって関西地方を襲った大暴風雨は、甚大な被害をこの地方一円に与え、本村でもかつてみない大きな災害となりました。この暴風雨は後に「室戸台風」と命名されますが、その中心が本村域の一部を通過した時刻が大阪湾の満潮時にあたったため、暴風雨に加えて大阪湾沿岸には高潮が襲来、海岸沿いの地域では被害が倍加され、甚大な被害をこうむることになりました。

芦屋川や江尻川の川尻では、護岸設備や村営塵芥焼却場岸壁・海岸住宅の防潮波施設がことごとく破壊されました。

被害は人身にも及び、死者３人(他村１人)・重傷者４人・軽傷者６人。さらに、流水高潮による流失家屋 21 戸・全壊 42 戸・半壊は実に 106 戸・床上浸水 354 戸・床下浸水 222 戸・流失船舶 16艘・流失冠水した田20町２反25歩・同畑４町８反２畝17歩、被害の総見積額は 198 万 6,243 円の巨額に達しました。

### ■阪神大水害

昭和９年の大災害がなお人々の記憶から消え去らぬ 13 年、再び前回をしのぐ大水害に見舞われました。

６月 28 日から降り出した雨が、７月５日には豪雨にかわり(最大時雨量 60㎜、最大日雨量 326㎜)、河川は大増水をきたし、各地で山津波が起こり、稀にみる水害が発生しました。この豪雨により、村内の芦屋川・高座川・宮川の各河川は一斉に氾濫し、大洪水がひきおこされました。中でも芦屋川は去る 10 年の降雨で上流山地が各所で崩壊していましたが、復旧工事もされずそのままであったため、連日の降雨と５日の集中豪雨が重なり、氾濫に加えてぼう大な量の土砂が流出、洪水はその極に達し、村内の大半が泥海と化しました。

国鉄(ＪＲ)芦屋駅構内も、すっかり土砂の下に埋没するほどの状態でした。

また、河川の氾濫に加えて防潮堤の一部が決壊したため、海水の浸入があるなど、低地域の浸水は予想外に深く、芦屋駅では最高３ｍの浸水高を記録しました。

さらに、芦屋川上流山地の崩壊土砂が流失して、下流一帯に堆積もしました。

村内の被害状況は死者３人・重傷者２人・家屋の流失 14 戸・全壊 14 戸・半壊 111 戸・床上土砂堆積 156 戸・床上浸水 790 戸・床下浸水 1,458 戸・橋梁の流失６・破損８・道路や堤防の破損決潰数 10 といった、甚大な被害がもたらされました。



**業平橋付近**　阪神大水害では、濁流が橋をのみ込む勢いで流れていった

業平橋の辺は大変でございます。水が恐ろしい勢いで、もうすぐ橋につきそうに流れております。

谷崎潤一郎「細雪」より




**阪神大水害で泥水に埋まった国鉄線路**

芦屋川から溢れた水は芦屋駅の構内外にわたって３万立方ｍもの大量の土砂を沈殿させ、その深さは３ｍにも及ぶ所もあり、線路は全く埋没してしまいました。

# F 芦屋トピックス　芦屋と災害－市制施行後

## ジェーン台風・第２室戸台風

戦災の傷も癒えない昭和 25 年９月、ジェーン台風が襲来しました。近畿・中国・四国・北陸を蹂躙し、死傷者 2,000 余人、被災者 50 万人という大きな被害をもたらしました。

芦屋市でも、浜地区に多大な被害を残し、三笠宮様をはじめ建設大臣らが見舞いに来芦されました。

また、昭和 36 年９月には第２室戸台風が上陸し、近畿を中心に、死者 202 人・被災家屋 98 万戸、最大瞬間風速 84.5 ｍを記録するなど、芦屋市にも大きな爪痕を残しました。

### ■ジェーン台風



防潮堤の決壊（伊勢町付近）
ジェーン台風による高潮によって東西 150 ｍにわたって決壊し、民家に大きな被害をもたらした。



ジェーン台風で被害を受けた伊勢町付近

### ■第２室戸台風



昭和 36 年９月の第２室戸台風で決壊した堀切川

### ■昭和 42 年７月 集中豪雨




昭和 42 年７月の集中豪雨で濁流に洗われる上宮川町付近

# F 芦屋トピックス　芦屋と災害－阪神・淡路大震災

平成７年(1995)１月17日午前５時46分、芦屋市をはじめ兵庫県南部を襲った阪神・淡路大震災は、本市が長年にわたって築き上げてきた住宅都市としての基盤を直撃し、一瞬の内に尊い人命を奪ったのみならず、全世帯の９割を超える住居を損壊させ、多くの都市施設に壊滅的な被害を及ぼしました。



平成７年１月７日未明の阪神・淡路大震災で、一瞬にして倒壊した阪神高速道路（神戸市境）

## 阪神・淡路大震災の概要　《地震の概要・避難所の状況・その他》

| ■地震の概要 | 平成22年１月15日現在 |
|---|---|
| 発生年月日 | 平成７年１月17日(火)午前５時46分 |
| 震源地 | 淡路島北部（北緯34度36分、東経135度02分） |
| 地震の規模 | マグニチュード　7.3 |
| 芦屋市の震度 | 震度７<br>＊２月７日、気象庁の現地調査の結果、国道２号沿い・JR芦屋駅周辺・三条町・山手町の一部が、震度７とされました。 |

【避難所の開所から閉鎖】平成７年１月17日～７月９日

- ■２月５日　給食開始(全避難所での開始は２月11日～)
- ■２月23日　プライバシー対策として、衝立を導入
- ■４月14日　避難所集約(民間施設等12カ所閉鎖)を通知
- ■５月18日　避難所第二次集約(11カ所廃止)
- ■５月24日　市内避難所・６月上旬に閉鎖を決定
- ■５月28日　避難所を集約し、２カ所(126人)となる
- ■６月７日　避難所１カ所となる
- ■６月14日　６月18日に、避難所閉鎖することを決定
- ■７月９日　避難者全員退出

■避難所の状況

| 月日 | 避難所数 | 避難者数 | 避難世帯数 |
|---|---|---|---|
| １月17日 | 47カ所 | 12,916人 | 5,045世帯 |
| １月19日 | 52カ所 | 20,960人 | 8,188世帯 |
| １月31日 | 53カ所 | 8,912人 | 3,481世帯 |
| ２月28日 | 49カ所 | 4,254人 | 1,662世帯 |
| ３月31日 | 41カ所 | 2,287人 | 893世帯 |
| ４月30日 | 32カ所 | 1,019人 | 398世帯 |
| ５月31日 | 2カ所 | 88人 | 49世帯 |
| ６月18日 | 1カ所 | 6人 | 3世帯 |
| 累計 | 5,431カ所 | 558,940人 | 218,334世帯 |

〈＊印は、避難者数のピーク時〉※上記の「避難世帯数」は推計です。
※避難所数のピークは、１月24日の55カ所（避難者数16,134人）

【その他】

- ■応急仮設住宅　市内47カ所・2,914戸を建設（引渡し日・２月７日～５月８日）
- ■仮設トイレ設置　176カ所・1,055基
- ■仮設浴場の設置　12カ所

◆阪神・淡路大震災についての詳細は、G－参考〈広報あしや・抜粋〉をご参照ください。

# F 芦屋トピックス　芦屋・橋ものがたり

本市は、芦屋川・宮川の２つの河川の扇状地にできた市街地と、後に控える六甲山系の山地から成り立っています。

芦屋川は、本市の景観を代表する市内最大の川で、全長６km余りの急峻な川です。普段は澄んだ水の流れる静かな川ですが、一旦集中豪雨に見舞われるとたちまちに大量の濁流が渦巻き流れ、昭和13年の阪神風水害のような大災害を引き起こしてきました。

一方の宮川は、市の中央部を流れる全長３km余りの川で、国道43号以南には河川敷があるものの、以北にはほとんどがありません。宮川下流は、直接海とつながっています。河口には、海の生物も生息しているのが見られます。



業平橋下の歩道／井上正三・水彩（1996）

## 芦屋川に架かる橋

芦屋川は、源を石の宝殿付近に発し、滝谷の本谷を南東に流れ、奥池盆地から流れ来る川水を合わせ、また西方から来る蛇谷・トックリ谷・黒越谷などの渓谷の水を合わせて、東からは石釜谷・石仏谷・八幡谷・柿谷などの谷水を合流し、俗に言う水車谷を過ぎて鷹尾山の東を通り、さらに北西からの支流高座川を合流し、ますます川幅を広くして、阪急線以南は天井川となり海へと流れています。

芦屋川には下流から、鵺塚橋・芦屋川橋・平田橋（人道橋）・公光橋・業平橋・大正橋・月若橋・桜橋（人道橋）・開森橋などの橋を、市街地の中で見ることができます。




### 1 開森橋（かいもりばし）

阪急芦屋川駅の北、芦屋川と高座川が合流するあたりに、開森橋があります。この橋は、明治17年刊行の「芦屋村誌」にも記されてあり、芦屋川に架かる橋としては古いものです。

開森橋の名称は、旧小字の名前から付けられたと考えられます。

開森とは、新しい土地を開拓するという意味がありました。

当初は木造の橋で、大正時代には芦屋川の改修に伴って架け替えられたり、風水害で破損した部分を修繕したりされました。昭和初期の写真を見ると、２対８個の擬宝珠が欄干に飾られていました。

その後、モダンな照明がついた石造りの欄干が造られましたが、これも昭和13年の阪神風水害で欄干のみが残り、修復されています。

現在の開森橋は、昭和38年に架け替えられたもので、人道橋部分は平成11年に加えられました。

### 2 桜橋（さくらばし）

阪急芦屋川駅のすぐ北側にある桜橋は、大正末から昭和初期ころに造られました。当初、阪急電車は現在のような車道との立体交差ではなく、踏切が設置され、電車と人・車が行き来していました。

初代の桜橋は昭和13年の阪神大水害で壊れましたが、すぐに２代目の桜橋が架け替えられ、その後も何度か改修されています。

そんな桜橋の名は、業平が植えたとの伝承が残る『潮見ざくら』に由来していると言われています。

# F 芦屋トピックス　芦屋・橋ものがたり



大正橋

## 芦屋川に沿って

### 3 月若橋（つきわかばし）・大正橋（たいしょうばし）

阪急芦屋川駅と国道２号との間に、月若橋と大正橋が架かっています。

阪急電車がまだ通っていないころ、ここには小さな木造の橋が１つだけありました。その橋は、現在の月若橋付近にあり、「ベコベコ橋」といわれていました。

その後、大正時代には石造りの橋として、「芦屋名所 絵はがき」に月若橋が登場します。このころの月若橋は、石の欄干に長方形と三日月の形をした透かしがあけられ、モダンな照明が付けられていました。

月若橋の名称は、室町時代の芦屋の里を舞台とした謡曲「藤栄」に登場する月若丸にちなんで付けられたものと言われています。

大正橋は、大正 13 年に架設されたことから、その名が付けられました。

旧国鉄芦屋駅前から市内西部を結ぶ最短道に架かる橋として、架設当時からずっと利用されてきています。

### 4 業平橋（なりひらばし）

国道２号に架かる業平橋。大正６年３月、芦屋川の改修に伴い、木造の橋が架けられました。大正時代に鳥海青児が描いた油絵「赤い橋」には、初代業平橋の欄干が赤く塗られていたことを見ることができます。

大正14年に始まった阪神国道（国道２号）の整備工事に伴い、木造の初代業平橋は改築され、同年12月に石造りの橋が誕生しました。橋の欄干４カ所には、珍しい照明が付けられていました。昭和13年の阪神風水害でこの橋も大きな被害を受けましたが、現在の業平橋は２代目の橋のデザインを基に造られています。

昭和11年には、阪神国道をくぐる通路も整備されました。

業平橋の名称は、在原業平の別荘跡がこの辺りにあったといわれていることにちなんで、昭和初期に名付けられたものと思われます。



開森橋



業平橋



公光橋



芦屋川橋



鵺塚橋

### 5 公光橋（きんみつばし）

鳴尾御影線の、公光町と川西町をつなぐ公光橋。ここに最初に架けられた橋のことについては、現在のところよく分かっていません。ただ、公光橋の名称は、公光町からとって名付けられたものと考えられます。

公光町は、昭和19年に、世阿弥の謡曲「雲林院」にちなんで名付けられました。その内容は、「伊勢物語」を愛読していた芦屋の里に住む公光という青年が、ある夜の夢の中でその作者である憧れの業平に会うという、幻想的な体験をするお話です。

### 6 芦屋川橋（永保橋（えいほばし））

明治 17 年に刊行された地誌「芦屋村誌」には、芦屋川に架かる橋として、永保橋・開森橋・瓦器（かわらけ）橋の３つの橋が記されています。その中で、唯一石造りの橋が「永保橋」でした。この橋は、江戸時代には最も海に近い「浜街道」に架かっていました。

「浜街道」は後に県道となり、やがて昭和 35 年には「第２阪神国道」となり、その際、橋の名前も「芦屋川橋」と改名されました。

### 7 鵺塚橋（ぬえづかばし）

芦屋川の最も海側に架かる鵺塚橋。初代の鵺塚橋は、おそらく、芦屋川周辺に多くの住宅が建てられ始めた大正時代初期ころに、架けられた橋だと考えられます。

鵺塚橋の名称は、謡曲「鵺」にもある伝説にちなんで名付けられました。

その伝説とは、おおよそ次のようなお話です。

昔、京の都で「ぬえ」と呼ばれた怪物（頭がサル、体はタヌキ、手足はトラ・尾はヘビ）が退治され、海へと流されました。その亡骸が芦屋の浜に流れ着き、これを見た村人たちはたたりを恐れて塚を造り、ねんごろに弔ったというものです。

昔の塚は今の場所より南にあったとの言い伝えも残っていますが、大正６年には芦屋遊園地（芦屋公園）の一角に造られ、現在に至っています。



ぬえ塚（芦屋公園内）

# F 芦屋トピックス　芦屋・橋ものがたり

## 高座川に沿って

### 高座川に架かる橋

上流は荒地山とロックガーデンとの間を流れ、巨石が多く横たわっています。２・３の堰を経て南へ流れ、高座の滝となり、さらに流れは芦屋川へと合流し、海へと流れています。

### 1 大僧橋（おおぞうばし）

現在の橋は、大正時代後半から昭和初期に架けられたものと思われ、それ以前は現在の橋より上流 20 m の位置に架けられていました。当時は、城山方面へは、開森橋より少し上流の城山橋（阪神風水害で崩壊）を利用していたようです。

橋の名称「大僧」は、昔の小字名をとって名付けられました。

### 2 法泉寺橋

橋の名称「法泉寺」は、昔の小字名をとって名付けられました。

江戸時代以降、周辺には多くの水車場が建てられていました。現在の橋は平成12年に架け替えられました。

### 3 高座橋

明治から大正にかけての交通機関の発達に伴い、住宅地が増加し、村内の里道の利用度が高まりました。

そんな時代の中で、明治 40 年の村議会で、高座橋が整備されることに決まりました。

現在の橋は昭和 30 年に架け替えられ、近隣の人や山手中学校の生徒ら、ハイカーたちにも親しまれています。



井上正三「開森橋と城山」（1996 年 / 水彩）



大僧橋



高座橋



法泉寺橋



水車臼跡（山芦屋町 / 芦屋川沿い）



# F 芦屋トピックス　芦屋・橋ものがたり

## 宮川に沿って

宮川は、打出川また都川ともいい、古くは呉川と呼ばれていました。源を劔谷に発して奇岩の間を清流し、水道橋付近で朝日ケ丘町の西・東山町の渓谷から流れてくる支流を合わせ川幅が広くなり、一直線に海へと流れています。全長約３㎞余り、下流の両岸は大正年間までは松林となっていて打出の名勝地でしたが、昭和に入ってから水害を防ぐための護岸工事が行なわれ、現在に至っています。

宮川の名称は、下流に金比羅神社をお祭りしてあったので、その名が付けられたものと考えられます。江戸時代の「摂津名所大絵図」や「山論図」などには、打出川や都川の名も見られます。

現在、宮川には下流から汐見橋・宮川大橋・汐凪橋・下宮川橋・浜打出橋・川原橋・西蔵橋・宮川橋・常盤橋・宮塚橋・西国橋・打出橋・上宮川橋・親王塚橋・芦月橋・岸ノ郷橋・川端橋・有楽橋・岩園橋・水道橋の20の橋が架かっています。

その内のいくつかをご紹介します。



宮川大橋

### 宮川に架かる橋

### 1 宮川大橋

昭和53年４月、シーサイドタウン誕生に先立ち、現在地に架けられました。幅約14ｍ・延長49ｍの橋には、広い歩道と車道との間に、さざなみを連想させる銀色のオブジェが美しく輝いています。

シーサイドタウンの東西をつなぐこの橋は、阪神・淡路大震災で大きな被害を受け、平成９年に大改修されました。

### 2 汐凪橋（しおなぎばし）

芦屋浜の埋め立て以前は、宮川の最も下流に架けられた（昭和12年）橋でした。

防潮堤線の整備工事に伴い、昭和54年、現在の汐凪橋が架けられました。



汐凪橋周辺

この橋の周辺には、今もカモメたちが群れてやってきて、のんびりと羽を休める姿を見ることができます。

### 3 宮川橋

国道43号に架かる宮川橋は、昭和35年の第２阪神国道の整備に伴って架けられました。

この橋は国が管理している橋ですが、阪神・淡路大震災後には改修され、現在に至っています。



岩園橋



親王塚橋



打出橋



宮川橋

### 4 西国橋（さいごくばし）

昭和28年に架けられた木造の橋を、昭和42年にコンクリート橋に改修し、現在に至っています。

この橋の名称は、かつての西国街道に架かる橋とのことで名付けられました。

### 5 打出橋

大正15年、阪神国道（国道２号）の整備工事に伴い、鉄筋コンクリート造の橋が架けられました。この橋は、昭和13年の阪神大水害や同20年の空襲、また同25年のジェーン台風や、平成７年の阪神・淡路大震災などにも耐え抜いてきました。

### 6 親王塚橋

昭和31年に小さなコンクリート橋として架けられた橋でしたが、山手幹線の供用開始に伴い、平成17年に現在のような大きな橋に架け替えられました。

橋の名称は、翠ケ丘町にある阿保親王塚に続く道に架けられたことによると考えられます。

### 7 岩園橋

昭和36年に架けられた橋。阪急線高架の北側にあるこの道は、宮川けやき通りと交差し、仲ノ池から西宮市へと続く、交通量の多い山手の主要道路の１つです。

### 8 水道橋（すいどうばし）

昭和35年に架けられた橋。この付近で、朝日ケ丘の西・東山の渓谷を流れてきた支流が宮川に合流しています。橋の名称は、水道管を対岸へ渡すための設備も備えた橋というところから名付けられたものと考えられます。

# F 芦屋トピックス　芦屋・橋ものがたり

## その他の橋　Ⅰ




### 六麓荘町に架かる橋





**月見橋**（平成14年撮影）
六麓荘町開発当時の面影を残す「月見橋」。
邸宅内を流れる小川は、道路に接するところで再び暗渠となって、地中を下流へと流れていきます。

六麓荘町は、“東洋一の健康地”をキャッチフレーズに、株式会社六麓荘が、昭和４年に剱谷国有林の払い下げを受けて住宅地建設を始め、上下水道や電線を地中化するなど、当時としてはとても画期的な住宅地として昭和６年に誕生しました。

住宅地の中に残る橋も、この当時に架けられたものと考えられます。北から、雲渓（うんけい）橋・紅葉（もみじ）橋・月見橋・落合橋・剣谷（つるぎや）橋・清見橋・日の出橋・寶来（ほうらい）橋・八十塚（やそづか）橋と、虹見（にじみ）橋が現在も見ることができます。これらの橋の下を流れる水路は、時には邸宅地内の借景となり、また地表に一部その姿を見せつつも、ほとんどは地中に隠れたままで下流へと流れています。

## その他の橋　Ⅱ

### 海に架かる橋

シーサイドタウンと南芦屋浜の間には、キャナルパークが横たわっています。
この水路に架けられたのが、東から、浜風大橋・あゆみ橋（人道橋）・潮風大橋です。
キャナルパークでは、毎年、夏にドラゴンボートレースが開催されます。スタート地点は潮風大橋の下で、何艘ものドラゴンボートが西へ向かい疾走していきます。
この潮風大橋と東の浜風大橋には路線バスも走り、またあゆみ橋（人道橋）は、陽光町からシーサイドタウンの若葉町をつなぎ、通学路や住民の皆さんの生活にも欠かせない橋として親しまれています。


ドラゴンボートレース（キャナルパーク）


陽光緑地に咲くフヨウ（キャナルパーク南護岸）

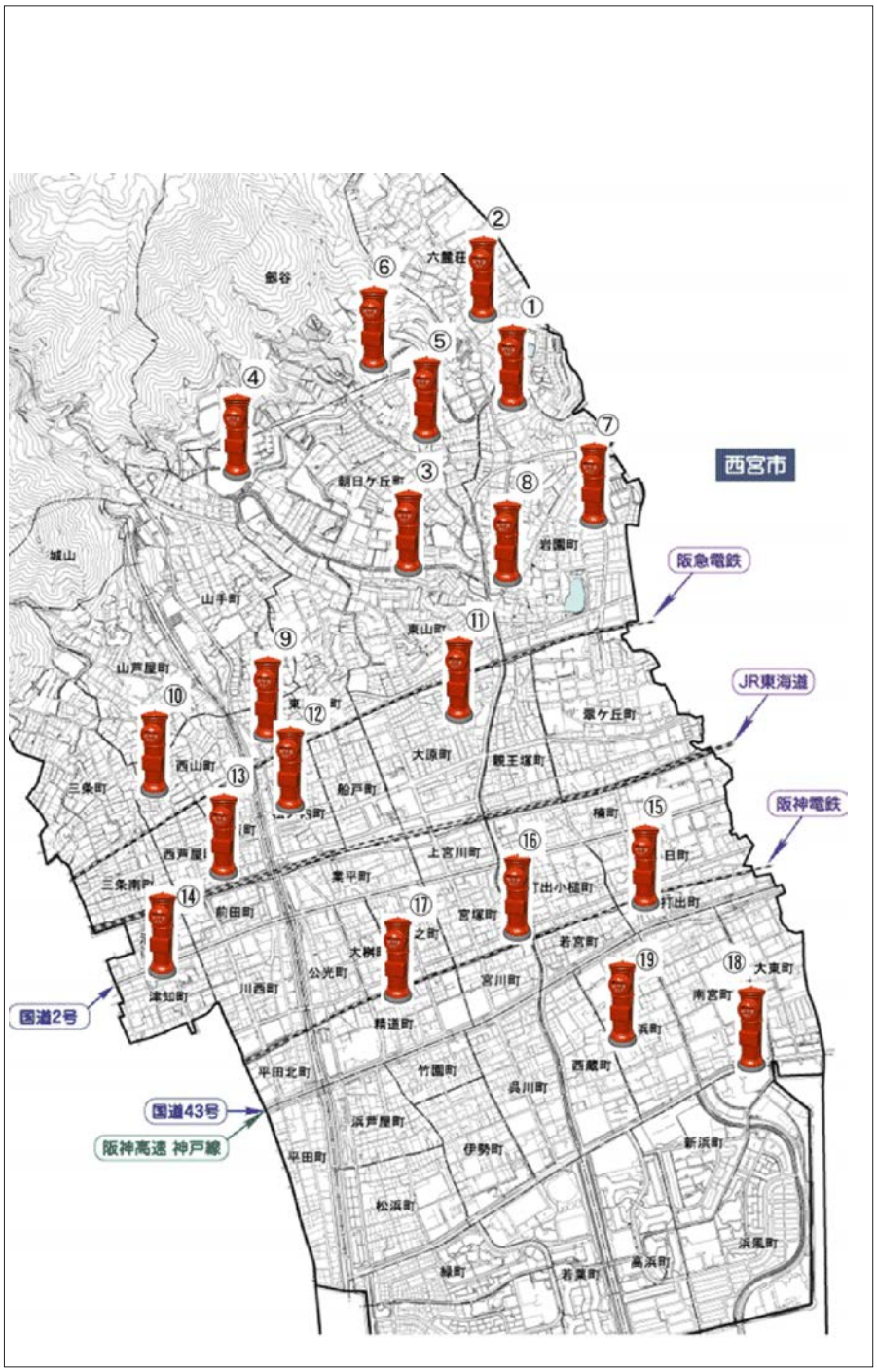
# F 芦屋トピックス　丸型１号ポストの似合うまち

今ではあまり目にすることのなくなった丸型ポストですが、芦屋市内ではよく目にすることができます。市内には箱型のポストを含め 98 本のポストが設置されていますが、その内の 19 本が丸型ポストです（平成 24 年 11 月現在）。

丸型ポストの正式名称は「郵便差出箱１号（丸型）」で、昭和 24 年から昭和 45 年まで生産されていました。現在設置されている丸型ポストは、一番新しいものでも 40 年以上、古いものになると 60 年以上も使用され続けています。老朽化や破損などにより郵便物が守れなくなった場合には箱型ポストに替わってしまいますが、市民の皆さんが大切に使用し、郵便局の皆さんがこまめに清掃や塗り替え等をしてくださっているため、19 本の丸型ポストが現役で活躍しています。

阪神・淡路大震災で傾いたポストもありましたが、修復され本数を減らすことなく現在も使用されています。

美しい街並みを残すため、さりげなく努力する芦屋市民の気質と積み重ねの象徴ともいえる“丸型ポスト”。そんな“丸型ポスト”のある風景を探しに、市内を散策してみませんか。





①六麓荘町９（日の出橋東詰）


②六麓荘町 16（六麓荘駐在所）


③朝日ケ丘町６（消防署東山出張所・北西向き）


④朝日ケ丘町 13（甲南高校前バス停）

# F 芦屋トピックス　丸型１号ポストの似合うまち



⑤朝日ケ丘町 33（芦屋病院西口南東・さくら参道）



⑩西山町７（サンモール商店街・西道路）



⑯宮川町１（県立芦屋高校・東交差点北）



⑥朝日ケ丘町 38



⑫大原町 16



⑰精道町９



⑦岩園町 15（岩園町バス停・南向）



⑬松ノ内町３



⑱南宮町 17



⑧岩園町 23（岩園小学校・南西角）



⑭前田町６（JR 東海道線・沿線南）



⑲浜町 19（エルホーム芦屋・北西角）



⑨東芦屋町４（阪急電車神戸線・沿線北）



⑮打出町２（打出交番・東）



⑳浜風町１（浜風小学校内）

# F 芦屋トピックス　関西初 ― 打出浜海水浴場

## 海水浴

関西で海水浴場が開設されたのは、打出浜が最初でした。

明治 39（1906）年に、大阪毎日新聞社主催として、紙上に「打出海水浴場開設」の社告が出たところ、南海電鉄が急きょ大阪・浜寺に開設したといわれています。



大正時代中ごろの打出海水浴場

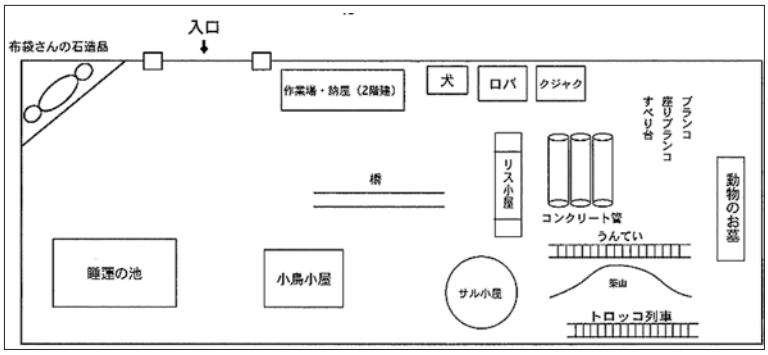


昭和初期の海水浴場



芦屋浜海水浴場のスナップ（昭和 12 年）

# F 芦屋トピックス　小説「ミーナの行進」を生んだ－伊藤動物園



伊藤動物園の内部見取り図（平成 16 年 4 月 15 日号・「歴史散歩 60」掲載）

広報あしやでは「伊藤動物園」について、『歴史散歩』43 回・60 回の 2 度にわたり紹介しています。

『西芦屋町』という町名は、旧大字芦屋の西側に位置することから、昭和 19（1944）年の町名改正で名付けられました。

町名改正が行われる以前、町内には「寺田」・「岸ノ下」・「西ノ口」の三つの小字名がありました。

昭和初期、その小字寺田の一角に入園無料の私設動物園「伊藤動物園」（通称）がありました。200 坪の園内には、ロバ・サル・クジャク・リス・ウサギ、池付の小鳥小屋があり、ゾウの形をした滑り台・ブランコなどの遊具も完備され、手作りの砂山やトンネル（コンクリート管を代用）もありました。

また、動物園の入り口には「布袋さん」の石造品もあったと言われています。

（「広報あしや」平成 14 年 11 月 15 日号・抜粋）

園内には５メートル前後のトロッコ列車や、門構えも立派なリス小屋、ぶら下がって遊ぶ「うんてい」やコンクリート管内に固定された椅子、石が埋め込まれた築山などが設置され、子ども達の探検心を誘うような工夫に富んだ所だったようです。

また、園内から逃げ出したサルが近隣の家に入りこみ、食べ物をあさるところをよく見たという目撃談や、園の入口には凝灰岩で造られた大きな布袋の石造品があり、その石造品は現在も山手町に安置されているという後日談もあります。

さらには、氏の息子であった正太郎氏は、動物園で飼われていたロバにまたがり、精道尋常高等小学校（現精道小学校）に通っていたという、当時の芦屋を偲ばせる話も寄せられています。

（「広報あしや」平成 16 年 4 月 15 日号・抜粋）

## ■第 42 回 谷崎潤一郎賞　受賞記念 特別講演会

## 「物語と私」　小川　洋子　<要約>

私は 2002 年からご縁がございまして、この芦屋に住んでおります。谷崎潤一郎記念館から、自転車ですぐのところですので、私は日本で谷崎記念館の最も近くに住んでいる作家ということになると思います。ですので、今回、谷崎賞をいただけたということは、大変ありがたく、嬉しく思っております。

芦屋で家を探そうと、不動産屋さんの車に乗って、北から南に向かい芦屋川沿いに走ったとき「ここは南仏かな」と思うくらいに驚きました。自分が生まれ育った岡山とは、あまりにも風土が違う感触を得ました。松林がありテニスコートがあって、その反対側にはすごく大きなお屋敷が並んでいて、前を見ると海が見え、振り返ると山があり川が流れている。風景がとても洗練されていて、どこか外国にいるような、とても乾燥した新鮮な風景だなと思い、一度で芦屋が好きになりました。

住みはじめてしばらくした頃、「広報あしや」の中の『歴史散歩』という小さなコラムに、芦屋に私立の動物園があったという、そのような紹介記事がありました。

そこには、戦前のことですけれど、ある製薬会社の社長さんのお家が、ロバ・サル・クジャク・リスなどを飼っていて、それを近所の子どもたちに無料で開放していたといったエピソードが紹介されていました。

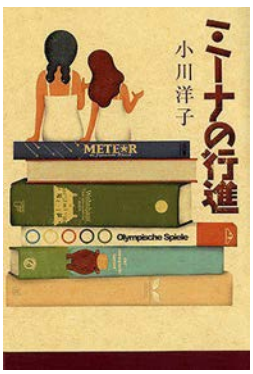
また、そこの息子さんは、自宅動物園で飼っていたロバに乗って、精道小学校まで通っていたといいます。

それを読んだときに、ぱっと映像が浮かんできました。芦屋のお屋敷街に住んでいる子どもが動物に乗って毎朝学校に通う…、その小さなエピソードに心惹かれたことが、今回の受賞作となった「ミーナの行進」のスタートとなりました。

それを機に、芦屋のまちの歴史を調べてみますと、昭和 40 年代にはすでに日本で初めてクレープというお菓子を売っていたお店があったとか、フランスパンを芦屋ではすでに食べていたとか、とてもワクワクするようなエピソードがたくさんありまして、そういう一つのまちを知っていく喜びの中で「ミーナの行進」のお話ができあがっていきました。

ですから、この小説は、私が偶然芦屋に住むということがなければ、決して生まれることのなかった小説だと思います。

（「広報あしや」平成 19 年 1 月 1 日号・抜粋）



第43回 谷崎潤一郎賞を受賞した「ミーナの行進」（表紙）

# F 芦屋トピックス

## ★ 芦 屋 児 童 の 村 小 学 校

大正 14 年神戸市御影町に設立された「児童の村小学校」は、翌 15 年には芦屋字前田に移転、新教育を謳った私立「芦屋児童の村小学校」が誕生しました。このときの児童数は 38 人。１教室ごとに別棟建ての住宅式を採用、家庭的・平和的な愛の学園を校風としました。

「芦屋児童の村小学校」は、戦時色へと染まっていく時代の中、昭和 13 年までこの地に存続しました。



芦屋児童の村小学校



芦屋児童の村小学校（昭和３年撮影）

# F 芦屋トピックス

## ★ 東 洋 牧 場

“しぼりたての牛乳”で親しまれた東洋牧場は、大正年間に乳牛約50頭を飼育し、年間の搾乳量は約300余石（54,000リットル余）をあげ、精道村内や灘地方に販売されました。
東洋牧場は、終戦間際の空襲により、昭和20年に焼失しました。




東洋牛乳株式会社（明治40年～昭和20年）



東洋牧場のようす　（昭和初期／川西町）




*To be continued in the Future.*

# G 参 考 〈広報あしや・抜粋〉



井上正三「松浜町・芦屋公園の藤棚」（1996 年 / 水彩）

ました。その後、大正十二年に、現在の市役所北側に、鉄筋コンクリート造三階建ての、当時日本一といわれた村役場が新築されました。

明治以前の芦屋の生業は、主として農業と漁業、また芦屋川の急流を

校長であった佐多愛彦氏が、その専門とする結核病学的立場から、芦屋の山手地帯を阪神間第一の健康地と喧伝し、自らも別荘を建て、松風山荘住宅地の基を開きます。

それとともに、大正二年の国鉄芦

出丘陵地、宮川上流の丘陵地へと発展していくことになりました。

これとともに、剱谷国有林の一部払い下げを受けた株式会社六麓荘の土地区画整理の設計が昭和四年に認

まちが昭和六年に完成しました。

さらに昭和十二年、六麓荘に芦屋国際ホテルが竣工。戦後、ＧＨＱに接収されるまで営業していました。

その後、国際ホテルは芦屋女学校

こうして精道村では、全村に電話・上水道、その他の都市施設も相次いで完備し、高級住宅地としての形態を、次第に整えていったのです。

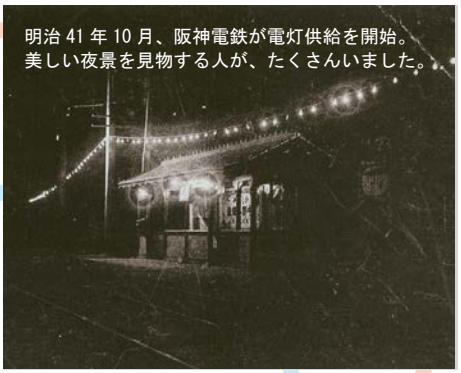


▶右の写真は、昭和初期の城山橋でのスナップ写真。城山橋は、開森橋の北、現在の大僧橋北詰から芦屋川東端へかかっていました。当時としては珍しい写真。

■この頁の写真は、主に市制施行50周年記念写真集「芦屋今むかし」から転載しています。



大正４年ころ、芦屋川を渡る阪神電車
明治 38 年４月開通時、芦屋・打出駅が設置された。



明治 41 年 10 月、阪神電鉄が電灯供給を開始。
美しい夜景を見物する人が、たくさんいました。



大正 12年６月14日
村役場新庁舎完成



大正時代、芦屋遊園（業平橋南付近）を
走るタクシー



大正９年７月、阪急電車神戸本線開通。
芦屋川停留所が設置されました。

# 《芦屋市制》誕生前夜点描

昭和15年11月10日。この日、精道村民の永年の宿願であった市制施行が実現、全国で173番目の市として歩き始めました。

そして来年、本市は「市制施行70周年」を迎えます。

市制施行69周年の本年、芦屋市誕生前夜の様子を振り返り、当時の人々の努力と、その思いに触れてみたいと思います。

## 精道村のころの芦屋

### ■精道村の誕生

明治二十二年（一八八九）は、大日本帝国憲法が発布された（二月十一日）歴史的な年でしたが、また市町村制が実施され、芦屋村・津知村・三条村・打出村の旧四村が合併し、「精道村」が誕生した記念すべき年でもありました。

「精道村」の村名は、精道小学校の校名から命名されました。この校名は、西宮の学者豊田政苗が書いた「養精修道」の語から二字を選んだといわれています。

また精道村役場は、芦屋樋口新田（現在の精道小学校内）に設けられ利用した水車産業などでした。

### ■高級住宅地としての発展

明治維新以後、大阪・神戸の二大都市が近代都市としての新たな発達を始め、ことに日清・日露戦争を経て、その発展は目覚しくなりました。

そんな中、二大都市近郊に位置する芦屋の地は、両市に興隆した当時の実業家たちの注目を集めるところとなりました。

そして、明治三十八年の阪神電車開通を機に、阪神芦屋駅周辺の芦屋川扇状地を中心に、これら実業家たちの邸宅が建ち始めました。次いで明治四十年には、大阪府立高等医学


大正９年、芦屋海岸

屋駅開設、大正九年の阪急電車開通により、芦屋川を挟んだ山手丘陵地に邸宅建設が伸び、芦屋川を中心とした広壮な住宅街が形成されていきました。

ところが、芦屋川を中心とした住宅地の発展も、早くも昭和初年には飽和点に達し、市街地は引き続き打




可され、この計画に従って、東洋一を謳った高級住宅街が建設されます。

ここでは街路の完全舗装、電力・電話線の地下埋設、上下水道整備や巡査派出所まで完備され、近代的な

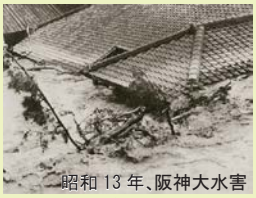


昭和12年ごろ、本通り商店街付近

の手に渡り、現在は芦屋大学となっています。

## 精道村から芦屋市誕生までの略年表

| | |
|---|---|
| 明治19年 | 精道小学校成立 |
| 明治22年４月１日 | 芦屋村・津知村・三条村・打出村が合併して“精道村”誕生 |
| 明治24年３月 | 精道村に消防組織を開設 |
| 〔明治27年７月～28年４月 | 日清戦争〕 |
| 〔明治37年２月～38年９月 | 日露戦争〕 |
| 明治38年４月12日 | 阪神電車開通（芦屋駅・打出駅） |
| 大正元年８月１日 | 兵庫県芦屋郵便局設置 |
| 大正元年８月29日 | 神戸ガスが打出にガスタンク設置 |
| 大正元年11月 | ガスの供給開始 |
| 大正２年８月１日 | 国鉄芦屋駅開設 |
| 〔大正３年７月～７年11月 | 第１次世界大戦〕 |
| 大正７年７月13日 | 村立隔離病舎（精道病院）設置 |
| 大正９年７月16日 | 阪急電車開通 |
| 昭和２年４月１日 | 阪神国道（現２国）開通 |
| 昭和２年４月30日 | 芦屋警察署創設 |
| 昭和２年７月１日 | 阪神国道電車開通 |
| 昭和２年９月15日 | 村営三条火葬場操業開始 |
| 昭和３年４月１日 | 阪神芦屋バス開通 |
| 昭和３年７月28日 | 阪急バス開通 |
| 昭和４年４月１日 | 阪神国道バス開通 |
| 昭和６年10月15日 | 村営塵芥焼却場設置 |
| 昭和９年９月21日 | 室戸台風により大きな被害 |
| 昭和10年５月18日 | 下水道工事着工 |
| 〔昭和11年２月26日 | 2.26事件〕 |
| 昭和11年 | 公光町治療所設置 |
| 〔昭和12年７月７日 | 日中戦争始まる〕 |
| 昭和13年３月30日 | 奥山浄水場完成。給水開始 |
| 昭和13年７月５日 | 阪神大水害で大被害 |
| 〔昭和14年９月１日 第２次世界大戦始まる〕 | |
| 昭和15年11月10日 | 173番目の市・芦屋市誕生 |
| 〔昭和16年12月８日 第２次世界大戦日本参戦〕 | |


昭和13年、阪神大水害（松ノ内町付近）



▶フランク・ロイド・ライト設計のヨドコウ迎賓館（大正十三年・旧山邑邸）《重要文化財》

を持ち、加えて娯楽が提供されることでした。それまでの日常生活では考えられなかったモダンな生活が提唱され、現実のものとなり始めます。

そして、この時期の生活スタイル

福井一郎も芦屋に住んでいました。山崎が京都から「健康地」を求めて結核の療養のために訪れていたのに対し、福井は資産家の家に育ち、芦屋に別荘住まいをしていました。いずれも、当時の阪神間に移り住んだ人々の典型を見ることができます。

そして、芦屋に住み、日本独自の油彩画を目指した小出楢重にとっても、芦屋は一番近い西洋だったようです。

また、長谷川三郎・吉原治良という、二人の日本の抽象絵画のパイオニアを生んだ土壌も、阪神間のライフスタイルと無縁ではないでしょう。



貴志康一

ロシア人音楽家と出会い、音楽家・貴志康一となって、芦屋から世界へと羽ばたいていきました。

また、明治三十八年に精道村で生まれ、後に吉田総理の懐刀と呼ばれた白洲次郎も、貴志と同時代に芦屋で幼・少年期を過ごしています。

③芦屋仏教会館（前田町）／片山安設計（昭和二年）

④滴翠美術館（山芦屋町）／安井武雄設計（昭和八年）

⑤中山悦治邸（山芦屋町）／村野藤吾設計（昭和九年）

### ■時代の中の阪神間文化

明治以降、芦屋に移り住んだ有産階級の人々によって、阪神間文化のベル・エポックが築かれたといっても、過言ではありません。

しかし阪神間文化の栄華は、昭和五年ころをピークとし、やがて戦時色に染まっていきました。

## 精道村から芦屋市へ

全国屈指の富豪村として発展してきた精道村は、昭和十五年十一月六日付け内務省告示第五八〇号により、精道村を廃しその区域をもって芦屋市を置くことが認可され、同月十日、時あたかも皇紀二六〇〇年記念祝典挙行の日を期して市制を施行し、ここに芦屋市の誕生を迎えました。

芦屋市は、全国で一七三番目にできた市ですが、とくに重要なのは、村から一躍して市になったことです。

また新市名には、精道村の大字名であった「芦屋」が全国的に知られていたので、これを市名としました。

同年十二月二十六日には、初めての市議会議員選挙を実施し、定数三十人の議員が選出されました。

翌十六年一月九日の市議会で、初代市議会議長に山村伊左衛門氏、副議長に高津久四郎氏が選出。次いで一月三十一日には、それまで臨時市長を務めていた大利市右ヱ門氏が、初代市長に就任。さらに二月十日には、初代助役の筏鹿一氏、初代収入役には矢島末蔵氏がそれぞれ就任し、初代市三役が揃いました。

その一方で、市制施行の年には日独伊三国同盟が結ばれ、昭和十六年十二月八日、日本も第二次世界大戦へと参戦していきました。



▲昭和15年11月10日、市制施行祝賀式（精道小学校）
▼市制施行を祝う市民（市役所前）






▼下欄は、当日の新聞（平田町・八木幸一氏提供）

# 《芦屋市制》誕生前夜点描

## 阪神間モダニズムの開花


大正４年ころ、芦屋川を渡る阪神電車
明治 38 年４月開通時、芦屋・打出駅が設置された。


大正時代、芦屋遊園（業平橋南付近）を走るタクシー

### ■ライフスタイルの変革

明治以後の工業化に伴う生活環境悪化によるためか、大阪市内に店を構える商人・弁護士・医者をはじめとする富裕な階級は、近代的生活の第一歩として、空気の良い、緑豊かな地での生活を求めました。

なかでも、山・海・明るさといった自然環境の条件が満たされた阪神間に、人気が集中しました。

当初別荘地として求められていた阪神間は、やがて阪神電車の開通とともに、通勤可能な生活居住地として脚光を浴びるようになりました。

彼らの求めた生活とは、自然の恩恵を受け、高尚な趣味や研究テーマこそが、今日の生活スタイルの基盤となったものと考えられています。

### ■芸術家たちの芦屋

阪神間の雰囲気を最も早く吸収したのは、画家・中川一政（一八九三～一九九一）でしょう。彼の回想録には、「大正三年、私は摂津の芦屋にいた。裸で浜へ行ける距離のところに斎田という家があり、詩人の富田砕花が家族のようにしており、私を呼んでくれた。（中略）当時の芦屋は、松林の中に流れひなびていたが、肉屋がアメリカ帰りであったり、ミッションスクールがあったり、どこかハイカラなところがあった」と記しており、その当時、深江の酒蔵を描いたのが、中川の画家としての第一歩でした。

大正の初め、画家の山崎福之助と一方、新しく精道村に居を構えた資産家たちの中からは、従来の書画骨董だけでなく、洋画を収集するコレクターや、洋画家たちを支援するパトロンが現れました。特筆すべきは、滴翠と号した山口吉郎兵衛と謙四郎の兄弟でしょう。滴翠美術館は、旧三和銀行の前身である山口銀行頭取であった故山口吉郎兵衛が蒐集した古美術類（陶磁器・人形・かるた等）を展示していました。

現在の建物は、吉郎兵衛の住宅（建築家・安井武雄氏設計）を改装したもので、近年の「関西モダニズム建築二十選」の中に名を連ねています。

また、船場の実業家で大正半ばに芦屋に移り住んだ山本発次郎は、短期間に佐伯祐三の作品百五十点余りを収集。昭和十二年には東京で回顧展を開催したり、画集を発行するなど、佐伯への傾倒は並々ならぬものがありました。

音楽の世界では、今年生誕百年を迎える天才的音楽家・貴志康一が、大正五年から芦屋に住んでいました。

そして、文化村に住んでいた亡命


製作中の小出楢重
昭和３年、川西町アトリエ

中山岩太「パイプとグラスと舞台」
昭和７（1932）年



文学では、富田砕花・谷崎潤一郎をはじめ、山口誓子・高濱年尾・星野天知・生田俊月・柳沢健・吉沢独陽・早野臺氣・児玉隆男ほか、多くの詩人・歌人・文学者が活躍しています。

写真の世界でも、中山岩太・ハナヤ勘兵衛・紅谷吉之助らが、昭和五年に「芦屋カメラクラブ」を設立し、それまでの営業写真から芸術作品としての写真の世界を築き上げました。

### ■モダニズムと洋風建築物

①ヨドコウ迎賓館（旧山邑邸・山手町）／F・L・ライト設計（大正十三年）

②山本発次郎邸（山芦屋町）／竹腰建造設計（大正半ば）


ヨドコウ迎賓館（旧帝国ホテル建設のため来日していたF.L.ライトが、大正７年に設計。山邑家住宅）・４階食堂大正 13 年に完成した。

※「芦屋市制誕生前夜点描」は、前ページから続いています。

# 県史跡第１号指定から半世紀経て「国史跡」　答申

# 高地性集落「会下山遺跡」

考古・古代史の世界では超一級の遺跡として知られてきた会下山遺跡は、市民が発見以来 50 年にわたり守ってきた大切な本市の宝です。すでに兵庫県史跡第１号でしたが、昨年の 11 月には「国史跡」指 定の答申を受けました。今号では、半世紀に及ぶ歴史的な経過を特集し、会下山遺跡の過去・現在・未来をご一緒に考えたいと思います。

問い合わせ　生涯学習課文化財担当　TEL 38-2115

## 会下山遺跡の文化的価値

会下山遺跡は、三条町に所在する今から約二千年前の弥生時代の集落跡です。昭和二十九年に、山手中学校による会下山山腹の造道工事中に生徒が弥生土器を発見し、その後、昭和三十一～三十六年には、遺跡の内容を明らかにするため、五次にわたって発掘調査が実施されました。

その結果、山頂や尾根から竪穴住居跡や倉庫跡、祭祀場跡、火焚き場跡などが見つかりました。そして、米作りを生業としていた弥生時代において、まったく不適な山のムラがあったことが明らかになり、見晴らしが大変良好な立地と合わせて、山に住む特殊な集落（高地性集落）として全国的に有名になりました。さらに、昭和三十五年には学術的な価値が評価され、兵庫県史跡第一号に指定されました。

発掘調査後、遺跡は歴史教材園として整備され、歴史学習の場として活用され続け、現在に至っています。

最初の発掘調査から半世紀が経過した平成十九～二十一年度には、この遺跡の内容を現在の学問的な水準で改めて検証するために発掘調査を実施しました。その結果、本遺跡がこれまで想定されてきたような、狭いやせ尾根上に竪穴住居が数棟営まれた小規模な集落ではなく、山腹や山裾にまで広がる、規模の大きい集落として、長期間にわたって営まれたことが明らかとなりました。

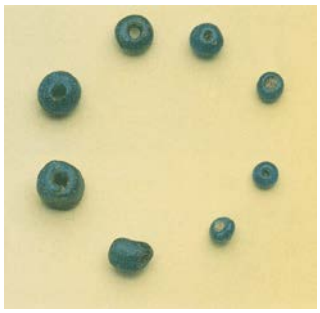
さらに、出土品には、青銅製漢式三翼鏃（本市指定文化財）や多数の鉄器、近江や河内・播磨・讃岐などの各地域から持ち込まれた土器などが認められ、本遺跡が閉鎖的な環境ではなく、先進的な文物や遠隔地の物資を、活発な交流によって入手していたことも明らかとなりました。

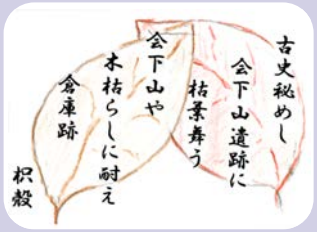
会下山遺跡の調査で明らかとなった多くの成果は、これまでの弥生文化像に再考を迫り、今後は、日本の古代史を考える上でも大変意義あるものになることでしょう。



遺跡から出土した弥生土器

遺跡から出土したガラス玉






●詠み人・村川 行弘氏

枳殻（きこく）と号された。考古学者。昭和 34 年の大阪城総合学術調査で石垣の刻印を調査し、現存する大坂城の石垣が徳川時代の再築と裏付けた。また会下山遺跡では第１～５次の調査担当者で、本市文化財保護審議委員を長年務め、本市の第１回市民文化賞受賞。昨年４月、83 歳で逝去された。



⑤東斜面裾部の段状遺構（2009 年）



④特異な構造の焼土坑（2009 年）




③炎天下での調査風景（1960 年）



六甲南東麓斜面に位置する会下山遺跡（赤色枠線内が遺跡範囲）

## ■高地性集落「会下山遺跡」発掘の歴史

| | | |
|---|---|---|
| 昭和 29 年（1954 年） | 会下山遺跡の発見 | |
| 昭和 31 年（1956 年） | 第１次発掘調査 | 写真①<br>写真②<br>写真③ |
| 昭和 33 年（1958 年） | 第２次発掘調査 | |
| 昭和 34 年（1959 年） | 第３次発掘調査 | |
| | 第４次発掘調査 | |
| 昭和 35 年（1960 年） | 兵庫県史跡第１号指定 | |
| 昭和 36 年（1961 年） | 第５次発掘調査 | |
| 昭和 39 年（1964 年） | 報告書『会下山遺跡』刊行 | |
| 昭和 46 年（1971 年）・昭和 51 年（1976 年） | 『新修芦屋市史』本篇・資料篇に会下山遺跡の内容を紹介 | |
| 昭和 48 年（1973 年） | 第６次発掘調査 | |
| | 報告書『会下山弥生遺跡』刊行 | |
| 平成 14 年（2002 年） | 第７次発掘調査 | |
| 平成 18 年（2006 年） | 会下山遺跡発掘開始 50 周年記念事業<br>＊ルナ・ホールで、苅谷俊介氏による記念講演と「歴史フォーラム」を開催（６月 25 日） | |
| 平成 20 年（2008 年） | 第８次発掘調査 | |
| 平成 21 年（2009 年） | 第９次発掘調査 | |
| | 第 10 次発掘調査 | 写真④⑤ |
| 平成 22 年（2010 年） | 『会下山遺跡確認調査報告書』刊行 | |
| | 国史跡指定の答申 | |

## 近年の調査を振り返って

平成十九～二十一年度の三カ年で実施した第八～十次発掘調査によって、これまで分かっていなかった会下山遺跡の歴史像を塗り替える、数多くの発見がもたらされました。

その一つは、これまで山頂から尾根部にかけてのみ存在すると考えられていた遺跡が、東斜面裾部など標の溝状遺構を確認しました。

この溝は、人や獣の進入を防ぐほか、この山に住む人々の精神的な意味での結界も示していたと考えられます。

さらに、三つめに非常に高い熱を受けた穴が見つかりました。「焼土坑」と呼ばれる遺構で、穴の表面には粘土を塗り込め、真っ黒に炭化していました（写真④）。この構造から、通常の炊さん施設やのろし跡とは異なり、金属やガラス・土器などを生産する工房跡の可能性が指摘されています。

このように、発掘開始から五十年の節目を迎えて実施した近年の発掘調査では、会下山遺跡の実像に迫る大きな成果を得ることができました。



②昭和 30 年代の調査



①発掘調査の幕開け

# 会下山遺跡（えげのやま）

## 発掘の歴史

1956 年～ 2009 年



①後円部発掘のようす

市内の東部、西宮市との市境には翠ケ丘丘陵と呼ばれる広くて長い台地が広がっています。この台地上には、古墳時代前期や中期の築造である阿保親王塚古墳や金津山古墳など大形古墳の緑樹におおわれた墳丘が現存しています。また、かつては、駒塚古墳や四ツ塚と呼ばれる横穴式石室墳、塚や古墳の伝承をもつ鞍塚やうの塚、元塚や大藪小藪塚といった小さな円丘も点在していました。

しかし、これらの多くは近代以降の開発により、次々に姿を消していきました。



入れ墨の施された人物埴輪

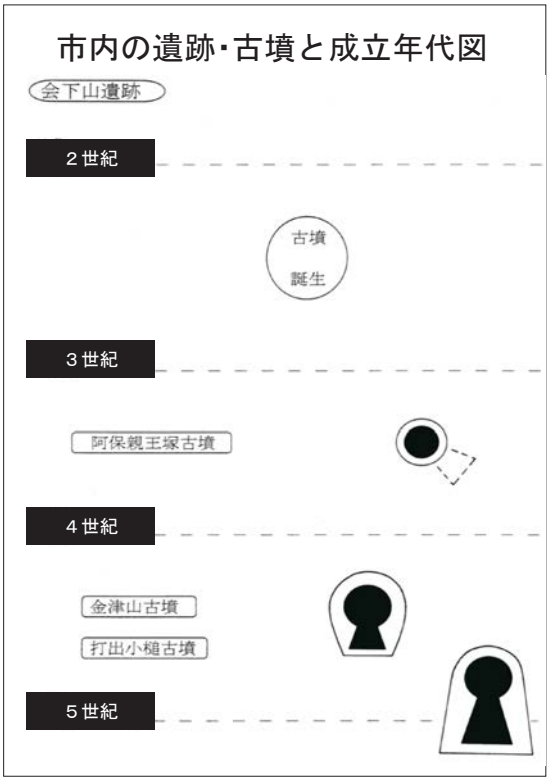
平成元年には、濠の南東端が確認され、濠が北西方向に曲がることと、濠の長さが四十メートルを超えることが明らかになり、造り出しを基点にすると、一辺二十六メートルの墳丘となります。後円部周濠のその姿がようやく現われたのです。すべり落ちた葺石や埴輪がたくさん見られましたが、前方部とは違って、墳丘の裾を明らかにする基底石(葺石の最下段に並べられたやや大振りの石)は残っていないことが判明しました。



②埴輪と葺石の出土状態



③築造時期を示す円筒埴輪(５世紀末ころ)




## 芦屋の土地だけでなく、もっと広い地域を治めた被葬者

出土した埴輪や須恵器から、金津山古墳、次いで打出小槌古墳が築造されたものと考えられます。

打出の地には、五世紀後半から末に、帆立貝形古墳→前方後円墳と続く有力首長の墓が築かれたことが明らかになっています。この時期、倭の五王の時代には、阪神地域において、大形の古墳を継続して築いているのはここだけです。

これらの古墳の被葬者の勢力圏は、旧菟原郡を超えてかなり広大であったことがうかがえます。

よく問われる被葬者については、大阪湾岸の沿岸地域を中心に広い統治を示す職掌が込められた、凡河内直一族が考えられます。彼らは地方官ながら、航海祭祀や海運とも関係するなど、北部九州の遠い場所にまで活発な活動を示しました。

打出小槌古墳には、そのことを示す九州系の埴輪や装飾古墳の顔料が用いられています。

打出丘陵一帯には、まだまだ埴輪が出るところがあり、金津山古墳や打出小槌古墳に近い時期に造られた古墳があるようです。若宮町などにも、打出小槌古墳や金津山古墳と関連のある、未知の古墳群が埋没していることも分かってきました。

芦屋の有力古墳は、やがて行政組織の確立する古代社会と深く関係し、私たちの祖先の長い歩みの連続性とそのリーダーたちの活躍や、築造にかかわった民に光を照らす、文化財保護の大切さを教えています。

# 住宅地の土中に眠る大豪族の墓を掘る
## 埋葬者が分かりつつある打出小槌古墳

宅地化した町並みの下からは、古墳の痕跡が突如現れ、私たちを驚かせることがあります。その好例の１つが、今夏に行った打出小槌古墳です。今回は、この発掘調査の概要について紹介します。

この打出小槌古墳は、出土品やその大きさから阪神間を代表するものであることが判明し、さらにその巨大な勢力を誇る豪族の存在を新たに考える必要も出てきました。

問い合わせ　生涯学習課文化財担当　℡ 38-2115

### 発見から二十四年後の夏…後円部がその姿をついに現した

この古墳は、金津山古墳の西方百メートルほどにあるマンション建設予定地で、昭和六十一年（一九八六）二月に、最初に見つかったものです。埴輪の破片と、葺石の可能性のある円礫が出土したのを契機とします。

周辺では、昭和初期に国道２号の工事に伴って、打出天神社の北西側で埴輪の出土が記録されていますが、今回、新たに埴輪の出土が確認された位置はかなり離れた場所ですので、まったく知られていない古墳が埋没していることが想定されたため、急きょ発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、幅五・六メートル、深さ〇・八メートルほどで、直線的に伸びる濠が、長さ二十三メートルにわたって姿を現しました。

濠には、崩れ落ちた多くの葺石とともに、人物埴輪、赤・白・緑など彩色豊かな顔料を塗ったうつぼ形や家形などの形象埴輪が大量に出土し、町名にちなんで「打出小槌古墳」と名付けられました。入れ墨を施した大変珍しい人物埴輪も出土し、県下初の貴重な発見となりました。

この古墳の形や大きさについては、今もいろいろな説が出されています。

発見当初は、直線状の濠の形から、方墳ないし前方後円墳の前方部の可能性が考えられていました。丘が想定され、濠を合わせた規模は一辺四十八メートル程度の大形の方墳と推定されました。

その後、平成十一年には、最初の調査地点のすぐ西側で発掘調査が実施され、二十メートル延びる濠は、幅六～九メートル、深さ一メートルで、北側ほど幅の広くなることが分かり、方墳の濠とは異なることが判明したのです。

これは、前方後円墳の前方部からくびれ部に向かって幅を増していく部分と考えられました。

このように、盾形周濠をもつ前方後円墳が確認されましたが、その規模はまだ正確には分かっていません。

### 後円部の濠と葺石と埴輪

その後、国道２号沿いでの発掘調査は、これまでの調査結果を念頭において進めましたが、埴輪片の出土は少なく、濠の痕跡はありませんでした。この古墳の位置が、国道よりずっと南になることがわかりました。

平成二十年の二月に行われた発掘調査では、調査面積が限られていたものの残りのよい埴輪片がいくつもみつかり、濠の一部ではないかと見られる土層も確認でき、古墳本体に近いことが推測できました。

そして、本年八月、その想定していた地点を対象とした発掘調査を行いました。発掘を進めると、調査地の東寄りに、弧を描く幅八メートルの濠が、長さ十五メートル程見つかり、典型的な前方後円墳と思われ、「周濠」は常時水を貯えた水濠ではなく、空濠のようでした。また、濠内に墳丘から埴輪や葺石が次々に転落した時期は、一緒に出土した須恵器から、およそ奈良から平安時代ごろと思われます。

中世には、濠の大部分が埋まってしまい、その後、濠跡に流路が通っていたことも観察できました。



④後円部形態の判明した打出小槌古墳

後円部の周濠から外に一メートルほどの位置に、周濠に沿うようにして、幅一～一・五メートル、深さ三十センチの細い溝が巡っています。

この溝からは、埴輪や葺石と考えられる円礫が出土するとともに、中世の土器や磁器が出土しています。

この溝の時期と性格は、今後の資料整理や分析で明らかになるでしょう（写真①～④）。



写真１：発掘され芦屋川水車場跡（山芦屋町）



阪急電鉄の芦屋川停留場が開設しました。

これら鉄道の発達とともに交通の利便性が飛躍的に向上した芦屋は、大阪と神戸の二大都市にはさまれた郊外住宅都市として急激に発展しました。

それらの中で山手町にある旧山邑家住宅（現・ヨドコウ迎賓館。国指定重要文化財）は大正十三年ころ、醸造家であった八代目山邑太左衛門氏によって建てられた別荘で、世界的に著名なアメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトによって設計されました。

その他にも、国登録文化財である松濤館（図書館打出分室）（写真２）をはじめ、市内には終戦以前の歴史的建造物は残っています。

また、平成二十年に実施された呉川町の芦屋市保健福祉センターの建設に伴う発掘調査では、大正時代から当時から富裕層が優雅に暮らしていた情景が想像できます。



写真３：呉川遺跡から出土したガラス瓶

## 国際文化住宅都市としての発展

本市は、戦後の復興にあたって、文化住宅都市の再建とさらなる発展を目指し、昭和二十六年（一九五一年）に住民投票を経て、同年三月三日に特別法である芦屋国際文化住宅都市建設法が公布されました。

この法律に基づき、市独自のまちづくりが進められ、全国的にも名高い住宅都市として目覚しく発展してきました。

平成七年一月十七日に起こった阪神・淡路大震災によって、本市は甚大な被害を受けました。

しかし、その直後から、まちの復興・復旧に全力で取り組み、現在に至っています。



現在の市街地（三条町からの遠望）

以上、これまで記してきましたように、本市は明治時代末より高度な住宅都市として発展してきました。

### ◇　芦屋の近代略年表　◇

| | |
|---|---|
| 明治７年（1874） | 大阪－神戸間に鉄道開通 |
| 明治 22 年（1889） | 芦屋村・三条村・津知村・打出村が合併して、精道村が発足 |
| 明治 38 年（1905） | 阪神電鉄開通。芦屋・打出停留場の設置 |
| 明治 41 年（1908） | 電気（電灯）の供給開始 |
| 大正２年（1913） | 国鉄芦屋駅の開設 |
| 大正３年（1914） | 電話交換事務の開始 |
| 大正９年（1920） | 阪急電鉄開通。芦屋川停留場の設置 |
| 大正 13 年（1924） | 旧山邑家住宅の建設 |
| 昭和２年（1927） | 阪神国道（国道２号線）開通<br>国道電車の開通 |
| 昭和４年（1929） | 六麓荘住宅地の建設 |
| 昭和 10 年（1935） | 下水道工事の開始 |
| 昭和 13 年（1938） | 上水道完成。給水開始<br>阪神大風水害 |
| 昭和 15 年（1940） | 市制施行 |
| 昭和 20 年（1945） | ４度の空襲。終戦 |
| 昭和 26 年（1951） | 芦屋国際文化住宅都市建設法の公布 |
| 昭和 39 年（1964） | 市民憲章の制定 |
| 平成７年（1995） | 阪神・淡路大震災の発生 |

# 発掘された芦屋の一〇〇年

今年は、「芦屋国際文化住宅都市建設法」が制定されて六十周年目という、本市にとって記念すべき年です。

芦屋市は住環境に優れたまちとして全国に知られていますが、今号では発掘された遺跡や出土品などから芦屋の近代のあゆみを紹介します。

問い合わせ
生涯学習課文化財担当
☎ 38-2115

## 農村・漁村であったころの芦屋

明治新政府の発足後、市域にあった幕府領の芦屋村・打出村と尼崎藩領であった三条村・津知村は、明治五年すなわち廃藩置県の翌年に兵庫県の第六区下、明治十二年に同県菟原郡下に属しました。そして、明治二十二年には、これら四カ村が合併して精道村が発足しました。

このころの芦屋の人々は、農業や漁業を主な生業としており、江戸時代とほとんど変わらない暮らしを営んでいました。

市内にある遺跡の発掘調査では、当時の水田や畑の跡が数多く見つかっていますが、特筆すべき遺跡として山芦屋町において発掘された芦屋川水車場跡が挙げられます(写真1)。この遺跡は、江戸時代後期(十八世紀)から明治時代に灘の酒造用の精米や、菜種・綿実の油絞りに活躍した産業用水車場の遺跡です。


明治末期・農作業をする人々


大正時代の芦屋浜・地引網でいわし漁をする人々

## 住宅都市・芦屋市の誕生

明治七年には、大阪-神戸間に官設鉄道(現・JR神戸線)が開通しました。しかし、この時には市域に駅は設けられず、鉄道は市域を通り過ぎていくだけでした。その後、明治三十八年になって、ようやく阪神電鉄の芦屋停留場と打出停留場、大正二年に国鉄芦屋駅、大正九年に市制が施行されて間もなく、昭和十六年には日本は太平洋戦争に突入しました。戦争末期の昭和二十年には、五月十一日・六月五日・六月十五日・八月五日から六日の四度にわたって、米軍の空襲を受けました。七月二十二日には、戦闘機による機銃射撃があったという記録もあります。

市内の発掘調査では、これまでに二十基近くの防空壕跡が見つかっています(写真4)。

また、市内には今でも防空壕跡が残っている個人住宅などがあると考えられます。

空襲の痕跡としては、大型爆弾の爆発によってできた穴、空襲に伴う火災による焼土や焼けて解けたガラス瓶、焼夷弾や弾丸などが見つかっています。

## 市内に今も残る戦争の傷跡


写真2：国登録文化財 松濤館(図書館打出分室)


写真4：発掘された防空壕の出入口（業平町）

ら昭和時代前期（一九一〇年代～一九四五年）にかけての陶磁器、化粧品瓶、薬類（目薬瓶・処方薬瓶・イチジク浣腸など）、文房具（万年筆・鉛筆・インク瓶など）、玩具（磁器製人形と列車、石蹴り、ビー玉など）、その他（歯ブラシ、かんざし、乾電池など）の多種多様な日用品が多数出土しました（写真3）。

その中には、高級洋食器の破片もたくさん確認されており、周辺には

は、多くの人々を魅了してきました。
そんな田中千代氏のコラム記事の掲載が「広報あしや」(昭和四十二年五月五日号)にあります。
その一部分をご紹介します。


①昭和７年「パジャマ・ドレス」


②昭和 25 年「市松柄のきもの」


③昭和 37 年「黒地に銀唐草柄帯地のコート」

氏は、明治三十八年に大阪の植物油問屋の次男として生まれました。関西学院在学中より油絵に親しみ、昭和三年には初めての個展を開きます。折りしも帰国中であった藤田嗣治氏に評を仰ぎ、独創性の大切さを強く学ぶことになります。

若い人たちが集まり、新しい表現を試みようとしました。氏は、彼らのエネルギーを結集し、昭和二十九年「具体美術協会」を結成、〝具体〟は今日も世界的に知られる美術運動の一つとなりました。

大正十五年、吉原治良氏二十一歳を開催し、審査員を務めています。

また芦屋公園で、昭和三十年「真夏の太陽に挑む野外モダンアート実験展」・翌三十一年「野外具体美術展」を開催するなど、芦屋市民の目をおおいに驚かせました。


①昭和 27 年、「田中千代グランド・ショー」の舞台デザイン


②昭和15年「雪山」油彩(大阪市立近代美術館建設準備室蔵)


③昭和40年「黒地に赤の円」油彩(兵庫県立美術館蔵)

《略年譜》

■吉原　治良(よしはら　じろう)氏

| | |
|---|---|
| 明治 38 年 | １月１日、吉原定次郎・アイの次男として、大阪市に生まれる |
| 大正 15 年 | 胸を患い、このころ芦屋に移住(21 歳) |
| 昭和４年 | ４月、奥田千代と結婚(24 歳) |
| 昭和９年 | 藤田嗣治の勧めで、二科展に初出品し、出品作５点すべて入選する(29 歳) |
| 昭和 14 年 | 芦屋の自宅にアトリエを新築(34 歳) |
| 昭和 19 年 | 胸の病いで、徴兵検査失格となる(39 歳) |
| 昭和 21 年 | 市主催の講座で「モダンアートについて」講演する(精道小学校)(41 歳) |
| 昭和 23 年 | 「芦屋市美術協会」設立。代表となる。同協会主催で第１回「芦屋市展」・「童美展」を開催し、終生審査員を務める(43 歳)<br>※第４回から、市の主催事業となる。 |
| 昭和 27 年 | 「田中千代グランド・ショー」の舞台美術を担当。以後も何度か担当する(47 歳) |
| 昭和 30 年 | ７月、「真夏の太陽に挑む野外モダンアート実験展」を芦屋公園で開催する。<br>吉原製油㈱の取締役社長に就任(50 歳) |
| 昭和 31 年 | ７月、「野外具体美術展」を開催(51 歳) |
| 昭和 38 年 | 兵庫県文化賞を受賞(58 歳) |
| 昭和 40 年 | 吉原製油㈱の取締役会長に就任(60 歳) |
| 昭和 45 年 | ルナ・ホールの壁画を制作(65 歳) |
| 昭和 47 年 | ２月 10 日に芦屋病院で逝去(67 歳)<br>※３月 31 日、「具体美術協会」解散 |


④昭和30年、野外モダンアート実験展(作品手前)


昭和 45 年撮影

※「芦屋市制黎明期・文化の創造者たち」は、次ページに続きます。

～あのころの芦屋～

# 屋市制黎明期・文化の創造者たち

昭和15年 ▶ 35年

問い合わせ　広報課　℡ 38-2006 ／美術博物館　℡ 38-5432

本市は、昭和十五年十一月十日、全国で一七三番目の市として誕生しました。そして、本年は市制施行後七十周年目の年を迎えることとなりました。

昭和十五年といえば、五月に第二次大戦が始まっており、日本では昭和十二年から中国との間で戦争状態が続いていました。そして、翌十六年十二月八日には、日本も人類史上最大の戦争といわれた第二次大戦に参戦していきます。この大戦は、昭和二十年、連合軍の勝利で終わり、日本は敗戦を迎えます。

そんな戦中・戦後にあって、いち早く戦争の傷跡から立ち上がり、日本を文化面でリードしてきた人々のうち、芦屋に住み、文化の創造に力を注いでこられたかたたちを、今回はご紹介したいと思います。

## 田中 千代

### 日本のファッションデザイナーの草分け・田中千代学園創立者

田中千代氏は、日本のファッション・デザイナーの草分けの一人また田中千代学園の創立者として、服飾界に大きな影響を与えてきました。

昭和五年、ヨーロッパ滞在中にスイスでバウハウスの流れをくむオットー・フォン・ハスハイエ教授に師事、デザインを学びます。帰国後、服飾デザイナーとして、また神戸・御影の自宅に洋裁研究グループ「皐会（さつき）」を発足させ、活動を始めます。そして、デザイナーとして斬新なファッションを創造するかたわら、教育者としても洋裁研究に力を注ぎました。

戦後は、いち早くファッション・ショーを開き、また昭和二十二年にはこの芦屋に研究所を移し、やがて学校法人田中千代学園として、日本の洋裁技能教育に、大きく貢献していくことになります。

その一方、民族衣装の研究・収集や「服飾事典」の編集などに積極的に取り組み、その仕事ぶりと着実な歩み


昭和42年撮影

『私の住居は芦屋の学園の中にあり、後は山で、学園の窓からは海が見えるといった全く恵まれた土地にあります。東京と行き来の多い私は、この芦屋のわが学校、またわが家に帰ってくると、まず胸をふくらませてこのおいしい空気を吸うのが楽しみなくらいです。芦屋の空気が私の健康を守ってくれるのだと、そんなときいつもこの地に感謝します。』
（冒頭部分抜粋）

《略年譜》

■田中　千代（たなか　ちよ）氏

| | |
|---|---|
| 明治39年 | ８月９日、男爵松井慶四郎・照子の長女として、東京で生まれる |
| 大正13年 | 経済地理学者の田中薫と結婚（18歳） |
| 昭和３年 | 夫と渡欧（22歳） |
| 昭和４年 | ベル・エポックのパリに滞在（23歳）（翌年スイス・ドイツへ） |
| 昭和６年 | 夫と渡米。９月に帰国し、帰国の船上でカネボウ創始者・武藤山治夫人千世子と出会う。10月、神戸（住吉）に家を借りて住む（25歳） |
| 昭和７年 | カネボウ顧問となる。自宅で、洋裁研究グループ「皐会」を発足し、活動を始める。ニューキモノ考案（26歳） |
| 昭和12年 | 田中千代洋裁研究所開設（本山）。所長となる（31歳） |
| 昭和20年 | 田中千代洋裁研究所再開（＊戦争で中断） |
| 昭和22年 | 研究所を本山から芦屋へ移転（41歳） |
| 昭和27年 | 皇后陛下のお召し物相談役となる〈～昭和34年〉（46歳） |
| 昭和30年 | 第１回兵庫県文化賞受賞（49歳） |
| 昭和38年 | 研究室・住まいを東京分館へ移す（57歳） |
| 平成７年 | 阪神・淡路大震災で、芦屋の田中千代服飾専門学校被災。閉校へ（88歳） |
| 平成11年 | ６月28日に逝去（92歳） |

■著作…「私の洋裁」・「図解服飾事典」・「子供服全書」「皇后様のデザイナー」など多数


④昭和22年、田中千代氏は大原町に300坪の土地と建物を購入し、研究所を本山から芦屋へと移転しました。
上の写真は、移転当時の芦屋校舎。

## 吉原 治良

### 世界が注目した　日本の前衛美術グループ〝具体〟を主宰

吉原治良氏は、抽象絵画の先駆者として、とりわけ「具体美術協会」の指導者として、多くの作家たちに影響を与えてきました。

昭和十三年には、二科会の前衛作家による「九室会」の結成に参加し、意欲的に抽象作品を発表しました。

戦後、吉原治良氏の下には関西のとき芦屋に移住して以来、没するまで芦屋に住み続け、昭和二十三年には「芦屋市美術協会」を創立、同協会主催の「芦屋市展」や「童美展」

# 富田 砕花

## 〝兵庫県文化の父〟富田砕花生誕百二十年の年を迎えて…


昭和 52 年 4 月撮影

大正時代、〝民衆詩派〟の詩人と呼ばれた富田砕花氏。住まいを芦屋に移してからは、県内各地を旅し、多くの市町歌や校歌、またその地を題材とした詩を多く残し、晩年にはその詩業の集大成ともいえる壮大な「兵庫賛歌」を発表しました。

富田砕花(本名・戒治郎)氏が生まれた家は、盛岡市で油問屋を営む名家でした。父親は誕生前に他界していたため、伯父に漢籍の素読や習字を教授されたといわれています。

十代のころ上京、会計検査院に勤めながら、短歌を「文章世界」などの雑誌に投稿し、掲載していました。

明治四十一年(砕花十八歳)には、与謝野鉄幹・晶子の『新詩社』に加わり、「明星」に砕花で短歌を発表しています。「明星」廃刊後は、若山牧水の「創作」や前田夕暮の「詩歌」にも作品を発表しました。このころの作品をまとめた歌集「悲しき愛」(明治四十三年刊・砕花二十歳)は、若い女性の圧倒的な支持を得、熱狂的なファンも多かったといいます。


①富田砕花旧居


②富田砕花旧居・内部

大正時代に入ると、カーペンターやホイットマンなどの訳詩を手掛け、民主主義の文芸を日本に紹介するようになりました。氏の作風も自然と詩作の世界へと移り、民衆の心を代弁した作品は、大正デモクラシーの波に乗って、多くの人の心を打ち、白鳥省吾や福田正夫などとともに〝民衆詩派〟と呼ばれました。

芦屋を初めて訪れたのは、大正二年。肺を患い、芦屋の斎田家に身を寄せ療養しました。大正九年、芦屋の田島マチさんと結婚し、翌年から芦屋に定住しました。終の棲家となった宮川町の家には昭和十四年、谷崎潤一郎が住んでいた後に入居しました。


③庭内・春日燈籠


④庭内歌碑(S. 61 建碑)

以後、昭和五十九年十月十七日に九十三歳で没するまで、ここから多くの歌集・詩集を発表、また校歌や市町歌等の作詞を手掛けました。

昭和六十年、明治期から昭和にわたる氏の膨大な資料が市に寄贈され、同年発足した「富田砕花顕彰会」の手によって、四冊の資料目録が完成しています。(資料は美術博物館蔵)

平成二年には、氏の生誕百年を記念し、詩集を対象とした全国公募の「富田砕花賞」が制定されています。

そんな氏のコラム記事が「広報あしや」(昭和五十三年一月五日号)にあります。その一部分をご紹介します。

『ボクは、文学の話を人とするのが嫌いでね。東京にいると、文壇的なつながりが面倒くさくて、それでこっちにきたんですよ。(中略)芦屋でもあっちやこっちに住んだなア。

いま住んでいるのは、村の人が建てたのを谷崎潤一郎さんが借りて住んでたんだけれども、谷崎さんが魚崎に移ったあと、義兄が買ってね、ボクたち夫婦に入らないかってことになったんだ』(冒頭部分抜粋)

### 芦屋市制施行のころ活躍していた文化人 《抄》

**■中山 岩太(なかやま いわた・明治 28 年～昭和 24 年)〈前田町〉**
写真家。大正時代をニューヨークとパリで過ごし、シベリア横断鉄道で帰国。海外仕込みのモダニズムを武器に、日本の写真の近代化を推進した。昭和３年から芦屋に住み、同５年「芦屋カメラクラブ」を創立(～昭和 17 年)

**■早野 臺氣(はやの だいき・明治 31 年～昭和 49 年)〈浜芦屋町〉**
歌人。郷土史家。本名・二郎。芦屋短歌会の創設に参画し、同会主催の「業平祭」を企画開催した。オブジェとしての短歌を唱え、吉原治良らとかかわる。昭和 44 年、芦屋市民文化賞受賞。著書に「海への曾話」(昭和 50 年)

**■高浜 年尾(たかはま としお・明治 33 年～昭和 54 年)〈月若町〉**
俳人。虚子の長男。本名年尾は子規の命名。著書に「俳諧」(昭和 13 年)、「俳諧の手引き」(昭和 21 年)。昭和 21 年４月、虚子から引き継ぎ「ホトトギス」の主宰者(現在は、娘・稲畑汀子氏)に。昭和 54 年 10 月 26 日に他界(78 歳)

**■吉澤 独陽(よしざわ どくよう 明治 36 年～昭和 43 年)〈西山町〉**
詩人。関東大震災(大正 12 年)後、芦屋へ。西山町に「聖樹薬詩園」を経営。戦前「日本詩壇」を創刊。戦後は、坂本勝(元兵庫県知事)氏と「聖樹」を刊行

**■ハナヤ勘兵衛(はなや かんべえ・明治 36 年～平成３年)〈前田町〉**
写真家。本名・桑田和雄。昭和４年に芦屋に写真材料店を開き、翌５年には彼の店に行き来する人々によって「芦屋カメラクラブ」が結成された

**■伊藤 継郎(いとう つぐろう・明治 40 年～平成６年)〈山芦屋町〉**
画家。昭和３年から芦屋に。同 23 年には芦屋市美術協会の創立に参加。47 年には、吉原治良氏の死去に伴い、芦屋市美術協会代表(～昭和 52 年 10 月)に。昭和 44 年、芦屋市民文化賞受賞。同 46 年紺綬褒章受章。平成２年、兵庫県文化賞受賞。また、昭和 58 年にはアルパ芦屋の壁画「輝く芦屋」を制作

### 《略年譜》

**■富田 砕花(とみた さいか)氏**

| | |
|---|---|
| 明治23年 | 11月15日、盛岡市に生まれる(本名戒治郎) |
| 明治41年 | 与謝野鉄幹・晶子「新詩社」に参加(18歳) |
| 明治43年 | 若山牧水「創作」に同人参加(20歳) |
| 大正元年 | 歌集「悲しき愛」出版(20歳) |
| 大正２年 | 肺患を患い、芦屋で療養(21歳) |
| 大正４年 | 詩集「末日頌」出版(25歳) |
| 大正５年 | カーペンター訳詩集「民主主義の方へ」出版 |
| 大正８年 | 詩集「地の子」出版。ホイットマン訳詩集「草の葉１」出版(29歳) |
| 大正９年 | 田島マチと結婚(30歳)。訳詩集「カーペンター詩集」・ホイットマン訳詩集「草の葉２」出版 |
| 大正10年 | 「富田砕花詩集」出版(31歳) |
| 大正11年 | 評論集「解放の芸術」・詩集「時代の手」出版 |
| 大正13年 | 詩集「登高行」出版(34歳) |
| 大正15年 | 詩集「手招く者」出版(36歳) |
| 昭和９年 | 歌集「白樺」出版(44歳) |
| 昭和14年 | 宮川町の自宅(現旧居)へ(49歳) |
| 昭和20年 | 空襲で自宅被災。家財・蔵書を失う(55歳) |
| 昭和23年 | 第１回兵庫県文化賞受賞(58歳) |
| 昭和25年 | 歌集「歌風土記 兵庫県」出版(60歳) |
| 昭和36年 | ３月２日、マチ夫人逝去(71歳) |
| 昭和45年 | 詩集「ひこばえのうた」出版(80歳) |
| 昭和46年 | 詩集「兵庫讃歌」・ホイットマン訳詩集「草の葉」改々訳出版(81歳) |
| 昭和50年 | 詩集「視差錯落」出版(85歳) |
| 昭和59年 | 10月17日、心臓衰弱のため逝去(94歳) |
| 昭和60年 | 富田砕花顕彰会発足。歌集「属目散趣」・訳詩集「詩集 草の葉」出版 |

～あのころの芦屋～

# 芦屋市制黎明期・文化の創造者たち

昭和15年 ▶ 35年

問い合わせ　広報課　TEL 38-2006 ／美術博物館　TEL 38-5432

■広報あしや　思い出の一ページ

《平成二十二年一月一日号》

※「芦屋市制黎明期・文化の創造者たち」は、前ページから続いています。




富田砕花氏の著作集

## 「細雪」「猫と庄造と二人のをんな」　谷崎（たにざき）　潤一郎（じゅんいちろう）





谷崎潤一郎記念館（伊勢町 12-15）

**●谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）**

大正十二年九月一日、谷崎は箱根で関東大震災にあい、関西にまず単身避難し、小学校時代の親友であった芦屋の伊藤甲子之助宅を訪れています。

妻千代と幼い娘鮎子を伴い関西に移ってきたのは、大正十二年十月、谷崎三十八歳のときでした。

関西に移り住んだ谷崎は、やがて阪神間に定住する意志を固め、芦屋・西宮・神戸の岡本などを転々としながら、次々と傑作を発表していきました。

谷崎は、岡本での約八年間に、妻千代と離婚（佐藤春夫への細君譲渡事件）し、古川丁未子と結婚と別居、また後に夫人となる松子とも出会っています。

松子との運命的な出会いは、昭和二年、芥川龍之介の関西講演の際、根津清太郎夫人としてでした。

出会いから七年後、双方の離婚問題を解決した二人は、昭和九年に芦屋に新居（現・富田砕花旧居）を構え、翌十年、この家で正式に結婚しています。

二十一年間の関西在住のうち、芦屋には昭和九年三月から十一年十一月までの二年八カ月の間でしたが、芦屋に住む友人・知人も多く、ここで始まった新たな人生の中から、「源氏物語」の現代語訳が始められ、後の「細雪」（昭和十八年）の世界が開かれていきました。

この阪神間時代には、「痴人の愛」（大正十三年）、「卍」「蓼喰ふ蟲」（昭和三年）、「乱菊物語」（昭和五年）、「吉野葛」「盲目物語」（昭和六年）、「春琴抄」「陰翳礼讃」（昭和八年）、「猫と庄造と二人のをんな」（昭和十一年）、「細雪」などの名作を、次々と発表しています。

芦屋を舞台にした小説は、「細雪」が特に有名ですが、「卍」にも西山の潮見桜の近くに住む徳光光子（大阪船場の羅紗問屋の娘）と香炉園に住む弁護士夫人・柿内園子の物語が描かれています。



昭和初期の業平橋を走る国道電車

さらに、谷崎が芦屋に住んでいた昭和十一年に発表された「猫と庄造と二人のをんな」には、ごく普通の下町に住む芦屋庶民の生活が、ペーソスを交えて描かれています。

旧国道（国道2号）沿いで金物屋を営む猫好きな男が、先妻に譲った猫に会うため、夕暮れの国道をひたすら自転車を走らせるというシーンが印象的な作品です。

また、この旧国道筋は「細雪」の舞台にもなっています。昭和十三年の阪神大水害の様子が、迫力ある描写で描かれています。



●富田砕家旧居（宮川町 4-12）　砕花が昭和 13 年から過ごしたこの家は、戦災で門屋と塀を残し焼失しました。谷崎が住んだころにもあった春日燈篭は、今も庭に残されています。

**●阪本（さかもと）　勝（まさる）**
（一八九九～一九七五）

兵庫県知事時代から朝日ヶ丘町に居住。文人政治家として活躍し、自らも戯曲「洛陽餓ゆ」や伝記「佐伯祐三」などを著した。

**●吉沢（よしざわ）　独陽（どくよう）**
（一九〇三～一九六八）

詩人。信州の生まれ。関東大震災後、芦屋に移り住み、西山町に聖樹薬詩園を経営。戦前「日本詩壇」を創刊、戦後は阪本勝と「聖樹」を刊行した。

**●高浜（たかはま）　年尾（としお）**
（一九〇〇～一九七九）

俳人。虚子の長男。昭和十年に鎌倉から芦屋へ。月若町に居住し、虚子が没した昭和二十六年以後は、句誌「ホトトギス」を主宰した。

著書に「俳諧手引」や句集「年尾句集」などがある。

現在、「ホトトギス」を主宰しているのは、年尾の次女・稲畑汀子氏。

稲畑氏の住む平田町には、平成十二年に開館した『虚子記念文学館』が建てられ、汀子氏は同館理事長も務めている。

# 近・現代文学と芦屋 Ⅰ

文化の秋―。本市では、谷崎潤一郎賞（小説）や富田砕花賞（詩）受賞者による記念講演会が、それぞれ11月に開催されます。

古くから芦屋は、日本最古の和歌集「万葉集」、業平が著したといわれる歌物語「伊勢物語」、中世の芦屋が舞台となった謡曲や軍記物語「太平記」中の『打出合戦』（楠正成と足利尊氏の合戦）など、多くの文学の中に登場してきました。

やがて、大正・昭和の初め、別荘地・健康地また住宅地として画期的に拓けていく近代にも、多くの文人たちが芦屋を訪れ、詩や小説の舞台となりました。なかでも谷崎潤一郎と富田砕花は、芦屋とのゆかりが深い文人ではないでしょうか。

今回はそんな２人を中心に、大正・昭和に活躍した芦屋にゆかりの深い文人たちをご紹介しましょう。《文責・広報課》

## 〝兵庫県文化の父〟と呼ばれた詩人　富田（とみた）　砕花（さいか）



●富田砕花（一八九〇～一九八四）

盛岡市に生まれた砕花（本名・戒治郎）は十二歳で上京、十八歳には与謝野鉄幹・晶子の「新詩社」に入り、同郷の石川啄木と歌会に出席。『明星』や若山牧水の歌誌『創作』などに短歌を発表。

大正元年、第一歌集「悲しき愛」を出版。翌大正二年に病を得、知人を頼って病気療養のために芦屋へとやってきました。

大正九年、田島マチと結婚。茶屋之町・公光町・宮川町へと居を移しながらも、大正十年から昭和五十九年に亡くなるまでの七十余年、芦屋に住み続けました。

芦屋定住後、大正・昭和にかけて多くの著作を残しました。昭和二十三年には、第一回兵庫県文化賞を受賞。戦後は、県下をくまなく旅し、『歌風土記兵庫県』や『兵庫讃歌』を出版。また宮川・岩園小学校や精道中学校ほか多くの校歌や社歌等を作詞し、広く兵庫の風土と人を愛して、〝兵庫県文化の父〟と呼ばれました。

現在の旧居は戦災で一部を残し焼失して、戦後再建された建物ですが、谷崎が昭和九年三月から同十一年十一月まで住んだころの面影も一部残し、またその後昭和十三年から五十九年まで砕花が住んだという文学にゆかりの深い家です。

砕花氏没後、ご遺族から建物や蔵書一式のご寄贈を受け、昭和六十二年からは富田砕花旧居として一般公開しています。

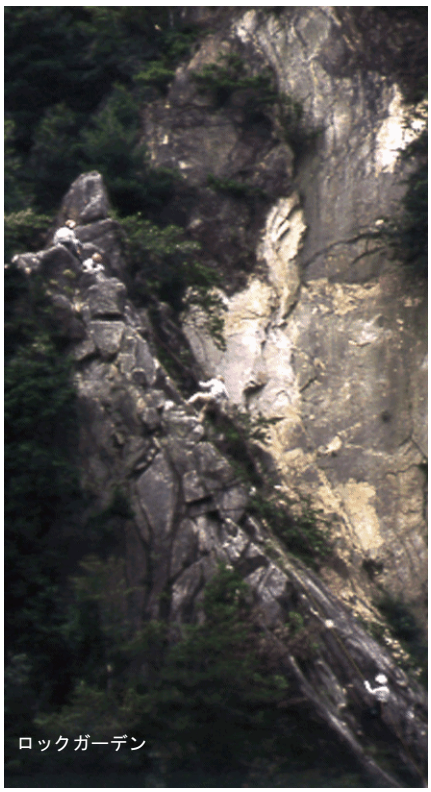
●『歌風土記兵庫県』には、潮見桜やロック・ガーデンを詠んだ歌があります。

**開森の潮見ざくらの名のみにて　海こそ見ゆれ咲くはなもなし**

**ただひとりとかげ極めこむ日もありて　物の音絶えし岩場なりしか**

**岩梯子乏（こも）しき草のひょうひょうと　風に吹かるる末枯れたるまま**

**花原に仰向けに寝て海近き　山の秋雲動きゆく見つ**



ロックガーデン

●富田砕花（1890 ～ 1984）の主な著作物

第１歌集「悲しき愛」（大正４年）、第１詩集「末日頌」（大正４年）、カアペンタア訳詩集「民主主義の方へ」（大正５年）、詩集「地の子」・ホイットマン訳詩集「草の葉」Ⅰ（大正８年）、訳詩集「カアペンタア詩集」・訳詩集「草の葉」Ⅱ（大正９年）、「富田砕花詩集」（大正10年）、評論集「解放の芸術」・詩集「時代の手」（大正11年）、詩集「登高行」（大正12年）、詩集「手招く者」（昭和元年）、歌集「白樺」（昭和９年）、訳詩集「草の葉」改訳（昭和24年）、歌集「歌風土記兵庫県」（昭和25年）、詩集「ひこばえのうた」（昭和45年）、「兵庫讃歌」・訳詩集「草の葉」改々訳（昭和46年）、詩集「視差錯落」（昭和50年）／＊没後、歌集「属目散趣」（昭和60年）・「富田砕花全詩集」（昭和63年）が出版されました。



●富田砕花旧居〈内部〉
毎週水曜日と日曜日・午前10時～午後４時まで、母屋・庭園・門屋（展示室）を公開しています。

## 芦屋と近・現代文学者

●星野（ほしの）　天知（てんち）

（一八六二～一九五〇）

作家。慶応三年・江戸生まれ。明治期に「文学界」を主宰。大正十二年の関東大震災後に姻戚の高浜虚子家とともに関西へ逃れ、次に昭和二十五年に没するまで大原町に住んだ。芦屋在住時の著書に、回想録「黙歩七十年」がある。

●柳沢（やなぎさわ）　健（けん）

（一八八九～一九五三）

詩人。会津若松生まれ。横浜郵便局・朝日新聞社・外務省に勤めた。都会風の情熱的な詩人で、三木露風らと詩誌『未来』を出す。富田砕花との交流も深く、大正八年から十三年まで公光町に住んだ。

●早野（はやの）　臺氣（だいき）

（一八九八～一九七四）

歌人。本名・二郎。浜芦屋町に十九歳から居住し、戦前から前衛短歌運動にかかわる。戦後は、具体美術の創始者吉原治良らと親交をもち、自らオブジェ短歌と称し、歌集『海への會話』を遺した。

芦屋在住五十七年の間、郷土史家として、また芦屋短歌協会創設にも功労。昭和四十四年、芦屋市民文化賞受賞。

## ■富田砕花賞

**現代詩の詩集を対象とした文学賞。平成２年、富田砕花生誕 100 年・芦屋市制施行 50 周年を記念して創設されました。歴代の選考委員には、井上靖・小野十三郎・伊藤信吉・川崎洋・小林武雄・杉山平一・安水稔和氏など、著名な作家や詩人が名を連ねています。**

**【受賞作】** **第１回**（平成２年）長田弘「心の中にもっている問題」/ **第２回**（平成３年）時里二郎「星痕を巡る七つの異文」/ **第３回**（平成４年）北畑光男「救沢まで」/ **第４回**（平成５年）大崎二郎「沖縄島」/ **第５回**（平成６年）平林敏彦「磔刑の夏」/ **第６回**（平成７年）西岡寿美子「へんろみちで」/ **第７回**（平成８年）深津朝雄「石の蔵」/ **第８回**（平成９年）中塚鞠子「駱駝の園」/ **第９回**（平成10年）広部英一「苜蓿」/ **第 10 回**（平成 11 年）清岳こう「天南星の食卓から」/ **第 11 回**（平成 12 年）川島完「ピエタの夜」/ **第 12 回**（平成 13 年）山本美代子「西洋梨そのほか」/ **第 13 回**（平成 14 年）木津川昭夫「掌の上の小さい国」/ **第 14 回**（平成 15 年）皆木信昭「ごんごの渕」/ **第 15 回**（平成 16 年）くにさだきみ「壁の目録」/ **第 16 回**（平成 17 年）秋山基夫「家庭生活」・川上明日夫「夕陽魂」/ 第 17 回（平成 18 年）苗村吉昭「オーブの河」・境節「薔薇のはなびら」/ **第 18 回**（平成 19 年）秋川久紫「花泥棒は象に乗り」・日笠芙美子「海と巻貝」/ **第 19 回**（平成 20 年）中西弘貴「飲食」・松尾静明「地球の庭先で」/ **第 20 回**（平成 21 年）金田弘「虎擲龍拏」/ **第 21 回**（平成 22 年）永井ますみ「愛のかたち」・闇田真太郎「十三番目の男」/ **第 22 回**（平成 23 年）司茜「塩っ辛街道」・万亀佳子「夜の中の家族」

## ■谷崎潤一郎賞

**中央公論新社の創業 80 周年を記念して、昭和 40 年に創設されました。明治・大正・昭和を通じて、幅広いジャンルで活躍した谷崎の業績にちなみ、時代を代表する優れた小説・戯曲を顕彰しています。**

芦屋市ゆかりの作家では、村上春樹氏（昭和 60 年・「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」）と小川洋子氏（平成 19 年・「ミーナの行進」）の２人が受賞されている。

## 芦屋を舞台に描いた「ミーナの行進」

小川（おがわ）　洋子（ようこ）

●小川洋子（一九六二～）

小説家。岡山市生まれ。早稲田大学卒業。平成十四年から二十年まで芦屋市に在住されました。

昭和六十三年「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞、平成三年「妊娠カレンダー」で芥川賞受賞。平成十六年「博士の愛した数式」で読売文学賞、本屋大賞受賞。同年「ブラフマンの埋葬」で泉鏡花賞受賞。

平成十八年には、博士の愛した数式」が映画化され大ヒット。

同年、芦屋を舞台に書き下ろされた小説「ミーナの行進」で谷崎潤一郎賞を受賞。その他、著書多数。

平成十九年、芦屋市民文化賞受賞。また、同年から芥川賞選考委員に参加されています。

私は二〇〇二年から、この芦屋に住んでおります。住みはじめてしばらくしたころ、「広報あしや」の中の『歴史散歩』という小さなコラムに、芦屋に私立の動物園があったという、そのような紹介記事がありました。

そこには、戦前のことですけれど、ある製薬会社の社長さんのお家が、ロバ・サル・クジャク・リスなどを飼っていて、それを近所の子どもたちに無料で開放していたといったエピソードが紹介されていました。

また、そこの息子さんは、自宅動物園で飼っていたロバに乗って、精道小学校まで通っていたといいます。

それを読んだときに、ぱっと映像が浮かんできました。芦屋のお屋敷街に住んでいる子どもが動物に乗って毎朝学校に通う…、その小さなエピソードに心惹かれたことが、今回の受賞作となった「ミーナの行進」のスタートとなりました。それを機に、芦屋のまちの歴史を調べてみますと、昭和四十年代にはすでに日本で初めてクレープというお菓子を売っていたお店があったとか、フランスパンを芦屋ではすでに食べていたとか、とてもワクワクするようなエピソードがたくさんありまして、そういう一つのまちを知っていく喜びの中で「ミーナの行進」のお話ができあがっていきました。（谷崎潤一郎賞受賞記念特別講演「物語と私」より、一部分抜粋）



旧右近邸（大正８年築・山芦屋町）

# 現代文学と芦屋 Ⅱ

問い合わせ　広報課　☎38-2006

前回(10月15日号)では、谷崎潤一郎と富田砕花を中心に、近・現代に活躍された芦屋とゆかりが深い文人のご紹介をしました。
今回は、谷崎潤一郎賞や富田砕花賞について、また現在も活躍されている芦屋にゆかりの深い作家・詩人についてご紹介します。

## 芦屋にゆかりの詩人・映画評論家　杉山(すぎやま)　平一(へいいち)

●杉山平一(一九一四～)

詩人。昭和初期ころ、東芦屋町に在住されたが、現在は宝塚市在住。

昭和十六年第二回中原中也賞、同十八年『夜学生』で文芸汎論詩集賞受賞。平成十五年『戦後関西詩壇回想』で小野十三郎賞特別賞を受賞。

三好達治に見い出され、抒情の中に社会的感覚を備えた詩人・映画評論家として、現在も活躍されている。関西詩人協会代表・四季派学会会長・現代詩人会会長。

また、本市の富田砕花賞の第一回から第二十一回までの間、選考委員を務めていただいた。

芦屋に住まれたころに書かれた次の詩の中の橋は、阪急芦屋川駅北側の桜橋といわれています。


桜　橋

「橋の上」

橋の上にたつて
深い深い谷川を見おろす
何かおとしてみたくなる
小石を蹴ると
スーツと
小さくなつて行つて
小さな波紋をゑがいて
ゴボンと音がきこえてくる
繋がつた！
そんな気持で吻(ホッ)とする
人間は孤獨だから

(第一詩集「夜学生」より)

## 思春期を芦屋で過ごした作家　村上(むらかみ)　春樹(はるき)

●村上春樹(1949～)

小説家。京都市生まれ。西宮市立香櫨園小学校・芦屋市立精道中学校・県立神戸高校・早稲田大学文学部演劇科卒業。

昭和54年『風の歌を聴け』で群像新人賞、同57年『羊をめぐる冒険』で野間文芸新人賞、同60年『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で谷崎潤一郎賞を受賞。

昭和62年『ノルウェイの森』が空前のベストセラーとなり、平成18年にはフランツ・カフカ賞を受賞し、それ以後毎年のようにノーベル文学賞の有力候補者となっています。


かつての海辺・防潮堤を残した現在の臨港線

「ねえ、もう二十年も昔になるかな、夏になると僕は毎日この海で泳いでいたんだよ。海水パンツをはいたまま、家の庭先から海岸まで裸足で歩いて通ったんだぜ。太陽に焼かれたアスファルトの道は恐ろしく熱くってね、ぴょんぴょん跳びながら歩いたもんさ。夕立もあったよ。焼けたアスファルトの路面に吸い込まれていく夕立の匂いがたまらなく好きだった。」

(昭和56年「カンガルー日和」『五月の海岸線』より)

# 「伊勢物語」と

芦屋は、古来より歌名所として多くの秀歌が残されています。なかでも、「伊勢物語」に取り上げられた影響は大きく、業平ゆかりの地として広く一般に知られることとなりました。「伊勢物語」の定本では 125 段の物語があり、芦屋は第 87 段に登場します。

今回は、芦屋ゆかりの第 87 段や美術博物館収蔵の絵巻物やかるた、また伝承等をご紹介します。

解説文より、その原文と現代語訳を抜粋してご紹介しましょう。

**【第八十七段・第一場面〈芦屋の里〉】**

昔、男、津の国、菟原の郡芦屋の里に、しるよしして、行きて住みけり。昔の歌に、芦の屋の灘の塩焼き暇無み黄楊の小櫛も挿さず来にけりと詠みけるぞ、この里を詠みける。ここをなむ芦屋の灘とは言ひける。

この男、なま宮仕へしければ、それをたよりにて衛府の佐ども、集まり来にけり。この男の兄も衛府督なりけり。

**《現代語訳》** 昔、男がいました。その男は、摂津の国菟原郡芦屋の里に、領地を持っている縁で出かけて行って、そこに住んでいました。昔の歌に、

芦屋の灘の塩焼き人である私は、仕事が忙しいので、黄楊の櫛を挿す余裕の男の兄も衛府督であったので一緒にやって来たのです。

**【第八十七段・第二場面〈布引の滝〉】**

その家の前に海のほとりにあそびありきて、「いざ、この山の上にありといふ布引の滝、見に登らむ」と言ひて、登りて見るに、その滝、物より異なり。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石の面、白絹に岩を包めらんやうになむありける。さる滝の上に蘿蓋の大きさしてさし出でたる石あり。その石の上に走りかかる水は、小柑子・栗の大きさにてこぼれ落つ。そこなる人に、皆、滝の歌詠ます。かの衛府督まづ詠む。

わが世をば　今日か明日かと待つかひの　涙の滝といずれ高けん

主次に詠む。

貫き乱る人こそあるらし　白玉の

間なくも散るか　袖のせばきに

と詠めりければ、かたへの人、笑ふ言にやでしょうか、いいえ、そうではなく、この歌に感じ入って、そのまま誰も詠まなくなってしまったのでした。

**【第八十七段・第三場面〈芦屋の浜〉】**

帰り来る道遠くて、失せにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。



「伊勢物語歌かるた」（美術博物館蔵）



「伊勢物語絵巻」芦屋の浜（美術博物館蔵）



「伊勢物語絵巻」布引の滝（美術博物館蔵）

※「『伊勢物語』と芦屋」は、次ページに続きます。

# 芦屋

問い合わせ
美術博物館
TEL 38-5452



上段２枚・布引の滝／下段２枚・芦屋の浜

「伊勢物語画帖」狩野探雪・三十九人公家筆（美術博物館蔵）

芦屋は在原業平ゆかりの地とされ、業平の父・阿保親王の御陵と称する親王塚があり、業平町・業平橋という地名もあります。このような芦屋と在原業平の関係は、すべて、この『伊勢物語』第八十七段に発しています。

今回は、平成十二年に美術博物館特別展図録「伊勢物語と芦屋」から、『伊勢物語』の権威者・片桐洋一氏の

ありけん、この歌にめでて、やみにけり。

**《現代語訳》**　その男の家の前の海のほとりを遊覧して、男の兄が「さあ、この山の上の方にあるという布引の滝を見に登ろう」と言って、皆で登って見ると、その滝は、他と比べられないほどに特異でした。長さは二十丈（約六・五メートル）、広さ五丈（約一・六メートル）程の石の表面は、白絹に岩を包んでいるかのようでした。そんな滝の上に走りかかる水は、小さな柑橘や栗と同じ大きさでこぼれ落ちる。衛府督が、そこにいる人、皆に、滝の歌を詠ませます。もちろん衛府督がまっさきに詠みました。

我が世の来るのが今日か明日かと待っている「かい」ならぬ「峡」と、流しても効のない涙の滝と、どちらが高く、どちらが激しく流れ落ちるでしょうか。

主人の男が次に詠みました。

糸の緒を引き抜いて、玉を散乱させる人があるようです。白玉がこのようにすき間もないほどに散り乱れていますよ。拾い集めようにも、私の袖は狭

くて、包むこともできないですのに。

と詠んだので、そばにいた人には、大げさに笑うほかない表現であったのもないままに来てしまったことです。

と詠んでいるのは、この里を詠んだものでした。この歌では、ここを芦屋の灘と言っているのです。

この主人公の男は、ちゃちな宮仕えをしていたので、それを縁にして、近衛府・衛門府の次官たちが芦屋に集まってきたのでした。また主人公

宿りの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かの主の男詠む。

晴るる夜の　星か河辺の蛍かも
　我が住む方の　海人のたく火か

と詠みて、家に帰り来ぬ。

**《現代語訳》**　芦屋への帰路は遠くて、亡くなった宮内卿もちよしの家の前まで来ますと、日が暮れてしまいました。宿所の方を見やりますと、漁師の漁火がたくさん見えますので、例の主の男が詠みました。

晴れている夜の星でしょうか。

それとも河辺の蛍だろうかな。

あるいは私が住むあたりで漁師が

燃やす漁火なのでしょうか。

と詠んで、家に帰って来ました。

**●特別展「伊勢物語と芦屋」美術博物館展覧会図録（平成十二年発行）より一部抜粋**



2000年特別展 図録
【「伊勢物語」と芦屋】
1,000円
美術博物館で
頒布しています



「業平画像」福田眉仙筆（美術博物館蔵）

## 「業平画像」福田眉仙

福田眉仙（ふくだびせん・1875～1963）によって描かれた業平画像（昭和初期ころ・絹本著色）。美術博物館蔵。
縦127.8cm× 横56.7cm掛軸。

大正９年に芦屋に居住してから、晩年を当地で過ごした。六甲山を愛し、その山並みをよく画材としたほか、歴史画も多く残している。 本図は、不退寺蔵「在原業平像」を参考にしたと思われるが、原図よりは柔和な表情に描かれている。



「若鶴百人一首」（美術博物館蔵）

## 金津山の黄金

昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建てて村人たちを愛し、親しみをもって接していました。村人たちも“親王さん”といって、たいそう敬っていました。親王は、村人たちに「もし、自然の災害などで困ったときには、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられています。

朝日さす　入日かがやく　この下に
金（こがね）千枚　瓦万枚



この塚は、金津山（かなつやま）・黄金塚（こがねづか）・金塚（かねづか）などと呼ばれていますが、寛政（かんせい）８年（1796）刊の『摂津名所図会』を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があって、その周囲に道が造られ、大きな松が描かれています。

「打出名所は数々あれど、わけて名高い黄金塚」と、打出の御輿（みこし）かき音頭にも歌われ、街道を行く人々がお参りする名所になっていました。

「あしや子ども風土記　伝説・物語」より



●業平と公光の石の祠
阪急芦屋川駅南、月若公園の北側道路を少し西へ入ると、地域の人によって大切に守られている石の祠があります。

## 謡曲「雲林院」　業平と公光

昔、芦屋の里に公光という若者が住んでいました。「伊勢物語」がたいそう好きで、業平に強い興味を持っていました。ある夜のこと、夢の中に美しく咲き乱れた花の中に業平が現れたので、「ここはどこですか」と尋ねると、「ここは京の都の北山にある紫野の雲林院」と教えられ、夢から覚めました。公光は、はるばる雲林院（うんりんいん）を訪ねていきました。

ちょうど花盛りで、桜の一枝を折ったところへ、老人が現れて公光をとがめました。公光は「芦屋の里から訪ねてきた公光というものです。業平様の夢を見て、ここまで来ました」といいますと、老人は『今夜この花かげで待っていると、伊勢物語にまつわる楽しいお話が聞けるでしょう」といって、夕闇の中に姿を消しました。やがて夜になると、業平の魂が人の姿となって現れ、伊勢物語のことを語り、舞や音楽の遊びを続けているうちに明け方となり、公光の夢は覚めました。

「あしや子ども風土記　伝説・物語」より

＊謡曲「雲林院」（室町時代）は、能の創始者・世阿弥の自筆本が残る能本九曲の内の一つです。

※「『伊勢物語』と芦屋」は、前ページから続いています。

## 歌名所としての芦屋

六甲の山並みを背にして、芦屋川の流れが浜辺で交差する辺り、白砂青松の芦屋の浜は、古来より景勝の地として、多くの和歌が詠み継がれてきた歌名所です。都人が西国への往還の途中、初めて潮の香をきき、波間に浮かぶ漁船を遠望するのもこの地でした。平安貴族が都に近い観光地として、あるいは別荘地として風雅を楽しんだのも当然のことと言えます。同じ意味で、芦屋から１日で行ける行楽地として布引の滝も平安歌人に知られる所となりました。　この、歌名所としての芦屋の浜・布引の滝を考えるときに、『伊勢物語』が最も重要になってきます。
実際に、『伊勢物語』で芦屋の里が歌題になってから、芦屋は歌名所として多数の和歌が詠まれ、そして和歌を題材とした物語絵も盛んに描かれました。
近世以降は、絵入り木版本の出現により、物語と絵が、広く一般に親しまれるようになりました。
このように物語の享受は、古写本の伝授によるものだけではなく、「伊勢物語絵」などの絵画作品が果たした役割もまた、大きかったと考えられます。
なかでも、慶長 13 年(1608)に刊行された嵯峨本『伊勢物語』は、四十九図の挿絵を備えて、本書以降の絵巻・版本などにも圧倒的な影響を及ぼしました。



●業平の歌碑（松ノ内緑地）
“世の中に　たえて
　桜のなかりせば
春の心はのどけからまし”
平成３年・芦屋文化友の会建立



「摂津名所図絵」（寛政８年・1798）に掲載されている芦屋の名所地
■阿保親王塚（あぼしんのうづか）／翠ケ丘町
■金津山（かなつやま）／打出小槌町
■阿保山親王寺（あぼさんしんのうじ）／打出町

# 阿保親王墓と芦屋

**【親王さんの森】**

市域の東部、ＪＲと阪急にはさまれた住宅地（翠ケ丘町）に、静寂を保つ森があります。そこが、古くから「親王さんの森」として市民に親しまれてきた阿保親王墓です。

阿保親王は平城天皇（七七四～八二四）の第一皇子で、桓武天皇（七三七～八〇六）の孫にあたり、延暦十一年（七九二）に誕生しています。弘仁元年（八一〇）の藤原薬子の乱に連座して、大宰権帥として筑紫に左遷されますが、十余年後に許されて、都に戻っています。このころ、仲平・行平・守平・業平の四子に賜姓を請い、在原姓を賜わりました。

親　王は、上総太守・三品・治部卿・上野太守・宮内卿・弾正尹などを歴任し、承和九年（八四二）、上総太守兼弾正尹となりましたが、この年の十月二十二日に薨去、五十一歳でした。

『続日本後紀』によれば、親王は文武両道に秀でた人でありながら、慎み深い人であったと記されていますが、親王が芦屋で薨ぜられたことについては、正史に記載がありません。

親王と芦屋の関係については、山口県文書館所蔵の毛利家文庫に「阿保親王御廟詮議」・「阿保親王事取集」・「阿保親王竹園伝記」等があります。また、親王の菩提寺と伝えられる打出町の阿保山親王寺にも、毛利家の記録が伝わっています。

**【阿保親王と毛利家】**

毛利家文庫の「江氏家譜」によると、同家は阿保親王の嫡孫・大江朝臣音人の末裔になるため、親王を祖先と仰ぎ、祀り続けてきたことがわかります。

親王寺に伝来する「阿保親王寺縁起」一巻と、「曩祖阿保親王尊廟竹園之伝記」一巻は、親王の事績に詳しいのですが、ともに親王が、「承和九年摂津国菟原郡芦屋庄打出村において薨じ給う」と記しています。とりわけ後書は、長門府中藩主毛利甲斐守綱元（一六五〇～一七〇九）が同寺に寄進したもので、元禄四年（一六九一）十月二十二日の日付があり、巻末に「今年今月今日八百五十年忌　記此一巻　以奉納阿保親王古廟訖」とあり、その趣旨が明らかにされています。また、これらの史料では、親王寺建立は「承和十一年甲子、親王のすませ給う地を改めて、寺院を建立し、阿保山親王寺と号す」と伝えています。

「阿保親王御廟詮議」によると、毛利家と親王家の関係は、前記した元禄四年の親王八百五十年忌あたりから密度を増したものと考えらます。

それにしても、なぜ、毛利家が元禄四年の段階で打出村の阿保親王墓と関わりを持つに至ったのでしょうか。

打出宿が参勤交代の途上にあり、いつも通過する場所であったということなのか、ともかく毛利家は親王八百五十年忌から以後、親王寺に代参を差し向けているのです。

しかし、業平と芦屋は『伊勢物語』によって知られていますが、阿保親王と芦屋の関係については、現在でもあまり知られていないのです。

●特別展「伊勢物語と芦屋」美術博物館展覧会図録（平成十二年十月発行）より一部抜粋

# 阪神・淡路大震災から 15 年目の年を迎えて…

■広報あしや　思い出の一ページ

## 定点撮影で見る　平成７(1995)年▶22(2010)年

平成七年



▼

平成二十二年



ＪＲ芦屋駅周辺(船戸町)



平成７年１月 31 日、天皇・皇后両陛下は精道小学校(避難所)を訪れ、避難生活を送る人たちにお見舞いのお言葉をかけられました

## 阪神・淡路大震災の概要　《地震の概要・避難所の状況・その他》

| ■地震の概要 | 平成 22 年 1 月 15 日現在 |
|---|---|
| 発生年月日 | 平成７年１月 17 日(火)午前５時 46 分 |
| 震源地 | 淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分） |
| 地震の規模 | マグニチュード　7.3 |
| 芦屋市の震度 | 震度７<br>＊２月７日、気象庁の現地調査の結果、国道２号沿い・JR 芦屋駅周辺・三条町・山手町の一部が、震度７とされました。 |

【避難所の開所から閉鎖】平成７年１月 17 日～７月９日

- ■２月５日　給食開始(全避難所での開始は２月11日～)
- ■２月23日　プライバシー対策として、衝立を導入
- ■４月14日　避難所集約(民間施設等12カ所閉鎖)を通知
- ■５月18日　避難所第二次集約(11カ所廃止)
- ■５月24日　市内避難所・６月上旬に閉鎖を決定
- ■５月28日　避難所を集約し、２カ所(126人)となる
- ■６月７日　避難所１カ所となる
- ■６月14日　６月18日に、避難所閉鎖することを決定
- ■７月９日　避難者全員退出

■避難所の状況

| 月　日 | 避難所数 | 避難者数 | 避難世帯数 |
|---|---|---|---|
| １月 17 日 | 47 カ所 | 12,916 人 | 5,045 世帯 |
| １月 19 日 | 52 カ所 | 20,960 人 | 8,188 世帯 |
| １月 31 日 | 53 カ所 | 8,912 人 | 3,481 世帯 |
| ２月 28 日 | 49 カ所 | 4,254 人 | 1,662 世帯 |
| ３月 31 日 | 41 カ所 | 2,287 人 | 893 世帯 |
| ４月 30 日 | 32 カ所 | 1,019 人 | 398 世帯 |
| ５月 31 日 | 2 カ所 | 88 人 | 49 世帯 |
| ６月 18 日 | 1 カ所 | 6 人 | 3 世帯 |
| 累計 | 5,431 カ所 | 558,940 人 | 218,334世帯 |

〈＊印は、避難者数のピーク時〉※上記の「避難世帯数」は推計です。
※避難所数のピークは、１月 24 日の 55 カ所（避難者数 16,134 人）

【その他】

- ■応急仮設住宅　市内 47 カ所・2,914 戸を建設（引渡し日・２月７日～５月８日）
- ■仮設トイレ設置　176 カ所・1,055 基
- ■仮設浴場の設置　12 カ所

## 定点撮影で見る市内の情景

平成七年



▼

平成二十二年



ＪＲトンネル上周辺・芦屋川(松ノ内町)



▼



本通り商店街(公光町・大桝町)



▼



三八通り商店街(大桝町・茶屋之町)

# 阪神・淡路大震災から15年目の年を迎えて…

平成七年（一九九五）一月十七日午前五時四十六分、芦屋市をはじめ兵庫県南部を襲った阪神・淡路大震災は、一瞬にして私たちの住みなれたまちを破壊し、多くの尊い命を奪い、市民を恐怖と悲しみのどん底へと突き落としました。

あの日から十五年の月日が流れました。

そんな中で、私たちは地震直後や復興過程の生活・まちの姿の中から、多くの教訓を学びました。

震災後十五年を経た今日、改めて大震災で犠牲となられた皆さんのご冥福をお祈りするとともに、この教訓を生かし、安全で安心な、より良い芦屋・芦屋らしい芦屋の発展を、皆さんとともに目指していきたいと考えています。

## 大震災の貴重な教訓

本市は、古来から緑豊かな自然環境に恵まれ、明治末期から鉄道や道路が整備され、交通の便が良くなるとともに、良好な住宅地として発展してきました。

昭和二十六年には、理想的な国際文化住宅都市の建設を目指した「芦屋国際文化住宅都市建設法」が制定されました。

この法律の理念に基づき〝自然と調和した緑豊かな美しいまち〟、〝都市機能の充実した住みよいまち〟、〝豊かな人間性と文化をはぐくむ健康なまち〟を目標に、阪神地区でも特徴のあるまちづくりを進めてきました。

阪神・淡路大震災は、このような本市が長年にわたって築き上げてきた住宅都市としての基盤を直撃し、一瞬のうちに尊い人命を奪ったのみならず、全世帯の九割を超える住居を損壊させ、多くの都市施設に壊滅的な被害を及ぼしました。

今回の大震災によって、災害に対して都市基盤がいかにもろい構造・システムであったかを知りました。

しかしその反面、震災直後の市民相互の助け合いや数多くのボランティアの救援活動などを通して、人間らしい優しさを大切にした社会の形成の重要性を、改めて認識することができました。

## 震災復興への道のり

震災の翌日から、広報課では「災害対策本部からのお知らせ」を発行、被害状況や今後の対応を、手書き文字やワープロで打ち出し、毎日の状況を避難所へ配布。また、二月二十四日からは「復興へ」を発行、九月二十五日までの四十九回にわたり震災復興への歩みをお知らせしました。

また、平成七年七月には、平成十七年を復興の目標期間とした「芦屋市震災復興計画」を策定、市民の皆さんとともに復興に取り組みました。

この間、応急仮設住宅の廃止、芦屋市中央線（ハナミズキ通り）開通、「都市景観条例」の施行、「地域防災計画」の改訂、南芦屋浜地区の町名決定、区画整理事業の実施、市民センターや体育館・青少年センターの再開、消防署の奥池分遣所新設などが進められ、本年の秋には、山手幹線も市内全線が開通することとなりました。

## 定点撮影で見る　平成7(1995)年▶22(2010)年

平成7年 ▶ 平成22年




川西町8番付近・被害の大きかった西部地区（清水町・前田町・津知町・川西町）の1つ




津知公園（津知町）にはテント村ができ、ここで避難する人も多くいました




若葉町（宮川河口付近）の防潮堤・芦屋浜地区では、地盤液状化による被害が目立ちました




平成7年2月26日、皇太子ご夫妻も臨席する中、県立芦屋南高校体育館では「合同慰霊祭」がしめやかに営まれ、悲しみも新たに、芦屋の再生を誓いました。

《平成 22 年 1 月 15 日号》

# 阪神・淡路大震災から 15 年目の年を迎えて…

## 阪神・淡路大震災　～つめ跡もあらわな芦屋風景～

《撮影・平成７年２月～３月／美術博物館歴史学芸員》



水車臼跡（山芦屋町）


芦屋霊園（朝日ヶ丘町）


阿保親王塚（翠ヶ丘町）


三条八幡神社（三条町）


北側に傾いた「細雪」の碑（東芦屋町）


自衛隊・給水活動（川西町・川西運動場）


仮設住宅建設（高浜町）


廃材集積場（高浜町・芦屋大学グラウンド）

# 阪神・淡路大震災から 15 年目の年を迎えて…





その日、昇る太陽に照らし出されたのは、阪神高速３号神戸線が国道 43 号上に横倒しになっていた衝撃の風景でした

■阪神・淡路大震災　芦屋市被害一覧　　平成 22 年 1 月 15 日現在

| 区分 | | 被害 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 人的被害 | 死者 | 444 人 | 【平成７年１月１日現在の芦屋市推計人口】<br>総数 86,862 人／男 40,514 人・女 46,348 人<br>世帯数 33,916 世帯 |
| | 行方不明 | 0 人 | |
| | 負傷者 | 3,128 人 | |
| | 避難者 | 20,960 人 | ※平成７年１月 19 日のピーク時（避難所・52 カ所） |
| 建物被害 | 全壊 | 4,722 棟 | ※構成比 30.6%（全壊） |
| | 半壊 | 4,062 棟 | ※構成比 26.4%（半壊） |
| | 一部損壊 | 4,786 棟 | ※構成比 31.0%（一部損壊） |
| | 地震火災 | 13 件 | ※震災発生後３日間の発生件数 |
| 公共土木施設等被害 | 道路 | 47,410 m | ※市道・国庫補助対象分 |
| | 橋梁 | 12 カ所 | |
| | 河川 | 2 カ所 | ※平成８年度に復旧完了 |
| | 海岸施設 | 8 カ所 | |
| | 公園 | 33 カ所 | ※国庫補助対象分 |
| ライフライン等被害 | 水道 | 直後に全域で停止 | ※平成７年２月 27 日に給水復旧完了 |
| | 下水道管渠 | 277 カ所 | ※平成７年３月 31 日現在の応急復旧箇所 |
| | 下水処理場 | 直後に処理機能停止 | ※平成７年１月 31 日から下水処理開始 |
| | 電話 | 9,200 回線 | ※平成７年１月 31 日までに復旧完了 |
| | 電気 | 直後に全域で停電 | ※平成７年１月 20 日に応急復旧完了 |
| | ガス | 直後に全域で停止 | ※平成７年４月 11 日に復旧完了 |
| | 鉄道 | 直後に広域的に不通 | ※ＪＲ・４月１日／阪急・６月 12 日／阪神・６月 26 日に全線開通 |




*To be continued in the Future.*